特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 11

第86・87・90・132・135・144次調査（西山光照寺跡）

2015

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

口絵1　発掘調査遺構(1)

第132次発掘調査区全景(東より)

第135次発掘調査区全景(北から)

口絵2　発掘調査遺構(2)

SX6495、SD6496、SV6497 検出状況(北より)

SK6491の擂鉢・茶入・建水・鉄鍋出土状況(南より)

口絵3　出土遺物(1)

SF4418 出土の陶磁器

SF4418 出土の越前茶器

SK6491 出土品

口絵4　出土遺物(2)

SK6491出土の「光」の一文字を記す漆器皿

繭形分銅

色彩の残る石造物：上２点

７代上人銘の石造物

序　文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業は、昭和42年に朝倉館跡の調査に着手して以来、約45年間にわたって行われてきました。今日では、戦国期の城下町の構造や当時の生活・文化の様子が徐々に明らかになってきております。

本報告書は、一乗谷の北側玄関口に所在し、一乗谷屈指の規模をもつ西山光照寺跡の発掘成果をまとめたものです。西山光照寺は、一乗谷でも特に信仰を集めた、盛瞬上人を中興の祖とする有力寺院です。今も、当時の人々が功徳を願い建てた約40体もの石仏が、旧参道両脇に並んでいることで知られています。昭和5年（1930）に「西山光照寺址」として、一乗谷の中でも最も早く国の史蹟に指定された場所の一つです。

発掘調査の結果、残念ながら、建物跡などの遺構は良好には残ってはいませんでしたが、巨石積みの石垣が長い区間に築かれ、有力寺院にふさわしい多彩な内容の出土遺物がみられました。

最後になりましたが、事業の実施から報告書の刊行に至るまで、文化庁をはじめ関係各位、地元の皆様には多大なご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成27年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　畠中清隆

目　　次

口　絵
序
目　次
図版目次

Ⅰ　事業概要
1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査の方法および組織 …… 5
4　本報告書について …… 8

Ⅱ　調査の経過と概要
1　はじめに …… 9
2　平成6・7年度、南区（第86・87・90次）の調査 …… 10
3　平成22・23・25年度、北区（第132・135・144次）の調査 …… 11

Ⅲ　遺　構
1　南区（第86・87・90次調査）…… 15
2　北区（第132・135次調査）…… 20

Ⅳ　遺　物
1　越前焼 …… 29
2　土師質土器 …… 34
3　瀬戸・美濃焼 …… 37
4　その他国産陶磁器 …… 40
5　外国産陶磁器 …… 41
6　金属製品 …… 46
7　石製品 …… 49
8　木製品他 …… 53

Ⅴ　まとめ …… 75

Ⅵ　考　察
西山光照寺の石造物からみた寺院変遷 …… 77

図 版 目 次

口 絵（カラー）

口絵1　発掘調査遺構（1）
口絵2　発掘調査遺構（2）
口絵3　出土遺物（1）
口絵4　出土遺物（2）

図　　面

第1図　西山光照寺の寺域推定図
第2図　西山光照寺跡発掘調査区全体図
第3図　南区遺構詳細図（1）
第4図　南区遺構詳細図（2）
第5図　南区遺構詳細図（3）
第6図　南区遺構詳細図（4）
第7図　南区遺構詳細図（5）
第8図　南区遺構詳細図（6）
第9図　南・北区遺構詳細図
第10図　SF4418・SV4423 詳細図
第11図　南区（第87次調査）トレンチ土層図
第12図　北区遺構詳細図（1）
第13図　北区遺構詳細図（2）
第14図　北区遺構詳細図（3）
第15図　北区遺構詳細図（4）
第16図　北区遺構詳細図（5）
第17図　北区土層図（1）
第18図　北区土層図（2）
第19図　北区上層図（3）
第20図　北区石垣立面図
第21図　北区北半の土坑詳細図
第22図　出土遺物（1）　越前焼
第23図　出土遺物（2）　越前焼
第24図　出土遺物（3）　越前焼
第25図　出土遺物（4）　越前焼
第26図　出土遺物（5）　越前焼
第27図　出土遺物（6）　越前焼
第28図　出土遺物（7）　越前焼
第29図　出土遺物（8）　越前焼
第30図　出土遺物（9）　越前焼
第31図　出土遺物（10）　越前焼
第32図　出土遺物（11）　越前焼
第33図　出土遺物（12）　越前焼
第34図　出土遺物（13）　越前焼
第35図　出土遺物（14）　越前焼
第36図　出土遺物（15）　越前焼
第37図　出土遺物（16）　越前焼
第38図　出土遺物（17）　土師質土器
第39図　出土遺物（18）　土師質土器
第40図　出土遺物（19）　瀬戸・美濃焼
第41図　出土遺物（20）　瀬戸・美濃焼
第42図　出土遺物（21）　瀬戸・美濃焼
第43図　出土遺物（22）　瀬戸・美濃焼
第44図　出土遺物（23）　その他国産陶磁器
第45図　出土遺物（24）　外国産陶磁器
第46図　出土遺物（25）　外国産陶磁器
第47図　出土遺物（26）　外国産陶磁器
第48図　出土遺物（27）　外国産陶磁器
第49図　出土遺物（28）　外国産陶磁器
第50図　出土遺物（29）　外国産陶磁器
第51図　出土遺物（30）　外国産陶磁器
第52図　出土遺物（31）　金属製品
第53図　出土遺物（32）　金属製品
第54図　出土遺物（33）　金属製品
第55図　出土遺物（34）　金属製品
第56図　出土遺物（35）　石製品
第57図　出土遺物（36）　石製品
第58図　出土遺物（37）　石製品
第59図　出土遺物（38）　石製品
第60図　出土遺物（39）　石製品

第61図　出土遺物(40)　石製品
第62図　出土遺物(41)　石製品
第63図　出土遺物(42)　石製品
第64図　出土遺物(43)　石製品
第65図　出土遺物(44)　石製品
第66図　出土遺物(45)　石製品
第67図　出土遺物(46)　石製品
第68図　出土遺物(47)　石製品
第69図　出土遺物(48)　石製品
第70図　出土遺物(49)　石製品
第71図　出土遺物(50)　石製品
第72図　出土遺物(51)　木製品
第73図　出土遺物(52)　壁土状塊

写真図版

PL. 1　南区（第86・87・90次）発掘調査前
PL. 2　南区遺構　全景・南東側
PL. 3　南区遺構　南側
PL. 4　南区遺構　南西側の墓地等（1）
PL. 5　南区遺構　南西側の墓地等（2）
PL. 6　南区遺構　地下式倉庫跡
PL. 7　南区遺構　地下式倉庫跡他
PL. 8　南区遺構　西側
PL. 9　南区遺構　北西側
PL. 10　南区遺構　北東側
PL. 11　南区遺構　北側・東西トレンチ
PL. 12　南区遺構　石垣
PL. 13　北区（第132・135次）発掘調査前
PL. 14　北区遺構　南半側全景・区画溝
PL. 15　北区遺構　南西側
PL. 16　北区遺構　南半側建物跡他
PL. 17　北区遺構　南半側
PL. 18　北区遺構　西側
PL. 19　北区遺構　北半側全景・建物跡
PL. 20　北区遺構　北半側
PL. 21　第144次調査区遺構
PL. 22　北区遺構　下段南東側
PL. 23　北区遺構　下段南東側
PL. 24　北区遺構　下段東側の石垣他
PL. 25　北区遺構　名号石碑他
PL. 26　北区遺構　下段北側の石垣他
PL. 27　北区遺構　下層トレンチ調査
PL. 28　出土遺物（1）　越前焼
PL. 29　出土遺物（2）　越前焼
PL. 30　出土遺物（3）　越前焼
PL. 31　出土遺物（4）　越前焼
PL. 32　出土遺物（5）　越前焼
PL. 33　出土遺物（6）　越前焼
PL. 34　出土遺物（7）　越前焼
PL. 35　出土遺物（8）　越前焼
PL. 36　出土遺物（9）　越前焼
PL. 37　出土遺物(10)　越前焼
PL. 38　出土遺物(11)　越前焼
PL. 39　出土遺物(12)　越前焼
PL. 40　出土遺物(13)　越前焼
PL. 41　出土遺物(14)　越前焼
PL. 42　出土遺物(15)　越前焼
PL. 43　出土遺物(16)　越前焼
PL. 44　出土遺物(17)　土師質土器
PL. 45　出土遺物(18)　土師質土器
PL. 46　出土遺物(19)　瀬戸・美濃焼
PL. 47　出土遺物(20)　瀬戸・美濃焼
PL. 48　出土遺物(21)　瀬戸・美濃焼
PL. 49　出土遺物(22)　瀬戸・美濃焼
PL. 50　出土遺物(23)　その他国産陶磁器
PL. 51　出土遺物(24)　外国産陶磁器
PL. 52　出土遺物(25)　外国産陶磁器
PL. 53　出土遺物(26)　外国産陶磁器
PL. 54　出土遺物(27)　外国産陶磁器
PL. 55　出土遺物(28)　外国産陶磁器
PL. 56　出土遺物(29)　外国産陶磁器

PL. 57　出土遺物 (30)　外国産陶磁器
PL. 58　出土遺物 (31)　金属製品
PL. 59　出土遺物 (32)　金属製品
PL. 60　出土遺物 (33)　金属製品
PL. 61　出土遺物 (34)　金属製品
PL. 62　出土遺物 (35)　石製品
PL. 63　出土遺物 (36)　石製品
PL. 64　出土遺物 (37)　石製品
PL. 65　出土遺物 (38)　石製品
PL. 66　出土遺物 (39)　石製品
PL. 67　出土遺物 (40)　石製品
PL. 68　出土遺物 (41)　石製品
PL. 69　出土遺物 (42)　石製品
PL. 70　出土遺物 (43)　石製品
PL. 71　出土遺物 (44)　石製品
PL. 72　出土遺物 (45)　石製品
PL. 73　出土遺物 (46)　石製品
PL. 74　出土遺物 (47)　石製品
PL. 75　出土遺物 (48)　石製品
PL. 76　出土遺物 (49)　石製品
PL. 77　出土遺物 (50)　石製品
PL. 78　出土遺物 (51)　木製品
PL. 79　出土遺物 (52)　壁土状塊

挿　図

挿図 1　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図
挿図 2　西山光照寺跡発掘調査区周辺地形
挿図 3　南区（第 86・87・90 次調査）グリッド図
挿図 4　北区（第 132・135・144 次調査）グリッド図
挿図 5　SZ6422 東端
挿図 6　SD6432・SX6454 検出状況
挿図 7　SX6454 台座平面図
挿図 8　片口鉢碗出土状況
挿図 9　SD6488 調査状況
挿図 10　SX6457 台座平面図
挿図 11　名号石碑 (SX6495) 拓本
挿図 12　越前焼擂鉢・鉢出土分布図
挿図 13　越前焼大・中甕出土分布図
挿図 14　瀬戸・美濃焼天目茶碗出土分布図
挿図 15　瀬戸・美濃焼鉄釉壺出土分布図
挿図 16　瀬戸・美濃焼灰釉壺出土分布図
挿図 17　白磁・染付出土分布図
挿図 18　朝鮮碗出土分布図
挿図 19　華南褐釉壺（2 個体）出土分布図
挿図 20　金属製品出土分布図
挿図 21　鉄釘出土分布図
挿図 22　銅銭出土分布図
挿図 23　朝倉・阿波賀氏略系図
挿図 24　安波賀・安波賀中島村地籍図

表

表 1　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧
表 2　南区Aエリア上坑一覧
表 3　石垣区間別の石材横幅
表 4　出土遺物一覧表
表 5　石塔・石仏種別一覧表
表 6　越前焼観察表
表 7　土師質土器観察表
表 8　瀬戸・美濃焼観察表
表 9　その他国産陶磁器観察表
表 10　外国産陶磁器観察表
表 11　金属製品観察表
表 12　石製品観察表
表 13　年次別分布グラフ①・②
表 14　石造物銘文集成

Ⅰ　事業概要

1　調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所で、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院等の遺構が一体となって残されており、我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない、国民共有の文化遺産として永久に保護するため特別史跡に指定し、公有化を進めている。

遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められているが、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態等を直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的にかつ連続的になされた発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、かつ適切な維持管理のもと遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査が続けられてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第11冊に当たる。その他、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途なされている。なお、各年次の発掘・整備事業の概要は当該年次の概報として公刊されているが、本書で正式に調査所見を報告し、内容については本報告書が優先する。

2　調査の経過

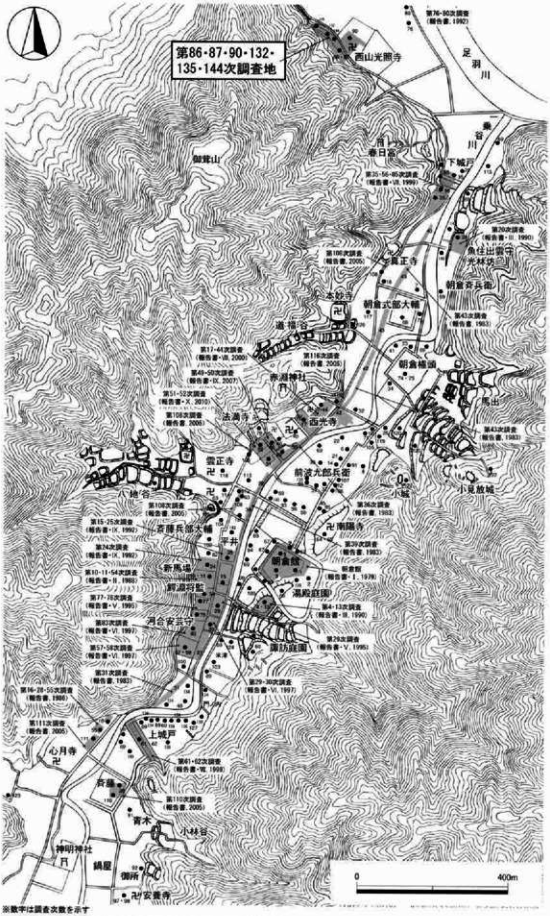
一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な調査は、昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度からは、福井県教育委員会がこれを引き継いで発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は、昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5か年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の、足羽町と福井県教育委員会による調査を第1次5か年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5か年計画が進められた。第1次5か年計画では、朝倉氏の最後の当主である朝倉義景の館跡を中心として調査を行い、第2次5か年計画ではそれに引き続き平井地係の武家屋敷や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤淵地係に所在するサイゴー寺跡、指定地の北部に位置する瓢町地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋などとみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況を把握する試みがなされた。第3次5か年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5か年計画ではその最初の4年で指定地の中央に位置する一乗谷川より西側の赤淵・奥間野・古野本地係を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出し、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。最後の5年目は再び平井地係の武家屋敷を調

表1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査区数	調査場所・住所	機関	報告書	面積
昭和42年	1967	第1次5ヵ年	一乗谷の発掘調査が道路の整備に伴う事前調査として始まる。朝倉義景館での調査は1日本中世考古学の確立に貢献した役割を果たす。	庭園	諏訪館跡・高厳跡・興福寺跡の庭園	I	I	1,800
昭和43年	1968			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東南部)	I	I	2,065
昭和44年	1969			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東北部)	I	I	1,955
昭和45年	1970			興福寺・安養寺	東調町字調所・安福寺	II		240
昭和46年	1971			第1次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	626
				第2次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	34
昭和47年	1972	第2次5ヵ年	朝倉義景館の調査が終了し、武家屋敷や町屋跡の調査を開始する。 町屋跡では職人の工房跡が確認される。	第3次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	1,992
				第4次	城戸ノ内町字本谷(中ノ御殿北半分)	IV	I	1,340
				第5次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館西北部)	IV	I	1,365
昭和48年	1973			第6次	城戸ノ内町字江角14-2-1	V		172
				第7次	城戸ノ内町字32-1, 33, 38-1	V		246
				第8次	城戸ノ内町字北新浦13-25-26	V		30
				第9次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館北辺道)	V	I	150
				第10次	城戸ノ内町字平井	VI	II	2,425
昭和49年	1974			第11次	城戸ノ内町字平井	VI	II	1,240
				第12次	福井市城戸ノ内町字北新浦	VI		108
				第13次	城戸ノ内町字本谷(中ノ御殿北半分)	VI	III	2,250
				第14次	城戸ノ内町字谷口・唐堂寺			42
昭和50年	1975			第15次	城戸ノ内町字平井・川合・平井・森藤	VII	IV	2,400
				第16次	西新町1-4(心月寺地区)	VII	一乗小学校	350
昭和51年	1976			第17次	城戸ノ内町字赤淵	VII	VII	2,650
				第18次	城戸ノ内町字鷲町	VII		2,500
				第19次	城戸ノ内町字八重谷43-1	VII		350
				第20次	城戸ノ内町字市黒谷2-4	VII	III	2,200
昭和52年	1977	第3次5ヵ年	平井、川合、赤淵、鷲岡野地区を中心に遺跡の調査を実施。武家屋敷や町屋の様子が明らかになってくる。 遺跡の重層状況が明確になり、約20cm～100cmを基準とした町割や状況が判明する。	第21次	城戸ノ内町字生角	IX		100
				第22次	城戸ノ内町字生角14-8	IX		100
				第23次	城戸ノ内町字鷲鷲8-8-1	IX		30
				第24次	城戸ノ内町字平井	IX	IV	2,200
				第25次	城戸ノ内町字平井・唐藤	IX	IV	2,400
				第26次	城戸ノ内町字江角9-11-1	IX		36
昭和53年	1978			第27次	城戸ノ内町字角14-56, 59	X		33
				第28次	東新町字市藤 小学校プール	X		600
				第29次	城戸ノ内町字谷松・平井	X	V・VI	2,205
				第30次	城戸ノ内町字川合崎	X	VI	1,220
				第31次	城戸ノ内町藤松用地・川合崎		朝江・美山線	1,700
				第32次	城戸ノ内町用久保 福井川合線センター			114
昭和54年	1979			第33次	安波賀町13字法下9（はたらの里資料館	X I		30
				第34次	城戸ノ内町	X I		120
				第35次	城戸ノ内町下下城戸	X I	VII	1,630
				第36次	城戸ノ内町市黒谷・鷲岡野		朝江・美山線	2,800
昭和55年	1980			第37次	城戸ノ内町江角14-62, 588	X II		100
				第38次	城戸ノ内町江角14-26-1	X II		100
				第39次	城戸ノ内町唐藤・木屋		朝江・美山線	800
				第40次	城戸ノ内町字鷲岡野			3,000
昭和56年	1981			第41次	城戸ノ内町字 福祉集落センター			10
				第42次	城戸ノ内町字用久保・赤淵	X III		4,800
昭和57年	1982	第4次5ヵ年	赤淵、鷲岡野、吉野本地区を中心に調査。 赤甲寺院や武家屋敷、町屋遺構を確認した。特に、上医学者の匙が出土した匙跡と匙跡の量産と利用。 また、下城戸の西に位置する武者野遺跡では火葬墓が検出された。	第43次	城戸ノ内町赤淵・鷲岡・下城戸		朝江・美山線	1,700
昭和58年	1983			第44次	城戸ノ内町字赤淵	X IV	VII	2,600
				第45次	城戸ノ内町赤淵遺跡・麓 消防器具置場	X V		63
				第46次	城戸ノ内町字鷲岡野	X V		3,000
昭和59年	1984			第47次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	100
				第48次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	270
				第49次	城戸ノ内町鷲岡野	X VI	IX	1,200
				第50次	城戸ノ内町鷲岡野	X VI	IX	1,200
昭和60年	1985			第51次	城戸ノ内町字吉野本	X VII		1,720
				第52次	城戸ノ内町字吉野本	X VII		1,930
				第53次	安波賀町字武者野		武者野遺跡	200
昭和61年	1986			第54次	城戸ノ内町字平井	X VII	II	1,800
				第55次	西新町字心月寺		一乗小学校	500
昭和62年	1987	中期 第1次10ヵ年 前半	諏訪館跡、湯殿跡遺跡の考古総合調査。4箇所3特別名勝に指定される。 川合崎地区では上級武家屋敷、中間地区では職人武士大工屋敷の様子を考えられる様子を確認。 城跡では武家屋敷と町屋を確認。 湯殿寺跡を調査し、発掘の時型出土。 水辺空間事業では一乗谷川の流路移動や江戸遺跡を確認した。	第56次	城戸ノ内町字下城戸	X VII	VII	1,200
				第57次	城戸ノ内町字川合崎	X IX	VI	2,560
				第58次		X IX		1,200
				第59次	城戸ノ内町字上川原		遺跡通路	1,200
昭和63年	1988			第60次	諏訪館跡・湯殿跡遺跡 考古総合調査	X IX		70
				第61次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸	X X	VII	1,000
				第62次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸	X X		
				第63次	城戸ノ内町字本藤	X X		200
平成元年	1989			第64次	城戸ノ内町21字鷲岡寺	1989		1,000
				第65次	城戸ノ内町21字鷲岡寺	1989		1,000
				第66次	城戸ノ内町14-16			140
				第67次	城戸ノ内町22字新御殿	1989		330
平成2年	1990			第68次	城戸ノ内町字20字	1990		3,600
				第69次	城戸ノ内町・安波賀町・西新町(第四回整)		水辺空間	721
				第70次	安波賀町14上切ノ木13-1	1990		100
				第71次	城戸ノ内町14字6角2-1, 2	1990		300
平成3年	1991			第72次	城戸ノ内町字中黒	1991		210
				第73次	城戸ノ内町字高瀬	1991		70

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査箇所	調査地点数	調査場所・住所	概略	報告書	頁数
平成4年	1992	中期 第1次10ヵ年 後半	香椎、川合地地区の調査を11、武家屋敷空町屋群を補足。また、上城戸・下城戸の外にある寺院を中心に調査。 環境整備事業で21町並定体測量。	第74次	城戸八丁目町下地蔵	1991			2,600
				第75次	城戸八丁目町下地蔵	1991			
				第76次	安養寺町本部			薄尾・勝山線	500
				第77次	城戸八丁目町平田台地	1992	V		2,600
				第78次		1992			
				第79次	城戸八丁目吉野本	1992			120
				第80次	安養寺町字本谷	1992		薄尾・勝山線	695
平成5年	1993			第81次	東新町字小林谷	1992			330
				第82次	城戸八丁目町字茅藤	1993			1,920
				第83次	城戸八丁目町台地	1993	VI		1,300
				第84次	東新町字首木、新町安養寺				500
平成6年	1994			第85次	城戸八丁目町下城戸	1994	VII		400
				第86次	安養寺中島町字西山光照寺	1994	11		2,400
				第87次		1994	11		
				第88次	東新町	1994			500
				第89次	城戸八丁目町字上城戸	1994			100
平成7年	1995			第90次	安養寺中島町字西山光照寺	1995	11		800
				第91次	城戸八丁目町字瓜割流	1995			100
				第92次	東新町字安養寺(跡所、安知寺地区)	1995			2,600
				第93次	城戸八丁目町字上川原	1995			200
				第94次	城戸八丁目町字新御殿	1995			1,400
				第95次	城戸八丁目町字瓜割流				400
平成8年	1996			第96次	城戸八丁目町字上川原	1996			630
				第97次	東新町字安知寺	1996			2,400
				第98次		1996			
				第99次	城戸八丁目町字新御殿、藤兵衛川原				1,600
平成9年	1997	中期 第2次10ヵ年 前半	香椎、川合地地区中心に調査を実施。上城戸武家屋敷を多数確認。 中山間事業では城戸八丁目全域で道路遺構を検出。	第100次	城戸八丁目町字川合地、藤兵衛川原	1997			2,600
平成10年	1998			第101次	城戸八丁目町字蛭谷				400
平成11年	1999			第102次	城戸八丁目町字茅藤	1998			2,300
				第103次	城戸八丁目町字本谷	1999			100
				第104次	城戸八丁目町字茅藤	1999			2,000
				第105次	城戸八丁目町字瓜割9-18	1999			120
				第106次	城戸八丁目町字瓜割流	1999			225
平成12年	2000			第107次	城戸八丁目町字瓜割流	32			90
				第108次	城戸八丁目町字本藤、古野本、鶴町	32	中山間		1,400
				第109次	城戸八丁目町字新御殿	32			2,000
				第110次	東新町字茅藤		中山間		1,050
平成13年	2001			第111次	西新町字心月寺		中山間		150
				第112次	城戸八丁目町字雲正寺	33			2,000
平成14年	2002	中期 第2次10ヵ年 後半	道路調査での調査を実施。雲正寺地区周辺を調査。南北道路の両側に大型の区画を検出。 中山間事業では道路遺構を確認。	第113次	城戸八丁目町字本藤、雲正寺	34			1,700
平成15年	2003			第114次	城戸八丁目町字雲正寺	35			1,700
				第115次	安養寺町字向山				540
				第116次	城戸八丁目町字川久保		中山間		315
平成16年	2004			第117次	城戸八丁目町字堅	35			95
				第118次	城戸八丁目町字長藤				115
平成17年	2005	中期 第3次10ヵ年	道路調査での調査を実施。特に一乗谷川右岸の上城戸は心和館における唯一の性格不明の未調査区。および西山光照寺の未調査区を都明する。	第119次	城戸八丁目町字雲正寺	36			3,000
					城戸八丁目町字雲正寺	36			
平成18年	2006			第120次	城戸八丁目町字上城	37			500
				第121次	城戸八丁目町(大岩谷用)				100
				第122次	城戸八丁目(城戸八丁目)				650
				第123次	西新町字大門(西新田)				250
平成19年	2007			第124次	城戸八丁目町字朱座	38			2,500
				第125次	城戸八丁目町字八地谷・雲正寺・茅藤	38			135
平成20年	2008			第126次	城戸八丁目町字中整	39			44
				第127次	城戸八丁目町字門内	39			2,000
				第128次	城戸八丁目町字八地	39			120
平成21年	2009			第129次	城戸八丁目町字本谷				20
				第130次	城戸八丁目町字門内	40			2,500
				第131次	城戸八丁目14字疣角2	40			42
平成22年	2010			第132次	安養寺町字本藤	41	11		1,800
				第133次	城戸八丁目町字疣角	41			40
				第134次	城戸八丁目町字藤兵衛川原・上城戸組				222
平成23年	2011			第135次	安養寺中島町字本藤	42	11		800
				第136次	城戸八丁目町字上城戸	42			1,200
平成24年	2012	改定基本計画短期5ヵ年	城下町の防御施設の要である上城戸について、城戸内外をつなぐ通路と城戸入口の構造および周辺の様相を部分に解明する。	第137次	城戸八丁目町字本藤・茅藤	43			300
				第138次	城戸八丁目町字上城戸	43			900
				第139次	城戸八丁目町字上城戸				600
				第140次	城戸八丁目町字上川原	43			120
平成25年	2013			第141次	東新町字上才木	44			300
				第142次	城戸八丁目町字上城戸・道東・川原谷・茅藤谷				245
				第143次	城戸八丁目町字本藤・茅藤	44			30
				第144次	安養寺中島町字本藤	44	11		60
				第145次	東新町字上才木				200

注 報告書略称 一乗小学校…「一乗谷朝倉氏遺跡 一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書1986」、桜江・美山調…「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 県道桜江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書1983-3」、武者野遺跡…「武者野遺跡 国道158號改良工事に伴う事前調査報告書1986-3」、道路遺跡…「一乗谷朝倉氏遺跡 城倉都城遺跡道路遺構に伴う発掘調査報告書1987」、本庄空間…「一乗谷朝倉氏遺跡 一乗谷川本庄空間整備工事に伴う事前調査報告書1991」、福元・勝山線…「一乗谷城址 県道福元・勝山線改良工事に伴う事前調査報告書1992」、中山間…「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 ～中山間地域総合整備事業調査略道路整備事業に伴う発掘調査～ 第106次・第110次・第111次・第116次調査2005」



挿図 1　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図

査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城戸本体の調査に入った。

翌昭和62年度から中期第1次10か年計画として巨大な土塁を持つ上城戸や南陽寺・今回報告する西山光照寺・御所安養寺などの大規模な寺院、そして中惣・椿殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模で特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10か年計画に入り、町並立体復原地区に隣接する一乗谷川より西側部分の八地谷川両岸の地が連続的に発掘調査され、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。途中、平成16年度は、雲正寺地係の発掘中に福井豪雨により被災したため、発掘調査は中断し、災害復旧に全力を注ぐこととなった。

翌平成17年度から改めて中期第3次10か年計画を施行し、中断した調査を再開した。平成19年度からは朝倉館跡から上城戸跡に至る遊歩道沿いの整備を進める目的で米津・門ノ内を連続的に発掘し、屋敷区画内において刀装具製作工房、ガラス玉製作工房の存在が明らかとなった。平成22年度からは、今回報告する西山光照寺跡の平地部北半の調査を行い、大規模な石垣や建物の存在を確認した。

平成24年度からは、前年度に改定した「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘・整備基本計画」に基づき、城下町の防御の要である上城戸跡について、城戸内外をつなぐ道路と城戸入口の構造および城戸周辺の様相を面的に解明する目的でトレンチ調査を実施し、道路の一部や屋敷地の存在を確認して現在に至っている。

3　調査の方法および組織

発掘調査・環境整備は、国庫補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日）、およびこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館(昭和56年8月20日～。平成4年4月1日から、名称が一乗谷朝倉氏遺跡資料館となった)が設置され、その任に当たってきたが、平成24年度からは、県の機構改革により同資料館が教育庁から知事部局に移管となったことに伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが朝倉氏遺跡グループを設けて引き継いでいる。また当初から「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会（平成8年度から、名称が福井県朝倉氏遺跡研究協議会となった）が設置され、その指導と助言を受けている。本報告書に関係する年度における組織、及び経費を以下に記す。

○平成6・7年度（第86・87・90次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委　　員　近藤　公大（神戸芸術工科大学教授）
委　　員　河原　純之（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）
委　　員　木原　啓吉（千葉大学教授）
委　　員　小林健太郎（滋賀大学教授）
委　　員　田畑　貞寿（千葉大学教授）
委　　員　玉置　伸吾（福井大学教授）
委　　員　坪井　清足（大阪文化財センター理事長）
委　　員　平井　　聖（昭和女子大学教授）

委　　員　松浦　義則　(福井大学教授)
委　　員　吉田　伸之　(東京大学教授)
委　　員　石田　昇　(朝倉氏遺跡保存協会長)
委　　員　奥田　道雄　(城戸ノ内区長)

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館　　長　貴志　真人　(美術)

次　　長	大塚セツ子＊(事務)	次　　長	山田　利秀＊(事務)
主任文化財調査員	岩田　隆　(考古)	主任文化財調査員	吉岡　泰英　(建築)
主　　査	佐藤　圭　(歴史)	主　　査	赤澤　徳明＊(考古)
文化財調査員	水村　伸行　(考古)	文化財調査員	宮永　一美＊(歴史)
非常勤嘱託	舟澤　茂樹　(学芸)	非常勤嘱託	高野　正春　(事務)

(＊大塚・赤澤は平成6年度、山田・宮永は平成7年度)

経費　平成6年度　発掘調査経費　33,103千円 (2,800㎡　内86・87次調査2,400㎡)
　　平成7年度　発掘調査経費　29,875千円 (3,400㎡　内90次調査800㎡)

○平成22・23年度 (第132・135次調査)

福井県朝倉氏遺跡研究協議会

委　　員　河原　純之＊(元川村学園女子大学教授)
委　　員　池上　裕子　(成蹊大学教授)
委　　員　小野　正敏　(大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事)
委　　員　高橋　康夫　(京都大学大学院教授)
委　　員　高瀬　要　(和歌山県立紀伊風土記の丘館長)
委　　員　本出　光子＊(九州国立博物館学芸部博物館科学課長)
委　　員　神吉紀世子　(京都大学大学院助教授)
委　　員　久保　智康＊(京都国立博物館学芸企画室長)
委　　員　高妻　洋成＊(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)
委　　員　岸田　清　(朝倉氏遺跡保存協会長)

委　　員	石川　太＊(公募)	委　　員	川口　義雄＊(公募)
委　　員	高橋百合子＊(公募)	委　　員	山下忠五郎＊(公募)

(＊河原・本田・石川・川口委員の任期は平成24年1月24日まで、久保・高妻・高橋・山下委員の任期は同1月25日から)

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長(嘱託)	水野　和雄　(考古)	館長(嘱託)	吉岡　泰英　(建築)
副館長	佐藤　圭＊(歴史)	副館長	畠中　清隆＊(考古)
次　　長	山崎　俊枝　(事務)	主　　任	柳部　正典　(考古)
主　　任	川越　光洋　(考古)	主　　任	宮永　一美＊(歴史)
主　　査	千木良礼子＊(建築)	文化財調査員	藤田　若菜　(造園)
文化財調査員	今出　瑞穂　(建築)	非常勤嘱託	伊藤　正博
非常勤嘱託	岡本　妙子	非常勤嘱託	眞保　弘恵

(＊佐藤・千木良は平成23年5月16日まで、畠中・宮永は同5月17日から)

経費　平成22年度　発掘調査経費　35,078千円（1,500㎡　内132次調査1,500㎡）

　　平成23年度　発掘調査経費　39,361千円（2,000㎡　内135次調査800㎡）

○平成24～26年度（第144次調査、本報告書作成）

福井県朝倉氏遺跡研究協議会

委　員　池上　裕子（成蹊大学教授）
委　員　小野　正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）
委　員　高橋　康夫＊（京都大学大学院教授）
委　員　高瀬　要一（和歌山県立紀伊風土記の丘館長）
委　員　神吉紀世子（京都大学大学院教授）
委　員　久保　智康＊（京都国立博物館学芸企画室長）
委　員　高妻　洋成＊（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）
委　員　富島　義幸＊（京都大学大学院准教授）
委　員　岸田　清（保存協会長）
委　員　水野　和雄＊（元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館長）
委　員　数本　金一＊（元福井県立若狭東高等学校長）
委　員　高橋百合子＊（公募）　委　員　山下　忠五郎＊（公募）

(＊高橋康夫・高橋百合子・山下委員の任期は平成26年1月24日まで、富島・水野・数本委員の任期は同1月25日から)

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所　長　佐藤　圭＊　　所　長　畠中　清隆＊
次　長　冨山　正明＊　　非常勤嘱託　上出嘉代子＊
非常勤嘱託　蟻塚美佐子

(＊佐藤は平成24年度、畠中は同25・26年度。冨山は同25年度まで。上出は同24・25年度、蟻塚は同26年度)

同　朝倉氏遺跡グループ

主　任　月輪　泰＊（考古）　主　任　櫛部　正典＊（考古）
主　任　川越　光洋＊（考古）　主　査　木村孝一郎＊（考古）
文化財調査員　今出　瑞穂＊（建築）

(＊月輪・櫛部・川越は平成24年度、木村は同24・26年度、今出は同24・25年度で資料館併任。)

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長(嘱託)　吉岡　泰英（建築）　副館長　畠中　清隆＊（考古）
副館長　月輪　泰＊（考古）　次　長　田中　典子＊（事務）
次　長　井上　順子＊（事務）　主　任　櫛部　正典＊（考古）
主　任　川越　光洋＊（考古）　主　任　宮永　一美＊（歴史）
主　査　木村孝一郎＊（考古）　主　査　松本　泰典＊（考古）
文化財調査員　藤田　若菜＊（造園）　文化財調査員　熊谷　透＊（建築）
非常勤嘱託　辻岡　良彦＊　非常勤嘱託　眞保　弘恵
非常勤嘱託　松村　良行＊

(＊畠中は平成 24 年度、田中・辻岡は同 24・25 年度、月輪・櫛部・川越・松本は同 25・26 年度、木村は同 25 年度。井上・熊谷・松村は同 26 年度。宮永・藤田は同 24 年度から朝倉氏遺跡グループ併任)

経費　平成 24 年度　発掘調査費　33,098 千円（1,200 ㎡、報告書遺物整理　）
　　平成 25 年度　発掘調査費　30,383 千円（800 ㎡　内 144 次調査 60 ㎡、報告書遺物整理）
　　平成 26 年度　発掘調査費　17,011 千円（報告書刊行）

発掘作業には、地元はじめ地域の方々の参加・ご協力を得た。遺物整理については、埋蔵文化財調査センター整理作業員がこれに当たった。

4　本報告書について

内容

本報告書は、国庫補助事業として福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が西山光照寺跡において平成６・７年度に実施した第 86・87・90 次調査、同 22・23 年度に実施した第 132・135 次調査と、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが同 25 年度に実施した第 144 次調査の発掘調査報告書である。

執筆

本報告書は、各次の発掘調査記録をもとに、以下の分担により執筆し、全体の編集は櫛部正典が担当した。
Ⅰ月輪泰、Ⅱ・Ⅲ櫛部正典、Ⅳ－１・２櫛部正典、Ⅳ－３・４木村孝一郎、Ⅳ－５月輪泰、
Ⅳ－６松本泰典、Ⅳ－７宮永一美、Ⅳ－８川越光洋、Ⅴ櫛部正典、Ⅵ宮永一美

図面

遺構平面図は、第 86・87・90 次調査は（株）アジア航測、第 132 次調査は（株）太陽測地社、第 135 次調査は（株）帝国コンサルタントに委託し、空中写真測量等により作成したものを用いた。

実測図・遺構図等については当時の職員と各担当者で作成し、遺物整理員がこれを助けた。

挿図として使用した地形図は、昭和 44 年に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（1／1,000）を使用した。

その他

本報告書の遺構図に用いた座標は、国土座標系「第Ⅵ系」である。

本文中の方位は、説明の便宜上、グリッドラインを基準に、山側を西、足羽川を東として記述している。そのため、実際の方位とは約 40°西にずれている。

遺構番号の頭に付した記号は、以下の分類による。

ＳＡ：上塁・塀・柵、ＳＢ：建物、ＳＤ：溝・濠、ＳＥ：井戸、ＳＦ：石積施設、ＳＧ：池、ＳＩ：門、ＳＫ：土壙、ＳＳ：道路、ＳＴ：墓、ＳＶ：石垣、ＳＺ：暗渠、ＳＸ：その他の遺構

出土遺物、ならびに図面、写真等は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

Ⅱ　調査の経過と概要

1　はじめに

調査を実施した西山光照寺跡は、下城戸跡から北西に約 400 mの場所に位置する。日本海方面から足羽川沿いに南下するルートで、城下町の玄関口として目にすることができ、朝倉氏の権威を示す重要な場所となる。西山光照寺は、現在、福井市の中心市街地にある「福井大仏」の名で親しまれる天台宗寺院で、朝倉氏の時代は当地に所在し、天台真盛宗の祖、真盛上人の高弟の盛舜上人が初代住持として再興したとされる。また、「光照寺」の名の由来は、朝倉初代孝景の叔父で朝倉豊後守将景の法名「光照用公居士」に因んで付けられ、将景の菩提を弔うために再建されたと考えられている。この地にいつから寺院があったかは文献等の記録がなく不明である。現在、本尊として伝わる平安末期の阿弥陀如来立像の存在から、15 世紀以前の前身の寺院が存在したことが推定できる。西山光照寺は 16 世紀中葉に最も栄え、この頃に天皇の勅願寺としての記録が文献に表れる。しかし、繁栄の間も少なく、天正元年(1573) に、織田信長によって朝倉氏は滅ぼされ、一乗谷の城下町は焼亡した。その当時、西山光照寺がどのような状況に遭ったかは不明だが、一旦廃絶に近い状況になった可能性は高いと思われる。その約 30 年後の慶長 11 年(1606) に、越前北庄初代藩主結城秀康より北庄城下に寺領を賜り、慶長 16 年(1611) に現在の地で西山光照寺は再興する。そして当地に、寺守の住む庵のみが残され、その庵は大正期前後まで続いたと言われる。昭和 5 年 (1930) に、一乗谷朝倉氏館址附南陽寺址が国史蹟及び名勝に指定された際、この西山光照寺址も国史蹟に指定された。一乗谷の中でも特に歴史的に価値の高い場所として、早くから認識されていたことがうかがえる。

挿図 2　西山光照寺跡調査区周辺地形 (1 /2, 000)

西山光照寺跡は、西側を山として東側に足羽川を望む山裾を中心に存在する。寺域の広がりは明らかでないが、地籍図によれば字名を「西山」とする範囲から山裾までの平坦部と背後の山地部に広がりが想定されている（第1図参照）。南北約160mの平坦部の中央には旧参道が東西に延び、その南・北両側に石仏群が立ち並ぶ。山地部では谷の南側を中心に階段状の平坦面がみられ、一石五輪塔や石仏等の散乱する状況から、現時点では墓地と推測される。この上段部には盛嶋上人七回忌供養塔がみられ、谷の最深部には「南無阿弥陀仏」と彫られた自然石があり、結界として認識している。

発掘調査は寺院跡の平坦部のみを、大きく2時期に分けて実施した。まず、平成6・7年度に寺院跡の南半側（「南区」とする）を第86・87・90次発掘調査として実施した。次に、平成22・23年度に寺院跡の北半側（「北区」とする）を第132・135次調査として実施し、平成25年度にその補足調査として南・北区境付近を中心に第144次調査を実施した。

2　平成6・7年度、南区（第86・87・90次）の調査

南区の調査面積は約3,200㎡である。調査地の北東側は旧参道が東西に走り、ほぼ中間付近で南北道路とT字に交わる。旧参道両脇には大型石仏35体が参道側を向いて立ち並び、石仏と道の間は方形状の窪地で、窪地の南・西面には小ぶりな石を積み上げた石垣が存在する。T字路の西側と石仏の南側は一段高い平坦面になり、この段を境に上・下段の平坦面に分かれる。上段は、南北道路より東側では水田区画に改変され斜面の高い方が削られ造成されている。西側も南半は同様の状況である。上段の北西側では近代まで庵の存在した場所があり、耕作地の造成がない。その旧参道側では一石五輪塔等を重ねて築いた台座上に大型の石仏を乗せた石造物が2基並んでみられ、南側が虚空蔵菩薩坐像、北側が阿弥陀如来立像であった。

第86次調査は上段の西半部で、平成6年5月19日から8月13日にかけて調査を実施した。調査の結果、調査区南側で、礎石の遺存は少ないが柱の痕跡を示すピットを多数検出し、建物の存在した場所と判明した。南西側では、厚い堆積土の下で焼土面や石垣・墓地跡等の遺構を検出し、山際で遺構の遺存状況が良いことが分かった。中央部では、地下式倉庫と考えられる大型の石積施設を検出し、その内部に大量の遺物と炭化物が詰まっていたことから、火事場整理に使用されたことが判明した。その西側では、根固めされた礎石をもつ建物跡を検出し、南区の中心的建物になると想定される。礎石の遺存が悪いため建物の形・規模等は不明であった。北西側では庵跡とみられる礎石建物と同時期の井戸等を検出した。

第87次調査は、上段東半部と下段の南側の石仏群辺りを対象とする。調査は、平成6年8月19日から12月25日にかけて実施した。11月14日に第86・87次調査区の航空測量を行った。調査の結果、上段では後世の削平が著しく、建物跡等の遺構が全く遺存していなかった。Q列と23列沿いに断ち割りのトレンチを入れて、造成方法と下層の確認を行った。石仏背後の上・下段区画境では、朝倉期の巨石積みによる石垣を検出した。石垣の手前では火葬骨の散乱箇所を検出し、石仏が配置される前に墓の造営があったことが新たに分かった。

第90次調査は、第86次調査区の西側と北東側、下段の南北方向の石垣を新たに拡げて調査するのと合わせ、南西側の墓地跡や北西側の庵跡付近を再調査した。調査期間は平成7年4月3日から7月18日である。航空測量は、第91次調査と合わせて12月13日に行った。調査区の北東側にあった石塔を積み上げた台座と石仏2体は調査中に解体し、西山光照寺跡の石仏・石塔資料として別に整理・調査す

ることとした。調査の結果、南西側の墓地跡では新たな墓は無く、第86次調査で検出した墓の下に墓壙は確認されなかった。調査区の北西側では庫の南側で朝倉期の遺構と考えられる溜枡状の石積施設を新たに検出した。また北東側では、旧参道から続くルートの延長で入口階段状の石列を検出した。

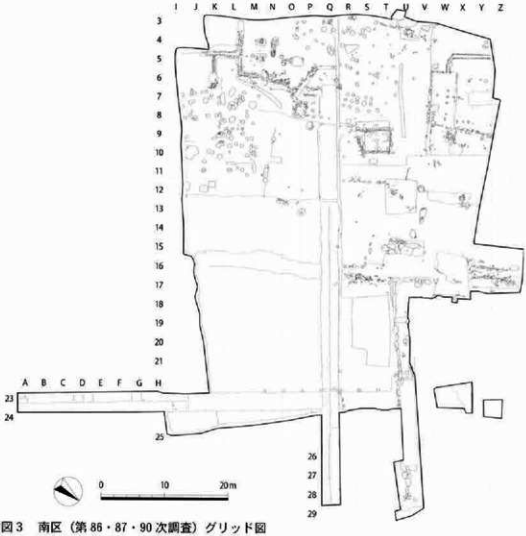
3　平成22・23・25年度、北区（第132・135・144次）の調査

北区の調査面積は約2,300㎡である。調査区は上・下2段の平坦面に分かれる。上段は南北約70m、東西約35～14mで、北側に向かって次第に狭くなる。下段は農道がすぐ東側を通るため、調査可能な幅は最大で約5mしかない。南区の調査区との境は舗装された里道が造られているため、直接繋げて調査できなかった。発掘前の現況は、調査区の全体が杉と竹・雑木の林で、上・下段の間は緩やかな斜面になっており石垣は露出していなかった。ただ唯一、調査区の北東端で縦長の巨石（SX6495）の上半部が地表に露出しており、石に彫られた「南無阿弥」の4文字が確認できた。なお、発掘当初この石は寺域北東端の結界石とされていた。

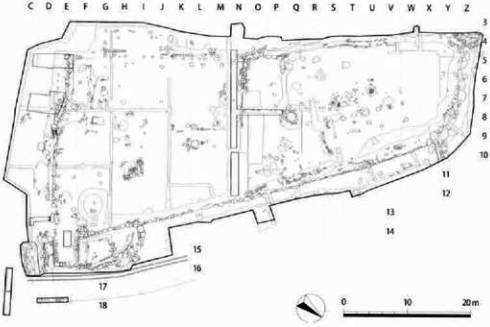
第132次調査は、平成22年5月25日から平成23年3月15日に実施した。調査面積は、当初排土置場（約300㎡）を除く約2,000㎡としていたが、山際の斜面崩落土や上・下段間斜面の堆積土の量がかなり多いことから、南側の約1,500㎡分までを調査することに変わった。作業は、12月2日に航空測量を行ない12月10日に調査を終了し、翌年3月1日から3月15日に調査区の埋め戻し作業を行った。調査の結果、上段の山際付近では火災による焼土面が良好に残り、大型の礎石建物跡等を検出した。しかし、上段の東半側は後世の削平が強いため礎石の遺存が悪く、建物全体の形状・規模は不明であった。調査区の南端部では、敷地を南・北に区切る区画溝を検出した。上・下段間の斜面ではこれまで石垣の存在は推測されていたが表面に露出していなかった石垣を実際に検出し、旧参道に近い南東側では、石垣の方形突出部や、曲線状に組まれた土壇状遺構等を検出した。

第135次調査は、第132次調査区の北側約800㎡を、平成23年5月21日から平成24年3月23日に実施した。作業は、9月8日に航空測量を行い、9月22日に調査を終了し、その後は調査区の埋め戻し作業を9月30日まで行い、第136次調査（字門ノ内）や冬期間で中断した後、翌年3月に残りの埋め戻し作業を行った。調査の結果、上段北半で大きな礎石をもつ建物を検出した他、井戸・土坑等を検出した。上・下段境の石垣では、北東角で「南無阿弥陀仏」と彫られた石碑が石垣内にはめ込まれていたこと明らかになり、その銘文に紀年名と合わせて、石碑を造立した人物の諱と戒名の両方が彫られていたことが貴重であった。また、第132次調査区と比較すると遺物の出土量が少ない割に、土坑の底面から茶入・建水・鉄鍋・擂鉢・漆器皿が一括で出土した他、一乗谷で初となる歯形分銅が出土するなど、貴重な遺物が出土している。

第144次調査は、南・北両地区の境付近と第132次調査区の南側で実施した補足のトレンチ調査で、平成25年10月3日から10月30日に実施した。この補足調査の主な目的は、北区で検出した石垣等の遺構と南区側の入口階段等の遺構とのつながりの把握や、遺構・層序の再確認をすることであった。トレンチは9箇所に設定し掘り下げた。調査の結果、トレンチ1で区画溝より古い下層の溝の一部を検出した。トレンチ4・5では南側に面をもつ巨石積みの石垣を新たに検出し、第132次調査区側の北面の石垣との間が通路状のスロープ遺構となっていた。トレンチ6では、入口階段（SI4463）が嵩上げして築かれた後世の構築と判明し、下層に朝倉期とみられるしっかりと固められた通路面と、東に下がる段を検出した。



挿図3　南区（第86・87・90次調査）グリッド図



挿図4　北区（第132・135・144次調査）グリッド図

日 誌 抄

第86次調査（平成6年5月19日～8月13日）

5・19　調査開始。
5・23　耕土除去を開始。
6・2　遺構の検出開始。
6・13　大型の石積施設（SF4418）を検出。
　　石が多数投げ込まれ遺物が多量に出土。
6・14　R列以南、9列以西で焼土面検出。
6・15　近代とみられる廃跡の礎石を検出。
6・20　山側の表土除去。（～22日まで）
6・23　調査区南西隅より遺構検出開始。
　　石垣（SV4421）と焼土ピット多数検出。
6・27　S列以北、11列以東は全く遺構なし。
　　表土直下に山上整地層が露出。
7・5　N列以南、10列以西のピット調査。
7・7　Q列トレンチを掘削開始。
7・8　Q列トレンチを約1m掘り下げる。
7・12　12列東側で石列（SX4432）検出。石列東側で焼土面及び砂利敷き道路検出。
7・14　SF4418の掘削開始。
7・15　SF4418より大・小の鉄釘が多数出土。
7・26　SV4421付近の近世以後の石段を除去。
8・2　写真撮影（～9日まで）実施。
8・13　調査終了。

第87次調査（平成6年8月19日～12月25日）

8・19　調査開始。23A～H列トレンチ掘り下げ。
8・22　23A・23D・23G区の深掘り実施。
8・23　23A区が他の地点より地山層が深い。
8・24　表土除去。
8・26　23A・23D・23G区、トレンチ土層図実測。
8・30　23～29R列トレンチ掘り下げ。
8・31　23～29R列土層図実測。
9・2　石仏背後の石垣付近を調査。
9・5　23H～T列トレンチで地山層まで掘り下げ。
9・8　17～22Q列トレンチを13列まで拡張。
9・12　20～22U列の掘り下げ。
9・13　23II・I区掘り下げ。
9・19　Q列を24列まで拡張。参道の南・北（23W区・23Z区）掘り下げ。
9・26　23W区完掘。参道が後世の盛土と確認。
10・4　18～22U区で石垣の検出作業。
10・6　U列の石垣下面を検出。
10・7　石垣下面で人骨集中地点を4箇所検出。
10・12　第86次調査区南西隅を再度精査。
10・13　土層図実測。（～14日まで）
11・14　ヘリ実機での航空測量。
12・25　調査終了。

第90次調査（平成7年4月3日～7月18日）

4・3　調査開始。
4・4　第86次西側の山裾側から表土除去開始。
4・11　杉木伐採。
4・14　山際の表土がかなり厚い。
4・18　表土除去終了。
　　山際の墓地の広がりとSD4413を追及。
4・19　墓地の周囲で砂利敷きと炭層検出。
4・25　SD4460を調査区西端まで検出。
4・27　P3・4区で炭層を含むピット多数検出。
5・2　炭層がR～W列にかけて広がる。
5・10　R3～U5区でピット検出。
5・16　V3～W4区炭層下のピット検出。
5・17　X～Z3区で調査区を山際に拡張
5・19　広い溜枡（SX4426）を検出。
5・20　SX4426が近代廃跡の下層に広がる。
5・24　山裾側の調査終了。
5・26　原位置にない石仏・五輪塔を移動。
5・31　調査区東側の耕土除去。
6・9　砂利敷き（S14431）面まで掘り下げ。
6・13　SX4475の周例で火葬骨を検出。
6・22　入口階段（SI4463）を検出。
6・30　SI4463の調査終了。
7・5　石垣（SV4422）の調査。
7・7　清掃。門跡付近の石仏を移動。
7・14　写真撮影。
7・18　調査終了。

第132次調査(平成22年5月25日～平成23年3月15日)

5・25　調査開始。竹・雑木除去。
6・3　現地の杭打ち作業開始。
6・8　調査区南端の排水溝を掘削。
7・7　N8・9区で石敷き(SX6442)検出。
7・16　N列山裾にトレンチ設定。
7・20　区画溝(SD6421)検出。
8・20　SD6421上面の石造物を写真撮影。
8・24　山際の崩落土を掘り下げる。
8・27　山際で焼土面を検出。
9・3　H4区焼土面で灰釉壺や銅製品が出土。
9・7　上段東側に石垣の存在を確認。
9・9　石組遺構(SX6427)検出。
9・10　土師皿集中地点(SX6440)検出。
9・14　石垣の並びが明らかになる。
9・30　溝(SD6448)両側の石垣を検出。
10・8　下段炭焼土層より多量の遺物が出土。
10・15　7列畦の土層図実測。
10・21　下段でSX6452検出。
10・22　SX6440遺物出土状況図実測。
10・27　山際焼土面と礎石列の写真撮影。
11・3　現地説明会を行う。
11・4　H列畦の土層図実測。
11・10　SA6452内部の暗渠(SZ6453)を検出。
11・12　M7・8区でSX6433検出。
11・17　SX6442の東側で石列(SX6445)検出。
11・18　SD6443、SZ6444を検出。
11・19　SE6428内の崩落石を除去。
12・1　完掘状況写真撮影。
12・2　ラジコンヘリ航空測量。
12・8　N列北側トレンチの掘り下げ。
12・10　現地調査終了。
3・1　調査区埋め戻し。(～15日まで)

第135次調査(平成23年5月21日～平成24年3月23日)

5・20　調査開始。杭打ち。調査区周囲の草刈り。
5・24　第132次調査区、SX6452の石垣実測。
5・27　上段側から遺構面の検出作業を開始。
5・31　T列以北で遺構面まで掘り下がる。
6・2　上段東側斜面の表土掘り下げ。
6・3　P11区で鉄製の鉈出土。
6・7　下段の表土掘削開始。
6・8　北面の石垣(SV6497)検出。
6・9　SD6443をQ5以北で検出。
6・14　石碑(SX6495)の下の文字が地表に現れる。
6・16　上段の遺構面で赤色焼土ピット多数検出。
6・22　東面石垣の検出作業。
6・29　石碑(SX6495)の文字を拓本。
7・6　T5区でSK6488検出。
7・8　T11区の石垣前面で歯形分銅出土。
7・14　SK6485の調査。
7・19　下段のS11区で2面の遺構面を確認。
7・22　P11区で壁土状の塊多数出土。
7・26　石碑(SX6495)前面でSD6496検出。
7・28　遺構精査し SK6491等検出。
7・29　下段北西端でSX6498検出。
8・2　SK6491で茶人・鉄鍋等を発見。
8・3　SK6491遺物出土状況の写真撮影。
8・8　O8区切株下でSE6483検出。
8・9　SK6491底面で新たに漆器皿発見。
　　慎重に検出。遺物出土状況実測。
8・10　SK6491の遺物取り上げ。
8・18　航空測量に向けた清掃開始。
8・25　清掃。台風のため測量延期を決定。
8・29　下段、O・P13区を東に拡張。
8・30　地上写真撮影。
9・8　ラジコンヘリ航空測量。
9・13　下層調査のためN列深掘りトレンチ設定。
9・14　O列深掘りトレンチ設定。
9・16　下層より土師皿多量に出土。
9・22　調査終了。一部埋め戻し。(～30日まで)
3・12　調査区埋め戻し再開。
3・23　調査区埋め戻し終了し調査終了。

第144次調査(平成25年10月3日～平成25年10月30日)

10・3　調査開始。草刈り。杭設定。
10・7　トレンチ4・5で巨石積み石垣検出。
10・9　トレンチ1・2調査始める。
10・10　トレンチ4・5でSD6523検出。
10・15　トレンチ4・5南北畦の写真撮影。
10・17　トレンチ3・6・8を調査。土層図実測。
10・18　トレンチ9調査。
10・23　写真撮影。
10・24　トレンチ1で下層遺構のSD6521検出。
10・28　石垣立面図実測。
10・29　埋め戻し開始。
10・30　調査終了

Ⅲ　遺構

1　南区（第86・87・90次調査）

第86・87・90次調査を実施した、西山光照寺跡平坦部の南半地区を、便宜上「南区」とする。南区は遺構面の削平が殆ど無く、遺構がある程度遺存する第86・90次調査区と、遺構面が大きく削平され、遺構が殆ど確認されなかった第87次調査区の上段側、及び、第87・90次調査区の中の石垣によって区画された下段側の地区の３区に大きく分かれる。次に、建物の配置等を考察する上で検出した遺構の内容から、以下の６エリアに分割される。

小さな土坑が集中する上段南部（Ａエリア）

山裾の一段高い位置で墓地を検出した上段南西部（Ｂエリア）

地下式倉庫跡とその西側に続く建物跡を検出した上段中央部西半（Ｃエリア）

近代まで寺院の庵跡が存続する上段北西部（Ｄエリア）

東西に区画する段や通路跡等を検出した上段北東部（Ｅエリア）

入口階段及び石垣下の区画となる下段（Ｆエリア）

南区Ａエリア　（第３図、PL. ２・３）

南北約13ｍ、東西約17ｍの狭い範囲で、直径0.3ｍ～2.5ｍの土坑が70基程と、礎石とみられる石７個が密集したエリアである。土坑の覆土は、炭・焼土が多量に詰まったものとそうでないものとがある。また、土坑の形や深さから掘立柱建物の柱穴状の土坑と、礎石抜き取り穴状の浅い土坑、それに礎石の基礎部に穴を掘って石を置き根固めしたと思われる土坑など、様々な特徴がある。よって、恐らく、時期の異なる建物が同一場所に複数回築かれたことと、建物には礎石建物と掘立柱建物の両方がみられることが想定される。

SK4420・4440～4449、4452～4459、4467　各土坑は以下表のとおりである。

表２　南区Ａエリア土坑一覧

遺構名	地　区	平面規模（ｍ）	深さ（m）	備　　考
SK4420	J10	1.80 × 2.50	0.65	規模大
SK4440	J7・K7	0.70 × 0.85	0.40	柱穴か
SK4441	K6	1.45 × 1.95	0.25	SD4414関連土坑
SK4442	K7	1.10 × 1.15	0.25	炭・焼土多量
SK4443	K7・L7	0.75 × 1.85	0.30	炭・焼土多量
SK4444	L8	1.05 × 1.00	0.25	
SK4445	L9	1.50 × 1.25	0.25	礎石基礎か
SK4446	K9	1.20 × 0.95	0.30	礎石基礎か
SK4447	K9・K10	1.40 × 0.75	0.30	礎石基礎か
SK4448	K10	0.85 × 0.70	0.20	

遺構名	地　区	平面規模（ｍ）	深さ（m）	備　　考
SK4449	J11	0.70 × 0.85	0.20	礎石基礎か
SK4452	L7	0.95 × 1.40	0.60	柱穴か
SK4453	L7	0.60 × 0.70	0.35	柱穴か
SK4454	K7	0.60 × 0.55	0.50	柱穴か
SK4455	J8	0.85 × 0.85	0.15	礎石基礎か
SK4456	K8	0.60 × 0.85	0.45	柱穴か
SK4457	L8	0.65 × 0.70	0.30	柱穴か
SK4458	L9	0.70 × 0.60	0.40	柱穴か
SK4459	L9・L10	0.90 × 0.60	0.60	柱穴か
SK4467	L11	0.75 × 0.70	0.20	礎石基礎か

SB4450 建物の礎石とみられる石6個（石1～6）を検出した。石の大きさは長軸0.4～0.7m、短軸0.3～0.5m程で、上面がやや平坦となっている。建物東辺が石1を通るラインにあり、建物の北西角が石6と想定される。建物の北東角と推定される付近に、礎石抜き取り痕とみられる浅い穴が集中する。その西側約1mの所にSD4415があり、この建物の雨落ち溝の可能性も考えられる。SK4442は建物北辺の礎石抜き取り痕で、SK4448は建物東辺の礎石抜き取り痕の可能性がある。建物の東西方向の長さは約11.0mとなる。石3・4・5や、SK4446・4447・4448は建物の北辺に平行な方向の柱列と想定される。土坑の検出状況から、この礎石建物が築かれる以前に、ほぼ同位置に掘立柱建物が存在した可能性が高い。

南区Bエリア（第3～5図、PL. 4・5）

SD4412 墓地ST4424等のある段北端側にある石組み溝で、建物の主軸方向よりも約45°斜めにはしる。溝の北側では斜め北に折れて建物の軸と同じ方向にはしる。また、東端はSF4419南西角につながる。

SD4413 鍵の手状に折れ曲がる石組みの溝である。溝幅は約0.4mで、深さ約0.2m。勾配は南西側が低く、そこから南の調査区外に延びている。

SD4414 水を使う何らかの施設の痕跡と考えられるSX4441からSD4413にかけて、長さ約3.0mの溝。

SV4421 SD4413の北半部で、一段高く造成した区画と接する部分に築かれた石垣である。石垣は2段積みで南東角のみ大きな石を1個縦置きにしている。段の高さは、溝底から約0.6m。

SD4460 山裾から流れる溝で、SD4413につながる。山裾側半分は柔らかい岩盤を掘っただけの溝で、途中から石組みの溝となる。山裾から流れる溝だけに、夏の渇水期でも水が途切れることはなかった。

ST4424 第86次調査で笏谷石の板石を平らに敷いた墓の土台部分と考えられるもの4基（石7・9・10・11）と、自然石の平らな面を利用した同様のもの1基（石8）を検出した。第90次調査でこれらの石を取り外して、人骨を収めた落ち込み等の墓の痕跡があるか調査した。しかし、板石の下に墓壙らしき痕跡はみられなかった。笏谷石の板石は、最初から墓のために作ったものではなく、何らかの製品の再利用とみられる。

SX4451 ST4424付近からSD4460の間にかけて、小砂利が敷き詰められていた。

SD4461 墓（ST4424）の西に隣接する溝状遺構で、長さ約1.5m、幅約0.5m、深さ約0.25m。人頭大の石が一列に並ぶ。この遺構の性格は不明である。

SK4439 南北約2.1m、東西約1.5m、深さ0.12mの浅い土坑。内部は黒い炭で埋まる。

SX4468 墓（ST4424）の北西約4m付近で検出した、性格不明の小ピット群。径約0.4～0.5m、深さ約0.1～0.2mのピット4基がL字状に約1.0～1.25m間隔で並ぶので、建物の柱穴か礎石抜き取り痕の可能性がある。

南区Cエリア（第5図、PL. 6・7・8）

地下式倉庫跡（SF4418）を含め、その西側に建物跡が広がる。建物の規模は不明だが、最大でとると北端が東西溝（SD4416）から南端がSF4419までの間に広がると思われる。

SB4407 東西方向に礎石2石（石12・13）と礎石抜き取り穴4基が長さ約8.0mにわたり一列に並ぶ。この列を中心に、南北両側に同一建物のものであろう礎石や抜き取り穴状のピットが広がる。まず、その中でも確実なのが、列の東端の石12から北に直角に折れて並ぶ、2基の礎石抜き取り穴である。礎石の大きさが直径約40cmと比較的大きく、礎石を据える穴も小砂利を詰めて固めてあったことから、

かなりしっかりとした建物が想定される。建物全体の広がりとしては、建物北辺側が建物の庇下の雨落ち溝と推定されるSD4416の手前のピットまで、建物南辺側がSB4409と別の名称を付けた礎石まで広がる可能性が考えられる。そうすると、建物の南北幅が約13.0mとなる。また、石12の束に約2.8mの所にある石14が一直線上にあることから、地下式倉庫の建物（SB4408）と棟続きの可能性が考えられる。

SB4408　SF4418の西側に礎石3石（石15・16・17）が一列に並び、建物の西辺と推定される。この列と後述するSF4418床面の礎石列が、石17で垂直に交わるので一体の建物と想定される。また、東の対には石18があり、位置的に建物の東辺とみられ、よって、東西幅は約4.8mと推定される。建物の南北両側は、実際には不明だが、可能性としてSF4418の入口南端から、北辺にある石19の間が考えられ、南北幅は約5.5mと推定される。SF4418の入口部分のある南側に、建物の張り出しと考えられる礎石2石（石20・21）があり、SB4407の方とつながる庇下と考えられる。

SB4409　SB4407と軸が同じ建物で、SB4407の南辺の可能性がある。東西に礎石（石22～25）が約1.15m間隔で並び、石22と石23の北約1.3mに石26・27が並ぶ。また、礎石（石23・27）を通る南北ラインをそのまま南に伸ばすと、SF4419南壁側の上面が平らで礎石の可能性のある石28を通るので、SF4419の上層がSB4407の南辺から南に張り出す形でつながる可能性が考えられる。

SD4416　SB4407の北辺と推定するラインから北に約0.7mの所にある東西方向の溝。溝の側石は無く、溝幅約0.5m、深さ約0.15m。

SF4418　地下式倉庫と考えられる大型の石積施設である。石積みの天端から床面までの深さが約1.6mである。床面の規模が東西約3.2m、南北は最深部で約3.9mであるが、床面の南側で約0.2m高い面が約0.7m幅で設けられており、これを含めた幅は約4.6mとなる。壁面のほぼ全体が石積みされるが、南壁側は、東側角部から約0.75mの間が石組されておらず、ここに入口の階段があったとみられる。床面には5石の礎石と見られる石が、南北と東西の2方向にT字状に並び、礎石建物（SB4408）内部の施設である。床面の礎石は、東西列が最深部床面の中心に約1.0m間隔で均等に並ぶ。南北列は、東西列に垂直ではなく約5°西に傾き、1.25m間隔で均等に並ぶ。この礎石や四周の壁は火災による被熱を受けた痕跡がみられる。内部に堆積した炭・焼土起じりの覆土から、青磁等の優品を含め、多数の遺物が出土している。これらの遺物は、恐らく、朝倉氏滅亡後の火事場整理を行う際に、低い場所を利用してかき落とされたものと考えられる。

SF4419　Cエリア南端に位置する石積施設で、規模は南北約1.0m、東西約1.7m、石組み天端からの深さが約0.7mである。SD4412が南西角に接続し、便所あるいは溜枡と考えられる。

SK4433　南北約1.25m、東西約0.75m、深さ約0.25mの隅丸方形状の土坑。

SX4434　SB4407内部と想定される南東側で、径約0.5m、深さ約0.15～0.4mのピットが3基2列で、約0.8～1.0m間隔で平行に並ぶ。これらの軸は、建物の東西軸より約20°南に振れている。性格は不明である。

SX4437　SB4407内部と想定される南西側で、越前焼甕の体部下半の1/2程度の破片が土坑壁面に付いた状態で出土した。土坑は径約0.6mで、深さ約0.25m。大甕1個を埋設した遺構である。

SK4469　Bエリア北端部にある、南北約1.0m、東西約1.6m、深さ0.13mの浅い土坑。土坑の上面には焼土が広がり、土坑内部は黒い炭で埋まっていた。

SX4470　西側の山裾に沿って直径0.4～0.8mのピット8基が、南北約7mの範囲で帯状に集中する所がある。ピットの深さは約0.1～0.3mと浅い。礎石抜き取り穴の可能性はあるが、性格は不明である。

SK4471　南北 2.2 m、東西 1.25 m、深さ 0.1 mの浅い土坑で、内部は炭が詰まっていた。

南区Dエリア　（第6図、PL. 9）

当エリアは、近代まで庵が存続した場所であり、近世～近代の造成による攪乱が大きく、上面で近世・近代の建物跡等の遺構を検出している。逆に、中世朝倉期の建物跡等の遺構は、地面が削平されたためなのか、あまり検出されていない。出土遺物も近世後半～近代の陶磁器類、瓦等が多く、中世朝倉期の遺物は他のエリアに比べてかなり少ない。

SA4405　第 86 次調査時に検出した建物（SB4406）の南側の上塀状の高まりで、近世～近代の遺構である。南側に面をもつ石列を伴う。第 90 次調査で石列より北側の下層を掘り下げ、この石列はもともと溜枡状遺構（SX4426）の南壁と判明した。

SB4406　近代まで続いた庵とみられる礎石建物で、建物の主軸が朝倉期の建物よりやや東向きである。

SD4411　SB4406 の西側にある石組み溝で、溝石を立てた作り方が朝倉期の溝とは異なるため、恐らく、近世以後の所産と考えられる。しかし、溝の方向は朝倉期の建物の主軸方向と同じで、SB4406 より古くから溝があった可能性が高い。

SE4417　庵の東側に位置する石組み井戸で、この井戸は発掘調査前より開いており、後世の庵でも使用されていたとみられる。井戸上面の直径は約 0.7 mで、下へ行くほど径が大きく膨らんでいる。井戸の天端には笏谷石を敷いている。朝倉期からこの井戸が存在した可能性は全く否定できない。

SX4426　SA4405 の南側石列の北側背後で検出した溜枡状の遺構で、規模は南北約 3.8 m、東西約 8.2 m、深さは最大約 0.5 m。東西約西側より SD4411 の水が流れ込み、南東側に出口が設けられ SD4462 へと流れる構造とみられる。南壁の石積みは２段積みで、下側に幅 0.5 ～ 1.1 mの大きめの石を並べ、上側に天端高を調整するための小さめの石を置いている。特に南壁の中間点には、幅約 1.1 m、高さ約 0.7 mの大きな石 29 を置き、設計・構築の基準となる石の可能性が高いと思われる。南壁側の石積みが、かなりしっかりした造りで、朝倉期の所産にふさわしい。これに対し、西壁は小さめの石を底面よりかなり浮いた位置から２段積みし、積み方も雑なため、後世の石積の可能性が非常に高い。北壁と東壁については石の残りが悪く、状況は不明である。従って、南壁は朝倉期当時の位置で、他の壁面の位置は後世の造り替えによるものの可能性も捨てられず、朝倉期の形状は不明としか言えない。

SD4462　SX4426 の南東角から、やや西側に入り込んだ位置から東に流れる石組み溝である。SX4426 南壁に使われた石と同様の大きめの石を両側に並べ、朝倉期に存在した可能性が高い溝である。約７m東より先は、後世の削平のためか遺存していなかった。

南区Eエリア　（第7図、PL. 10）

当エリアでは、建物跡と思われる遺構は確認されず、敷地を東西に区画する段の石列と、砂利敷き通路跡、石碑等を検出した。

SX4430　南北 0.7 m、東西 0.75 mの方形に石を並べた遺構。石の天端からの深さ約 0.35 m。

SX4432　地下式倉庫跡（SF4418）の東に約 4.5 m離れて、南北方向の石列を検出した。東側がレベル差 0.1 m程で一段下がり、そこに砂利敷きの通路跡（SS4431）がみられる。

SS4431　砂利敷きの通路跡で、東西幅で約 4.5 m、南北長約７mの広がりがみられた。後世の削平によって、全体の範囲は不明である。砂利敷き面の直上は焼土層が薄く広がり、火災時に存在した通路であ

ることが伺われる。

SX4473　石列（SX4432）より東に約13.5m離れた地点にある南北方向の石列で、レベル差約0.4mで東側が一段下がる。石列は、Qライン畦から約3.5m北に延びた地点で西に折れてL字状になる。この石列の東側に、砂利敷きの通路跡（SX4474）が広がる。

SS4474　砂利敷きの中に拳大以上の礫も散らばった状態で含まれる。砂利敷きの範囲は削平で明らかでないが、東西幅約2mでQライン畦から約6m北までを検出した。

SX4475　西を正面に2石の立石と平らな石が横に並ぶ。これらは周囲より高くなった地面に立ち、発掘調査前から地表に露出していた。中央の石が、真盛上人、盛瞬上人供養の石碑で、表に、阿弥陀三尊種子を表す梵字と真盛上人・盛瞬上人の文字、裏に、梵字と開眼供養導師当寺五代真重上人、天文廿四乙卯年四月（以下は不明瞭）と刻まれる。左の石は、横長に立ち、表に平らな面をもつが、何も刻まれていない。これらの石の周辺には、河原石の小砂利が敷き詰められたとまでは言えないが多数存在し、また、少量の火葬骨を西側2か所と東側1か所の合計3か所で検出している。

南区Fエリア　（第8～10図、PL.11・12）

南区の北東角付近は、東西にはしる旧参道の突き当たりで、ここに後世の庵の時期の遺構ではあるが入口階段を検出し、朝倉期の参道もここに存在する可能性が高い。旧参道の両脇は覆屋で保護された石仏が並び、旧参道南側にある石仏覆屋の背後で、上・下段を区画する朝倉期の石垣を検出している。

SI4463　第90次調査で3段からなる石列を検出し、下段から上段への入口階段としたが、第141次調査でSI4463北端部（石30）付近の下層を調査したところ、石30が石垣の石で、実際の朝倉期の遺構面は約0.7m下に存在すると判明し、SI4463の北側は、少なくとも後世の造成によって埋め立てられた部分であることが分かった。第90次で検出したSI4463の形は、近代まで存続した庵の頃の階段であろう。従って、朝倉期にどのような形で存在したのかは不明となる。SI4463の最上段の石列を見ると、石31を基点に南と北で石列の方向がずれており、石31までが石垣の可能性が高い。

SV4422・SV4423　石仏覆屋の背後で検出した上・下段を区画する石垣である。北面の石垣をSV4422、南面の石垣をSV4423とする。石材の大きさは、横幅約1.2～2.0m、高さ約1.2～1.4mの巨石で、これを立てて構築している。倒れた石をみると石材の厚さは約0.5mと大きさの割に薄いのが特徴的である。

ST4425　SV4422の前面で3基の火葬骨を埋めたピットが並んでいるのを確認し、石垣の前面に墓地が存在した可能性が高いことが分かった。

第87次調査区トレンチ　（第11図、PL.11）

第87次調査区となる上段の東半は後世の削平が著しく、遺構が遺存していなかったため、寺院の建物などの配置は不明である。

上段の整地層と下層遺構の有無を確認するため、グリッド東西方向のQラインと、南北方向の23ラインに沿って3m幅のトレンチを掘り下げたが、一度に造成した2m近い整地層を確認し、下層遺構は確認されなかった。主に、黄色山上層と礫層とが交互に堆積する。

2　北区（第132・135次調査）

第132・135次調査を行った、西山光照寺跡平坦部の北半地区を「北区」とする。北区は、石垣を区画として上段と下段に分かれる。上段は、南側で検出した東西方向の区画溝が、西山光照寺跡の平坦部を南・北に大きく二分する境と推定される。上段の区画溝以北の敷地（北区画）では、建物跡、井戸等の遺構を南・北2か所のまとまりで検出し、両方の建物の主軸に異なりがみられるので二分する。なお、その境が第132次と第135次の調査区境にほぼ一致する。下段は、調査区の南端側に特殊な遺構が集中しており、円弧状遺構の南と北で二分する。

区画溝以南で、本来、南区Dエリアとなる上段南端部（Gエリア）

区画溝以北の敷地のうち、南半側建物を中心とする上段北区画の南半部（Hエリア）

区画溝以北の敷地のうち、北半側建物を中心とする上段北区画の北半部（Ｉエリア）

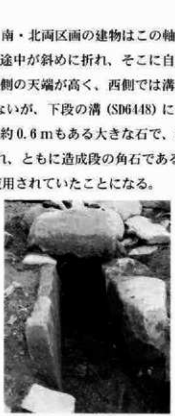
特殊な遺構が集中する円弧状遺構以南の下段南部（Ｊエリア）

円弧状遺構以北の下段中・北部（Kエリア）

北区Gエリア（第12・15図、PL.14・15・19）

SD6421　寺跡の北半の敷地を区画する石組溝。主軸方位はN53°Eで、南・北両区画の建物はこの軸方向で築かれている。溝幅は約0.25～0.5m、深さ0.4～0.6m。溝の途中が斜めに折れ、そこに自然石の蓋石を置いた入口（SZ6422）がある。この入口より東側では溝の北側の天端が高く、西側では溝の南側の天端が高い。溝の東端は横長に据えた石32から東側は遺存しないが、下段の溝（SD6448）につながると推定される。石32の石は横幅約1.6m、高さ約0.7m、奥行約0.6mもある大きな石で、約0.3m埋まっていた。これと同様の大きな石33が入口の西側にもみられ、ともに造成段の角石である。溝内の遺物に近世の遺物も若干混じるため、溝は近世のある時期まで使用されていたことになる。

SZ6422　北区画の敷地の入口で、平らな自然石5個を蓋石として置き、通路にしている。蓋石の架かっていた長さは約2.8mで、この部分の溝幅は約0.25～0.3mである。なお、東端の蓋石1個はずれて溝内に転落していたので、調査中に取り除いてみたところ、溝の南側は笏谷石の板石を立てて築いていた。なお、北側やその他確認できる所は通常の自然石の石組みである。また、笏谷石を立てた所の底面は壁土状の塊を敷き詰めて、地面が固く締められていた。



挿図5　SZ6422 東端

SX6423　東西約4.8m、南北約2.3mの隅丸方形土坑で、深さ約0.3～0.6mである。近世まで存続していたSD6421の南側を壊して掘り込んでおり、後世の攪乱坑である。

SV6424　SD6421の南側の建物（SB6425）が築かれた土台北面の石組みで、大きな石材で強固に築いている。石組み天端高は溝の北側より約0.3m高くなる。石組み東端の石33は、幅約1.3m、高さ約0.55m、奥行約0.7mとかなり大きく、上面が平らである。西側の石34・35も大き目で上面が平らな石であり、このような石が約2.0m間隔で並ぶ。石35の西約2mの位置にも石の抜け痕状のピットがあり、火災で生じたとみられる炭・焼土が多量に入り込んでいた。SV6424は、多くの石が被熱で赤く変色していた。

SB6425　SV6424より約1.6m南で、ピット5基が一列に並ぶ跡を検出した。ピットは径約0.3～0.5

mで深さ約0.1mと浅く、建物の北面の礎石抜き取り痕と考えられる。ピットの間隔は1.0m前後(0.9～1.1m)で、全てのピットに多量の炭・焼土層が詰まっていた。東端のピットで華南褐釉壺(図566)の破片が集中的に出土した。第144次補足調査の際にトレンチで西側に拡張して調査したが、後世の削平が南になるほど強く及び、建物の痕跡は全く確認出来なかった。

北区Hエリア(第12・15図、Pl.15～19)

SB6426 東西方向2列の礎石列を基本に推定した礎石建物。建物の四隅が確認出来ないため形・規模は不明である。建物南辺とみられるラインでは、礎石が西から約3.9m間隔で2石並び、その東約4.0mに礎石の抜き取り痕と推定されるピットがある。このラインの北約3.8mに、南辺と平行する礎石列があり、礎石は西から約1.9m、2.0m、5.7m間隔で3個並ぶ。礎石(石36)の上面には、柱を据える際の目印として「十」字の刻線がある。建物の東端の延長線上に礎石の可能性のある石37・38があり、建物の東辺がこの辺りまで延びていた可能性もある。

SX6427 方形の石組遺構である。石組は東西約0.9mで、南北は北壁が遺存しないため不明だが、底面の痕跡から1.2m前後と推定される。南壁は自然石を用いて2段積にするのに対し、東西両壁は笏谷石の板石を立てた上に笏谷石の板石を横にして積まれる。炉跡の可能性が考えられるが、炭や灰等の堆積が確認されず、遺構の性格は不明である。石組内部の覆土には笏谷石や越前焼甕片等が詰まった状態でみられた。

SE6428 発掘前の状況は、東斜面側に開いた大きな洞みとなっており、洪水により谷から運ばれた礫が堆積する状況にあった。窪み内を掘り下げると、下に行くにつれて大きな石が内部に落ち込んだ状態で詰まり、特に大きな石はクレーンで吊って除去した。地表下約3.2m(標高約29.5m)でようやく崩れていない状態の石組み井戸を確認した。しかし、大きな崩落石を取り除けなかったので、井戸全体の形状をだすことができなかった。

SB6429 SB6426の北側に棟続きになると考えられる大型の礎石建物である。建物の西辺には縁の東石と思われる小さめの石の並びがあり、南はSB6426北面の礎石(石39)から、北は礎石(石40)にかけての長さ約15.6mの間に、約1.4m間隔で並ぶ。建物の北西角が北端の礎石(石41)で、この石から東に建物北面の礎石が並ぶ。北面の礎石は、長辺約1.0、短辺約0.5～1.0mと大きな石材を使用しているのが特徴である。建物の東面は、遺構の残りが悪く明らかでないが、石42・43とその南側の礎石抜き取り痕らしきピットを結ぶラインが想定される。これらのラインから建物の規模は、南北約21.2m、東西約10.6mと推定される。

SX6430 SB6429西辺より0.75m西にある石列。SB6426・6429の礎石設置面よりも約3～5cm低い位置で、石列の上面を検出した。この石列上に堆積した上は、火災で赤色化した炭・焼土層であった。SB6429の西側では火災面が良好に遺存していたため、火災面の保存のために石列はサブトレンチで一部検出するに留めた。その結果、下層遺構かどうか十分な検討が出来なかったが、火災時には少なくともこの石列は地上に表れていなかったと考えられる。なお、この石列に沿った溝は確認されなかった。また、石列の設置面より下は、かなり固く締まった地山層である。

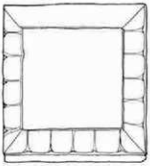
SX6431 SB6429の東石列より約0.5m西側に平行に、SB6432の東側の縁に並べられた石列である。東石上面の高さよりも約0.1m石列上面の高さが高い。

SD6432 この溝の上層に火災による炭・焼土層が堆積する。溝底までの深さは約0.4mである。もとも

と山際の排水施設として掘られた溝が、火災までに徐々に埋没して浅くなったものと思われる。溝の南側はL字に西側に折れ曲がる。北端は徐々に立ち上がり、岩盤に当たって途切れる。

挿図6　SD6432・SX6454 検出状況（北から）

SX6454　SD6452の西側に地山面をカットした平坦面が南北約5mの広さである。その中央部に石仏・石塔類を載せるための笏谷石の台座が1基据えてあった。（なお、これは遺構として現地保存した。）台座は南北32.6cm、東西28.0cmで、高さ11.2cmで、側面3方を連弁彫りで装飾しているが、北側面のみ連弁が無いので、南を正面にして立つと思われる。崖上に立つ西の山裾は斜面の崩れた土で埋まり調査出来なかったが、平坦面はまだ2～3mは奥に広がると推測される。



挿図7　SX6454 台座平面図（1/8）

SX6433　炭・焼土混り土で埋まった不整形な土坑で、平面規模は東西約5.8m、南北約3.3mと大きい。土坑北側の立ち上がりは、Mラインの畦北側の東西トレンチまで拡がる。深さは最大約0.7mである。土坑の性格は不明だが、何らかの構造物を抜き取るための攪乱と考えられる。出土した土師質皿を見ると、天正元年（1573）の際の火災遺物に比定する他の炭焼土層出土のものより古い様相が強いので、朝倉氏が滅亡する前にも敷地の改変等があったことが推測される。

SK6434　平面約1.2m×0.8m、深さ約0.5mの楕円形をした土坑で、覆土は黒灰色炭混り土である。土坑内より多数の石造物片が、詰め込まれた状態で出土している。まず、土坑の最上面より、五輪塔2連を線刻した板碑片（図745、口絵4）が線刻面を下向きの状態で出土した。この線刻部分の溝には朱と金箔が部分的に遺存し、文様を描く前の割付け線も残っており、表面の風化が殆どみられない状態である。板碑の下からは、「永正13年」の年紀を刻む一石五輪塔の地輪（図708）1個体が横向きに出土した。また、その下に、小型石灯籠形（図812）や石龕の屋根形の石造物片、「南無阿」3文字に朱・金箔が施された線刻の板碑片（図772、口絵4）があり、石製風炉・バンドコ片、土師質皿・越前焼甕・白磁片等が混ざって出土した。遺構の性格は不明だが、地表に散乱する石造物を片付けるため穴に埋めた可能性が考えられる。その時期は明らかでないが、石造物の破片に風化が見られない点から、石造物を当地に造立してから長年経過した後に埋めた感じではない。

SK6435・6436　両土坑は隣り合って検出した。SK6435は平面約1.4×0.9m、深さ約0.5mで、SK6436は平面約1.5×1.4m、深さ約0.6mである。両土坑はやや大きな規模で、礎石抜き取り痕ではなく貯蔵具の越前焼甕などを埋設した土坑の可能性が考えられる。両土坑から越前焼中甕片（図26）など、多数の越前焼甕・壺・擂鉢が出土している。

SK6437～6439　これらの土坑はSK6435・6436と比べて規模が小さく深さの浅い土坑で、礎石抜き取り痕の可能性もある。SK6437は平面約0.8×0.75m、深さ約0.4m。SK6438は平面約1.0×0.75m、深さ約0.4m。SK6439は平面約0.9×0.8m、深さ約0.3mである。

SX6440　土師質皿（図 252 ～ 260 等）を一括で廃棄するために小さく掘り込んだ土坑。直径約 10 cmの皿が 23 個体分以上出土し、その多くは重ねた状態で、側面を上向きに埋められていた。

SX6441　井戸（SE6428）と貯蔵の甕を埋設した土坑（SK6435・6436）から、ともに約 6 mの近距離にある長方形の石組みと小礫を敷いた石敷き遺構で、洗い場的な施設の可能性が考えられる。長方形石組みの底面は隙間の多いガラ石混じりの造成土で、自然に地下に水が浸透する所である。遺構の規模は、長方形の石組みが南北約 0.5 m、東西約 1.5 m、石組み天端からの深さ約 0.5 mで、その南に隣接する石敷きが、南北約 3.2 m、東西約 2.2 mの範囲に広がり、深さ約 0.15 mである。南東対角線上には性格不明だが炉跡の可能性のある SX6427 がある。

SB6455　SX6441 の北東角にある石 44 は上が平らで、礎石の可能性が考えられる。石 44 の南には礎石の石 37 があり、SB6426 と同じ軸で南北方向のラインが結ばれる。ただ、SB6426 の続きなのか、別の建物なのかは、礎石の遺存状況が悪いため不明である。SB6455 は、建物の北東角に位置する部分を検出した。そして、付近には井戸や、炉跡・甕の埋設、洗い場的性格の施設等があり、鉄釉片口鉢（図 341）が完形で出土し、酒宴等で使用されたとみられる土師質皿の一括廃棄土坑（SX6440）があり、日常生活で使う陶磁器類の出土分布の中心地になることから、当建物が台所的な場所であった可能性が考えられる。

挿図 8　片口鉢出土状況

北区 I エリア（第 13・14 図、PL. 18・19・20）

SX6442　SB6429 の北側の西半に隣接する石敷きで、東西約 5.1 m、南北約 0.75 mの範囲に平らな石が敷き詰められる。南側の礎石との段差が約 0.3 mで、北側の縁石との段差が約 0.2 mで、石敷きは低い位置にある。石敷きの西端は SD6443 の南端と接する。石敷きの下は締りのない土が堆積し、暗渠の溝となる可能性が高い。

SX6445　石敷き（SX6442）より一段低い位置の石列である。東西長約 5.3 mを検出した。検出当初は下層遺構と考えたが、トレンチ土層断面（第 19 図、7 ライン畦西竪土層図参照）を精査すると SB6429 の礎石設置面と同じ地面から掘り込まれた、断面U字形の細い溝であることが明らかとなった。この溝は、東側に緩やかに下り、水を地下に浸透しやすいガラ石の造成土に当たって無くなる。恐らく、排水用の導水路を地下に造るために溝状の石列を並べ、地上からは見えないように埋めたと思われる。開渠でないため、遺物は出土しなかった。

SD6443　山ぎわの溝で、SX6442 の西端から北側に長さ約 32 mで延び、北端は SD6500 につながる。大半は素掘りだが、南端付近のみ溝の両側が石組され、地山の岩盤を打ち砕いて築いた面もある。溝幅は 0.5 ～ 1.0 mで、深さは約 0.2 ～ 0.5 mである。溝東側の底は、ガラ石混じりの造成土が露出し、通常の雨程度の水は、すぐ地下に浸み込んでしまう状態である。北端が SD6500 につながっていたのも当初の時期で、ある段階に SD6500 が土砂崩れで埋まった後は、土砂が自然に埋まり、浅い窪みになったと思われる。

SZ6444　SD6443 上に平らな自然石等を置いた暗渠で、幅約 1.7 mである。山際の通路に進むための道と考えられる。

SX6481　径約 0.4 m、深さ約 0.3、の小ピット 3 基が東西に約 1.8 m間隔で並ぶ。覆土は赤色焼土混り

土である。赤色焼土粒混り土の覆土の小ピットを、このラインより北側で10基程度検出している。断面が垂直に落ちるピットが多い。掘立柱建物の柱穴としては規模が小さく、性格は不明である。

SX6482 幅約1.0m、深さ約0.15mの浅い溝状遺構である。覆土はしまりのない灰褐色土で、表土直下で遺構の輪郭を検出でき、比較的新しい遺構と考えられる。性格は不明だが、何らかの石列があり、それを抜き取った痕跡の可能性も考えられる。

SK6501 赤色焼土混り土を覆土とする土坑の一つで、規模はやや大きく、南北約1.3m、東西約1.1m、深さ約0.35mである。

SE6483 円形の石組み井戸で、石組み内法径約1.4mである。上に杉があったため、上部は攪乱がいちじるしく天端石は遺存しなかったが、地表下約0.6mからドの石組みは良好に残る。この井戸内の調査は約2.3mまでの深さで安全性を考えて止めた。この深さまでは、まだ井戸廃絶後の埋め立て土で、赤色焼土混り土の単一層である。

SK6484 赤色焼土混り土を覆土とする土坑で、径約1.4mで深さ最大約0.5mである。中心部に向かって擂鉢状に窪む形をしており、土坑内で小ピット3基を検出した。土坑内から二次的に強い被熱を受けて変形した土師質皿（図291～293）や小壺（図294）が出土している。

SX6485 笏谷石製の盤を埋設した遺構で、底に黒灰色の炭層が堆積し火炉の性格が考えられる。石盤は隅丸方形状で、内法61cm×48cm、厚さ2.5cmを測る。上部は欠損し残存部分での深さが約20cmである。

SX6486 SX6485の東側に、南北約1.4m、東西約2.2mの範囲で、5基程度のピットが互いに切り合いながら密集する遺構である。ピット径約0.5～1.0mで、ピットの中には地固めのために笏谷石片を多く入れた穴と、土層にしまりがなく柱穴とみられるピットが存在し、掘立柱の位置が何度かにわたって改変された痕跡ではないかと考えられる。しかしこれらの柱と同じ建物の存在が確認できかったため、実際に何であるかは不明である。

SK6487 L字状に曲がる不整形な土坑で、規模は南北約1.4m、東西約1.1mである。土坑の深さは約0.2mで全体がさがり、その中心部に径約0.4mの深い穴がある。この穴は、斜め直線状に下がり、約0.6m下でガラ石の礫層に到達している。実際の性格は不明だが、ここに何らかの水を良く使う場所があり、排水を目的とする穴を造っていた可能性も考えられる。

SK6488 隅丸方形状の土坑で、南北約1.4m、東西約0.8mである。土坑の覆土は黒灰色または暗灰色の炭混じり上で、越前焼、土師質皿、石製バンドコ等の遺物が比較的多く出土した。火災後に埋まった可能性がある土坑で、周囲の赤色焼土混り土の土坑（ピット）よりは遺物量が多い。

SK6489 南北約1.3m、東西約1.3mの隅丸方形状の土坑。深さは約0.6mで全体にドがり、中心で径約0.2mの小さな円形部分が、深さ約0.2m下がる。土坑上には杉の木の株があったため上層は不明瞭であったが、土坑の底面から約15cm上のレベル付近で、径10cm前後の平らな川原石が投げ入れられた状態で散乱し、黒灰色の炭が大量に含まれる層が、約10cm厚で広がっていた。その中には越前焼の大甕（図10）の破片も多数含まれ、越前焼からみると、16世紀後半かそれ以後に川原石が投入されるなどして埋まったと考えられる。土坑の性格は不明であるが、川原石や炭化物が一度に投入されている様子は特異である。

SB6490 上段北東側に位置する礎石建物である。かなり大きな石を礎石とすることが大きな特徴である。建物の四隅が確認できないため、建物の形・規模は不明である。南北約11.6mの長さで6基の礎石と礎石抜き取り痕のピットが一列に並び、このラインを基準に、東西両側に建物が広がると推定される。

建物の主軸は東側の石垣と平行に築かれており、他の建物が区画溝（SD6421）と同一方向に建てられる点と大きく異なる。基準ライン上の礎石で特に大きいのが、中心の石45で、南北約1.1m、東西約0.8m、地表からの高さが約0.25mで、全体の高さは約0.4m以上もある。石の周囲に、石を抜き取るために掘ったとみられる穴があるが、途中で抜き取りを断念したと思われる。建物の基準ラインより東側では、南端の礎石（石46）から垂直に2石の礎石が約2.4m間隔で並ぶ。これに対し西側では、明確な礎石が確認出来なかった。ただ全くないわけでなく、基準ラインより約3.8m西に同軸の向きで据えられた礎石とみられる石47が存在する。本来あった礎石が削平や抜き取りで失われたのか、それとも建物自体が西側に延びていなかったのか、明確な判断は出来なかった。

SK6491　SB6490の基準ラインのすぐ西隣で検出した隅丸方形状の土坑。南北約1.5m、東西約1.0m、深さ約0.6mである。土坑内は底面付近まで赤色焼土混り土の単一な上層で、一度に埋めたことが考えられる。土坑底面の西寄りから、瀬戸・美濃焼の鉄釉茶入（図364・366）2点と、建水（図393）1点の茶道具、また小型の越前焼擂鉢（図160）1点、鉄鍋（図628）1点が完形で出土した（口絵2・3）。茶入は口縁上向き、筒形陶器は口縁下向き、擂鉢と鉄鍋は口縁下向きでやや斜めにした状態で、鉄鍋が擂鉢の上に被さった状態で出土した。この他にも、漆器皿が出土したが、漆器皿の中心を杉の根が貫通しかなり破損した状態であった。取り上げ時にバラバラの状態になるのを危惧して土ごと取り上げ、後日室内で土を取り除く作業をしたところ、高台部分の径が約10cmの内湾口縁の漆器皿が、3枚重なっていることが判明した。漆器皿は内外面とも赤色塗りされ、高台内のみ黒色であった。その高台内の中心には「光」とみられる一文字が赤色で書かれており、西山光照寺の「光」を指すと考えられる。（口絵4）土坑にこれらの遺物が埋められた時期は、瀬戸・美濃焼の建水が大窯Ⅲ期で、その製品が作られたのが1560年代以後になるため、朝倉氏が滅亡する天正元年（1573）の時期にかなり近いことが推測される。

SK6492・6493　2基並列する土坑である。SK6493は東西約1.8m、南北約1.1mで、深さ約0.3mである。両土坑には大きいもので10cm大程ある壁土状の焼土塊が多数含まれ、この付近に、何らかの部分で上を厚く塗り込んだ建物が存在する可能性が考えられる。また、SK6492の西側すぐに、礎石とみられる上面平らな石48が1個のみ確認され、建物があったことは言える。

北区Ｊエリア（第9・15・16図、PL.21～23）

SX6446　上・下段を区画する石垣（SV6447）を東側に突出させた方形状の石垣突出部で、南北約3.8m、東西約4.6mの規模がある。この軸方向は、SV6447に対して垂直に接しておらず、上段の区画溝（SD6421）や建物群と一致する。東面の石垣高は約1.8mである。石49・50の上面は平らであり、建物の柱が据えられた可能性もある。なお、この石垣突出部と上・下段区画石垣は一連の造成により同時に構築されたことを、第144次補足調査トレンチ7で確認している。

SD6448　石垣突出部（SX6446）の南側の溝で、上段の区画溝（SD6421）から続くと考えられる。SX6446南面の石垣と通路状遺構（SX6522）北面の石垣との間の約1.5mの窪みの中に存在するが、溝そのものは幅約0.8mで、北寄りに位置する。溝の南壁がSX6522北面ではなく、そこから北に約0.4mの石列になるためである。これは、SX6522がSX6446・SV6447等の石垣及び、SD6448よりも後に造られた施設が要因と考えられる。SD6448の西奥側は中心部を境に巨石2石を立てに置いた構造で、西奥側の石垣下面には20cm前後の川原石が敷き並べてあった。これは恐らく、上から落ちる水で地面がえぐれないように受けるための工夫と考えられる。また、導水用と考えられる石製の大型盤（図852）が出土して

いる。出土遺物は石垣突出部の北側と比べかなり少なかった。地で廃棄場所とされたのに対し、この溝はその後も使用し廃棄場所にされなかったためと思われる。

挿図9　SD6448 調査状況

SX6522　第144次補足調査トレンチ4・5によって東に向かって緩やかに下がる東西幅約1.8mの通路状遺構と判明した。SX6522の南面には巨石を1石配し、その上を小ぶりな石で調節する石垣が築かれている。石材の大きさは西奥の（石51）が横幅約1.3m、高さ約1.2m、（石52）が横幅約1.9m、高さ約0.8mもあり、立面が鏡石のように平らである。通路北面の石垣が小ぶりな石を雑に積み上げているのに対し、南面は参道側からの人に見せることを意識してなのか、明らかに立派な造りである。なお、SX6522の構築は、上・下段区画の石垣（SV6447）、溝（SD6448・SD6523）よりも新しいことが、層位関係、及び石垣の接続部分の重なり状況等から確認されている。

SD6523　SX6522南面石垣の根元にある東方向に流れる石組み溝。南面石垣からの幅が約0.8mで、深さ約0.3mである。東端の溝が北向きの弧状に曲がっている。土層の堆積状況をみると、SX6522南面石垣の下に溝下層の流路堆積が続いており、また、SX6522南面石垣が構築された後に、溝上層の流路堆積がみられ、大きく二時期の流路堆積が存在することが分かる。上・下層流路とも、中心部がU字状に下がり、粗い砂が堆積する。遺物は陶磁器類の細片がわずかにみられるのみで、常に清浄な状態が保たれていたと思われる。

SS6524　第144次補足調査のトレンチ6で検出。第90次調査で検出した入口階段（S14463）の東側をトレンチで掘り下げたところ、S14463の構築面の約0.5m下で、小砂利を混ぜて固くしめた水平な地面を検出した。朝倉期の参道部かまたは参道に近い通路面と推定される。その上に堆積する淡褐色土層は、遺物や礫を全く含まず、造成時に寺跡から離れた地点から運び込んだ感があり、近代に近い時期の造成が想定される。

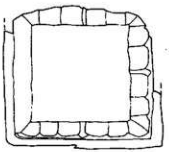
SX6525　SS6524の東端で南北方向に延びる段を検出した。段はほぼ垂直に落ちていたが、かなり深いので下面まで検出出来なかった。この層は礫を多く混じり、笏谷石の石造物片などの朝倉期の遺物も含まれていた。

SD6449　方形突出部（SX6446）北面直下で検出した幅約1.0m、深さ約0.2mの浅い溝である。SX6456側から落とされた水を流したものと思われる。溝の北側には一段の石列が部分的に残っている。この溝は途中の時期に埋められ、SD6450が築かれている。

SX6456　SV6447とSX6446の角部に位置する、方形の石組み遺構で、底面に10cm以下の小さな礫が敷き詰められている。石組みの規模は、南北約0.6m、東西約1.5mで、石列天端からの深さが約0.35mである。上段に存在した溝の先端部の施設と考えられるが、その溝がどこから来ているのかは不明である。ここから石垣下に、滝状に水を落としていたと推測される。

SX6457　SX6456の直下のSD6449の北側肩部に据えられた笏谷石製の台座である。この上に小型の石仏・石塔が立てられていたと思われる。推測だが、滝と関係のある不動明王像かもしれない。台座は一辺約32cm、高さ約13cmで、側面3方に連弁を彫るが、連弁が無い面が南側なので、北側から見る方向に設置された可能性が考えられる。この台座は遺構と考えて、現地保存した。

SX6458　SD6449 埋没後の面で、小ピット３基を東西に並んで検出した。ピットの径約 0.3 mで、深さ約 0.4 m以上あるが、その下で水が勢いよくあふれ出したため底面まで掘り下げられなかった。各ピットの間隔は西から約 1.5 m、約 1.9 mで、東端のピットから柱根（図 869）を検出し掘立柱であることは確かだが、これが建物の柱かどうかは不明である。



挿図 10　SX6457 台座平面図 (1/8)

SX6451　SV6447 と同じ軸で西から北側に折れる浅い溝状遺構を検出した。右列が並んでいたのを抜き取った痕跡かも知れない。石 53・石 54 の上面が平らで礎石の可能性もある。

SX6452　両側に石垣をもつ土塁状の高まりで、北から西へ円弧状に曲がる遺構である。上・下段区画の石垣の設置面より約 5 cm程度高い地面に築かれ、新しく付け足された遺構と考えられる。上面での幅約 1.8 ～ 2.2 mで、上面の傾斜は南東から北西に緩やかに下がっている。同じく後で付け足された SX6522 から続く通路状遺構の可能性が考えられるが、農道下を確認していない現段階では不明である。

SZ6453　SA6452 の内部を通り貫ける暗渠で、SD6450 の続きの溝が北側の出口から東に折れている。

北区Ｋエリア（第 13・14・16 図、PL. 24 ～ 26）

SV6447･SS6494　上・下段を区画する東面の石垣。石垣突出部（SX6446）から六字名号石碑（SX6495）まで、約 58 mをほぼ直線で延びる。上・下段の比高差約 2.3 mで、石垣自体の残存高は、下段から約 0.8 ～ 1.6 mである。石垣構築時の仕切り的な意味があるとみられる縦長の石が、飛び飛びにみられ、こうした石を基に、積み方や石材の規模等が石 55・56・57 の地点で変わり、南端からＡ～Ｄの４区間に分けられる。石材の横幅でみると、全体には横幅 0.75 m以下の石材を多用しているが、中央のＣ区間のみ横幅 1.25 m以上の巨石を横に並べた特徴がみられる。この区間の下砂利敷きの通路跡（SS6494）が石垣の構築から時間を置いて造られている。人々の視界に入りやすい場所に変わったために、その部分の石垣を巨石で積み直した可能性も考えられる。また、南端と北端で横幅 0.75 m以上の石材が多くなる点も特徴としてあげられ、人目に触れやすい場所ほど少しでも大きな石を使う傾向が高かったものと思われる。

表３　石垣区間別の石材横幅（個数）

遺構名（区間）	中小	中中	中大	大小	大中	大大
SV6447（A）	2	9	4	1	1	0
〃（B）	23	20	2	4	0	0
〃（C）	35	26	3	4	1	3
〃（D）	44	16	15	2	0	0
SV6497	12	7	2	3	3	4

（注）石材横幅から６段階に分類
中小：横幅 0.25 m以上 0.5 m未満
中中：横幅 0.5 m以上 0.75 m未満
中大：横幅 0.75 m以上 1.0 m未満
大小：横幅 1.0 m以上 1.25 m未満
大中：横幅 1.25 m以上 1.5 m未満
大大：横幅 1.5 m以上

SV6497　上・下段区画の北面の石垣で、六字名号の石碑（SX6495）から北西山裾にかけて約17ｍの長さで延びる。上・下段の比高差は東側約2.3ｍから西側約1.4ｍで、下段が北西上がりの斜面になる。石材は横幅1.5ｍ前後の石を中心に、２段積みで築き、壁面が垂直に立ち上がるのが特徴である。

SX6495　石垣の内部にはめ込まれた六字名号の石碑である。高さ約2.3ｍ、横幅約1.1ｍ、奥行約1.0ｍの縦長の石で、上端は丸くすぼまり、基部は尖り気味となる。石垣の面より約0.3ｍ前に張り出した状態で立つ。石碑の銘文は、中心に「南無阿弥陀仏」六字名号を大きく刻み、右側に「名号施主宇野三郎五郎名乗職近」、左側に「戒名真玄　永禄三庚申十二月吉日」の文字を小さく刻む。ド端の尖った部分には蓮華座を刻む。なお、永禄３年は西暦1650年である。

SD6496　六字名号石碑（SX6495）の前面の下から東に伸びる石組み溝で、幅約0.4ｍ、深さ約0.45ｍである。石碑の基部を支えた石が溝の西端の中に半分ほど埋まった状態で据えられ、その下から水が自然と湧き出している。

SX6498・6499　SX6498は石垣（SV6497）の北西端で検出した階段状の石列である。山際を通る溝の出口部分（SD6500）が土砂崩れ等で埋まった後に築かれた通路の遺構である。SX6498の下層に、石組み遺構（SX6499）がある。石組みの南端はSD6500の西壁につながりる。３段積みで、高さ約0.5～0.6ｍである。これより内側にある南北方向の石垣も、同時期の石組みの可能性が高い。遺構の性格は不明だが、西側にある中世墓の区画を示す石組みの可能性が考えられる。

SD6500　SD6443北端から続く石組みの溝である。幅約1.2ｍと広いが、上段に降った雨水は造成上に浸み込んでしまうため、水が流れることはほとんど無かったと思われる。この溝は土砂崩れによって埋まったと考えられ、風化のみられない一石五輪塔の周囲に火葬骨の混ざった灰の塊が土砂ごと滑り落ちた状態で出土した。

【石碑銘文】

名号施主宇野三郎五郎名乗職近

南無阿弥陀仏（蓮華座）

戒名真玄　永禄　庚申　十二月吉日

挿図11　名号石碑（SX6494）拓本

Ⅳ　遺物

西山光照寺跡（第86・87・90・132・135・144次調査）の出土遺物総点数（台帳に記入時の破片数）は61,857点で、その内訳は表4の通りである。主な陶磁器を多い順に示すと、上師質土器36.1%、越前焼31.8%、中国製（青磁・白磁・染付・褐釉等）7.8%、瀬戸・美濃焼3.0%、朝鮮製0.7%となる。甕・壺など大きな製品が中心の越前焼や、細かく割れる率の高い土師質土器は、どうしても破片数が実際の個体数比より増える傾向がある。しかし、それでも土師質土器が50%を下るのは、館跡や上級武家屋敷跡では80%前後になることをみるとかなり少ない。陶磁器の碗では、瀬戸・美濃焼の鉄釉碗（天目茶碗）が最も多く、次に朝鮮製の高麦茶椀が多い。一乗谷の他の地区では、青磁・染付の碗が多いが、これらが朝鮮製の碗よりも少なくなるのは異例である。背景に、侘び茶の文化の浸透が強いと思われる。石製品は、調査区西側の山間部にかなりの基数をもつ墓域が広がり、そこから転落したか運ばれたとみられる石仏・石塔類が多く出土している。これら石造物に彫られた銘文は、西山光照寺跡の歴史を解明する大きな手がかりとなるため、本書の末章にて、発掘調査で出土した以外の現地調査で確認した資料も含めた、石造物銘文集成を掲載する。

遺物の出土層位は、ほとんどが検出遺構面より上の層に伴う。下層遺物は、第87次Qラインと、第135次7ラインの深掘りトレンチより出土した土師質皿がある。遺構から出土した同時期性の高い一括遺物は、北区の土坑（SX6440）一括出土土師皿、土坑（SK6481）底面出土茶入・建水・擂鉢・鉄鍋・漆器皿の一括資料がある。また、南区の火事場整理で捨て場にされた大型の地下式倉庫跡（SF4418）より、茶器・花器、及び外国産陶磁器の優品の他、建物の釘、その他様々な陶磁器・金属・石製品がまとまって出土している。

1　越前焼　（第22～37図、PL.28～43）

本調査区出土の越前焼は、破片数で19,686点を数える。主に貯蔵具の甕・壺、調理具の擂鉢・鉢であるが、この他に、御皿、紫硯、茶器の水指・建水・茶入、花器の掛花生がみられる。貯蔵具の甕・壺類は、大甕、中甕、短頸甕、壺等に分かれる。これらの個体数を、判別可能な口縁部片から概観すると、甕よりも壺の方がかなり多とみられる。これは、小壺（器高30cm未満）が火葬骨を入れる蔵骨器にも使用されるため、背後の墓地から転落したものがあることが理由に考えられる。しかし中型以上の壺も個体数が多く、日常の様々な貯蔵に、甕よりも壺が多用されたことが伺える。また、玉縁口縁・球形胴で成形の美しい壺や、茶壺の四耳壺など、日常雑器ではなく座敷飾りとして見せる意識の高い壺もある。さらに、これまで類例のなかった体部が四角形の壺（「四角壺」とする）も出土しており、これも座敷飾りの要素が高い。鉢では、内湾口縁の小型鉢、直径60cmを超える大型の鉢が特筆される。

調理具の擂鉢・鉢の出土分布（挿図12）をみると、南区では建物SB4450付近が最も多く火事場整理にされたSF4418に集中がみられ、北区では南半側の建物SB6425からSB6455にかけてと火事場整理にされたその東側の下段に集中がみられ、これらの建物に台所を伴う日常的な生活空間が存在したことが考えられる。次に、大甕・中甕（判別が可能な口縁部片とその同一個体のみ）の出土分布（挿図13）をみると、南区では大甕・中甕の出土量がかなり少なく、甕埋設土坑（SK4437）のある付近のQ6・7

表4　出土遺物一覧表

器種			破片数	%
日本産陶磁器	諸前焼	甕 ※	10,995	
		壺	5,770	
		鉢 ※	777	
		擂鉢	1,737	
		卸皿	6	
		桶 ※	357	
		花生	6	
		薬研	1	
		その他	37	
		計	19,686	31.83
	土師質	皿	22,300	
		丸皿	4	
		土釜	14	
		壺	19	
		土鍋	1	
		その他	20	
		計	22,358	36.14
	瀬戸・美濃	鉄釉 碗	499	
		皿	24	
		壺	632	
		茶入	14	
		瓶	8	
		鉢	10	
		桶 ※	61	
		水滴	2	
		香炉	1	
		蓋	9	
		その他	41	
		小計	1,301	2.09
		灰釉 碗	38	
		皿	292	
		壺	176	
		鉢	1	
		香炉	21	
		花生	2	
		その他	11	
		小計	541	0.87
		無釉 建水	13	
		茶入	1	
		その他	22	
		小計	36	
		計	1,878	2.96
	瓦質	香炉	23	
		風炉	13	
		その他	99	
		計	135	0.22
	備前	壺	10	
		花入	10	
		その他	4	
		計	24	0.04
信楽		壺	281	0.45
その他			108	
近世陶器		瓶志器	9	
		土師器	16	
		近世	2,315	
		計	2,340	
合計			46,810	71.89

器種			破片数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	218	
		皿	249	
		鉢	99	
		盤	89	
		壺	34	
		香炉	139	
		瓶	143	
		角杯	9	
		酒会壺	3	
		乳鉢	5	
		その他	30	
		小計	1,018	1.65
	白磁	碗	19	
		皿	1,674	
		杯	36	
		壺	40	
		合子	3	
		その他	22	
		小計	1,794	2.90
	染付	碗	272	
		皿	1,007	
		杯	60	
		鉢	7	
		盤	1	
		壺	4	
		香炉	2	
		その他	10	
		小計	1,363	2.20
	青白磁	壺	5	
	瑠璃釉	碗	14	
		他	1	
		小計	15	
	華南 褐釉	壺	727	
		鉢	21	
	彩釉	皿	90	
		小計	838	
	計		5,028	7.79
朝鮮製陶磁器		碗	386	
		皿	6	
		香炉	3	
		壺	33	
		その他	9	
		計	437	0.71
ベトナム		皿	1	0.04
外国産 合計			5,466	8.78

器種		破片数	%
金属製品	釘	2,333	
	鋲止め	8	
	壺金	4	
	鏡	2	
	くさび	1	
	金槌	1	
	手斧	1	
	刀子	3	
	鎌	1	
	引手金具	3	
	鍵	1	
	鍔前	1	
	環状金具	6	
	銀	1	
	碗	1	
	板	2	
	香炉	5	
	蓋	11	
	鈴	1	
	箸	2	
	匙	1	
	煙管	2	
	銅銭	99	
	分銅	1	
	臍	1	
	小柄	1	
	小札	2	
	鞍	1	
	弾丸	2	
	鉱滓	37	
	その他	391	
	合計	2,939	4.72

器種		破片数	%
石製品	パンドコ	711	
	風炉	593	
	炉	261	
	臼	632	
	水盛	8	
	硯	172	
	砥石	129	
	火打石	3	
	玉石	61	
	茶臼	32	
	臼	68	
	鉢	133	
	桶	2	
	建築具材	7	
	炉蓋石	30	
	石仏	348	
	石蓋	77	
	石座	198	
	笠塔婆	12	
	石五輪塔	1,174	
	組合五輪塔	24	
	宝篋印塔	21	
	石塔	5	
	板碑	137	
	花立	15	
	凝灰岩	1	
	板石	235	
	勾玉	1	
	その他	1,406	
	合計	6,476	10.47
木製品	櫃	9	
	漆器皿	3	
	櫛	1	
	漆片・漆膜	1	
	漆塗座	1	
	柱根	1	
	合計	16	0.03
その他	骨	17	
	瓦土	103	
	ガラス製品	1	
	ルツボ	1	
	種子	2	
	その他	46	
	合計	170	0.27
総合計		61,857	100

区に集中するのみである。しかし、南区側に近い北区南半側を中心に、数は少ないが古い大甕片が出土する南区から北区南半にかけての下層に古い時期の建物が存在し、そこで使われた甕の破片が造成時に散乱したことに由来すると考えられる。これに対し、最も新しい大甕（図9・10）2個体の破片は、北区北半側に集中し、ここでの使用が考えられる。ただこの大甕2個体が、擂鉢・鉢の少ない場所でどのように使われたかは課題となるが、大甕の時期的な新しさから当地区の造成が他よりも新しいことが考えられる。中甕は、北区南半の甕埋設土坑（SK6435・6436）付近に集中するのと、北区北半の山裾で調査区西側の山間部から転落してきたとみられる1個体分の破片が集中してみられる。このことから、その上の山間部に何らかの建物が存在する可能性も考えられる。越前焼の茶器・花器等の出土状況をみると、水指は図化した10点中の6点が南区から出土し、建水・掛花生・茶入・及び四角壺は全て南区側からの出土で、圧倒的に南区が多い点が興味深い点としてあげられる。

大甕　（第22・23図、PL.28・29）

越前焼大甕の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』（1983）を基準とする。

（1）は大甕Ⅲ群で、肩の屈曲が強く口縁部が肥厚せず斜めに立ち上がる。Ⅲ群で口縁部の残る資料はこの1個体のみである。（2）は口縁端部が欠損するが受口状口縁となる大甕Ⅰ群で、15世紀以前の可能性がある。（1・2）以外は大甕Ⅳ群である。（6）は口縁部の肥厚が小さくⅣ群aタイプでⅣ群の中では古い。また、口縁部外面に指幅の凹みがめぐりその下側の稜がやや尖る。（7）は（6）と同一個体で押印の格子が明瞭にみられる。（3・4）は口縁部上面が横に長く広がり（6）よりも新しい特徴をもつが、口縁部外面をめぐる指幅程度の凹みと稜の尖り具合は（6）と変わらない。（5・8～12）は口縁部断面形が四角い形をなすⅣ群cで、Ⅳ群の中で最も新しいタイプである。（8）は口縁部の外端側が粘土紐の裂ぎ目とみられる所から剥離している。（9・10）は寺跡北区北半側に分布の中心があり出土点数もかなり多いので、朝倉氏の滅亡時に当場所で使用されていたものと考えられる。（13～21・23）は押印の破片である。大甕Ⅲ・Ⅳ群の押印は漢字の「本」と格子の組み合わせを基本とする。（8～10・14～21）に「本」がみられる。その字体の違いから（9）、（10）、（14）、（15）、（8・17・18）、（19）、（20・21）の8種類に分けられる。（16）は不鮮明なため分からない。（10）と（19）の「本」は「大」と「十」を上下に組み合わせた形の字である。（22）は口縁部やや下の部位で、縦の条線を鋭利な道具で一本づつ刻む文様である。（23）は短冊状の格子がキャタピラ状に横に連なる押印で、15世紀以前の古い時期のものである。口縁部や押印の分類から当調査区より出土した大甕の個体数は10個体を少し超える程度と推定できる。

中甕　（第23図、PL.29）

（24）～（27）は口頸部が「く」字に立ち上がる中甕で、口縁部の破片から4個体を確認した。中甕は体部片からも10個体以下の数量と推定される。（26）は唯一全形の分かる個体で、器高46.8cmの大きさは中甕としてはやや小さめである。主に寺跡北区南半側の土坑（SK6436）から破片が出土している。（27）は推定器高約60cmの大きさがある。体部に緑灰色の自然釉の垂れ下がりが顕著にみられる。寺跡北区北半の山裾側（W4・X4区）で集中して出土している。

短頸壺・壺　（第24図、PL.30）

（28～37・40～45）は口径15～20cmの短頸甕で口縁部上面に水平な面をもつ。（28・32）は頸部から肩部までが短く肩部に鋭い稜がめぐる。（37）は頸部のすぐ下に「本」のヘラ記号が刻まれる。（42）は全形が分かる個体で、頸部に指でナデ回した窪みが明瞭に付き体部は全体に丸い器形である。（43）

は器高 22.2 cmの (42) をやや大きくした形で器高 25 cm程度と推定される。(44・45) は肩部に突帯をめぐらす甕である。ともに地下式倉庫 (SF4418) 内より破片で出土している。(38・39) は全体の器形は分からないが口径 12 cm程度と口が小さいので短頸壺とする。(38) は小型壺の口頸部を短く縮めた形で口縁部を玉縁状に仕上げている。(39) は玉縁状の口縁部のすぐ下に丸い体部がつく器形である。

壺 (第 25 ～ 30 図、Pl.. 31 ～ 36)

(46 ～ 93) は器高 30 cmを超える中型の壺である。中型の壺では器壁が全体的に薄く小型品よりも丁寧に作られた感がある。中には茶壺の四耳壺もある。口縁部の破片からみて 50 個体以上の数量が出土しており、口の広い甕よりも数量が圧倒的に多い。口頸部の外傾角度によって２タイプに分類でき、量的にはほぼ半々である。

A　口頸部の外傾角度が 10 ～ 30° の外開きタイプ。(46 ～ 64・83 ～ 86・88 ～ 92)

B　口頸部の外傾角度が 10° 未満の直立タイプ。(65 ～ 81・82・87)

次に、口縁部の特徴によって３タイプに分類できる。

① 口縁部を玉縁状に折り返し丸く仕上げるタイプ。口縁部の下端に鋭利な当て具による切込み痕が残るものが多い。Aで 10 点 (46 ～ 49・51 ～ 53・57・60・63)、Bで６点 (66・67・74・76・78・80)。

② 口縁部を指でつまんで外に伸ばすタイプ。口縁部上端が細くなり口縁部直下に指でナデ回した稜が残るものが多い。Aで３点 (54・55・56)、Bで８点 (65・68・69・71 ～ 73・75・81)。

③ 口縁部下端に当て具で押さえて上面を外側に伸ばすタイプ。Aで６点 (50・58・59・61・62・64)、Bで３点 (65・70・77)。

(56) は口縁部直下に指でナデ回し稜になっている。(58・61・63・79・80) は肩の上部に耳が残り四耳壺である。(48) は横方向に粘土紐を架けた耳が付く。(62) は横方向に粘土紐を架けた比較的大きな耳で、左右の貼り付け部分の先が高く突出する。(63) は縦方向に粘土紐を貼り付けた中を円形にくり抜いた耳が付く。(79・80) は横方向に粘土紐を架けた耳が付く。(64・81・92) は全形が残る壺。(64・81) はなで肩で胴の中心が膨らんだ 16 世紀代に典型的な形である。(92) は肩部で膨らみ口縁部が斜めに外反する器形で 14 世紀代とみられる。寺跡南区の SF4418 で出土している。(93) は口縁部が欠損する。内面の頸付近まで黒色の付着物が確認される。

(94 ～ 127) は器高 30 cm未満の小型の壺である。全体的に器壁が厚く大きさの割に底部が幅広く安定感がある。片口の口縁部が多く、双耳壺もある。口縁部片から 50 個体以上を数え、中型の壺と同程度の量が出土している。(94 ～ 96) は器高 13 cm未満の小壺で頸部の内径が４cm未満と狭い。お歯黒壺に使われるタイプで、口縁部には本来片口が付いている。(97 ～ 115) は器高が 14 ～ 21 cmの小壺で、頸部の内径 7.5 ～ 9 cmで (94 ～ 96) よりも二倍に広がる。口縁部上面に平らな面があり、短い口頸部で、口縁部直下と頸部下端の所に沈線か、強くナデ回した痕が見られる。(100・112) は口縁端部を上から押さえて作る小さな片口がみられる。(97・102・108) は、口縁内面に縦方向に一条の沈線を入れて片口の代わりとしている。(116 ～ 127) は器高が 21 cm以上ある大きめのタイプで、口頸部の作りは (97 ～ 115) と同じである。(118) は長胴形をしている。(126) は縦方向に粘土紐を架けた耳の痕が残り双耳壺である。

(133 ～ 141) は壺の肩口にみられるヘラ記号 (窯印) である。(142 ～ 147) は壺または甕の底部片である。(146) の底部外面には板目の痕が全体に付くのと円弧状に１本の縄紐の痕が確認できる。(147) の底部内面には窯で焼成する際に内部に別の物を入れて焼いた痕が影となって残っている。

瓶　（第30図、PL.35）

（128・129）は瓶の口縁部片である。（128）は器高10cm前後の小型品と推定される。（129）は口頸部がやや長い形である。いずれも体部下半が膨らんだ徳利型の器形をしている。

四角壺　（第29図、PL.35）

（128）は口縁部が円形で体部が四角形の特殊な器形の壺である。越前焼でこのような体部が四角形の壺は他に例が無く、花入れ等に使われた特注品と考えられる。体部の一辺は幅14cm、高さ19.5cmの板状をなし、板どうしを接合する際の指ナデ痕が側面の角部で強く残る。口縁部は体部上端の内側に貼り付けられ、そこから外側にラッパ状に広がる。

掛花生　（第29図、PL.35）

（131）は体部が下膨れ状になる徳利形の掛花生で、体部の後面側は縦方向に切られ水平面となり、正面側にはやや瓢状になった縦線の上方に米粒大の点3個を散らした文様がみられる。

茶入　（第29図、PL.35）

（132）は肩部から口縁部にかけて欠損するが肩衝形の茶入である。底部1.2cmとかなり厚い。

桶　（第30・31図、PL.36・37）

（148）は3足で、口縁部外端を斜めに刻み、体部上半には斜めに刻みを入れた突帯が貼り付く。（149～158）は口径20cm前後と器高19cm前後の桶形で、用途は火桶または水指が有力と考えられる。（149）は体部に文様として2条の溝を1単位とする沈線が横方向に5条めぐる。（150）は肩がやや張り口縁部上面にやや広い面をもつタイプで、肩口にヘラ記号が刻まれる。（151～158）は体部がほぼまっすぐで文様や肩口の張りが無いタイプである。（151・156・157）は体部が特にまっすぐで、（152～154）は口縁がやや内湾する。（151）の底面にはヘラ記号と思われる沈線がみられる。

擂鉢　（第32～35図、PL.38～41）

擂鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』（1983）を基準とする。本調査による擂鉢Ⅰ・Ⅱ群の出土はなく、擂鉢Ⅲ群が少量みられる他はⅣ群のものばかりである。大きさは、大・中・小の3規格におおむね分かれる。（159～181）は口径21.4～30.8cmのもので小型の擂鉢であるが、中でも口径24～25cmのものが多くみられる。（182～204）は口径33.0～45.4cmの中・大型の擂鉢である。このうち口径33～35cmのものと口径40～42cmのものが多くみられ、前者は中型、後者は大型の擂鉢に該当する。

Ⅲ群の擂鉢は小型品の（179・180）と中・大型品の（188・196・198）である。これらは口縁部の内・外両端に角がなく丸みがあり、内面の沈線が口縁端部から1.5cm以上下側に離れてめぐる特徴がみられる。（179）は口縁部が内側に屈曲ぎみに立ち上がり断面が四角形をしている。（188）は体部内面の摺目が9本歯で櫛の幅の半分程度の隙間を開けて下から上に施され、その櫛目は口縁内面の沈線の位置できれいに収束し、また、体部内面の上方にヘラ記号がみられる。（198）は口縁部に指で押して浅い片口を作り出し、体部内面の摺目はほぼ全体に隙間なく施される。底部は丸く欠損させられている。（199）は口縁部が内側に屈曲ぎみに立ち上がる。内面の沈線は端部から約1.5cm下にはっきりとした線がめぐるが、さらに約1cm下にも浅い線があり2重の沈線がめぐるように見える。

Ⅳ群の擂鉢は口縁部の特徴が非常に多様である。全体的に口縁端部の角が強く、口縁端部が内側に傾く特徴が多くみられる。内面の沈線は口縁部のすぐ下にめぐり、摺目は沈線を越えて口縁端部まで施されるものが多い。（159）は口径21.4cmと特別小さい。（160）は、北区（Ⅰエリア）SK6491底面一括遺物で、

鉄鍋と重なって出土した完形品である。摺目は使用によるすり減った箇所がみられない。(161・168)は口縁端部内側の角が強く、内面の沈線は浅く、摺目が全て口縁端部まで延びる。(163)は口縁端部に櫛歯で付けられた横線がみられる。(164)は器壁がかなり細く口縁部の先端が尖りぎみとなる。(174)は焼成不良の擂鉢で、口縁部の内側に幅広いU字状の沈線がめぐる。(181)は口縁部の先端が細くなるタイプであるが、内側は丸味があり端部に面が作られていない。(185)は器高18.3cmあり比較的深い形で、体部内面の摺口は全面に施される。(195・196)は体部内面の摺目の下側が良く擦れて磨滅している。(196)は、Ⅳ群に典型的な見込みの摺目が見られずⅢ群に近い古いタイプである。

建水 (第36図、PL.42)

(205～207)は器高9cm弱のほぼ同じ大きさをした小型の筒形容器で、(205・206)は口縁部が内湾し、(207)は口縁部が外開きとなる。用途は茶道具の建水と考えられる。

鉢 (第37図、PL.43・44)

(208～222)は口縁部が内湾状となる小型の鉢で、口径15cm前後と17cm前後のものが比較的多く、当寺跡の鉢の中では圧倒的に出土量の多いタイプである。(208・218・219)は見込みの中央に重圏文が施される。(217)は見込みに櫛歯による一方向の条線が施される。(210・218)は底部外面に、(220)は体部外面に窯印のヘラ記号が施され、(212)は体部外面に円弧状の櫛歯文がみられ、これも窯印の一種であろう。(222)は見込みに製作者の銘と推測される2文字が刻まれる。

(223)は器高が低い皿状の鉢である。(224・225・230)は口縁部が内湾状の中・大型の鉢である。(226)は口縁外開きの鉢で、擂鉢の摺目が無いタイプで、口縁には指で押した浅い片口が作られる。底部中央に、焼成後に穿たれた円形の貫通孔がある。(231・232)は口径60cmを超える大型の浅鉢である。

卸皿 (第37図、PL.44)

(227・228)は見込み全面に櫛歯で摺目が施された卸皿である。(227)は体部が短く、摺目が体部下半まで施される。(228)は体部が直立気味に立ち上がり、摺目が体部まで施されない。

薬研 (第37図、PL.44)

(229)は薬研の車輪部の破片で、中央に軸棒を差し込む一辺約1.8cmの方形の孔がある。

引用・参考文献

福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館(1983)『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』

2 土師質土器 (第38・39図、PL.44・45)

皿が大部分を占め、小壺、土釜、土鍋が僅かにみられる。遺構・層位で一括性の高い皿を中心に、出土地点別に説明する。なお、皿の分類は、南洋一郎「一乗谷出土カワラケ基本分類基準」『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅶ に準拠する。

第87次調査区下層整地土 (第38図、PL.44)

寺院跡の南区側の造成土に混じって出土した下層遺構に伴う一群と考えられる資料。器形の分かる皿45点中、口径約9cmのⅢC3類が37点、口径約12cmのⅢD2類が8点で、一乗谷に通有のⅢD1類が存在しない。全体に器壁が薄く底部から体部にかけて丸味を持ち、浅い。この類似資料に、第50次

調査、東西道路跡（SS2001）最下層出土資料があり、時期は16世紀第1四半期と考えられる（阿部来2009）。

（233～237）は皿C3類で、大きく2タイプに分かれる。うち、（234・235・237）は全体に器壁が薄く口縁部が外に開くタイプで、仮に「aタイプ」とする。（234）は見込み中央に貫通孔があり、祭祀的な用途が考えられる。（233・236）は底部が薄いのに対し体部が厚く、口縁部は先端がやや内湾するタイプで、仮に「bタイプ」とする。（238～242）は皿D2類。これも全体に器壁が薄く、底部から体部にかけて丸味があり浅いことが皿C類と同じである。（241）は区縁端部がわずかに摘み上げされ、見込みに浅い圏線とその内側に突起状の線がめぐる。（242）は口縁端部に摘み上げや見込み外縁の圏線がない。

南区（第86次調査）上層遺構　（第38図、PL.44）

上層遺構が火災を受けた後、火事場整理のために埋めたとされるSF4418出土資料を中心にみる。

（243～247）は、口径6～7.5cmの皿B1類。外面に指で伸ばしたナデ痕が放射状に付き、底部外面がわずかに窪む。（244・247）は内面に顕著な布目痕が見られ、布を使って整形したことがうかがえる。（248）は皿C3類である。第87次下層整地土資料に比べ体部の立ち上がりが強く、全体的に厚手で形の歪みが強い。（249）は口径5.8cmで、短頸で肩の張る小壺である。（250）は皿C1類で、口縁端部の摘み上げと端部外面の面取りが明瞭である。（251）は皿D2類で見込み外縁の圏線が明瞭な点と、底部外面に板で一方向にナデたような段が特徴である。

北区（第132次調査）土師質皿一括出土遺構（SX6440）　（第38図、PL.44）

上層遺構の時期を検討する上での基準資料となる。全体の半分以上が残存する皿が23点あり、少なくとも23枚の皿が同時に廃棄されたことになる。その全ては口径約10cmの皿でタール痕も付かない。見込みに圏線のある皿D1類が20点で最も多く、圏線の見られない皿C3類が3点であった。皿D1類の圏線は明瞭なものは少なく、圏線の窪みが極めて浅い方が多い。また、皿D1類・C3類両方とも、第87次下層整地土層より、明らかに底部から体部にかけての丸味が少なく体部の立ち上がりが強い。また、歪みも強く不整形な個体が多い点が特徴としてあげられる。

（253・255）は皿C3類。（253）は底部が小さくやや深い器形である。（252・254・256～260）は皿D1類で、（252）は全体的に器壁が厚く重たい感じがある。体部外面ナデ回しの窪みが深い。（254）は歪みが強くやや不整形である。（256）は底部中央やや外側に2つの幅広い指頭圧痕が並ぶ。（257）は口縁端部の摘み上げが明瞭で体部外面ナデ回しの稜が明瞭でない。（258）の見込みの圏線は一部が浅く窪む程度であるが、体部外面ナデ回しによる段が明瞭である。

北区（第132次調査）遺構出土　（第38図、PL.44）

（261）はSD6448より出土した。口径約10cmの皿D1類で、見込みの圏線が明瞭に一周し、器形も整った円形をしていることと、胎土に赤色の微砂粒を多く含む点が特徴である。赤色微砂粒は少量含まれるものは通常あるが、目立って多い点が異質で、生産場所の違いかも知れない。

（262～265）はSX6433より出土した。SX6433は炭・焼土が目立つ覆土で火事場整理の際の埋め立てが考えられる。しかし土師質土器皿の特徴をみると、第87次下層整地土の皿C3類「bタイプ」に類似するものが多く、皿D1類が1点のみと非常に少ないため、他の炭・焼土層よりも古い時期の可能性が考えられる。（262～264）は、口径9cm程度の皿C3類で、（262）は口縁が内湾するのとやや厚い特徴から「bタイプ」に類似。（263）は端部外面の面取りと端部の摘み上げが明瞭である。（264）は器形が整った円形で丁寧な作りをしており、底部外面の真ん中に指の先端程度の窪みがあるのが特徴である。

また、胎土に赤色微砂粒を含む点は（261）と同じ特徴である。（265）は、口径12.4cmの皿D２類で見込みの圏線が明瞭である。（266）は口径14cmと大きく皿D３類となる。大きさの割に器壁が２～３mmと非常に薄く丁寧な作りをしている。

北区（第132次調査）下段石垣前面の炭・焼土層　（第39図、PL.45）

上層遺構が火災後に火事場整理のため捨て場とされた地区から出土した資料である。

（267・268）は口径６～7.5cmの手づくねタイプの皿B１類で、（267）は体部外面に指で押さえながら伸ばしたナデ痕が明瞭である。（268）は見込み中央が膨らんでいる。（269）は口径約９cmの皿C３類で、口縁端部の摘み上げと端部外面の面取りがされているのが特徴である。（270・273）は皿D１類で、（270）は口径10.6cmでD１類としてはやや大きめ。見込みの圏線は明瞭で指で引かれる。胎土は赤色微砂粒が目立つタイプである。（273）は内外面にタール痕が付着するが、見込み中央には貫通孔がある。（271・272・274）は皿D２類である。（271）は器壁が厚くぼってりした感じである。（272）は器壁が薄く色調は白くタール痕が付かない。（274）は内面に赤色顔料が付着し、何らかの物を塗る際の道具に使われたことが考えられる。（295）は土錘である。

北区（第135次調査）整地土下層　（第39図、PL.45）

第135次調査区７ライントレンチの下層から出土した一括性の高い資料で、北区北半側のガラ石を主とした造成の時期を検討する上で重要な資料となる。旧表土層とみられる黒灰色炭混土に含まれる。完形に復元できる皿が19点出土した。その内訳は皿C３類が17点、皿D２類が２点で、皿D１類は見られない。全てタール痕が付いた灯明皿である。皿C３類では第87次調査区下層整地土の「aタイプ」が全く無く、第87次側の下層資料とは時期差があり、やや新しいと考えられる。

（275～279）は、口径9.3～9.5cmの皿C３類で、口縁端部外面ややドに、先の尖った道具で付けられた様なスジが１条めぐる点が特徴である。（275・277）は底部が小さめで、この底部の特徴は第87次に近い。（280）は口径12cmの皿D２類で、器壁が薄く体部上半から口縁にかけて外側に開く。見込みの圏線は指で押引きされ、幅広い。

北区（第135次調査）遺構出土　（第39図、PL.45）

SK6493では壁土状の塊と上師質の皿が多く出土している。皿は全てタール痕がない。（281～284）は口径11～12.5cmの皿D２類で、見込み外縁の圏線は指で押引いた浅く幅広いタイプである。（284）は、丁寧な作りで焼成が良好で堅い。体部外面の回しナデの下端部に明瞭な稜ができる。

（285・286）はSD6500上層より出土した口径６～７cmの皿B１類である。

（287）はSS6494下層出土の口径９cm程度の皿C３類で、底部外面中央に、指頭大の窪みがある。

（288・289）はSK6501より出土した口径約９cmの皿C３類である。（275～279）の下層出土のものと比べて体部の立ち上がりが強い特徴がある。

（290）はSK6488出土で口径約10cmの皿D１類である。見込みの圏線が明瞭で断面が深い「U」字状をした特徴がある。

（291～294）はSK6484出土である。強い被熱により形の歪んだ皿や壺が出土している。（291～293）はかなり変形した皿で恐らくC３類であろう。（291）は口縁端部上面に、棒状の物で押さえた痕跡が一対に付く。（292）は口縁部が波状に変形し胎土中の砂粒が表面に浮き出ている。（293）は器壁が２倍に膨らみかなり火ぶくれを起こしている。（294）は、SK6488の底面付近で出土した小型の壺で、一方の側面が強い被熱により紫色に変色し、口縁部が楕円状に歪みを起こしている。

引用・参考文献
阿部来（2009）「土師皿からみた中世後期の越前」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館　紀要』2008
南洋一郎（1999）「一乗谷出土のカワラケ分類基準の検討」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅶ
福井県教育委員会（1979）『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告　朝倉館跡』Ⅰ

3　瀬戸・美濃焼（第40～42図、PL.46～49）

本調査区で出土した瀬戸美濃製品は、破片数で1878点である。この数値は、表土出土遺物も一括して扱っている。製品は、鉄釉・灰釉・無釉に大別できるが、無釉の物は微量で、茶道具の建水が主体的である。上記の3種中で、鉄釉品と灰釉品の比率は、ほぼ7：3で、器種別では碗・皿の飲食具と壺類が主を占める。この内、碗が29%、皿が約17%、壺類が44%と量が多く、3者で全体の9割を占める。碗を種別でみた場合は、鉄釉品が約93%と灰釉品の7%を圧倒し、喫茶具の天目茶碗が大半を占める一方、皿は数値が真逆となる。この点から、飲食具は種別による器種の使い分けが指摘できよう。壺類は法量及び器壁の薄さのために破片数が必然的に多くなるため、実際の個体数は減少するものと考える。壺を種別でみた場合は、鉄釉品が約78%と主体的で、小型の耳付壺のほかに大型の祖母懐壺などが存在するが、灰釉品は四耳壺のみからなる。その他の少数品は、香炉のように鉄釉品と灰釉品とが重複する器種もあるが、茶入など鉄釉品のみを認める器種もある。

分布状況を、時代の把握が可能で、出土量が多い天目茶碗で見ると、分布に幾つかの纏まりがある。南区は南西側に多くあり、SV4421とSD4412で区画されたO～Q3・4とM～O5・6、土坑群を多く認めるK・L5～8に纏まる。また、火事場整理の際の廃棄場であるSF4418が位置するT10にも集中するが、この遺構からは大型の鉄釉壺（353）や大型の桶（357）が出土している。北区では、調査次数の異なるL列を境に北と南で様相が異なり、北区出土品の約8割が南半側から出土しているが、SV4467の西方は、C～H7～13に纏まる。続いて鉄釉壺でみると、天目茶碗同様の偏りがみられる。数量的には南区ではO～S3・4とSF4418が位置するS9・T10に局所的に纏まるが、祖母懐壺（354）はQ3に分布が偏る。北区では、天目茶碗同様、北区出土品の約85%が南半側から出土しており、両器種の様相からは北区の北半側は、遺物量が少ないことが明確に指摘出来る。少数品の分布状況は、前記した大型の桶を除くと極めて希薄ながら、茶入は北区に目立ち、SK6491から（363・365）が、無施釉品の建水（392）と出土している。この他にも多様な器種を認めるが、散在する状況であるため観察表を参照されたい。

一方、灰釉品は、碗の分布は希薄だが、皿は南区の南西部に集中する。ただ、北区の分布は散漫で、南半部ではJ14を除くと希薄で、鉄釉品と相反する。壺は全て古瀬戸後期様式の四耳壺だが、南区のみに分布する点が特徴的で、SV4421とSD4412で区画されたQ～S3・4とN～P6のほかに土坑群を多く認めるK・L5～8に纏まる。また、火事場整理の際の廃棄場であるSF4418が位置するT10にも集中する。灰釉壺が一定量出土する点は本調査区の特徴で、蔵骨器として使用した可能性もある。なお、香炉の数量は極かながら、北区のO・Q3・4と南区のF15で認める。

無施釉品の分布は希薄だが、SK6491出土品に完形の建水を認める。

以上、遺物分布の概略を述べたが、両地区とも北半部よりも南半部の数量が多い点を指摘できる。

なお、天目茶碗の分布を時代別にみた場合、大窯１・２段階は調査区全体で認めるが、大窯３段階では、15点中12点が北区の南半部に集中する傾向がある。

以下、陶磁器の形態について述べるが、年代観や分類は、藤沢良祐（2002・2008）を参考とした。

鉄釉品　（第40～42図、PL.46～48）

鉄釉品には、碗、小坏、皿、壺、桶、瓶、茶入、水滴、蓋がある。

(296～335) は天目茶碗である。(296・297) は体部が直線的で、口縁はややくびれて直立する。底部は内反り高台で、内部の削り込みは深い。前者の高台周辺は露胎だが、後者には濃い錆釉を施す。両者とも古瀬戸後Ⅲ期である。(298～335) は大窯期に該当する。(298～305) は体部下方に丸みを帯び、口縁端部を短く折り返す。高台脇と内部の削り込みは浅く、周辺に濃い錆釉を施すものが多い。高台遺存品は、(301) のみ内反り高台でやや新しい。大窯１段階である。(306～314) は体部が直線的に開き、外反する口縁が、直立気味の口唇部に付くが、その形態は多様である。高台脇と内部の削り込みは深く、周辺に比較的薄い錆釉を施すものがやや多い。(307・309・310) の高台内に、窯道具の痕跡が残る。大窯２段階である。(322～325) は体部が僅かに内湾し、口縁は緩やかに外反する。高台周辺は露胎で大窯３段階である。(327) は体部の器壁が厚く、高台周辺は露胎である。大窯４段階と、朝倉氏時代よりも新しい。(326) は他より長く直立する口唇部を持ち、(328) の見込みには朱が付着する。(329～335) は、通常の碗の７割程の法量の小型の天目茶碗である。形態などの時代別の諸属性は、通常の碗と共通する。前４者は大窯１段階で、後３者は２段階である。(336・337) は、小坏である。口縁部は外反しない。前者は、輪高台を持ち大窯１段階、後者は２段階である。

(338～340) は平碗で、前２者は丸みを帯びる薄い体部全面に鉄釉を、高台周辺に濃い錆釉を施す。１点のみながら黄瀬戸がある。(340) は、直線的に開く体部全面に黄灰色の釉を施し、高台周辺に比較的濃い錆釉を施す。鉄釉品は大窯１段階、黄瀬戸は３段階である。

(341) は片口鉢である。体部上方で急に立ち上がり、同部位と内面に鉄釉を、低い輪高台周辺に錆釉を施す。片口は深い断面Ｕ字形で、持ち手には浅い穴を穿つが貫通はしない。両部とも外面は箆で丁寧に面取りする。見込みと高台内に、窯道具の痕跡が残る。大窯１段階である。

(342～347) は稜皿である。体部は直線的で、口縁の外反も顕著でなく、底部も削り出しの低い輪高台である。全面に鉄釉を施すため、見込みと高台内に窯道具の痕跡が残る。大窯２段階である。

(348～356) は壺である。(348) は小型の壺だが、口縁は玉縁状を呈する。(349・351) は双耳壺だが、両者とも耳部を欠き、前者は口縁を内側に引き出す。(350) は、(349) の底部と判断するが、(351) 同様、内外面に鉄釉を施す。両者とも見込みに窯道具の痕跡が、底部外面に回転糸切り痕が残る。古瀬戸後期様式に収まる。

(352) は四耳壺で、丸みを帯びる体部の外面と内面の中程まで鉄釉を施す。古瀬戸後期様式に収まる。

(353・354) は大型の壺で、丸みを帯びる肩部に、内傾して直立する頸部が付く。両者とも口縁は玉縁状を呈するが、前者は外側へと引き出す。後者は、肩部に四耳を持つ祖母懐壺で、いずれも底部側面を除く外面のみに鉄釉を施す。なお、底部のみだが、(355・356) は上方に向かいすぼまるため、瓶類の可能性もあろう。外面に鉄釉、内面に錆釉を施す。

(357) は大型の桶で、直線的に伸びる筒型の体部を持つ。口縁上面は水平で内側に肥厚する。ほぼ全面に施す鉄釉は、二次被熱のため灰緑褐色を呈する。(358・359) も体部が筒形を呈し、前者は外面に鉄釉、

内面に鉄釉を施す。(360) は直線的に伸びる筒型の体部を持ち、口縁上面は水平で内傾する。口縁部の内外面に鉄釉を施す。

(361) は耳付の瓶で、やや扁平な体部に、長い頸部を持つ。底部は、削り出しの低い輪高台で、露胎の高台脇に回転ヘラ削りを施す。大窯２・３段階とみられる。(362) も耳付の瓶で、口縁が大きく水平に広がり、頸部には円形の穴を穿った四角い耳部が付く。

(363) は仏華瓶である。撫で肩で、頸部との境界が不明瞭な下膨れした体部が急にすぼまる。側面を面取る平担な底部は露胎で、外面には回転糸切り痕が残る。

(364 ～ 366) は茶入である。(364) は体部全体が丸い文琳茶入、(365・366) は体部が扁平な大海茶入で、肩部が張り、直立する口縁を持つ。(365) は体部外全面にカキメ調整を施す。同資料を除き鉄釉の残り具合は良好で、底部側面を除く全面に認める。前２者は回転糸切り痕が残る。大窯２・３段階である。

(367) は水滴である。底部外面は露胎で、回転糸切り痕が残る。

(368) は小型の蓋で、鉄釉を施す上面の中央部に摘みがあり、そこから放射状に浮線が伸びる。露胎の内面は整形が粗雑で、中央部は内側に凹む。(369 ～ 371) は、鉄釉を施す上面中央部に、宝珠形の摘みがあり、露胎の内面に、かえりを貼りつける。大窯期である。

灰釉品　(第 43 図、PL. 49)

灰釉品には、碗、皿、壺、香炉がある。

(372 ～ 374) は碗である。(372) は丸碗で、体部は無文で丸みを帯びる。(373・374) は平碗で、扁平で直線的な体部の下方から底部にかけて回転ヘラ削りを施すが、同部位は露胎である。前者は大窯１段階、後者は古瀬戸後Ⅱ期である。

(375 ～ 386) は皿である。(375・378 ～ 381・385) は、口縁が外反する端反皿で、見込みに印花文を押す個体もある。全面に灰釉を施すため、付高台内には窯道具の痕跡が残る。大窯１段階である。

(382・383・386) は丸皿で、体部以外の諸属性は、端反皿と同じである。底部片のために器種分類の難しい (384) は大型品で、見込みに３点の印花文を押す。丸皿は大窯２段階である。

(376・377) は稜花皿で、口縁端部がヒダ状を呈する。体部は外反し、見込みに印花文を押す。他の皿類同様、付高台内には窯道具の痕跡が残る。大窯１段階である。

(387・388) は壺である。いずれも四耳壺だが、(387) は外傾する付高台から少し張る肩部へ緩やかに立ち上がる体部を持つ。頸部は直立し、口縁端部は折り返され玉縁状を呈する。四耳は欠くが、その上下に２本の沈線が巡る。(388) は体・頸部片で、上面に５本の沈線を施す耳部の上下に、３～４本程の沈線を３段にわたり施す。前者の灰釉は二次被熱で残りが悪いが、後者は全面に認める。前者は古瀬戸後Ⅳ古期、後者は古瀬戸後Ⅱ期である。

(389・390) は香炉である。(389) は竹の節を模倣した筒型の体部を持ち、底部に小さな３つの足を貼りつける。内側に肥厚する口縁には２本、体部に１本、底部に２本の沈線が巡る。灰釉は底部を除く外面と、体部内面の中程まで施す。(390) は小型の筒型香炉である。細部は省略されており、底部側面を除く外面のみに灰釉を施す。古瀬戸後Ⅳ新期である。

無施釉品　(第 43 図、PL. 49)

無施釉品は、水指、建水、茶入、花生のほか未図化だが香炉もある。無施釉品は須恵質で、焼締まり

の良いものが多いが、本調査区出土品でも明確なように、飲食具や壺類にはなく、数量も希少である。

(391) は水指である。口縁上面は水平で、内側へ引き出す。中央に最大径を持つ体部の下半は成形痕が顕著で、上方に1本の沈線が巡る。大窯3段階前半である。

(392 ～ 395) は建水で、直線的に伸びる筒型の体部を持つ。(393) は完形品で、平坦な底部に窯道具の痕跡が残る。いずれも焼締りが良く、(393) 以外は灰褐色を呈する。大窯3段階前半である。

(396) は肩の張る肩衝茶入で、ほぼ水平に横へ伸びる肩部を持つ。

(397) は掛花生である。付高台を持つ底部から、体部が外傾気味に直立する。口縁から 2.0 cm下に円形の孔を穿つが、穿孔の周囲に微量の鉄錆を認めるため、壁に掛けるための金具を取り付けと考える。焼締りが良く、灰褐色を呈する。大窯3段階前半である。

引用・参考文献

藤沢良祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

藤沢良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

4　その他国産陶磁器　(第44図、PL. 50)

本調査区で出土したその他の国産陶磁器は、信楽焼、丹波焼、備前焼、産地不明品に大別できるが、総点数は少ない。器種別では、信楽焼と丹波焼は壺のみながら、備前焼には壺・瓶類、花生を認める。信楽焼の壺は、通気性の良さから茶壺として使用されたと推定できる。なお、当遺跡で出土する備前焼は、先述したように茶道具が多く、甕・壺・擂鉢を主製品とする越前焼の補完品と考える。

信楽焼

(398) は信楽焼の壺で、縦長の体部を持つ。最大径は体部中程にあり、丸みを帯びる肩部が続く。外傾して立ち上がる頸部は、上位で再度屈曲し口縁部へ至る。外面の自然釉は二次被熱でかせているが、信楽焼特有の長石を多く認める。なお、体部内面には数段の粘土紐輪積痕が残る。

丹波焼

(399) は丹波焼の壺で、肩部から頸部までが遺存する。なだらかな肩部に外反気味の頸部が付くが、頸部屈曲部は強い回転ナデのためやや窪む。なお、自然釉の付着する肩部には格子状の刻文を認める。

備前焼

(400 ～ 405) は備前焼である。

(400) は壺で、内湾する頸部に、成形段階の余分な粘土を折り返し形成した口縁が付き、内外面に顕著な成形痕が残る。(401・402) は瓶で、前者は体部全体が丸い小型品で、内面に顕著な成形痕が残る。後者は口縁部で、端部は方形を呈する。

(403・404) は掛花生である。前者は円形の筒形掛花生で、口縁を方形に成形する。後者の角型掛花生は部分的に遺存するのみだが、外面に丁寧な箆削り調整を施す。両者とも口縁下の背面に円形の孔を穿つ。(405) の花生も部分的に遺存するのみだが、丸みを帯びる体部中程に、強い回転ナデを施し装飾性を持たせる。体部の把手は一部分欠損する。

その他

(406 ～ 409) は産地不明品である。(406・407) は瓶で、前者は内湾する頸部に先端に向け先細る口縁部が付く。後者は小型品で、見込み中央に兜布が残る。(408) は建水で、鉄鉢型を呈する。口縁部外面に強い回転ナデを施し、口縁を内側に引き出す。(409) は筒型の掛花生で、壁に接する背面を約 3.0 cm の幅で面取り整形し、口縁下に方形の孔を穿つ。

5　外国産陶磁器　(第 45 ～ 51 図、PL. 51 ～ 57)

中国製の青磁、白磁、染付、瑠璃釉、褐釉陶器、華南彩釉陶器や、朝鮮製の維釉陶器などがある。

青磁　(第 45 ～ 47 図、PL. 51 ～ 53)

青磁には、碗、皿、盤、壺、燭台、香炉、乳鉢、水注、花瓶、掛花生などがある。

(410 ～ 424) は碗である。(410) は、体部外面に細い線描きの葉文をもつ。器壁は薄く、口縁は先細る。青白色の釉を全面に施し、断面三角形を呈する高台の畳付は拭き取る。(411) は、平たい鎬蓮弁文をもつ。全面に施釉し畳付を露胎とする。底部は比較的厚く、見込に「顧氏」銘の印花をもつ。(412) は、細い鎬蓮弁文をもち、輪郭をヘラで略描きする。大振りで丸みのある体部から口縁が外反する。高台畳付以内は露胎である。(413) は、片切彫の蓮弁文をもつが明確な鎬はない。(414) は、胴に大きな線描きの蓮弁文、見込に印花文をもつ。釉は粗い貫入が目立ち、高台内側を拭き取る。口縁に雷文帯をもつタイプとみられる。(415 ～ 419) は、細い線描きの蓮弁文をもつ。(417) は、見込に劃花文をもつ。(418) は、見込脇に略した劃花文、中央に印花文が見られる。釉は粗い貫入が目立ち、高台内側を輪状に拭き取る。(419) は、見込に「顧氏」銘の印花をもち、細かい貫入の目立つ釉は、高台内を露胎とする。(420・421) は、外面が無文である。釉は粗い貫入が目立ち、高台内側を輪状に拭き取る。(420) は、見込に印花をもつ。(422・423) は内外面とも無文である。高台脇を水平に削り出す。底部外面は、高台脇以下を露胎とする。(424) は、外面に細い線描き蓮弁文、見込に圏線をもつ。釉は青白色を呈し、断面台形の分厚い高台部を露胎とする。

(425 ～ 443) は皿である。(425) は、口縁が内湾する小ぶりの皿である。体部外面に片切彫りの蓮弁文、同内面に細い鎬文を配し、見込に印花をもつ。暗灰緑色の釉は、高台内側を拭き取る。(426) は腰折れで、体部が外反する小ぶりの皿である。釉は白味を帯びた青色を呈し、一部に紅色の斑が見られる。(427 ～ 432) は腰折れの皿である。(427 ～ 429) は口縁を円形、(430 ～ 432) は花弁形に作る。(427) は、体部外面に蓮弁文、同内面に唐草文をヘラ描きし、見込に印花をもつ。釉は、高台内を蛇の目状に拭き取る。(428) は、体部内外面に花唐草文をヘラ描きする。(429) は、内外面とも無文である。(430) は、体部内面に花唐草状のヘラ描き、見込に不鮮明な印花をもつ。釉は、高台畳付以内を蛇の目状に拭き取る。(431・432) は、見込中央の釉を丸く拭き取る。(431) は高台畳付以内を露胎とし、(432) は高台内側を蛇の目状に釉を拭き取る。(433・434) は、口縁が内湾する 5 弁の輪花皿である。口縁部外面の釉を厚く施し、玉縁状に仕上げる。高台畳付の釉は拭き取る。(435) は、口縁が菊皿状で、体部外面に逆 S 字状の花弁文を配する。見込の印花は、不鮮明である。高台内の釉は、蛇の目状に拭き取る。(436) は、口縁が端反り、見込に印花をもつ。釉は、高台内を蛇の目状に拭き取る。(437) は無文で、広い見込を

もち、口縁がわずかに外反する。高台畳付以内を露胎とする。(438 ～ 443) は口縁が外反し、同端部を波状に削り、体部外面をノミにより鎬文状に作る。高台脇から畳付以下を露胎とする。

(444 ～ 449) は、盤である。(444) は、斜めに切られた高台から体部が丸みを帯びて大きく開き、口縁部は折縁となる。体部内面には鎬文を配する。全面施釉後、高台内縁辺部の釉を丸く拭き取る。(445) は、口縁が外折れとなる稜花盤である。高温の二次被熱により、釉の沸騰が著しい。(446) は、体部が広い見込から内湾気味に立ち上がり、口縁部を玉縁状に丸く収める。全面施釉後、高台内を蛇の目状に拭き取る。(447・448) は太鼓胴盤で、同一個体の可能性もある。(447) は、開き気味に立ち上がる体部が上部で内湾し、口縁を内に折る。口縁外面上下の凸帯間に、鈕状の突起を配する。(448) は、底部片である。渦状の装飾を伴う平坦な脚で、脇に鈕状突起が見られる。残存部は、全面に施釉されている。(449) は、盤の底部片である。厚さ 1.3 ㎝を測り、大振りの盤と考えられる。

(450) は、外面腰部に蓮弁文を配する酒会壺である。底部は、高台内側に外周に施釉した粘土円盤をはめ込む。体部の粗い貫入の目立つ釉は、この後施釉され焼成される。露胎の内面底部に印花をもつ。高台も露胎である。(451) は、牡丹唐草文酒会壺の上部破片である。口縁部の釉は拭き取る。

(452) は、燭台である。台の一部、右手・胸部、正面腰部、背面背中～脚上部、底部が出土した。衣服の模様や描写は、清浄光寺（神奈川県）蔵品に似る。

(453 ～ 467) は、香炉である。(453 ～ 457) は袴腰香炉である。(453) は、内面胴部が露胎である。(454) は、外面胴部に鈕状の突起を配する。胴の底面および脚底面を露胎とする。(456) は、左右に環状の耳 1 対、頸部の前後に窓 1 対をもつ。口縁部は受け口に作り、内側上面の釉を拭き取る。(457) は、(456) の蓋である。端部の釉は、拭き取る。破片であるが、円孔の一部が確認できる。(458 ～ 460) は、無文の筒形香炉である。高台を有し、形骸化した脚が貼り付く。(458・459) は高台畳付以内と内面底部は露胎で、(458) 内面には重ね焼きの痕跡がある。(460) は、高台畳付のみ釉を拭き取る。(461 ～ 463) は、竹節状の装飾をもつ。(464 ～ 467) は、外面胴部に算木文を配す。

(468) は乳鉢である。体部外面に、ヘラと櫛による蓮弁文をもつ。体部はゆるく内湾し、口縁部は内側にわずかに肥厚する。内面の口縁以下露胎部の器壁は、使用により研磨され、非常に滑らかである。

(469) は、瓜形の水注である。肩部の把手寄りに、花模様の浮文をもつ。高台畳付の釉は拭き取り、内面底部の釉掛りはムラが見られる。図の注口と把手は、推定復元したものである。

(470 ～ 474) は、花瓶・花生である。(470) は、ラッパ状に開く口縁の端部を上方に折り上げる。頸部には双耳をもつ。(471) は、全面施釉後脚底面の釉を拭き取る。底面は平滑で、金みが見られない。(472) は、角杯形の掛花生である。口縁部の釉は、拭き取る。円孔内に釉掛りは無く、焼成後に穿孔したとみられる。(473) は、花瓶の口縁部である。口縁は大きく外反し、頸部には凹凸による平行線が巡る。(474) は、下膨れの体部と筒状の頸部をもつ。

白磁　（第 47 図、Pl.. 53）

白磁には、碗、皿、鉢、坏などがある。

(475・476) は、碗である。(475) は、高台外側を垂直に、内側を斜めに削り出したもので、高台の内グリは浅い。残存する範囲の外面底部は、露胎である。(476) は、丸みのある腰部から直線的に口縁が立ち上がる。釉は、高台畳付のみ拭き取る。

(477 ～ 501) は、皿である。(477) は、高台をもたない 5 葉の輪花皿である。二次被熱により、本来

の釉調は不明である。口縁部に水色を呈するガラス質の付着物が、外底部周縁部に赤褐色の付着物がある。(478) は、高台を弧状に削り込む皿で、体部は大きく開く。釉は全面に施す。見込と高台に残る重ね焼きの融着痕は、研磨している。(479) は、高台畳付から直接ラッパ状に開く体部をもつ。高台内は垂直に削り出す。釉は、高台畳付のみ拭き取る。(480) は、内湾する胴をもち、口縁端部がわずかに外反する。釉は、細かい貫入があり、高台畳付のみ拭き取る。(481 ～ 499) は、口縁が端反りの皿である。釉は、高台畳付のみ拭き取る。口径は、(481 ～ 483) が 11 cm、(484 ～ 486) が 11.5 cm、(487 ～ 489) が 12.0 cm前後、(490 ～ 494) が 13 ～ 14 cmなど、まとまりが見られる。(495 ～ 499) は、口径約 18 ～ 21 cmを測る大皿である。

(500・501) は、菊皿である。花弁の幅と釉調に差がみられる。釉は、高台畳付のみ拭き取る。双方とも高台内に、二重圏に「天下太平」の銘をもつ。

(502) は、鉢である。内湾する体部は上位で外屈し、口縁部は再び内湾する。口縁内側と見込脇に、削り込みによる細い凸帯が巡る。釉は、他の白磁と異なり、くすんだ青灰色を呈する。

(503 ～ 505) は、坏である。(503) は、口縁が端反りとなる。釉は、高台畳付のみ拭き取る。高台内に「福」の銘をもつ。(504・505) は、丸く張った腰部から体部がやや外反して立ち上がる。釉は、高台畳付を拭き取り、見込も蛇の目状に拭き取る。見込露胎部に残る重ね焼き痕は、研磨している。

(506) は、小形の蓋である。頂部には、形骸化したつまみを周囲を削り出して表現する。下面中央に、径約 1.4 cmを測る円柱状の突起をもつ。釉は、上面のみに施す。

(507) は、角杯形の掛花生である。口縁部と胴部破片が出土した。青磁 (472) と同形とみられる。灰白色を呈す釉は、口縁端部のみ拭き取る。円孔内に釉が認められ、焼成以前に穿孔している。

(508) は、四耳壺の底部である。底は、径約 8.5 cmを測る。高台は、高台脇が腰部との接点ですぼまりやや広がる位置で稜をもって、逆台形に作る。底部中央の厚みは、約 4 cmを測る。釉は、やや青みを帯びた灰白色を呈す。

染付 (第 48 ～ 50 図、PL. 54 ～ 56)

染付には、碗、皿、坏などがある。分類は、小野正敏「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2 (小野正敏 1982) による。

(509 ～ 522) は、碗である。(509) は、口縁が端反りの碗B群である。外面は界線と牡丹唐草文を、内面口縁部に四方襷文、見込に界線と牡丹唐草文をもち、高台内に界線が認められる。(510) は、広く開いた胴をもち、見込が高台内に窪む碗C群である。外面は界線と唐草文、内面は見込に界線と花弁文をもつ。(511 ～ 515) は、外面口縁部に波濤文帯、胴部にアラベスクを配する碗C群である。見込には界線と蓮花文をもつ。(513) は高台界線下に模様をもち、(514) は腰部の界線を欠く。(516・517) は、外面に界線と梅月文、内面に界線と見込に梅月文をもつ碗C群である。(518・521・522) は、見込が緩やかに盛り上がる碗E群である。(518) は、外面に界線と梅花文、内面に界線と見込の如意雲文、高台内に界線をもつ。(521) は、外面に界線と鷹、内面に界線をもつ。(522) は、高台内に界線と「萬福修同」銘、見込に界線と瑞果文をもつ。(519・520) は、他に比して器壁が厚い。(519) は、口縁が内湾し、外面に界線と梅花文、内面口縁部に界線をもつ。(520) は、見込には界線と文字とも見える模様をもつ。逆台形の高台をもち、畳付以内が露胎である。(520) 以外の碗は、高台畳付のみ釉を拭き取る。

(523 ～ 550) は、皿である。(523 ～ 533) は、端反り口縁の皿B群である。高台畳付のみ釉を拭き取る。

(523 ～ 528) は、外面に界線と牡丹唐草文、内面に界線と見込の十字花文または花弁文をもち、(527・528) は、見込の界線外に蓮弁帯をもつ。(529・530) は、外面に界線と牡丹唐草文、内面に界線と見込の玉取獅子をもつ。(531 ～ 533) は、外面に界線と渦状の密な唐草文、内面に界線およびアラベスクと梵字の文様をもつ。(534 ～ 538) は、いわゆる碁笥底の皿C群である。外面は、口縁に波濤文帯、胴部に芭蕉葉文、腰部に界線、内面は、界線と見込に捻花または花文をもつ。(538) は、外面が梵字文、(535 ～ 537) は、内面胴部に花文をもつ。(539 ～ 542) は、端反り口縁の皿B 2 群である。(539・540) は、外面に界線と葡萄唐草文、内面に口縁部の四方襷文と胴部の牡丹唐草文および見込の界線と松竹梅鹿鶴文をもつ。(541) は、外面に界線、内面に口縁部の四方襷文および見込の界線と文様をもつ。(542) は、外面に界線、内面に口縁部の四方襷文および見込の界線と「長命富貴　金玉満堂」銘をもち、高台内に界線と「天下太平」銘をもつ。(543 ～ 545) は、丸く内湾する胴から斜めにつぼが付く皿F群である。(543・544) は稜花皿で、外面に界線とつぼの文様帯および胴部の唐草文、内面につぼの四方襷文と見込の玉取獅子をもつ。(545) は、外面に界線とつぼの文様帯および胴部の唐草文、内面に界線とつぼの波濤文帯および見込の松鶴文をもつ。(546) は、胴が内湾する大皿である。外面は無文で、見込に界線と唐草文をもつ。(547・548) は、底部が碁笥底で、端反り口縁の皿である。(547) は、外面に界線と唐草文、内面に界線と見込の花弁文をもつ。釉は細かい貫入が目立ち、やや赤みを帯びる。腰部以下は露胎である。(548) は、外面に界線と渦状の密な唐草文、内面に界線およびアラベスクと梵字の文様をもつ。(549) は、口縁が内湾する皿E群である。外面に界線と渦状の密な唐草文、内面に界線およびアラベスクと梵字の文様をもつ。(550) は、高台内に銘「宣德年製」が見られる大皿である。二次被熱により器壁が荒れ、融着物が見られる。

(551 ～ 556) は、坏である。いずれも、外面に界線と水草文、見込に界線と山水図をもつ。口縁内側は、界線または四方襷文がある。高台畳付のみ釉を拭き取り、高台内には「福」または「大明年製」銘がみられる。(554 ～ 556) は、碁笥底で腰部が丸みをもち、口縁が斜め上方に直線的に開く。外面上部に波濤文帯、下部に蓮弁文帯をもつ。内面は無文で、畳付のみ釉を拭き取る。

(557) は、蓋である。口縁下面から内側にかけて釉を拭き取り、外面のみ唐草文をもつ。破片のため全容は不明であるが、単純な円形ではなく、瓜形または輪花形の製品とみられる。

(558) は、なで肩で縦方向に稜をもつ体部から頸部が直立する、瓶状の袋物である。外面に、界線と唐草文が見られる。

瑠璃釉　(第 50 図、PL. 56)

(559・560) は、碗である。(559) は、やや外開きで小振りの高台と内湾して開く体部をもつ。全面施釉の後高台畳付以内は拭き取るが、拭き取りにムラが見られる。高台には砂目跡が残る。(560) は、内径する大振りの高台をもち、張りのある腰部から口縁が直線的に開く。釉は、外面の口縁部から畳付までが瑠璃釉で、内面と高台畳付以内は白磁釉である。畳付の釉のみ拭き取る。

(561) は、蓋の摘である。釉掛りは厚い。蓋本体と剥離し、接合部の突起が見られる。

華南彩釉　(第 50 図、PL. 56)

(562・563) は、稜花皿である。内湾する体部の外面に菊花状の花弁が表現される。口縁部は、稜をもって水平に折れる。釉は、二次被熱により変色・剥落があり、(562) には赤褐色、(563) には青色が

認められる。高台畳付以内は、露胎である。型作りの製品で、(562) の高台内には二重方圏内に「伍」銘の凸文がある。

褐釉 （第 50・51 図、PL. 56・57）

(564 ～ 568) は、四耳壺である。(564) は、丸く張りのある肩部をもち、口縁は内傾気味の頸部から外に折り返し玉縁状に作る。頸部下に 2 条の凹線を巡らせ、凸字の「太平」印を押す。釉は、暗褐色を呈し厚く施され、内面は頸部まで掛る。(565) は、なで肩の肩部に、玉縁状に折り返し肥厚した口縁が直接取り付く。釉は、暗褐色を呈し厚く施され、ロクロ目の残る内面残存部にも施される。(566) は、大きく張りのある肩部をもち、口縁は内傾する頸部から外に折り返し玉縁状に作る。胴部最大径の位置に、稜が巡る。底部は、脇が垂直に立ち、平坦である。釉は、茶褐色を呈し薄く施され、内面上部にも掛る。(567) は、大きく張りのある肩部から、わずかに内傾する短い頸部が立ち上がる。口縁は、上面を平坦に作る。胴部最大径の位置に、稜が巡る。底部は、脇が垂直に立ち、上げ底になる。釉は、黒褐色を呈し、内面肩部まで掛る。表面には、二次被熱による小さな円形の剥離痕が目立つ。(568) は、大きく張りのある肩部をもち、口縁は内傾する頸部から外に折り返し上面を平坦に作る。胴部最大径の位置に、稜が巡る。底部は、脇が下に窄まり平坦である。釉は、茶褐色を呈し薄く施され、内面上部にも掛る。

(569) は、壺である。丸く張りのある肩部をもつ。口縁は、内傾する頸部から外反し、外側を面取りして断面三角形に作る。内外面にロクロ目が残る。釉は、茶褐色を呈し、外面は口縁から肩部、内面は頸部まで施される。

(570) は、壺である。上げ底状に内反りする底部と、内湾する胴をもつ。口縁部は内傾し、外側を玉縁状に丸く作る。釉は、茶褐色を呈し、内面全体と外面腰部まで施される。

朝鮮製陶器 （第 51 図、PL. 57）

(571 ～ 588) は、雑釉の碗である。高台は、内側を時計回りに渦状に削り出し、断面が逆台形を呈する。釉は全面に施され、見込と高台畳付に砂目跡が残る。(571 ～ 573) は、見込脇を強くなでて内面に稜、外面に一段の張出しをもつ、典型的な「そば茶椀」である。外反気味に大きく開く体部をもち、(571) の口縁は上方に内湾する。(574 ～ 581) は、同じく見込脇に稜をもつが、外面の張り出しが目立たないもので、体部から口縁部は直線的に開く。(582 ～ 586) は、見込脇の稜がなく、腰部の張りが少ないものである。外反する体部と上方に内湾する口縁をもつもの (582・583) と、直線的に開くもの (584 ～ 586) がある。(587) は、高台から体部が大きく開く碗である。(588) は、腰部に丸い張りをもつ小振りの碗である。

(589) は、筒形の香炉である。底部には輪高台を削り出し、丸みのある腰部に粘土玉を貼り付けた脚をもつ。高台畳付に砂目跡が残る。

(590 ～ 592) は、雑釉の瓶である。他の出土例から徳利型とみられる。肩部は、やや張りのある (591) やなで肩の (592) がみられ、口縁はラッパ状に開く。

6　金属製品（第52～55図、PL.58～61）

本調査区から出土した金属製品は全2,919点で、ほとんどが戦国期のもので占められる。ただし、中には寛永通寶も出土しており、近世以降の金属製品も一定量確認される。金属の素材としては、鉄・銅・鉛が確認されている。坩堝の可能性がある土師質皿や炉壁も数点確認されているほか、鉛素材の流動滓13点が一つのグリッドから出土している（南区Ｐ５区）。金属製品の分布については、偏った分布の傾向は顕著に見られないが、岸面石垣の下にも少なからず金属製品が出土しており、遺構面からの流出もしくは人為的な廃棄などが想定できる。また、SF4418からは計896点の多量の金属製品が出土しており、そのうち釘が735点出土している。

建具類（釘）（第52図、PL.58）

本調査区から出土した釘は、全体で2,333点出土しており、SF4418からは735点出土している。そのうち19点を図版に掲載した。(593～611) は軸の長いものから図版に配列しており、(593～607) はSF4418出土、(608～611) は第135次調査区から出土している。釘の頭部は端部延圧後に巻き込んでいるもの (593など)、端部延圧後に折り曲げているもの (599など)、端部を延圧してそのままの状態のもの (598・607など) が確認され、特に端部延圧後に頭部を巻き込んでいるものが数多くある。釘の素材はほとんど鉄で占められるが、中には銅製も数点見受けられる。ただし、釘頭の形状は鉄製のものとあまり変わらない。

先端から釘頭が残っている釘を長軸別に計測した。計測値と数量は以下のとおりである。

〔SF4418〕2.5cm:36本、3.0cm:70本、3.5cm:41本、4.0cm:55本、4.5cm:73本、5.0cm:70本、5.5 cm:29本、6.0cm:38本、6.5cm:24本、7.0cm:14本、7.5cm:10本、8.0cm:8本、8.5cm:8本、9.0cm:8本、9.5cm:7本、10.0cm:2本、10.5cm:3本、11.0cm:1本、11.5cm:1本、12.0cm:1本、13.5cm:1本、15.0cm:1本

〔SF4418以外〕2.5cm:10本、3.0cm:21本、3.5cm:14本、4.0cm:18本、4.5cm:10本、5.0cm:16本、5.5cm:5本、6.0cm:5本、6.5cm:3本、7.0cm:13本、7.5cm:1本、8.0cm: 1本、8.5cm:2本、9.0cm:1本、9.5cm:2本、10.0cm:2本、10.5cm:2本、11.5cm:1本、12.0cm:3本

調査区全体の傾向としては、3.0～5.0cmに数量のピークがあるということ、またSF4418以外でいえば、7.0cmで13本と比較的多く出土している点が、SF4418の傾向と異なっている。

建具類（釘以外）（第53図、PL.59）

(612・613) は銅製の引手金具である。(612) の縁取りには墨がわずかに残存しているが、全体の半分が失われている。両者とも引手の長軸上には幅0.3cmの菱形の孔が向かい合ってあけられており、横長ではなく縦長の状態で襖に取り付けられていたと考えられる。また、(613) も縁取りに墨が残っている。(612・613) は各々別地点で出土しているが (612：SF4418、613：南区Ｎ５区トレンチ内)、墨が残存していることや形状が類似することから同組の襖（水墨画か）で使用していた可能性がある。(614) は引手金具で、筆筒などの引手部分であったと推定される。先端は円形の留め具が取り付き、さらに先は尖っている。もう一方の先端は細くなっており、切れ込みが観察される。(615) は竹節形の円筒部と環状部に分かれている錠前である。円筒部と環状部の接合部分には、幅0.5cmのＴ字形の孔があけられてお

り、中は1㎝弱の方形の空洞が確認される。円筒部から取り付けられている2本の環状の棒の間はもともと部品が取り付いていたと考えられる。また、棒先端は凸形に作られている。

(616) は鉄製の環状金具で、外径7.7㎝、厚さ1.0㎝を測る。錆膨れが激しく、全体に非常に脆くなっている。これまでの当遺跡出土の環状金具の外径は約1.5～5.0㎝であることを考慮すると、本例は大型の部類に含まれ、扉に付属する金具の可能性がある（南区M5区出土）。

生活道具類　（第53図、PL.59）

(617) は鉄製の鍵の柄であり、柄元から折れて鍵先までが欠けている。全体が錆によって厚く覆われているが、柄の先端は環状に折り曲げている。

(618) は鉄製の槌である（全長10.0㎝）。両端面ともに細い線状の擦痕が縁から中央にかけて残っている。第51次調査（医師の屋敷跡）で出土した同形態の鉄製槌（全長6.7㎝）に比べると、大型のサイズといえる。

(619) は手斧で、全長17.6㎝、刃部幅2.8㎝、柄穴4.0×1.8㎝を測る。大きさや形状から、石臼の目（溝）を刻む目立てなどの石工用の道具であったと推定される。

(620) は鼈形分銅で、長さ5.65㎝、幅4.25㎝、厚さ2.35㎝、重量368.5gをはかる。石垣下から出土している。分銅の表面には二重縁によって「拾両」の文字が繋状工具によって鐵彫され、また表面外縁に一条の細線が刻まれている。分銅の製作方法は、外型の金属を厚さ1㎜以下の薄さで作り、その側面に開いた穴から溶かした鉛を流し入れる方法で製作されている。

容器類　（第53・54図、PL.59・60）

(621) は銅製の花瓶の口縁で、口縁端部は面が作られ、また口縁帯が帯状に作出されている。花瓶の脚部の可能性もあるが、いずれにしても前卓に置かれた三具足の一つと考えられる。(622) は花瓶の耳の一部で、象の頭や鼻が造形上表現されていることから、花瓶の象耳と推定される。象耳としては大型のもので、胴部に取り付けられていたものであろう。内側には継ぎ目が確認されていない。(623) は銅製の管耳瓶の耳と推定される。外面には雷文が縦方向に列をなして表現されている。雷文の列ごとにずれが見られるが、雷文の線は丁寧に作られている。外面の一部に幅7㎜の縦長の剥離面が観察される。付着物や不定形な孔もその面で確認されるが、もともと瓶の頸の部分に取り付いていた面と考えられる。

(624) は銅製の蓋で、全体に熱を受けているためか変形が著しい。摘みは菊形様の作りをなし、茶釜などの蓋と考えられる。(625) は小型の蓋で摘みが横に歪んでいる。香炉などの小型品の蓋と推定される。

(626) は三足のある香炉で、外面全体が剥離・破損した状態で上器だまり遺構から出土している。口端は内側に直角に折れ、底は丸底状に作られている。(627) は香炉の脚部で、獣足として作られている。

(628) は鉄製の鍋で、全体に錆で覆われているが、欠損している部分はほとんどない。SK6491から他の遺物とともにまとまって出土している。法量は口径21.7㎝、底径16.6㎝、高さ9.7㎝を測る。鉉は錆によって口縁に接着した状態で、断面は長方形である。鉉の支持部は角が丸くなった五稜形の形状をなしている。鉉は先端が折り曲げられて支持部の中央の孔に固定されている。当遺跡でこれまでに出土した鍋と形態はよく類似しているが、本例は口端の作りが内外に少し突出している点が特徴的である。

貨幣　（第55図、PL.61）

貨幣は銅銭が99点出土している。そのうち一部抜粋して図化した。(629)は□（判読不明）元通寶、(630・634)は開元通寶、(631・638)は咸平元寶、(632・635・640)は皇栄通寶、(633)は元豊通寶、(636)は寛永通寶、(637)は祥符通寶、(639)は洪武通寶、(641)は朝鮮通寶である。(630)は接着して二枚重ねになっている。

銅銭のうち銭貨名が判読できたものは、28点である。その内訳は、以下のとおりである。
開元通寶（唐／621年）：4枚、乾元重寶（唐／758年）：1枚、咸平元寶（北宋／998年）：2枚、景德元寶（北宋／1004年）：1枚、祥符通寶（北宋／1009年）：1枚、皇宋通寶（北宋／1038年）：5枚、熙寧元寶（北宋／1068年）：1枚、元豊通寶（北宋／1078年）：5枚、元祐通寶（北宋／1086年）：1枚、紹聖元寶（北宋／1094年）：1枚、聖宋元寶（北宋／1101年）：1枚、洪武通寶（明／1368年）：1枚、朝鮮通寶（李／1423年）：1枚、寛永通寶：3枚

武具類　（第55図、PL.61）

(642)は小柄で、柄は銅製、嵌め込まれている刀子は鉄製で作られている。柄には菱形を多重に重ねた文様が描かれている。刀子の部分は全体に腐食や割れが著しく、先端は欠けている。

(643)は鞘形金具で、長さ6.5cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmを測る。全体に摩耗が激しいが、表面に単線の唐草文を象嵌している。象嵌された線の中には、白色の顔料が残存している。鞘にしてはかなりの大型品であり、武具以外の用途に使用した可能性もある。

その他　（第55図、PL.61）

(644)は不明銅製品で、棒状部分が4つ重なっており、中央の棒は幅1cm以上と特に太い。これらの棒状部分は、後から自然に密着したものではなく、製品と推定できる。蓮の茎と枝を表現しており、蓮を模した常花、もしくは蓮を銜える鶴を模した燭台などの可能性がある。(645)は用途不明の製品である。およそ7面前後の層が折り重なって全体が作られている。下面から金属（鉄）、樹脂、繊維、漆などの層が交互に密着して重ねられている。(646)は銅製の板片で、小破片にもかかわらず重量がある。外面に模様と推定できる突帯が2条あり、突帯断面は明瞭な方形を呈する。本来は円周状の器体であったと考えられ、喝り物道具の可能性もある。

坩堝・炉壁　（第55図、PL.61）

金属製品ではないが、金属加工に関わる道具としてここで報告する。

(647)は土師質皿で全体が被熱を受けて大きく歪み、表面は発泡している。歪みの大きさから、生焼けのまま、被熱状態で使用したと考えられる。内面には赤色の金属片を置いた痕跡が確認されるほか、銅と考えられる緑色の粒（径4mm程度）も観察できる。(648)は土師質皿で、形状の歪みは見られないが、内外面に金属の付着物を確認できる。外面が一部発泡している。(649)は炉壁の椀形破片で、金属が流動して固化した状態が炉壁内に約2.5cmの厚みで観察される。固化した金属の中には、製品と思われる棒などがそのまま突き出ている。

蛍光X線分析による解析では、(647～649)に青銅を検出している。また、これらとは別に内外面に発泡痕跡のある土師質皿4点も分析したところ、3点に銅（うち1点にヒ素含む）を検出した（国立科学博物館　香名貴彦氏の御教示）。

7　石製品（第56～67図、Pl.,62～77）

西山光照寺跡から出土した石製品は6,476点で、出土遺物総数に占める割合は10.47%である。このうち石塔・石仏類が2,011点となっている。出土点数・割合ともに多く、真盛上人門下の寺院として造塔活動が盛んであったことが西山光照寺跡の発掘調査からうかがえる。石材は臼・硯・砥石などを除き、ほぼ笏谷石製である。以下、種類ごとに概要を述べ、特筆すべき遺物について報告する。図版に掲載した資料の個別詳細については遺物観察表にまとめる。

石塔・石仏類（第56～67図、Pl.,62～73）

西山光照寺跡の石塔・石仏を対象とした調査[11]は、これまでに3回実施されている。第1次は昭和47～49年に実施された一乗谷石造遺物予備調査で、寺域内で地表に露出していた石造物に個別番号を付け、種類・法量・銘文などをカードに記録し340点を採録した。第2次は第86・87・90次発掘調査で、出土した石造物と、石塔を転用し積み上げて大型石仏の台座となっていたものを解体して調査し1,884点を採録した。第3次となる第132・135・144次の調査では、発掘で出土した448点を採録した。調査総数は2,672点（石仏・石塔以外の石製品を含む）を数え、西山光照寺に立てられた石塔・石仏のうち、西側山中の墓地が未発掘のため埋没しているものは未調査分として残されている。それぞれの調査の採録方法には差異があり、露出していた石造物については、屋外での簡易な探寸・略図作成に留まり、資料館へは収蔵せず現地に残したため、本報告書作成に伴って再整理を行うことが困難であった。そのため、本書では3回の石造物調査のうち発掘調査で出土し遺物として扱ったものを主に報告することとした。しかし、西山光照寺の石塔・石仏類全体の造立傾向や特徴を読み取るためには、3回の石造物調査を総合したデータをもとに考察する必要があるため石造物調査総数から選別・分類しまとめた表5「石塔・石仏種別一覧表」を適宜引用する。また、銘文の残る石仏・石塔については、Ⅵ考察「西山光照寺の石造物からみた寺院変遷」で概要を述べる。

表5　石塔・石仏種別一覧表

種　別	点　数
一石五輪塔	1,174
組合五輪塔	24
宝篋印塔	21
石　塔	5
板　碑	137
笠塔婆	12
石　仏	348
石　龕	77
台　座	198
花立等	15
計	2,011

一石五輪塔（第56～59図、Pl.,62～65）

まず、石仏・石塔類を種別ごとに見てみると「一石五輪塔の割合が多く、大部分は割れており、「石仏・石塔種別一覧表」の一石五輪塔総数　1,174点のうち、完形品はわずか6点と極めて少ない。この割合から経年による破損とは考えにくく意図的に割られたと推察されるが、その時期や理由は不明である。一石五輪塔については、調査時すでに、造立された原位置を保っていると確定できるものはなく、寺院区画の造成や寺院廃絶後の整地によって移動・集積されたものと考えられ、運搬や石材として転用する利便のために分割された可能性が高い。石塔の一部は（792～803）のような台座に掘えて立てられていたと思われる。

第132・135次調査で出土した五輪塔には、(676・677）のように、銘文の部分に施された朱・金の彩色が、造立当初のまま色鮮やかに残るものが多く見られた。ここは山林地籍となっていて、西山光照寺の墓地のうち朝倉氏滅亡後の比較的早い段階で山林に取り込まれた区画と考えられ、石造物も早くに埋没し土中にあったため彩色が剥落せず保存されたと考えられる。(650～696）は「石五輪塔の空・風・火・水

輪などの上部分で、空輪の大きさで比較すると最少のものは（650）で直径 9.9cm しかなく、最大は（691）の直径 22.2cm である。（702）は地輪高 22.9cm、幅 22.4cm あり、推定総高 70cm 以上の大型の一石五輪塔である。地輪部分を比較してみると、（698 ～ 705・707）のように地輪がほぼ正方形に近いタイプのものと、(706・708 ～ 727）のような長方形のものに分けられる。紀年銘をもとに年代変化をみてみると、永正年間（1504 ～ 1520）までは正方形が多く、大永以降（1521 ～）は長方形のものが主流になる傾向がみられる。

銘文彫刻についてみてみると、五大種字を四面に四転して彫るのを基本とし、（662・713・727）のように月輪で種字を荘厳したものもみられる。また（684・706）のように「妙法蓮華経」の題目が彫られるものもある。(711・715・724・725）は割り付け線を付けてから銘文が彫られている。次に、(698）は「為昌林紹繁禅定門／永正三年八月廿一日」と法名・没年月日が刻まれており、『幻雲文集』収載の賛詞「朝倉越中太守昌林紹繁居士肖像」と法名が一致する[11]。賛詞によると朝倉越中太守昌林紹繁居士は、景連を実名とする朝倉一族の武将で、古霜台（朝倉氏景）、今瑞台（朝倉貞景）に仕え、壮年には一休に帰依したが、8 月 21 日に一乗郷で亡くなり、三万谷福松深岳寺に葬られ碑（石の卒塔婆）が建てられたという。これにより（698）は朝倉景連の供養塔と考えられるが、朝倉一族・重臣クラスの武士であっても史料的に法名と実名の両方がわかる人物は限られているため、戦国時代に造立された一乗谷の石塔の中で、誰の墓石・供養塔なのか判明しているものはわずかであり、一乗谷における造塔行為について考察する上で大変貴重な例といえる。石塔銘と賛詞は、朝倉景連が永正 3 年（1506）8 月 21 日に亡くなり、生前から帰依していた一休ゆかりの深岳寺に葬られ石卒塔婆（石塔）が立てられたことと、それとは別に西山光照寺にも石塔が立てられたことを意味しており、被葬者の信仰と葬送・供養のあり方が具体的に読み取れる。景連の事績と葬送の経緯から深岳寺は景連の菩提寺・墓地と考えられるが、西山光照寺の石塔はいわゆる墓標ではなく、景連と西山光照寺の間に信者・外護者といった由縁があったとは考えられないことから、西山光照寺に石塔を立てることの意味を慎重に検討しなければならない。また、(698）は他の一石五輪塔と比べて法量・形状に特別な点はなく、童女の法名が彫られた（703）などとほぼ同じであるが、このことは石塔の大きさや形状から被葬者の身分について考察を試みることの注意点ともなるだろう。

その他の石塔（組合五輪塔・宝篋印塔）（第 60 図、PL. 66）

その他の石塔には、組合せの五輪塔・宝篋印塔などがあるが、倒壊した部材・破片しかなく「石仏・石塔種別一覧表」でみても、合わせて 50 点に過ぎない。（697）は組合五輪塔の水輪で、接地面を安定させるため上下面が刳られる。(728 ～ 731）は相輪で、(732）は宝篋印塔の笠部、(733・734）は反花座で、複弁の造りで大型の塔の一部と推定される。(735 ～ 739)は格狭間に蓮華座を彫る基礎部の石材である。

板碑型石造物（第 61 ～ 63 図、PL. 67 ～ 69）

（740・741）は五輪塔を平面的にした板塔婆状のもので、五大種字に続けて六字名号が彫られている。(742 ～ 761）は板石に五輪塔を線刻するタイプのもので、縁と底を残し、2、3 基と複数の五輪塔が彫られている。(764）は上部に石仏を半肉彫し、下部と縁部分に法名が刻まれている。(772・776 ～ 778）は「南無阿弥陀仏」の六字名号が彫られるもので、(776・777）は上部を山形に尖らせ三尊種字が彫られている。板碑型石造物は割れやすい形状ということもあり小片で全体の造形がわからないものも多い。(772・774）などは側面・裏面にも銘文が彫られており、丁寧に磨いて仕上げられていることから石龕・石幢など大型石造物の一部かもしれない。(757・761 ～ 763）の底部の作りをみると厚みはもたせてい

るが自立するほどの構造でなく、地面に埋め込むには足が短い。(762) はわずかに底部に凸部を削り出していることから、(814) のような台座に差し込み自立させるか後にもたせ掛ける作りであったと考えられる。

石仏（第 64 図、PL. 70）

石仏は破損が著しいが頭部や持物により像種が判断できる。現地にある 37 体の大型石仏も頭部を欠くものがあり接合可能な破片は修復されたが、(781 ～ 783) もこれら大型石仏の一部とみられる。(781) は丸彫りの菩薩像頭部で、西山光照寺の大型石仏は舟形光背に像を浮彫りする形で造形されるものがほとんどで、丸彫りの像は現地の虚空蔵菩薩像と (781) の 2 体だけである。小型の石仏は地蔵菩薩像の割合が多いが、(791) は千手観音菩薩像で石龕の一部と考えられる。

台座・石龕・石灯籠など（第 65 ～ 67 図、PL. 71 ～ 73）

(792 ～ 803) は石塔を立てる台座で縁には反花が彫られている。反花は単弁で表現されるものと、(802・803) のように複弁のものがある。(804 ～ 806) は石龕の屋根の部材と考えられる。(807) は阿弥陀如来像が彫られ、(808) は舟形光背の線刻のみで像種不明だが、これらは石龕の一部と考えられ、石板を組み合わせて上に屋根材を乗せていたと考えられる。(810) は「南無阿弥陀仏」の名号に、朱漆が塗られ金箔が貼られている。破片が小さく全体の形は不明であるが煤らしき付着物が残っているので灯籠の火袋などの一部とも考えられる。(809・811) は内部が刳られ、側面には蓮華座が浮彫りされているもので、同じく小破片のため石造物の種別は不明である。(812・813) は笠型の小型石造物で (812) は空気穴が開けられ煤が付着していることから、灯明を供える墓前灯籠のような使用法が考えられる。(814) は長方形にホゾ穴が開けられ内側を刳った台座、(815) は大型の石造物の台座で、(816) は六角形で塔の基礎の部分と推定される。(817) は上部に 6 カ所等間隔で穴をあけた足付台、(818 ～ 820) は花を供える花瓶で、これらは西山光照寺の墓地で供養のために使用された石製品と考えられる。

香炉・風炉・バンドコ・盤など（第 68 ～ 70 図、PL. 74 ～ 76）

(821・822) は 3 足が削り出される足付盤で形状から香炉としての用途が考えられる。(822) は内面にノミ痕が残るが外面は丁寧に磨かれ「南無阿弥陀仏、七代上人真慶、南無阿弥陀仏」の文字が彫られており、西山光照寺七代目の住職に関係する遺物と考えられる。『西山円頓戒血脈譜』[20]（光照寺蔵）には、中興の祖霊舜上人から真秀－真偏－盛玄－真重－恵運－真慶と続く系譜が記されており、また、天文 24 年 (1555) の紀年銘のある石碑には「当寺五代真重上人」と銘があることから、七代住持が真慶であったと裏付けられる。真慶といえば、『真盛上人往生伝記』に明応 4 年 (1495) 真盛上人が亡くなった際、越前から馳せ参じた引接寺住僧として真慶の名前がみえるが、光照寺の七代上人真慶とは年代的に隔たりが大きく、同名ながら別人と考えられる。

(823 ～ 826) は火桶・火鉢などの用途が考えられ、炭を燃したりして熱を受けて石が変色している。(825) は円筒形で内面縁に突起部分を残した作りになっており、七輪のような携帯式の炉と考えられる。(827) は大型の盤で外側面に「光・寺・日・水」などの文字が彫られている。被熱で変色しており、破片が小さいため形状や用途は不明である。(828・829) は風炉で、口縁が内湾しすぼまるタイプのものや、口縁が僅かに外に広がるタイプのものなどがあり、(830・831) はほぼ同じ大きさの足付の火鉢である。(832) も足付の口縁が内湾する風炉・または火鉢と考えられる。(833) は炉壇石で、縁は磨いて仕上げられているが、床下に隠れる外面には粗いノミ痕が残る。このように、光照寺からは、様々な種類の火

を燃やす道具が出土しているが、(830・831) のように同形のものも複数あることから寺の什器としてセットで揃えられていたものと思われる。(834 ～ 840) はバンドコで蓋・身の形状から楕円形・長方形・D形のものなど多種出土している。

(843・844) は朝倉氏遺跡の石製品として初めて確認された形の長方形盤である。笏谷石製で器壁は薄く内外面とも丁寧に磨かれて滑らかに仕上げられている。(845) は同じく方形の盤であるが底部角に足を削り出している。破片からこの他にも同様の作りの方形盤が複数あったことが確認できるが、何に使われたものか不明である。(845・846) のような小型の足付盤なら石菖盤などの寄せ植え、盆景を楽しむ容器とも考えられる。(847) は「山」などの文字が側面に彫られる破片で、楕円形の大型盤の一部と思われる。(849) は3足の付く円形盤、(850) は4足の楕円形盤である。(851) は底部横に水抜き穴のような穿孔のある円形盤で、外側面に「廟・御・丟」などの文字が彫られている。(852) は底部側面には穿孔があり、縁には注口が付けられ導水の溝が彫られているもので、水盤や手水盤の用途が考えられる。

その他の石製品（第71図、PL.77）

(841・842) は茶臼で、上臼の挽き手を差し込むホゾ穴には花模様の装飾が彫られ、目は8分画で入れられている。(853 ～ 860) は硯で、(853) は長辺5.9cm ×短辺2.7cm と大変小さい。西山光照寺跡からは、朝倉氏遺跡の他の調査区に比べ硯が多く出土しており、(855・856・860) などはまだ磨った墨が残って付着した状態で出土した[4]。また、(855・859) は陸の部分が磨り減り穴になるほどよく使用されており、彫刻などの施されていない実用的な硯が多く使われていたことがうかがえる。(861 ～ 867) は砥石。

以上、西山光照寺跡の石製品には、陶器・磁器・瓦質・金属・木製など、通常は別の材料で作られる製品を笏谷石で作るという傾向がみられ、加工のしやすさや耐久・耐熱・防水性などの利点から大変重宝されていたことがうかがわれる。光照寺の場合、屋外に大型石仏や歴代住持の供養塔その他数多の石塔が立ち並んでおり、そのような屋外の宗教空間を美しく荘厳するために笏谷石で造られた香炉や花瓶・炉龍など様々な石製品が置かれていたものと想像される。

朝倉氏遺跡ではカワラケ・鐵冶・金工・曲物・塗師など多様な職人の存在と工房跡が確認されているが、石製品については、加工途中の石材や削った石片など製作過程を示す痕跡は確認されておらず、石製品を作る石工がいたかどうかは明らかになっていない。石盤が出土しているので目の磨り減った石臼を直す日立て職人はいたと思われるが、笏谷石製品については石が採掘される足羽山周辺で成形加工され、乗谷へ運ばれてきたと推定される。しかし、これだけ多くの石塔・石仏が立てられ、それらに繊細な銘文彫刻や彩色が施されていたとすると、最後の銘文彫刻などの仕上げ工程は一乗谷でなされた可能性が十分考えられ、注文→製作→納品の過程や生産体制については未解明であり今後の課題としたい。

注 (1) 西山光照寺の石造物については、『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ』1975年、資料館発掘調査・整備事業概報『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 1995』、『同 1996』を参照。

(2) 宮永一美 「越前における文芸隆盛と月舟寿桂」「一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 2011」 2013年

(3)『西山円頓戒血脈譜』は真慶を真慶と記しているが、「真」の文字を使う名前が他に見られず、後世の写本であることから「眞」の誤写と思われる。銘文の文字は欠けて判読しにくいが、残画から「眞」の文字と判断した。

(4) 第20回企画展図録『戦国のまなびや』所載の、「一乗谷朝倉氏遺跡の硯出土比率一覧表」によれば、西山光照寺跡や寺院跡が集中する赤淵・奥間野地区は、1㎡あたりの硯破片の出土比率が高い傾向がみられた。

8　木製品その他

木製品

(868) は蓮弁を互い違いに３段に彫り出し、施された金箔が一部に残存する木製の蓮華座である。南区Ｃエリアの SK4471 周辺の土器だまりから出土した。最大径は 5.3cm、底径 2.9cm、器高 2.4cm を測り、上段の蓮弁は 12 枚、中段６枚、下段６枚を配置する。蓮台上面には設置されていた仏像の刳り抜き痕がある。また、裏面には中央と周囲に３つの孔があるため、反花などの台座が付属していたことが推測される。(869) は北区Ｊエリアにおいて SX6458 の東端ピット内から出土した柱根である。残存高 14.5cm、残存幅 18.1cm である。腐食が激しく、調整痕が明瞭に確認できないが、残存形や僅かに残る加工痕から、面取された柱であったと推測する。底部は平たく整形されていたことが窺える。

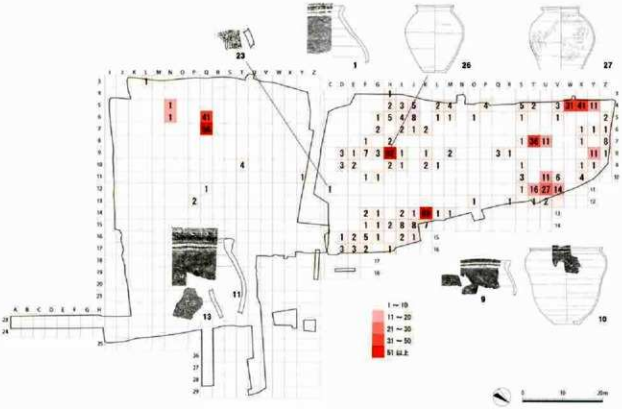
また、北区Ｉエリアの SK6491 から漆器の皿３点が出土している。皿は３点とも同形と考えられ、重なった状態で出土した。しかし、全てについて木胎部が腐食し、漆膜片のみで残存している。よって、器形の全容は不明であるが、３点とも内外面が朱漆で施された内湾口縁を呈する。高さ 0.9cm を測る高台部と底部のみが黒漆で施されており、うち１点の底部に「光」と朱書きされている (870)。この皿の高台の復元径は約 10.5cm である。

壁土状塊

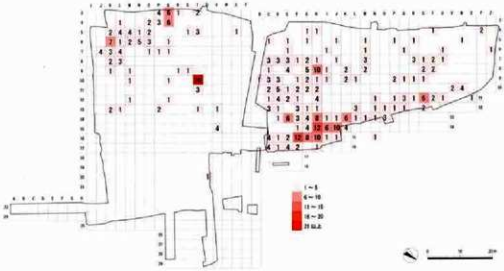
壁土と見られる厚さ３～５cm程で、表裏に面を持つ板状の粘土塊が、北区Ｉエリアの南東側を中心に多数出土している。特にグリッドＯ～Ｑ11 区に、５cm角以上の大きめの塊が集中し、そのすぐ東側の、Ｏ・Ｐ 12 区ド段遺構面直上からも多数出土する状況にあった。このことから、恐らく、北区Ｈエリアの建物 (SB6429) と北区Ｉエリアの建物 (SB6490) との間に、何らかの建造物が存在した可能性が高く、そのどの部分かは分からないが、土を塗り込んだ構造を持っていたことが考えられる。それが、火災か何らかの原因により高温で焼き締められたために、赤色または橙色を呈した強固な塊となったものと推測される。

(871 ～ 886) の 16 点を図化した。これらは竹を編んだ木舞の痕や、壁の表面となる整えた面がみられないことから壁土でない可能性の方が高く、「壁上状塊」としている。表裏二面のうち、一方の面の痕跡は全て同じで、ほぼ水平な面に板状の痕が付く。しかし、もう一方の面の痕跡は３種類あり、カヤ草状の植物の茎を束ねた痕が付くタイプ (871 ～ 876・878 ～ 883)、むしろの痕が付くタイプ (884 ～ 886)、両面とも板状の痕のタイプ (877) に分かれる。(873・877) は板に加えて丸木状の痕跡がみられ、(873) の断面には、幅３×４mmの楕円形の貫通孔がみられ、釘状のものを打ち込んだ痕と考えられる。(875・876) にはカヤ草状の植物を束ねた縄の跡が付みられる。

挿図 12　越前焼擂鉢・鉢出土分布図



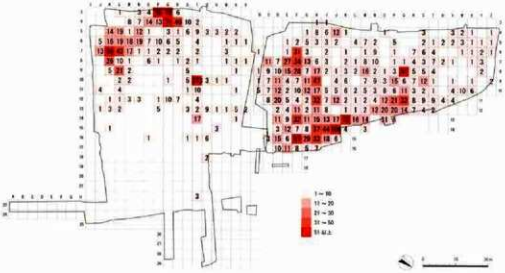
挿図 13　越前焼大・中甕出土分布図



挿図 14　瀬戸・美濃焼天目茶碗出土分布図

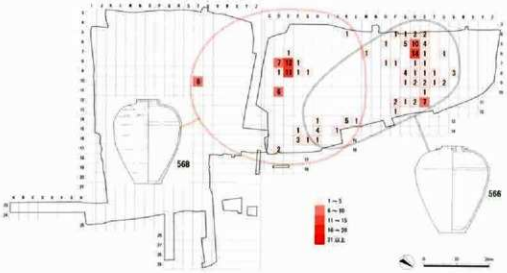
挿図 15　瀬戸・美濃焼鉄釉盃出土分布図

挿図 16　瀬戸・美濃焼灰釉盃出土分布図

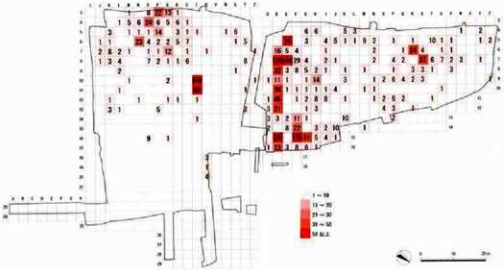


挿図 17　白磁・染付出土分布図

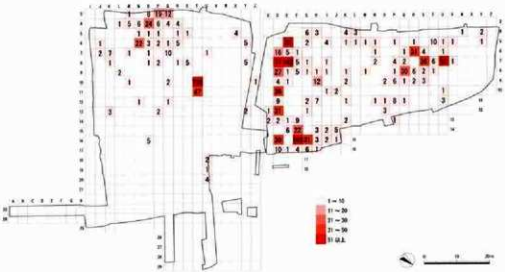
挿図 18　朝鮮碗出土分布図



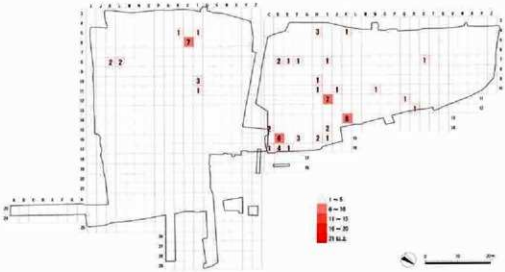
挿図 19　華南褐釉壺（2 個体）出土分布図



挿図 20　金属製品出土分布図



挿図 21　鉄釘出土分布図



挿図 22　銅銭出土分布図

遺物観察表

表6　越前焼観察表

※粘土の①～④は表8の下記注参照。

図	番号	器種	地区	出土地点 次数 - 出土区	遺構／層位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	色調 内面	色調 外面	胎土	備考
22	1	大甕	南・北	87-H13, 132 D9・E9・F8・G6・H5・H8・I5・J5・K6・K9・K13					灰	褐灰	①④	
	2	大甕	北	132-F13					赤褐	褐	①③	
	3	人甕	北	132-D8・F14・X7					灰白	灰白	①③	
	4	大甕	北	132-K13・K14・P4, 135 R12・U11					赤褐	赤褐	①③	
	5	大甕	北	132-D8・I9・I14・M4, 135-X10					赤黒	褐灰	①④	
	6・7	人甕	北	132-E9・F8・F15・F16・G13・H8・H16・I6・J5・J14・K14・L4・L13 他	SX6427				褐灰	褐灰	①④	押印
	8	大甕	北	132-E15・F8・G8・K4	SX6427				黒	黄灰	①④	押印・ヘラ記号
	9	人甕	北	135-O12・Q8・S4・S5・S10・T11・U10・U11・V12・W10・X10・Z6 他	SD6443・SD6483				褐灰	褐灰	②④	押印・ヘラ記号
	10	大甕	南・北	90-L3, 132-D16・K13・M4・M8, 135 Q10・T7・U11・Y8・Z7 他	SK6487・SK6489・SD6483 他	77.4	8.8	28.0	褐灰	褐灰	①④	押印・ヘラ記号
23	11	大甕	南・北	86-K5・T10, 90-Y, 132 D9・U8・G5・C14・H14・I14	SF4418				赤褐	赤褐	①④	押印
	12	大甕	北	132-D8・D9					暗灰	暗灰	①④	押印
	13	大甕	南・北	86-T10・Y11, 135-W10	SF4418				褐灰	褐灰	②④	押印
	14	大甕	南	86-Q6					灰褐	褐灰	①④	押印
	15	人甕	北	132-I5					暗灰	褐灰	①③	押印
	16	大甕	北	132-K13					褐灰	褐灰	①③	押印
	17	大甕	北	132-K14					暗赤褐	灰	①④	押印
	18	人甕	北	132-K8					暗赤褐	褐灰	①④	押印
	19	人甕	北	132-P13					褐灰	褐灰	①③	押印
	20	大甕	北	132-G13					赤褐	褐灰	①③	押印
	21	人甕	北	132-D16					赤褐	褐灰	①④	押印
	22	大甕	北	132-J4					褐灰	褐灰	①④	ヘラ記号
	23	大甕	北	132-C11					黄灰	黄灰	①③	押印
	24	中甕	北	132-H5・H6		20.0			黄灰	黄灰	②④	
	25	中甕	北	132-H4		21.6			黒褐	黒褐	①④	
	26	中甕	北	132-F10・G8・C10・H8・H9・I5	SK6436	26.0	46.8	15.6	灰黄	灰黄	①④	
	27	中甕	北	132-J5・K13, 135-W4・X4・Y4 他	SD6443	29.6			暗褐	暗赤褐	①④	
24	28	短頸壺	南	86-T10・Q12	SF4418	20.0			灰	灰	①③	
	29	短頸壺	北	132-E15・J14・K3		19.4			黒褐	黒褐	①③	
	30	短頸壺	南	86-T10	SF4418	18.4			暗赤褐	暗赤褐	①③	
	31	短頸壺	南	86-T10, 87-U18	SF4418	20.9			黒褐	黒褐	①④	
	32	短頸壺	北	132-H15					黒褐	黒褐	①③	
	33	短頸壺	北	132-H15					黒褐	黒褐	①④	
	34	短頸壺	南	86-?					褐灰	褐灰	①③	ヘラ記号
	35	短頸壺	北	132-F13					黄橙	黄橙	①③	
	36	短頸壺	南	90-?					黒褐	黄灰	①④	
	37	短頸壺	北	132-C10					黒褐	黒褐	①③	ヘラ記号「木」
	38	短頸壺	北	132-G15		11.5			褐灰	褐灰	①③	
	39	短頸壺	北	132-F15		12.0			灰	灰緑	①③	
	40	短頸壺	南	90-R3・R4		17.0			黒褐	黒褐	①④	
	41	短頸壺	南	86-T10, 90-?	SF4418	17.0			黒褐	黒褐	①④	
	42	短頸壺	北	132-D16・D16・E11・F15		15.3			褐	褐	①④	ヘラ記号
	43	短頸壺	北	132-D16・F15・M13		15.0	22.2	8.4	褐	灰	①③	ヘラ記号
	44	短頸壺	南	86-T10	SF4418	15.4	28.2	14.5	灰褐	灰褐	①③	突帯付
	45	短頸壺	南	86-T10	SF4418	20.0			黒褐	褐灰	①③	突帯付、ヘラ記号
25	46	壺	南	86-T10	SF4418	14.0			黒褐	黒褐	①③	
	47	壺	南	86-T10		14.4			黒褐	灰緑	①③	
	48	壺	北	132-D11		16.6			黄灰	暗灰	①③	
	49	壺	南	86-T10・90-S4	SF4418	18.0			褐灰	褐灰	①③	
	50	壺	北	132-H13		15.0			黒褐	黒褐	①④	
	51	壺	北	135-O12		14.2			黒褐	黒褐	②③	
	52	壺	北	132-F8・F9		15.2			褐灰	暗褐	①③	
	53	壺	南	86-T10・S11	SF4418	15.6			黒褐	黒褐	①③	
	54	壺	南	86-T10	SF4418	13.0			黒褐	褐灰	②④	
	55	壺	北	132-J14・K13・L13		14.4			黄灰	黄灰	①③	
	56	壺	南	86-?		16.7			黒褐	褐灰	①③	

区	番号	器種	出土地点 地区	出土地点 次数・層位	出土地点 遺構／層位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	色調 内面	色調 外面	胎土	備考
25	57	壺	南	86-K5・L10, 90 ?		19.6			褐灰	褐灰	①④	
	58	壺	北	132-K13・M13		12.4			黒褐	灰黄	①②	
	59	壺	北	132-D10		15.4			赤褐	暗赤褐	①②	
	60	壺	北	132-F15・G8・H9・K13		15.8			褐灰	灰緑	①②	ヘラ記号
	61	壺	北	132-F15・J14・K13・K14		16.6			黒褐	黒褐	①③	ヘラ記号
	62	壺	南	86 T10	SF4418	15.8			黄灰	黄灰	①③	
	63	壺	北	135-N13・O12・P12		17.4			褐灰	灰緑	①④	
	64	壺	南・北	86-O7・O8, 87 ?・90 ?, 132-C8・C10・E5・D6	SF4419	16.5	35.3	15.2	橙	灰褐	①③	ヘラ記号
26	65	壺	北	132-G8	SX6427	13.2			暗褐	褐灰	①④	
	66	壺	南	86 T10	SF4418	4.8			黒褐	暗褐	①④	
	67	壺	北	132-D12		6.0			赤褐	暗赤褐	①②	
	68	壺	北	132-C10・L8		3.6			黒褐	黒褐	①③	
	69	壺	北	132 H9		3.6			黒褐	黒褐	②④	
	70	壺	北	132-F6		15.0			灰褐	黄灰	①③	
	71	壺	北	132-H4・J14		17.8			暗灰黄	黒褐	①③	
	72	壺	南	90-Q3・R4		3.8			褐灰	黒褐	②④	
	73	壺	北	135-T8・Q8		4.8			褐灰	褐灰	②④	
	74	壺	北	132 U5・L13		6.0			褐灰	黒褐	①④	
	75	壺	南	86-P5		6.4			褐灰	褐灰	①②	
	76	壺	北	132-H9	SK6436	17.0			暗褐	暗褐	①②	
	77	壺	南	86-T10	SF4418	16.0			黄灰	暗灰黄	①④	
	78	壺	南	86 O6・P5・P6		16.4			褐灰	褐灰	①②	
	79	壺	北	132-H8・H9	SK6435・SK6436	14.9			黒褐	黒褐	②④	
	80	壺	北	132-H9・H10・K14	SK6436	14.6			褐灰	暗褐	①②	
	81	壺	北	132 L7・L8・H8・H9・K13	SD6421・SK6435・SK6436	13.3	32.4	13.8	褐灰	暗褐	①②	ヘラ記号
27	82	壺	北	135-Q8・R5		21.0			黒褐	黄灰	②④	
	83	壺	北	132-H8・H9	SK6435	23.2			黒褐	黒褐	①④	
	84	壺	南	86-T10	SF4418	27.8			褐灰	褐灰	②④	
	85	壺	北	132-D9・D11	SD6421	16.2			褐灰	褐灰	①②	
	86	壺	北	132-F9・H4		17.0			褐灰	褐灰	②③	
	87	壺	北	132 L14・N10, 135-O12・P12		24.1			褐灰	灰緑	①②	
	88	壺	南	86-N6		19.8						
	89	壺	北	132 D13・D15・G16		17.8			黒褐	黒褐	①②	
	90	壺	北	132 F15・G8・H8・H9・J14・O7		16.0			暗褐	黄灰	①②	
	91	壺	南	86-T10, 90-?	SF4418	18.4			暗褐	灰黄	①④	
	92	壺	南	86-T10	SF4418	15.4	44.5	18.0				
	93	壺	北	132-D7・H3・J4・K6・K10・M8・N10, 135-R11・S11 T1・Y4 他				15.8	赤褐	暗褐	①②	
28	94	壺	北	132-J13・M8, 135-M12・S8		5.0	12.3	7.9	灰褐	灰褐	①③	ヘラ記号
	95	壺	南	86-O5・O7・O8・P6	SF4419	6.2	11.8	8.0	灰褐	灰褐	①③	ヘラ記号
	96	壺	北	132-G15・H8・I9	SK6436			8.0	褐灰	褐灰	①③	
	97	壺	南	86-L8		9.8			暗褐	黒褐	①②	
	98	壺	南	86-O6・T10	SF4418	11.1			褐灰	黒褐	①②	
	99	壺	南	86-L10		10.4			褐灰	赤褐	①④	ヘラ記号
	100	壺	北	132 L13・H4・J14・K13・R6		9.1	14.3	8.8	褐灰	黒褐	①②	
	101	壺	南	86 K6・K7・K8・L7				9.1	褐灰	褐灰	①③	
	102	壺	南	86-R6		10.8			褐灰	黒褐	①④	ヘラ記号
	103	壺	北	132-D11		10.4			暗褐	褐灰	①④	ヘラ記号
	104	壺	南	86-K7・M5		10.0			黄灰	黒褐	①②	
	105	壺	南・北	86-T10, 132-F15	SF4418	9.9	16.8	13.0	赤褐	灰黄褐	①③	
	106	壺	南	86 J16		11.2			灰褐	灰褐	①③	
	107	壺	北	132-G15・H11・J14		11.2			褐灰	褐灰	②④	
	108	壺	北	132-L4		9.2			褐灰	褐灰	①④	ヘラ記号
	109	壺	南	86-T10, 90-?	SF4418	10.5	17.7	12.4	褐灰	褐灰	①④	ヘラ記号
	110	壺	北	132-F7		10.4			黒褐	黒	②④	ヘラ記号
	111	壺	南	90 L4・M4		11.2	19.5	13.0	暗褐	黄灰	①③	
	112	壺	北	132-E13・I9・I14・J14・L4		11.0	20.3	12.0	赤褐	赤褐	①②	ヘラ記号
	113	壺	北	135-O11・O12					褐灰	黒褐	①④	ヘラ記号
	114	壺	北	132-F15・G16・H13・J14・K13・K14				11.6	褐灰	黒褐	①④	ヘラ記号
	115	壺	北	132-F15・G15・H16				11.0	褐灰	黄灰	①③	
29	116	壺	北	132-L4		11.0			暗赤褐	暗赤褐	①②	
	117	壺	北	132-H14・H15		10.6			黒褐	黒褐	①④	
	118	壺	南・北	90 L13・U15, 132-D11		14.0			灰褐	暗灰黄	①④	ヘラ記号
	119	壺	南	86-O5・O7・O8, 90-P4・R4	SF4419				黒褐	黒褐	①④	ヘラ記号
	120	壺	南・北	86-S9, 87-F13, 132-H8		13.6			褐灰	黒褐	①②	

図	番号	器種	出土地点 地区	出土地点 次数－出土区	出土地点 遺構／層位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	色調 内面	色調 外面	胎土	備考
29	121	壺	北	135 86-T11-U1	SK6484	13.0			赤褐	暗褐	①②	ヘラ記号
	122	鉢	北	132-G15		14.8			暗褐色	黄灰	①②	
	123	壺	北	132-H14		11.6			褐灰	褐灰	②①	
	124	壺	南	86-K8-M7		12.2			暗褐色	黄灰	①②	
	125	壺	南	86-N6, 90-P5		16.0			黒褐	黒褐	①②	
	126	壺	北	132 J15-K13		12.8			橙	褐灰	①②	
	127	壺	北	132 D15-F15-H8-J4-J14-K13	SD6448			13.6	暗赤褐	黒褐	①②	ヘラ記号
	128	鉢	北	132-O15		5.1			褐灰	黒褐	①②	
	129	鉢	南	86-T10	SP4418	5.6			褐灰	黒褐	①②	
	130	四角壺	南	86-K6-K7-L5-L6-M5-N7-O7-P7-T10, 90-?	SP4418	14.3	23.6	14.0	褐灰	褐灰	①②	
	131	器台	南	86-K6-K7-X6				7.7	橙	橙	①②	
	132	茶人	南	86-O8	SP4419			3.0	黒褐	黒褐	①②	
30	133	壺	南	86-T10	SP4418				褐灰	灰黄褐	①②	ヘラ記号
	134	壺	南	86-L6					褐灰	褐灰	①②	ヘラ記号
	135	壺	北	132-I19					褐灰	黒褐	①②	ヘラ記号
	136	壺	南	86-L6					褐灰	黒褐	①②	ヘラ記号
	137	壺	南	86-P6					褐灰	褐灰	①②	ヘラ記号
	138	壺	北	132-I18-I19	SK6435				灰灰	黒褐	①②	ヘラ記号
	139	壺	南	90-P3-Q3-R4					灰黄褐	暗褐	①②	ヘラ記号
	140	壺	南	90-R3-R4					褐灰	黒褐	①②	ヘラ記号
	141	壺	北	132-X4-I14-K13					褐灰	褐灰	①②	ヘラ記号？
	142	壺	北	132-L12-L4				15.4	褐灰	褐灰	①②	
	143	壺	北	132 J15-J14-K13-K14				14.8	褐灰	褐灰	①②	
	144	壺	北	132-K9, 135-N12				15.4	暗赤褐	暗赤褐	①②	
	145	壺	南	86-X5-K7				12.4	暗赤褐	黒褐	①②	
	146	壺	南	86-T10	SP4418			16.8	黒褐	褐灰	①②	
	147	壺	北	132-D12-L9-M8				18.4	灰褐	赤褐	①④	
	148	鉢	北	132 I11-I14-X13-L13		8.0	15.8	12.5	灰黄褐	灰黄褐	①③	三足
	149	鉢	南・北	86-L5, 90-R4, 132-F15-H15-M13		18.6	18.2	16.4	黒褐	黒褐	①③	矢羽文
	150	鉢	南	86 T10	SP4418	20.0	19.7	14.0	暗赤褐	暗赤褐	①③	ヘラ記号
31	151	鉢	南・北	86-T10-N10-O8, 132 E8		20.4	17.5	15.6	暗赤褐	暗赤褐	①③	
	152	鉢	南	86-J8, 90 T3		20.6	16.9	14.2	褐灰	褐灰	②①	
	153	鉢	北	132-E16-F13-G14-G15-H14		20.2	17.6	15.0	赤褐	赤褐	①②	
	154	鉢	北	132-P4, 135-P12		20.8	18.0	12.5	灰褐	灰褐	①②	
	155	鉢	北	132-D8-K6-L4-L5-M4-		19.8	18.9	16.6	黒褐	黒褐	①②	
	156	鉢	北	132-O4-P4-P6-P8		20.4	18.8	16.1	褐灰	褐灰	①②	
	157	鉢	南・北	86-T10-K5-U19, 90-? 132-D7-F6-H8-G13 135 S4	SP4418-SK6436	22.2	20.2	17.0	橙	橙	①②	
	158	鉢	南	86-J11-P6				15.8	暗赤褐	暗赤褐	①②	
32	159	鉢	北	132-H16		21.4	9.0	10.4	褐灰	赤褐	①②	摺目8本
	160	鉢	北	135-V7	SK6491	24.0	8.9	13.0	赤褐	赤褐	①②	摺目10本
	161	鉢	南	86-N6		24.0	8.3	11.0	灰	灰	②④	摺目10本
	162	鉢	北	132-F15		24.1	7.9	12.2	黒褐	黒褐	①③	摺目10本
	163	鉢	北	132-K13-K14		24.2			褐灰	灰褐	①③	摺目9本
	164	鉢	北	135-S11					橙	橙	①③	摺目11本
	165	鉢	北	132 ?					灰褐	灰褐	①③	摺目10本
	166	鉢	北	132-E5-H7					橙	灰褐	①③	摺目8本
	167	鉢	南	90-?					灰褐	灰褐	①②	摺目10本
	168	鉢	北	132-P4-P5, 135-R6-S11		24.4	9.2	12.0	褐	褐	①③	摺目9本
	169	鉢	北	132 D10-		25.0	8.7	13.2	黒褐	暗褐	①③	摺目8本
	170	鉢	北	132-K4	SD6432	24.4	7.9	11.0	赤褐	赤褐	①③	摺目10本
	171	鉢	南・北	86-T10, 132-		25.2	8.5	12.8	黒褐	黒褐	①③	摺目7本
	172	鉢	北	132-F15		25.0	8.0	14.8	黒褐	暗褐	①④	摺目8本
33	173	鉢	南	86-L5		27.0	9.2	13.0	暗褐	暗褐	②④	摺目11本
	174	鉢	南	90-?		26.6	9.5	12.8	灰白	灰白	①③	摺目8本
	175	鉢	南	86-K7		30.8			褐	褐	①③	摺目9本
	176	鉢	北	132-M8		29.4	11.7	3.4	灰褐	灰褐	①③	摺目9本
	177	鉢	北	132-H14-K9		27.0			灰褐	灰褐	①②	摺目9本
	178	鉢	北	132-G14					黒褐	黒褐	②④	摺目11本
	179	鉢	南	90 ?					暗褐	暗褐	①③	摺目10本
	180	鉢	南	90-?					褐灰	暗赤褐	②③	摺目11本
	181	鉢	北	132-G14					褐灰	褐灰	②④	摺目11本
	182	鉢	南	86-P6		35.9			橙	橙	①②	摺目9本
	183	鉢	南	90-?		34.2	12.4	16.4	灰褐	暗褐	①④	摺目9本
	184	鉢	北	132 E4		33.0	11.9	15.2	浅黄橙	浅黄橙	①③	摺目9本
34	185	鉢	北	132-I14, 135-U10-U11-		36.6	18.3	14.6	明赤褐	明赤褐	①③	摺目9本
	186	鉢	北	132-D8-M4-M5					黄褐	灰黄褐	①②	摺目9本

図	番号	器種	出土地点 地区	次数・区・土区	遺構／層位	法量 口径	器高	底径	色調 内面	外面	胎土	備考
34	187	擂鉢	北	135-T1					灰褐	灰褐	①②	擂目10本
	188	擂鉢	北	132-H13・H13・J13・G1		41.0	14.5	16.4	灰黄褐	灰黄褐	②④	擂目9本
	189	擂鉢	南	86-T10	SF4418	41.8			黄橙	黄橙	①③	擂目11本
	190	擂鉢	北	135-U10・W10		38.2			褐灰	灰褐	①②	擂目9本
	191	擂鉢	南・北	90-7, 132-H14		39.2			黄褐	赤褐	①③	擂目9本
	192	擂鉢	北	132-M13					黄橙	黄橙	①③	擂目9本
	193	擂鉢	北	132-M5					褐	褐	①③	擂目9本
	194	擂鉢	北	132-M11・N5, 135-P10					暗黒	暗褐	②④	擂山11本
35	195	擂鉢	北	132-L4		34.0	10.8	15.0	褐	褐	②④	擂目10本
	196	擂鉢	南	88-K12・L12		34.4	11.0	13.1	赤褐	赤褐	①③	擂目9本
	197	擂鉢	南	90-M4					灰褐	灰褐	①③	擂目9本
	198	擂鉢	南	86-O8・P8・T10	SF44:8・SF44:9	43.6	16.1	16.0	褐灰	褐灰	②④	擂目11本
	199	擂鉢	南	86-M6・M7・M8・N8		40.6			褐灰	褐灰	②④	擂目9本
	200	擂鉢	南	86-M6, 90-L4		45.4			橙	橙	①③	擂山8本
	201	擂鉢	南	90-7					橙	橙	①③	擂目9本
	202	擂鉢	北	132-F15					褐灰	褐灰	①③	擂目10本
	203	擂鉢	北	132-L4・O5, 135-N5	SD6443				褐	褐	①③	擂目10本以上
	204	擂鉢	北	135-O11・R9・T5	SK6488				黒褐	褐灰	②④	擂目10本
36	205	鉢水	南	86-K5		10.8	8.5	8.0	灰褐	灰褐	①③	
	206	鉢水	南	86-7, 90-P4		10.2	8.8	9.0	灰	褐灰	①③	
	207	鉢水	南	86-O6・O6・P6・T10	SF4418	13.6	8.1	8.8	黒褐	黒褐	①②	
	208	鉢	北	132-K13		14.4	5.8	10.6	暗褐	暗褐	①②	見込みに円弧
	209	鉢	北	132-G8・K13		15.2	5.3	12.8	灰	灰	②④	
	210	鉢	北	132-K4		18.4	6.1	11.2	暗緑灰	暗赤褐	①④	底にヘラ記号
	211	鉢	南・北	86-T10, 132-D9・F13	SF4418	14.6	6.4	10.9	暗赤褐	暗赤褐	①③	
	212	鉢	北	132-H8・H4・J14	SK6436	15.1	7.1	11.8	暗褐	暗褐	②④	体部に弧状の線
	213	鉢	南	86-T10	SF4418	14.5	6.6	11.4	黒褐	黒褐	①③	
	214	鉢	北	132-J14		17.4	5.4	10.4	暗赤褐	暗赤褐	①③	
	215	鉢	北	132-H14・J14・K13		16.4	7.1	10.3	黒褐	黒褐	②③	
	216	鉢	南・北	86-T10, 132-H15	SF4418	17.4	6.2	11.8	褐灰	黒褐	②④	
	217	鉢	南	86-S9・T10	SF4418	15.4	6.3	11.0	褐灰	褐灰	①③	見込みに条線
	218	鉢	南	86-L5・N5		18.2	6.7	11.6	赤褐	赤褐	①②	見込みに円形、底にヘラ記号
	219	鉢	南	86-T10	SF4418	19.2	7.3	11.3	褐灰	黒褐	①③	見込みに円形
	220	鉢	北	132-H8・H4・J14	SK6436	18.1	7.1	11.4	灰	褐灰	②④	ヘラ記号
	221	鉢	南	90-L3		20.8	7.3	11.8	灰黄褐	灰黄褐	②④	
	222	鉢	南	86-Q12, 90-7		21.8	7.3	12.8	灰	灰	②④	見込みに文字刻む
	223	鉢	南	86-O8	SF4419	34.6	6.4	17.0	黒褐	黒褐	②④	
37	224	鉢	北	132-D11・T8, 135-O9・S8・T5・T11・L4・N8・W4・Z4	SD6443・SK6488	25.6	14.4	15.0	赤褐	赤褐	①③	
	225	鉢	北	132-J14・K14・M8・M12		32.0	13.7	15.8	褐灰	褐灰	①③	
	226	鉢	北	132-C15・K13・L4・L5・M4・M12, 135-O13		21.0	9.3	9.6	橙	赤褐	②④	底部に円形の孔
	227	鉢蓋	北	132-D7	SD6421	16.6	2.1	15.0	灰	黒褐	②④	
	228	鉢蓋	北	132-H3		18.2	3.9	16.0	灰	黒褐	②④	
	229	紡錘	北	132-L13					灰褐	灰褐	①③	車輪径14.2、厚2.6cm
	230	鉢	南	88-K7・M5K8・L8・M6		41.8	19.1	23.8	褐灰	褐灰	①③	
	231	鉢	南	86-K8・L6		61.8	13.2	26.0	褐灰	褐灰	①②	
	232	鉢	南	86-T10	SF4418	63.4	15.7	28.4	褐灰	赤褐	①②	

表7 土師質土器観察表

※胎土の①～④は表6の下記参照。

図	番号	器種	分類	出土地点 地区	次数・出土区	遺構／層位	法量 口径	器高	底径	色調 内面	外面	胎土	備考
38	233	皿	C3類	南	87-Q15	トレンチ下層	8.6	1.9	3.6	橙	橙	①	タール痕
	234	皿	C3類	南	87-Q13	トレンチ下層	9.0	1.8	3.8	黄橙	黄橙	①	底部穿孔
	235	皿	C3類	南	87-Q15	トレンチ下層	9.0	1.7	3.4	橙	橙	①	タール痕
	236	皿	C3類	南	87-Q15	トレンチ下層	9.2	2.7	4.2	橙	橙	①	
	237	皿	C3類	南	87-Q16	トレンチ下層	9.6	1.9	3.6	橙	橙	①	タール痕
	238	皿	D2類	南	87-Q13	トレンチ下層	11.2	2.2	5.6	黄橙	黄橙	①	タール痕
	239	皿	D2類	南	87-Q15	トレンチ下層	11.2	1.9	6.4	橙	橙	①	タール痕
	240	皿	D2類	南	87-Q16	トレンチ下層	11.5	2.0	5.6	橙	橙	①	
	241	皿	D2類	南	87-Q15	トレンチ下層	12.0	2.3	6.0	橙	橙	①	タール痕
	242	皿	D2類	南	87-Q15	トレンチ下層	12.5	2.0	7.0	橙	橙	①	タール痕
	243	皿	B1類	南	88-N5	トレンチ下層	6.1	1.5	3.0	黄橙	黄橙	①	
	244	皿	B1類	南	86-P5	トレンチ下層	6.5	2.0	2.2	黄橙	黄橙	①	赤彩痕
	245	皿	B1類	南	86-T11	SF4418	6.3	1.7	3.5	黄橙	黒褐	①	

図	番号	器種	分類	出土地点 地区	次数・出土区	遺構／層位	法量 口径	器高	底径	色調 内面	外面	胎土	備考
	246	皿	H1類	南	86-T11	SF4418	6.9	1.7	5.2	橙	橙	①	タール痕
	247	皿	H1類	南	86-T11	SF4418	6.2	1.4	3.4	橙	黄橙	①	布目痕
	248	皿	C3類	南	86-T11	SF4418	8.8	2.0	4.3	黒褐	暗灰	①	
	249	杯		南	86-T11	SF4418	5.8			淡黄	黄橙	①	
	250	皿	C1類	南	86-T8	SF4419	7.2	1.8	3.6	黄橙	黄橙	①	
	251	皿	D2類	南	86-L5		11.4	2.1	6.5	橙	橙	①	
	252	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.0	2.1	5.4	橙	橙	①	
	253	皿	C3類	北	132-I9	SX6440(一括)	9.8	2.6	4.8	橙	橙	①	
	254	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	9.7	2.5	5.0	橙	橙	①	
	255	皿	C3類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.0	2.4	5.0	橙	橙	①	
	256	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	9.8	2.1	4.8	黄橙	橙	①	
	257	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.1	2.4	5.2	黄橙	橙	①	
	258	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.0	2.4	4.8	橙	橙	①	
	259	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.0	2.4	4.9	橙	橙	①	
	260	皿	D1類	北	132-I9	SX6440(一括)	10.2	2.2	5.0	橙	橙	①	
	261	皿	D1類	北	132-O15	SD6448	9.8	2.2	5.3	橙	橙	①R	
	262	皿	C3類	北	132-M8	SX6433	8.7	2.2	3.8	浅黄橙	浅黄橙	①	
	263	皿	C3類	北	132-M8	SX6433	9.0	2.0	4.1	黄橙	黄橙	①	タール痕
	264	皿	C3類	北	132-M8	SX6433	9.0	1.8	5.6	橙	橙	①R	
	265	皿	D2類	北	132-M8	SX6433	12.4	2.4	6.8	黄橙	黄橙	①	タール痕
	266	皿	D3類	北	132-M8	SX6433	14.0	2.4	8.5	灰白	灰白	①	
39	267	皿	H1類	北	132-C15	炭焼一層	6.2	1.8	2.8	赤褐	赤褐	①R	タール痕
	268	皿	H1類	北	132-H15	炭焼二層	7.5	1.8	4.2	黄橙	黄橙	①	タール痕
	269	皿	C3類	北	132-F15	炭焼二層	8.7	2.1	4.3	橙	橙	①	タール痕
	270	皿	D1類	北	132-G15	炭焼二層	10.6	2.0	4.9	赤褐	赤褐	①R	
	271	皿	D2類	北	132-G15	炭焼二層	11.7	2.3	5.3	橙	橙	①R	
	272	皿	D2類	北	132-H15	炭焼二層	12.2	2.2	6.1	浅黄橙	浅黄橙	①	
	273	皿	D1類	北	132-G15	炭焼上層	10.0	2.6	5.2	橙	橙	①R	タール痕、底部穿孔
	274	皿	D2類	北	132-I14	炭焼二層	12.8	2.8	7.0	橙	橙	①	タール痕、赤色顔料
	275	皿	C3類	北	135-O8	トレンチ下層	9.3	2.1	4.0	黄橙	黄橙	①	タール痕
	276	皿	C3類	北	135-O8	トレンチ下層	9.3	2.1	4.1	黄橙	黄橙	①	タール痕
	277	皿	C3類	北	135-O8	トレンチ下層	9.5	1.9	4.0	黄橙	黄橙	①	タール痕
	278	皿	C3類	北	135-O8	トレンチ下層	9.4	1.9	4.0	黄橙	黄橙	①	タール痕
	279	皿	C3類	北	135-O8	トレンチ下層	9.4	2.1	4.2	黄橙	黄橙	①	タール痕
	280	皿	D2類	北	135-O8	トレンチ下層	12.0	1.9	6.2	橙	橙	①	タール痕
	281	皿	D2類	北	135-P11	SK6493	10.8	2.8	5.9	橙	橙	①	
	282	皿	D2類	北	135-P11	SK6493	11.2	2.0	6.6	橙	橙	①	
	283	皿	D2類	北	135-P11	SK6493	12.4	2.4	7.1	橙	橙	①	
	284	皿	D2類	北	135-P11	SK6493	12.6	2.2	8.0	橙	橙	①	
	285	皿	H1類	北	135-V4	SD6500上層	6.2	2.0	2.4	赤褐	赤褐	①R	タール痕
	286	皿	H1類	北	135-V4	SD6500上層	6.8	2.0	4.3	橙	橙	①	
	287	皿	C3類	北	135-M13	SS6494下層	8.9	2.1	4.2	橙	橙	①R	
	288	皿	C3類	北	135-Q6	SK6501	8.6	2.3	4.5	橙	橙	①	
	289	皿	C3類	北	135-Q6	SK6501	8.8	2.2	4.0	橙	橙	①	
	290	鉢	D1類	北	135-T5	SK6488	10.1	2.5	5.7	赤褐	赤褐	①	
	291	鉢	C3類	北	135-R6	SK6484	8.8	2.7	4.3	赤黒	赤黒	①	火ぶくれ状
	292	鉢	C3類	北	135-R6	SK6484	8.8	2.5	4.8	赤褐	赤褐	①	火ぶくれ状
	293	鉢	C3類	北	135-R6	SK6484	9.5	3.6		赤黒	赤褐	①	火ぶくれ状
	294	壺		北	135-R6	SK6484	6.2	7.5	7.2	赤褐	赤褐	①R	被熱で歪む
	295	土師		北	132-G16	炭焼上層	径2.7	長6.3		橙	橙	①	孔穿径0.4cm

※ 胎土にRの付くものは、赤色鉱物が目立つ。

表8 瀬戸・美濃焼観察表

※備考欄の①～④は下記注参照。

図	番号	種類	器種	時期	出土地点 地区	調査次数・出土区	遺構／層	法量 口径	器高	底径	釉調 鉄釉	施成	胎土	備考
40	296	鉄瓶	天目碗	後期	南	86-表土		12.2	6.9	3.8	黒褐	良	②	内反り高台
	297	鉄瓶	天目碗	後期	南	86-T10	SF4418	11.6			暗灰	良	①	二次被熱痕
	298	鉄瓶	天目碗	大1	北	132-J13・J14・K12		10.2	6.3	4.0	黒	良	①	削出輪高台
	299	鉄釉	天目碗	大1	南	86-T10	SF4418	11.6	6.7	3.8	黒	良	①	削出輪高台、二次被熱痕
	300	鉄釉	天目碗	大1	北	132-K13・K14		12.1			灰	良	①	二次被熱痕
	301	鉄釉	天目碗	大1	北	135-W10		12.2	6.2	4.6	黒褐	良	①	内反り高台
	302	鉄釉	天目碗	大1	北	132-J14		12.7	6.0	3.7	黒褐	良	①	削出輪高台
	303	鉄釉	天目碗	大1	南	86-9		12.4			暗灰	良	①	
	304	鉄釉	天目碗	大1	南	86-M6・N6		12.2			黒	良	①	
	305	鉄釉	天目碗	大1	南	90-T3		11.1			黒褐	良	①	
	306	鉄釉	天目碗	大2	北	132-G15		11.6	6.4	4.0	炭黒	良	①	内反り高台

区	番号	種類	器種	時期	出土地点 地区	出土地点 遺構数・出土区	遺構／層	法量 口径	法量 胴高	法量 底径	胎土	焼成	加工	備考
40	307	須恵	天王鉢	大2	南	86-O4・Q3・Q4		11.8	6.1	4.2	灰黄	良	①	内反り高台。高台内部に目痕3
	308	須恵	天王鉢	大2	北	132-D16	SD6448	12.2	6.5	4.2	暗灰	良	①	内反り高台。一次被熱痕
	309	須恵	天王鉢	大2	南	86-M9・S9		12.4	6.8	4.7	黒褐	良	①	内反り高台。高台内部に目痕3
	310	須恵	天王鉢	大2	北	132-H11・H14		12.1	7.0	4.5	黒褐	良	①	内反り高台。高台内部に目痕4
	311	須恵	天王鉢	大2	北	132-I8・E13・F15・H13		12.0	6.3	4.2	黒褐	良	①	内反り高台
	312	須恵	天王鉢	大2	北	132-N13・P12		11.8			黒	良	①	
	313	須恵	天王鉢	大2	南	86-L6・M5・M6・T10	SF4418	11.8			黒褐	良	①	
	314	須恵	天王鉢	大2	北	132-F16・I18		11.8			黒褐	良	①	
	315	須恵	天王鉢	大2	北	132-D8	SD4421	12.5			黒	良	①	二次被熱痕
	316	須恵	天王鉢	大2	南	86-L5・P7		12.2			灰黄	良	①	
	317	須恵	天王鉢	大2	南	86 Q12		12.8			黒	良	②	
	318	鉄釉	天目碗	大2	北	132-H13・H15・H16		12.0			灰黄	良	①	
	319	鉄釉	天目碗	大2	北	132-E7		12.8			黒	良	①	
	320	鉄釉	天目碗	大2	南	86-T10	SF4418	11.8			黒褐	良	①	
	321	鉄釉	天目碗	大2	北	132-G10・H13・H14		12.1			暗灰	良	①	二次被熱痕
	322	鉄釉	天目碗	大3	南	86-O6・O8・S5		11.8	6.6	3.0	黒褐	良	①	内反り高台
41	323	鉄釉	天目碗	大3	南	86-N5		11.2			灰褐	良	①	
	324	鉄釉	天目碗	大3	北	132-H15		11.2			黒褐	良	①	
	325	鉄釉	天目碗	大3	北	132-H14・H15		12.9			黒褐	良	①	
	326	鉄釉	天目碗	大3	北	132-G14・H14		10.8			暗褐	良	①	
	327	鉄釉	天目碗	大4	北	132 H7		11.0			黒褐	良	①	
	328	鉄釉	天目碗	大12	北	135-Y4				2.5	黒褐	良	①	内反り高台。高台内部に目痕3。見込みに刷付痕
	329	鉄釉	天目碗	大1	北	132 H8	SK6436	8.2	4.3	3.2	黒褐	良	①	削出輪高台。二次被熱痕
	330	鉄釉	天目碗	大1	南	86 T10	SF4418	8.2	4.4	2.8	灰	良	①	削出輪高台。二次被熱痕
	331	鉄釉	天目碗	大1	北	132 H15・J14		8.2	4.7	2.8	暗赤	良	①	削出輪高台
	332	鉄釉	天目碗	大2	南	86 T10	SF4418	8.2			黒褐	良	①	
	333	鉄釉	天目碗	大2	南	86 K7		8.6			暗褐	良	①	
	334	鉄釉	天目碗	大2	北	132 L12		8.6			黒褐	良	①	
	335	鉄釉	天目碗	大2	南	86-P4・Q3		8.4			黒褐	良	①	二次被熱痕
	336	鉄釉	小杯	大1	南	86-P5		5.3	2.0	2.2	黒褐	良	①	削出輪高台
	337	鉄釉	小杯	大2	南	86-Y		5.6			黒褐	良	①	
	338	鉄釉	平碗	大1	南	86-O3, 90 H4		18.8	6.6	6.8	黄灰	良	①	二次被熱痕
	339	鉄釉	平碗	大1	南	86-Z		16.6			暗褐	良	①	
	340	黄釉	平碗	大3	北	132-M7		14.8			浅黄	良	①	
	341	鉄釉	片口鉢	大12	北	132-I9		12.0	4.9	7.4	黒褐	良	①	削出輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕3
	342	鉄釉	徳利	大2	北	132-J13		10.2	2.1	6.6	黒褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	343	鉄釉	徳利	大2	南	86-W8・X3		10.2	2.7	5.8	暗褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	344	鉄釉	徳利	大2	南	86-Y11		10.2	2.7	5.8	暗褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	345	鉄釉	徳利	大2	北	132-E14		10.5	2.6	5.2	暗褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	346	鉄釉	徳利	大2	北	135-?		10.6	2.7	5.4	黒褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	347	鉄釉	徳利	大2	南	86-E15		10.7	2.6	6.4	黒褐	良	①	貼付輪高台。高台内部に輪ナデ痕。見込みに目痕
	348	鉄釉	壺	大	南	86-T10	SF4418	9.6	6.9	10.6	黒褐	良	①	
	349	鉄釉	双耳壺	後	北	132-H15・H14・H15・J13・J14		10.6			黒褐	良	①	横耳欠損
	350	鉄釉	双耳壺	後	北	132-H15・H14・H14・J14・K13・K14				10.0	黒褐	良	①	底部外面周辺露胎。底部外面に回転糸切り痕。見込みに目痕。二次被熱痕
	351	鉄釉	双耳壺	後IV	北	135-O13・P12・P13・Q11・Q12・T11・U1		10.4	13.7	8.4	黒褐	良	①	底部外面周辺露胎。底部外面に回転糸切り痕。見込みに目痕
	352	鉄釉	四耳壺	後	北	132 H16・H15・J14・L13・O15, 135-M13				8.0	暗灰	良	①	底部外面に回転糸切り痕。口縁内面鉄釉。体部内面鉄釉
42	353	鉄釉	壺	大	南	86-T10	SF4418	11.2	43.0	15.7	黒褐	良		底部外面周辺露胎
	354	鉄釉	壺	大	南	86 M5, 90-L3・P6 P8・Q3・R4		12.6	50.0	18.8	灰	良		底部外面周辺露胎
	355	鉄釉	壺	大	南	86-T10	SF4418			14.0	黒褐	良	①	底部外面周辺。体部内面鉄釉
	356	鉄釉	壺	大	南	86-T10, 90-R3	SF4418			12.2	黒褐	良	①	底部外面周辺。体部内面鉄釉
	357	鉄釉	壺	大	南	86 T10	SF4418	23.8	21.9	21.4	暗灰	良	①	二次被熱痕
	358	鉄釉	陶型容器	大	北	132-F15・G16		11.0			黒褐	良	①	口縁内面鉄釉。体部内面鉄釉
	359	鉄釉	陶型容器	大	南	86-T10	SF4418	11.4			灰	良	①	外内全面鉄釉
	360	鉄釉	陶型容器	大	北	132-K8		13.8			黄灰	良	①	口縁内外鉄釉。体部内外鉄釉
	361	鉄釉	瓶	大	南	86 N6・O6・P6・S6 90-P3・P4・Q3・Q4		6.6	15.9	8.4	黒褐	良	①	削出輪高台。貼耳。底部外面周辺露胎。
	362	鉄釉	瓶	大	南	86-L5・L7・M7		6.5						方形の耳
	363	鉄釉	仏華瓶	大	北	132-H4				5.0	黒褐	良	①	底部外面周辺露胎。底部外面に回転糸切り痕

図	番号	種類	器種	時期	出土地点 地区	調査次数・出土区	遺構／層	法量 口径	器高	底径	調整 底部糸	焼成	胎土	備考
42	364	鉄釉	文様茶入	大23	北	133-V7	SK6491	3.2	6.4	4.4	糸切	良	①	底部外面に同転を切り痕
	365	鉄釉	大海茶入	大23	南	86 -8・M6			5.7	6.0	灰黄	良	①	底部外面に回転糸切り痕 外面かき水調整。
	366	鉄釉	大海茶入	大23	北	133-V7	SK6491	4.9	5.8	5.2	黒褐	良	①	底部外面周辺露胎
	367	鉄釉	水滴	大	北	132-I14		2.4	2.2	3.2	黒褐	良	①	底部外面周辺露胎。
	368	鉄釉	壺	大	北	132-C13		9.3	2.2	7.0	黒褐	良	①	底部外面に回転糸切り痕 内面露胎
	369	鉄釉	壺	大	北	132 I14・K13		2.6	4.2	1.6	黒褐	良	①	内面露胎
	370	鉄釉	壺	大	北	132-D15・G15		9.4		6.9	黒褐	良	①	内面露胎
	371	鉄釉	壺	大	南	86-J.6・L7・M6		9.8		7.0	黒褐	良	①	内面露胎
43	372	灰釉	丸皿	大1	北	132-F15・I-14		10.8			淡黄	良	①	
	373	灰釉	平鉢	後II	北	132-D6		13.8			淡黄	良	①	体部下半露胎
	374	灰釉	平鉢	後II	南	86-T.9	SF4418	15.4			淡黄	良	①	体部下半露胎
	375	灰釉	緑灰皿	大1	南	86 L8		16.5	3.5	9.0	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に目痕3
	376	灰釉	梅花皿	大1	南	86-?		11.1	2.9	5.6	不明	不明	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文
	377	灰釉	梅花皿	大1	南	86-O5		11.3	2.9	5.8	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文。二次被熱痕
	378	灰釉	緑灰皿	大1	南	86-L9		17.7			淡黄	良	①	
	379	灰釉	緑灰皿	大1	南	86-O8・P8		9.4	2.4	4.8	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文
	380	灰釉	緑灰皿	大1	南	86 O4・P3		10.8	2.7	5.4	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文
	381	灰釉	緑灰皿	大1	南	90-P3		11.8			灰白	良	①	
	382	灰釉	丸皿	大2	北	132 G7		9.6	2.2	6.0	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。二次被熱痕
	383	灰釉	丸皿	大2	北	132-K13		11.8			淡黄	良	①	
	384	灰釉	緑灰・丸皿	大12	南	86 L5・M6				9.0	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文
	385	灰釉	緑灰皿	大1	北	132-F15		7.6	2.1	3.6	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部に軸ドチ痕。見込みに印花文
	386	灰釉	丸皿	大2	北	132-R11		6.3	1.6	3.1	淡黄	良	①	貼付輪高台。体部下半露胎。見込みに印花文。輪溜り
	387	灰釉	四耳壺	後IV古	南	86-O6・P5		13.0	30.7	12.8	淡黄	良	①	貼付輪高台。高台内部露胎。耳部欠損。肩部～体部に沈線3段。二次被熱痕
	388	灰釉	瓶子壺	後II	南	86-K7・K8・L6・L10・N6・T10	SF4418				淡黄	良	①	肩部～体部に沈線3段
	389	灰釉	青磁	大	南	90 O4・P3・Q3・Q4		9.0	6.4	6.0	淡黄	良	①	底部外面～胴部露胎。口縁内面灰釉。体部に沈線3段
	390	灰釉	香炉	後IV新	北	132-F.b		5.8	3.0	3.7	淡黄	良	①	体部下半露胎。口縁内面露胎
	391	黒釉	水指	大3前	南	86-K5・K6・L5・O6・T10	SF4418	12.0			黄灰	良	①	外内面露胎
	392	黒釉	壺水	大3前	南	86-Q8				10.0	黄灰	良	①	外内面露胎
	393	無釉	壺水	大3前	北	135-V7	SK6491	12.3	11.6	8.8	黄褐	良	①	外内面露胎
	394	無釉	壺水	大3前	南	90-P3・Q3・Q4		11.6	11.8	10.4	灰	良	①	外内面露胎
	395	無釉	壺水	大3前	北	135-N13				10.0	黄灰	良	①	外内面露胎
	396	無釉	瓶入	大3前	北	132-H10		3.2			灰	良	①	外内面露胎
	397	無釉	花生	大3前	南	90-P4		9.3	15.9	8.0	灰	良	①	貼付輪高台。円形の孔あり。外内面露胎

※ ①径1mm未満の微細砂を含む。 ②径1mm未満の微細砂を多量に含む。
③径1mm以上2mm未満の砂粒を含む。 ④径2mm以上の砂粒を含む。

表9 その他の国産陶磁器観察表

※胎土の①～④は表8の※記注参照。

図	番号	種類	器種	出土地点 地区	調査次数 － 出土区	遺構/層位	法量 口径	器高	底径	色調 内面	外面	焼成	胎土	備考
44	398	信楽	壺	北	135-O11・P11・P12・Q11・R11・S9・S11・S12・T11・T12・U11		17.0	50.0	14.0	黄褐	黄褐	良	①④	底部外面に焼台痕。胎土に多石多い。自然釉付着。二次被熱
	399	丹波	壺	南・北	86-N8・P12・Q12 87-P13・R23, 90-R14 132 D9・I1・O7					灰黄褐	褐	良	①④	肩部に刻文あり。自然釉付着
	400	備前	壺	南	86-T10	SF4418	9.4			黄灰	黄灰	良	①③	
	401	備前	甕	北	132-F15				3.0	灰黒	黒褐	良	①	
	402	備前	甕	北	132-R5, 135 Q8	SK6482	2.6			灰	黒褐	良	①④	
	403	備前	花生	北	132- I15・J14・J15		7.4			灰黒	灰褐	良	①④	隅形花生。円形の孔あり
	404	備前	花生	南	86-K7・L8・L10・M7					褐灰	黒褐	良	①	角形花生。円形の孔あり
	405	備前	花生	南	86-N6					黒褐	灰褐	良	①④	方形の把手久

図	番号	種類	器種	出土地点 地区	出土地点 調査次数 一 出土区	出土地点 遺構/層位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	色調 内面	色調 外面	焼成	胎土	備考
44	406	不明	瓶	北	135-R11・R12				3.0	炭	炭	良	①	
	407	不明	瓶	北	132-I14・I15		5.8			褐炭	褐炭	良	①	
	408	不明	壺水	北	132-D15・F16・G14・H18・J14		14.2			炭	炭	良	①④	
	409	不明	花生	南	86-K7		5.2	17.1	4.9	炭	炭	良	①	楕形花生。方形の孔あり。黄面面取り

表10 外国産陶磁器観察表

※枠上の①～④は表8の下記注参照。

図	番号	種類	器種	出土地点 地区	出土地点 調査次数 一 出土区	出土地点 遺構/層位	法量 口径	法量 胴径	法量 底径	色(釉)調	胎土	備考
45	410	青磁	碗	北	132-C8・F13, 135-P13・YZ4		13.6	6.2	4.2	青緑	①	
	411	青磁	碗	北	132 D10・J15・F7・F8・F6・F7・G7・F16・C8・C9・I14・J14		14.8	6.5	3.8	灰緑	①	
	412	青磁	碗	南	86-L5・M6・M7・M12・P7・Y13		18.9	8.5	4.5	淡緑灰	①	
	413	青磁	碗	南	86 S8・T10	SF4418	12.6			灰緑	①	
	414	青磁	碗	南	87-P13				5.4	黄緑	①	
	415	青磁	碗	北	132-H14		13.8			淡緑	①	
	416	青磁	碗	南	86 T10・S9・X11	SF4418	13.7			淡緑	①	
	417	青磁	碗	北	132-F13・G13・H14・I11・L16		11.1	7.1	3.8	緑灰	①	
	418	青磁	碗	北	132-I11・I12・L4・H15・J14・P6		12.0	7.0	4.1	緑灰	①	
	419	青磁	碗	南	86 K12・L12				4.5	黄緑	①	
	420	青磁	碗	北	132-O16				4.4	明黄緑	①	
	421	青磁	碗	南	86-R12・S9・T10	SF4418	11.7	7.2	4.2	緑灰	①	
	422	青磁	碗	南	86-T10	SF4418	14.0	4.7	5.0	暗緑灰	①	
	423	青磁	碗	南・北	86 T10, 132-D9	SF4418	13.7	4.8	5.0	緑灰	①	
	424	青磁	碗	南	86-O5・O6・O8・P6	SF4419	15.0	6.4	6.2	淡青白	①	
	425	青磁	皿	南	86-T10	SF4418	8.5	2.4	4.8	暗灰緑	①	
	426	青磁	皿	南	86 9		7.0			淡緑灰	①	
	427	青磁	皿	北	132-I19・I8・I14	SK6436	12.8	3.4	4.6	灰緑	①②	
	428	青磁	皿	北	132-H14・J14		15.0			暗緑	①②	
	429	青磁	皿	南	86 T10	SF4418	16.7	4.0	7.9	緑灰	①	
	430	青磁	皿	南	86-U11, 135 V11		11.4	2.7	5.1	暗緑灰	①	
	431	青磁	皿	南	86-T10	SF4418	12.1	2.8	5.1	淡緑灰	①	
	432	青磁	皿	北	132-O12, 135-P12		13.4	3.3	5.4	黄緑	①	
	433	青磁	皿	北	132 F15・H14・T8		9.4	2.1	4.6	淡緑灰	①	
	434	青磁	皿	北	132-F15・G15・G16・H15・H16		9.7	2.9	4.4	淡緑灰	①	
	435	青磁	皿	北	132-I4・I5・J5		13.0	4.0	6.8	暗緑灰	①	
	436	青磁	皿	南	90-9		12.5	3.7	6.6	灰緑	①	
	437	青磁	皿	北	132-I4・I5・J4		13.3	3.6	6.9	緑灰	①	
	438	青磁	皿	南	86 J6・K12		7.0	1.7	3.8	淡青緑	①	
	439	青磁	皿	北	132-H11・H12・J14		6.8	1.8	3.8	淡青灰	①	
	440	青磁	皿	南	90-M4		6.6	1.9	2.8	淡青白	①	
	441	青磁	皿	南	86-L9		6.6	1.7	3.2	淡青緑	①	
	442	青磁	皿	北	132-H11・I14・K13		6.2	1.7	3.2	淡青灰	①	
	443	青磁	皿	北	135 Q8	SD6483	5.7	1.9	3.1	淡青灰	①	
46	444	青磁	盤	南	86-M6・O6・P6・P7・R8・T10・90-P4・R4・S4	SF4418	26.9	5.9	10.1	灰緑	①	
	445	青磁	盤	南・北	86 T10, 132-C8・D6・D7・D10・F8・H4・J14・M7・M8	SF4418 SX6535	25.0			淡青灰	①	
	446	青磁	盤	北	132-I11・I14・I15・J14・K13・M8		27.0	5.0	17.0	暗灰緑	①	
	447	青磁	盤	南	86 A5・T10	SF4418	17.6			灰緑	①	
	448	青磁	盤	南・北	86-M7・T10・V8・W6・X9・132-K13	SF4418				灰緑	①	
	449	青磁	盤	南・北	90-T14, 132-G14・H13・I14					灰緑	①	
	450	青磁	酒会壺	南	86 L5・N6・O7				16.3	灰緑	①	
	451	青磁	酒会壺	南	86-L8・N6					灰緑	①	
	452	青磁	瓶子	南	86-T10	SF4418				灰緑	①	
	453	青磁	香炉	北	132-D16	SD6448	6.6			灰緑	①	
	454	青磁	香炉	南・北	86-K12・L8・L9・M7, 132 D9		7.2	5.2	5.2	灰緑	①	
	455	青磁	香炉	南	86 O5, 90-U13		13.6			灰緑	①	
	456	青磁	香炉	南・北	86-S8, 90 D11・132-F15・H15・L12		10.4			灰緑	①	
	457	青磁	香炉蓋	南	86-T10	SF4418	9.6			灰緑	①	
	458	青磁	香炉	北	132 I14・J14		6.0	4.9	3.4	灰緑	①	
	459	青磁	香炉	南	86-T10	SF4418	7.6	5.6	3.5	灰緑	①	
	460	青磁	香炉	南	86-U10・U11				4.2	淡緑灰	①	
	461	青磁	香炉	南・北	86-T10, 132-H7	SF4418	9.2			灰緑	①	
	462	青磁	香炉	北	135-P12・Q11		7.8			灰緑	①	

図	番号	種類	器種	出土地点 地区	調査次数 — 出土区	遺構/層位	法量 口径	器高	底径	胎土	備考
46	463	青磁	香炉	南・北	86-T10 132-D16・F15, 135-H6	SF4418	8.0	3.7	7.2	暗緑灰	①
	464	青磁	香炉	南	86-L12・M6・M7・N6		8.4	5.1	7.2	灰緑	①
	465	青磁	香炉	南・北	86-O6・S9・T10 132-C11・F16	SF4418	12.5			灰緑	①
	466	青磁	香炉	北	132-R8, 135-Q10・R4・R6・S5 ・S6・T5・T6・U8・U12		17.2	11.8	13.8	灰緑	①
	467	青磁	香炉	南	86-L6・M6		19.4	15.0		灰緑	①
47	468	青磁	花瓶	北	132-D13・J14		11.6			灰緑	①
	469	青磁	水注	南	86-J7・K7・K8・L8			8.5	5.5	暗青緑	①
	470	青磁	花瓶	南	86-T10	SF4418	7.0			灰緑	①
	471	青磁	花瓶	南	86-T10・T11	SF4418			6.5	灰緑	①
	472	青磁	角坏	南	86-T10, 90 M4・O4・R3	SF4418	5.0	17.0		灰青緑	① 接花生
	473	青磁	花瓶	南	86-S11・T10	SF4418				灰緑	①
	474	青磁	花瓶	北	132 N12, 135 O12・O13・P14					灰緑	①
	475	白磁	碗	北	132 F14				5.6	灰白	①
	476	白磁	碗	南	86-L6・L8・M6・M7		13.9	7.0	5.4	灰白	①
	477	白磁	皿	北	132-H4・J14・L13		15.0	2.6	9.0	乳白	①
	478	白磁	皿	南	86 K6・K7・L9		8.9	2.1	3.9	灰白	①
	479	白磁	皿	南	87-T10		11.2	2.7	6.0	乳白	①
	480	白磁	皿	北	132-H9	SK6436	13.8	2.7	7.4	淡灰	①
	481	白磁	皿	北	132 G15・H13		11.0	2.5	6.0	灰白	①
	482	白磁	皿	南	86-K7・L7		10.4	2.5	5.8	明灰白	①
	483	白磁	皿	北	132-H10・I10		10.8	2.7	6.0	灰白	① 高台内に砂粒
	484	白磁	皿	北	132-H14・J14		11.1	2.5	6.4	灰白	①
	485	白磁	皿	南	86 O8・T10	SF4418	11.5	3.0	5.8	灰白	①
	486	白磁	皿	北	132-F10・F15・H11		11.3	2.9	4.9	灰白	①
	487	白磁	皿	南・北	86-S9・T5, 132-H10		11.8	3.1	6.6	淡灰	①
	488	白磁	皿	南	86-T10	SF4418	11.9	3.5	6.8	淡灰	① 内面黒斑
	489	白磁	皿	北	132-G14・H12・J14		11.8	2.8	7.0	乳白	① 高台内に「福」
	490	白磁	皿	南	86-K7, 90 P3・Q3		13.6	3.0	8.0	乳白	①
	491	白磁	皿	南	90 C12・D6・L9		13.0	3.3	7.1	灰白	①
	492	白磁	皿	南	90-C12・D11		12.4	3.2	7.0	灰白	①
	493	白磁	皿	南	86-M10・Q6		12.8	3.2	7.2	灰白	①
	494	白磁	皿	南	90-M4・O4・P3		12.9	3.2	7.6	灰白	①
	495	白磁	皿	南	90-U13		17.8	4.0	10.2	灰白	①
	496	白磁	皿	北	132-F15・G9・G15・G16		18.1			灰白	①
	497	白磁	皿	北	132-F13・F15・G15・G16・H13・H14・H15・J11・K13	SD6449	19.7	4.1	10.5	灰白	①
	498	白磁	皿	北	132 K13・L13・N8		20.5			明灰白	①
	499	白磁	皿	北	132-F16・H14・U5・J14・M5・M13		20.4	4.3	12.8	明灰白	①
	500	白磁	皿	北	132 K13・M13 135-V10・V11・W10		13.2	3.2	6.9	明灰白	① 高台内に「天下太平」
	501	白磁	皿	北	132 K13・L13・L13, 135-W10		12.0	3.2	6.4	灰白	① 高台内に「天下太平」
	502	白磁	碗	南	86-T10	SF4418	24.9			淡緑灰	①
	503	白磁	坏	南	86-O8	SF4419	6.5	3.3	2.4	灰白	① 高台内に「福」
	504	白磁	坏	北	132-H8・H14・J14	SK6436	6.7	2.8	2.4	灰白	①
	505	白磁	坏	北	132-H14・K13		7.3	3.3	2.7	灰白	①
	506	白磁	蓋	南	90 ?		3.2	0.9	1.1	灰白	①
	507	白磁	角坏	南	86-K7・R12・S10		5.6	16.8		淡灰	① 接花生
	508	白磁	匙形品	南	90-P3・Q3・Q4					青白	①
48	509	染付	碗	南	86-K7・L7		11.2	5.5	3.2	灰白	①
	510	染付	碗	南・北	86-T10・V13, 132-E9	SF4418			4.1	灰白	①
	511	染付	碗	北	132 D13・D15・H9・J14・K13 135-S11		14.3	5.2	6.4	灰白	①
	512	染付	碗	北	132 D13・D15・H9・J14・K13 135-S11	SK6436 SD6449	13.4	6.5	4.8	灰白	①
	513	染付	碗	北	132-H15・H13・H14・J14				5.6	灰白	①
	514	染付	碗	南	86-T10	SF4418	13.8	6.2	5.4	青白	①
	515	染付	碗	北	132-F15, 135 O,P11	SK6493	14.2			灰白	①
	516	染付	碗	南	86 J7・M6・M7・T10	SF4418	16.0	5.4	5.6	青白	①
	517	染付	碗	南	86-L5・N6, 90-M4・P3		15.4	5.5	5.8	灰白	①
	518	染付	碗	南	86-S9・T10, 90-Q3・Q4・R4	SF4418	12.0	5.6	4.8	灰白	①
	519	染付	碗	北	132-H11・H14・H15・J14・K14		16.8			灰白	①
	520	染付	碗	北	132 K14				7.5	灰白	①
	521	染付	碗	北	132-F15・H13・H15・I14・I15					灰白	①
	522	染付	碗	北	132-H14・J14					灰白	①
	523	染付	皿	南	86-T10	SF4418	9.0	2.2	4.8	灰白	①
	524	染付	皿	南	86-T10	SF4418	9.4	2.3	4.2	灰白	①
	525	染付	皿	南	86-T10, 90 U13	SF4418	9.6	2.1	5.0	灰白	①
	526	染付	皿	南	86 T10	SF4418			5.0	灰白	①
	527	染付	皿	南・北	86-T10, 132-G16	SF4418	8.8	2.2	4.6	灰白	①
	528	染付	皿	南・北	86-T10, 132-J13	SF4418	9.0	2.2	3.9	灰白	①

図	番号	種類	器種	出土点 地区	出土点 調査次数 一 出土点	遺構/層位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	胎土	備考
48	529	染付	皿	南・北	86-S5, 132-X4, 135-N13		12.0	2.7	7.0	灰白	①
	530	染付	皿	北	132-D8・F8		12.8	2.7	7.0	灰白	①
	531	染付	皿	南	86-L8・M6		13.6			灰白	①
	532	染付	皿	北	132-J14・K13		15.6	3.4	7.6	灰白	①
	533	染付	皿	南	86-T10	SF4418			8.8	灰白	①
49	534	染付	皿	北	132-F15		10.6	2.9	3.0	青白	①
	535	染付	皿	南・北	86-T10, 132-K13	SF4418	10.3	2.6	3.2	青白	①
	536	染付	皿	南	86 T10	SF4418	10.3	2.8	2.4	灰白	①
	537	染付	皿	南	86 N5・T10	SF4418	10.2	2.9	2.4	淡灰	①
	538	染付	皿	南	86-T10	SF4418	9.8	2.5	3.0	青白	①
	539	染付	皿	南	86-Q6, 90 Q4		15.2	3.2	9.5	灰白	①
	540	染付	皿	南	86-T10	SF4418	14.7	3.5	8.9	灰白	①
	541	染付	皿	北	132-F6・H8・I9・F10	SX6436	14.0	2.7	7.8	灰白	①
	542	染付	皿	北	135-P11・Q11		13.4	2.8	6.0	灰白	①
	543	染付	皿	南・北	86-K5・K6・K7・L5・L6・L7・M5・M7 132-C10・D15・G4・H3		19.0	2.9	10.2	青白	①
	544	染付	皿	南	86-K5・K6・K7・L5・L7・M7・T10	SF4418	19.9	3.0	10.9	青白	①
	545	染付	皿	北	132-F16・K13・L13		19.8	3.0	10.8	淡白	①
	546	染付	皿	南	86-K5・L5・M5・M7・T10	SF4418	19.4	4.5	12.4	灰白	①
	547	染付	皿	南	86-P7・S5		12.0	3.1	3.8	淡緑灰	①
	548	染付	皿	北	132-F12・H8・H9・I11・H14	SK6436	12.2	3.7	5.4	乳白	①
	549	染付	皿	南・北	86-Q7・X11 132-G14・H13・H14・H12・J14・		14.8	3.7	8.9	灰白	①
	550	染付	皿	南・北	86-T10, 132 D11・I15	SF4418				灰白	①
50	551	染付	坏	北	135-Q10・Q11・Q12		6.4	3.5	2.4	灰白	①
	552	染付	坏	北	132-M9・R7		6.6			青白	①
	553	染付	坏	北	135-P11・P12・Q11		7.0			灰白	①
	554	染付	坏	北	132 O4, 135-S5	SE6483	6.0	4.0	2.2	灰白	①
	555	染付	坏	北	132-K13・N7,8, 135-O9・T11		6.1	3.9	2.2	青白	①
	556	染付	坏	北	132-H7, 135-P12				2.6	青白	①
	557	染付	蓋	北	132-H11		7.3			灰白	①
	558	染付	花瓶	南	86 T10	SF4418				灰白	①
	559	瑠璃釉	碗	南	86-U16		13.2	5.6	4.5	藤紫	①
	560	瑠璃釉	碗	南	86-R4・J16		14.7	5.3	6.1	藤紫	① 内面・高台は灰白色
	561	瑠璃釉	つまみ	北	135-Q12					藤紫	①
	562	華南彩釉	皿	北	132-H4・J14		6.5	1.3	3.0	緑黄	①
	563	華南彩釉	皿	南	86-?		6.6	1.3	3.8	淡黄	①
	564	華南褐釉	壺	北	135-Q,T・R11・R12・S11・S12		3.4			黒褐	①④
	565	華南褐釉	壺	北	135-P11・P12・P13・Q11・Q12・X5		10.9			黒褐	①②
	566	華南褐釉	壺	北	132-H13・K13・L13・M他 135 P11・Q8・Q11・R4・R8・R11・S8・S11・T8・T11・U6・V8他	SX6436 SX6484 SE6483	13.8	52.6	16.8	暗褐	②④
	567	華南褐釉	壺	南	86-S9・T10・U5	SF4418	13.2		15.4	黒褐	①⑤
	568	華南褐釉	壺	南・北	86 T10 132-D7・D8・D10・D16・E8・E9・I15・F14・G16・H15・J14・K4 135-V8	SB6425 SD6421 SF4418	14.2	54.5	16.6	暗褐	②④
51	569	華南褐釉	壺	南	86-Q6・T10・U1	SF4418	9.5	19.4	9.3	暗赤褐	①②
	570	華南褐釉	鉢	南	86-K7・K8・L7・L8		14.5	11.7	7.9	暗褐	①②
	571	朝鮮	碗	南	86-O6・O6		17.4	6.5	5.0	淡灰	②③
	572	朝鮮	碗	北	132-H10				5.0	乳白	① 胎土は橙色
	573	朝鮮	碗	南	86-N6・O5・O6				5.3	乳白	①
	574	朝鮮	碗	南	86-L5・T10, 90-M3・M4	SF4418			5.6	乳白	① 胎土は橙色
	575	朝鮮	碗	北	132-H9・H14・H16・I14・J14・R10	SK6436 SD6550			5.2	緑灰	②③
	576	朝鮮	碗	北	132-F15・L13・M13		15.9			緑灰	②③
	577	朝鮮	碗	北	132-F16・F15・H7		16.0			暗青灰	②
	578	朝鮮	碗	北	132 F13・H14・P4, 135-Q4	SD6483	16.8	6.7	5.8	黄白	②③
	579	朝鮮	碗	北	132-D9	SD6421			5.8	緑灰	①
	580	朝鮮	碗	北	132-P4・P6, 135-Q8	SE6483	17.8	6.5	5.6	橙褐	①②
	581	朝鮮	碗	南	86 ?				5.3	灰	①③
	582	朝鮮	碗	北	135-H6・H9・S8・S11・T11	SE6484	16.4	5.7	4.2	灰	②③
	583	朝鮮	碗	南	86-L6,L7・L8・L9・M6・T10	SF4418	16.4	5.7	5.0	灰	②③
	584	朝鮮	碗	北	132-F5・F16・G16		16.0	6.0	6.0	黄灰	① 胎土は橙色
	585	朝鮮	碗	南	86-K7		16.2			灰	②③
	586	朝鮮	碗	北	132-J14・K13		16.4			灰	②③
	587	朝鮮	碗	北	135 S11,12				5.4	淡緑灰	①②
	588	朝鮮	碗	南	86-O6・P5, 90-P8		10.6	3.8	4.2	乳白	①
	589	朝鮮	青磁	北	135-S11				4.4	淡緑灰	①②
	590	朝鮮	瓶	南	86-K7		6.1			黒褐	① 胎土は淡黄色
	591	朝鮮	瓶	南	86 T10	SF4418				黒灰	②
	592	朝鮮	瓶	北	132-D16・I15・G15					黒褐	① 胎土は淡黄色

表11　金属製品観察表

図	番号	分類	種類	出土地点 地区	出土地点 次数-出土区	出土地点 遺構／層位	法量 長径(最大)	法量 短径(厚)	法量 厚さ	備考
52	593	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	10.8	1.6	0.5	下半部大きな反り
	594	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	13.4	1.7	0.4	付着物あり、先端欠損
	595	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	12.1	1.5	0.4	
	596	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	10.6	1.2	0.4	先端欠損
	597	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	10.1	1.2	0.4	一部赤色化、腐蝕
	598	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	10.0	1.1	0.3	釘頭延圧のまま
	599	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	9.3	1.1	0.4	上半部腐蝕れ
	600	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	8.0	1.1	0.3	
	601	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	6.9	1.1	0.4	
	602	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	6.4	1.0	0.3	先端欠損
	603	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	5.4	0.9	0.3	全体に赤色化、先端欠損
	604	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	4.3	0.9	0.3	全体に赤色化、先端摩耗
	605	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	4.2	0.7	0.3	先端腐蝕
	606	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	3.2	0.6	0.2	
	607	鉄製品	釘	南	86-T10	SF4418	3.1	0.5	0.2	釘頭延圧のまま
	608	鉄製品	釘	北	135-?	石垣外／表採	7.2	0.8	0.3	
	609	鉄製品	釘	北	135-?	SK6483／上	5.9	1.1	0.3	
	610	鉄製品	釘	北	135 H6	SK6484／赤色粒混暗褐色土	4.7	1.1	0.3	
	611	鉄製品	釘	北	135 H6	SK6484／赤色粒混褐色土	3.9	1.1	0.3	先端欠損
53	612	銅製品	引手金具	南	86-T10	SF4418	6.5	5.0	1.2	鐶取付に黒色物(墨か)、縦軸上に穴
	613	銅製品	引手金具	北	132-N5	トレンチ／黄褐色粘質土	6.2	5.0	1.3	黒色物(墨か一部残存)、縦軸上に穴
	614	銅製品	引手金具	南	86-T10	SF4418	6.2	1.3	0.3	部分的に剥離、一部腐蝕れ
	615	銅製品	鋲頭	北	135-Z5	トレンチ／黄褐色土	5.0	2.4	1.1	
	616	鉄製品	環状金具	南	86-M5	石垣下一面	7.7	0.8	1.0	全体に腐蝕れ
	617	鉄製品	鍵	北	132-H8-9	SK6436	10.8	1.2	0.9	全体に腐蝕れ、先端欠損
	618	鉄製品	金具	南	86-T10	SF4418	15.0	2.7	1.7	錆膨れに使用痕
	619	銅製品	不明	北	135-P11	斜面／赤色粒混褐色土	17.6	3.5	3.0	中央穴あり、全体に腐蝕れ
	620	銅製品	分銅	北	135-P11	石垣外／褐色粘質土	5.7	4.3	2.4	銅形分銅、表面に「拾西」の文字
	621	銅製品	花鋲	北	135-P.3	赤褐混褐色土	(3.1)	(12.4)		破片資料
	622	銅製品	花鋲	北	135-P.2-13	赤褐混褐色土／下層	6.4	4.6	1.3	
	623	銅製品	管耳板	南	86-T12	第一面	4.1	1.8	1.8	接着面に付着物と孔
54	624	銅製品	蓋	南	86-T10	SF4418	(2.4)	(12.6)	0.3	熱変成による歪み、錆膨れ
	625	銅製品	蓋	北	132-O12	斜面／表土	6.4	6.5	0.2	歪みあり
	626	銅製品	香炉	南	90-?	土器ざまり	(5.1)	(6.2)		外面剥離、三足
	627	銅製品	香炉	北	132-I11	SK6461／黒色腐蝕土	4.8	0.9		脚部に接面
	628	銅製品	鐘	北	135-V7	SK6491	(9.7)	(2..7)		脚部(三足)、把手
55	629	銅製品	銅錢	南	86-T10	SF4418	2.3	2.3		開元通寶(判読不明)
	630	銅製品	銅錢	南	86-S6	遺構面	2.4	2.4		開元通寶、二枚重ね
	631	銅製品	銅錢	北	132-C14	表土	2.5	2.5		咸平元寶
	632	銅製品	銅錢	北	132-C14	表土	2.5	2.5		皇宋通寶
	633	銅製品	銅錢	北	132-I7	II	2.5	2.5		元豊通寶
	634	銅製品	銅錢	北	132-I11	II	2.4	2.4		開元通寶
	635	銅製品	銅錢	北	132-I11	II	2.4	2.4		皇宋通寶
	636	銅製品	銅錢	北	132-C16	II	2.3	2.3		皇宋通寶
	637	銅製品	銅錢	北	132-D16	土器溜	2.5	2.5		祥符通寶
	638	銅製品	銅錢	北	132-K13	石垣東側／炭層土	2.4	2.4		咸平元寶
	639	銅製品	銅錢	北	132-H4	石垣東側／炭層土	2.4	2.3		開元通寶
	640	銅製品	銅錢	北	132-?	SK6433／赤褐色土混上	2.4	2.4		皇宋通寶
	641	銅製品	銅錢	北	135-H12	石垣外／赤色粒混褐色土	2.4	2.4		開元通寶
	642	銅・鉄製品	小柄	北	132-D10	表土	17.5	1.4	0.5	柄部銅製、茎鉄製、刀身欠損
	643	銅製品	鞍形金具	南	86-N6	第一面	6.5	2.2	0.6	半鞍の断面文
	644	銅製品	不明	南	86-T11	pit	7.1	2.6	1.2	
	645	鉄製品	不明	北	135-W7	表土	(1.4)	(5.4)		綿・網目・フェルト・鉄など
	646	銅製品	不明	北	132-G9	II	6.9	5.0	1.1	突帯あり
	647	土師質	埋蔵	南	86-T10	SF4418	(2.2)	(9.0)		内面に金属付着物、発泡痕
	648	土師質	埋蔵	南	86-T10	SF4418	(2.1)	(8.4)		内面・外面に金属付着物、発泡痕
	649	土師質	炉壁	南	87-P13	pit	8.8	4.7	4.0	金属付着物

表12 石製品観察表

図	番号	石造物分類番号	種別	出土地点	遺構/層位	部位	総高	地輪高/地輪幅	水輪径	火輪幅	風輪径	空輪径	銘文	備考
56	650	132-29	一石五輪塔	DK	表土	空風	12.5				8.9	9.9		
	651	132-92	一石五輪塔	DK	表土	空風	12.5				12.4	12.8		
	652	132-131	一石五輪塔	E7付近	表土	空風	15.0				12.8	15.5		
	653	135-452	一石五輪塔	YZ9	石垣外縁内一括	空風	16.0				12.3	13.0		
	654	135-415	一石五輪塔	Z4	暗灰色～淡褐色土	空風	16.0				12.4	13.2		
	655	132-243	一石五輪塔	F15付近	表土砂利混土	空風	13.0				12.3	13.2		
	656	132-202	一石五輪塔	D11, 12	石だまり	空風	14.0				12.6	13.4		
	657	132-222	一石五輪塔	G15	表採	空風	13.5				13.0	13.6		
	658	132-15	一石五輪塔	B8ベット	表採	空風	20.0				14.4	15.2		
	659	132-203	一石五輪塔	B8	II層	空風	18.0				15.2	15.3		
	660	132-102	一石五輪塔	G8・9	II層	空風	18.0				16.0	16.6		
	661	135-433	一石五輪塔	Z6	石垣外	空風	15.0				13.4	15.2		
	662	132-59	一石五輪塔	E7付近		空風	19.0				15.2	16.0		種字に月輪の装飾あり。
	663	xo781	一石五輪塔			空風	19.7				15.7	16.0		87次
	664	135-404	一石五輪塔	Z4・5	斜面淡褐色土	空風	20.0				16.0	16.8		
	665	135-438	一石五輪塔			空風	15.0				15.2	16.0		
	666	132-67	一石五輪塔	B6付近	表採	空風	18.0				14.7	16.5		
	667	132-160	一石五輪塔	E7付近	表土	空風	20.0				14.2	16.2		
	668	133-403	一石五輪塔	XY10	石垣外褐色礫混土	空風	17.0				15.0	15.6		
	669	132-42	一石五輪塔	34	II層	空風	17.5				14.8	16.5		
	670	132-161	一石五輪塔	E7付近	表土	空風	19.0				15.3	16.2		
	671	135-401	一石五輪塔	XY10	石垣外褐色礫混土	空風	20.0				16.2	16.8		
	672	132-132	一石五輪塔	E7ベット	表土	空風	20.0				15.7	18.0		
	673	132-46	一石五輪塔	D10付近	表土	空風	18.0				16.8	17.0		
	674	135-423	一石五輪塔	Z4	斜面淡褐色土	空風	19.0				13.4	16.2		
	675	135-419	一石五輪塔	Z4	表土～淡褐色土	空風	18.0				16.8	18.0		
	676	135-434	一石五輪塔	Z6	石垣外	空風	20.0				17.0	18.4		種字が金彩色残存
	677	135-421	一石五輪塔	Z4	斜面淡褐色土	空風	21.0				17.0	17.4		種字に金彩色残存
	678	132-33	一石五輪塔	E7付近	表土	空風	22.0				18.0	19.1		
57	679	132-41	一石五輪塔	F14付近	表土砂利石混土	空風火穴	27.0	13.5	12.8		11.7	12.2		
	680	132-66	一石五輪塔	F6付近	表採	空風火水	31.5	14.8	16.3		12.4	13.2		
	681	135-410	一石五輪塔	YZ8	石垣外	空風火水	28.0		16.0		13.4	14.1		
	682	135-412	一石五輪塔	AA5	トレンチ表土地表	空風火水	38.3	16.8	17.0		15.0	16.6		
	683	132-54	一石五輪塔	C6	表採	空風火水	37.0	17.7	17.2		15.0	15.0		
	684	132-146	一石五輪塔	C14		火水	15.5	12.1	12.2				蓮華	蓮目が彫られる。
	685	135-409	一石五輪塔	YZ8	石垣外	火水	18.0	14.6	13.6					
	686	135-427	一石五輪塔	Y4	SD500 崩落土	空風火穴	46.0	19.8	18.8		16.7	17.3		
	687	132-52	一石五輪塔	E7付近	表土	空風火水	43.5	19.2	18.8		16.8	17.3		
	688	132-255	一石五輪塔	B5付近	表土～II層	空風火水	18.0	18.4	18.7		16.0	17.2		
	689	132-16	一石五輪塔	D8	表土	空風	26.0				19.0	20.5		
	690	132-14	一石五輪塔	B5ベット	表採	空風	22.0				19.7	21.0		
	691	132-17	一石五輪塔	D8	表土	空風	24.0				19.4	22.2		
	692	132-70	一石五輪塔	C14		空風	21.0				19.7	20.7		

図	番号	古仏番号 遺物番号	種別	出土地点	遺構/層位	部位	総高	地輪高 地輪径	水輪径	火輪径	風輪径	空輪径	銘文	備考
57	693	ko782	石五輪塔			火水	24.2		18.8	16.8				97次
	694	132-162	一石五輪塔	E7付近	表土	火水	24.0		18.6	17.6				
	695	135-441	一石五輪塔	SD6443	斜面崩落上	火水	23.0		19.0	18.8				
	696	132-72	石五輪塔	C14		火水	29.0		21.8	22.0				
58	697	135-430	組合五輪塔	Y24	SD6500	水	15.0		23.9					
	698	ko65	石五輪塔			火水道	44.6	18.8	19.8	18.3				86次
	699	132-104	一石五輪塔	G8-9	II層	地	13.5	13.5 13.0					為妙〔　〕 永正九四月十日	
	700	132-71	一石五輪塔	E7付近	表土	地	18.3	18.3 18.0					／師 永正六己巳正月廿九日	銘文に金彩色残存
	701	132-39	石五輪塔	F14付近	表土砂礫 石混土	地	18.0	15.0 17.0					為妙清大姉 永正八年未二月廿三日	
	702	135-446	一石五輪塔	Y8	表土上面	火水地	57.6	22.9 22.4	23.9	22.0			妙真 永正四丁卯十二月十七日	
	703	132-319	石五輪塔	E5付近	表土～II層	火水地	41.3	17.6 17.8	18.6	17.0			道俊童女 永正十二乙亥正月廿五日	
	704	135-422	一石五輪塔	Z4	斜面淡褐色土	火水地	45.4	18.8 19.0	19.5	18.8			盛為童女 永正十二乙亥天七月七日	
	705	132-2	一石五輪塔	D8	表土	地	18.0	17.0 17.5					舞兵禅定門 □元天四月十二日	
	706	135-420	石五輪塔	Z4	暗灰色上～淡褐色土	地	19.0	13.7 14.0 20.4					永永六年 妙慶童女 七月廿三日	題目が彫られる。
	707	ko49	石五輪塔			完形	66.2	20.0	20.6	19.8	16.7	17.3	永正十六天己卯 妙珍禅定尼 八月廿日	
	708	132-339	石五輪塔	SK6434	黒色土	地	22.0	18.0					永正十三年 妙蓮童女 十一月廿三日	
	709	132-118	一石五輪塔	E7 SD6421		地	25.0	18.0 17.0					永正十六天 妙□禅尼 九月二一日	
	710	ko783	一石五輪塔			地	25.4	24.2 19.0					□□大永八年 月□年始大禅定門 八月四二日	
	711	135-424	石五輪塔	Z4	斜面淡褐色土	火水地	46.0	22.5 17.8	18.8	17.2			今禅二天 妙心大姉 十一月廿八日	
59	712	132-66	一石五輪塔	E6付近	表採	地	18.5	12.5 12.0					聖母永貞大姉	
	713	132-4	石五輪塔	E7付近	表土	地	20.0	20.0 16.5					傳業蓮寿童女 天文八己亥年□月廿日□	月輪
	714	132-43	一石五輪塔	H4	II層	地	20.0	15.0 14.8					妙西大姉 四月二日	
	715	132-79	組合五輪塔	D8	表土	地	20.3	12.9 16.0					日光禅定門	
	716	132-234	石五輪塔	F14	表採	地	21.0	15.0 15.0					妙	
	717	135-437	一石五輪塔	Z5	石垣外黄褐色粗混土	地	27.0	25.8 17.0					大文八年 道慈禅定門 二月廿一日	
	718	ko845	一石五輪塔			地	24.0	23.0 18.5					天文四年／ 妙慶比丘／ 正月廿一	

図	番号	石仏番号 遺物番号	種別	出土地点	遺構/層位	部位	総高	地輪高 地輪径	水輪径	火輪径	風輪径	空輪径	銘文	備考
59	719	132-163	一石五輪塔	E7付近	表土	地	24.0	18.0 18.0					人永三天癸 慶正禅尼 七月八日	
	720	132-165	石五輪塔	F14	表土砂利 石混土	地	24.0	18.0 18.0					永禄七年三年 智口吉当禅定門 UU九口	
	721	132-83	一石五輪塔	D8	表土	火水地	42.8	21.0 16.3					寶冷院阿闍梨全祥	
	722	132-117	一石五輪塔	C14		地	21.5	14.8 14.8					口文 _ 1 酉 口清禅尼 四月十五日	
	723	ko7844	一石五輪塔			地	22.6	21.6 16.2					天文十年辛丑 妙龍禅定 九月十三日	
	724	135-464	一石五輪塔	Z4	トレンチ 淡褐色土	火水地	49.0	23.8 18.2	19.2	17.8			雪弘全鶴禅定門 天文三年壬月三日	銘文に金彩色残存
	725	132-169	石五輪塔	E7付近	表土	火水地	49.1	23.8 17.5	19.3	18.8			玉雪妙祝尼 天文八己亥十一月六日	
	726	135-428	石五輪塔	Y24	SD6500 黄褐色土	空形	61.0	20.6 17.5	17.5	17.5	13.4	15.0	道蓮禅尼 天文_年七月七日	
	727	132-48	石五輪塔	D8	表土	火水地	45.2	24.0 16.8	14.8	16.9			蓮淨口法大姉 永禄十二己巳閏五月八日	月輪

図	番号	石仏番号 遺物番号	種別	場所	遺構/層位	部位	法量 cm ( ) は現存長	銘文	備考
60	728	132-53	宝篋印塔	E7付近		相輪	高さ(36.2)×径13.4		五大種字彫る
	729	ko787	石塔			相輪	高さ21.4×幅18.2		
	730	ko900	石塔			相輪	高さ(33.0)×幅(17.[illegible])×厚さ(9.3)		九輪に五大種字を彫る。
	731	132-47	石塔	D8	表土	宝珠請花	高さ24.6×幅15.4×厚さ16.4		
	732	132-6	宝篋印塔	H11付近	表採	笠部	高さ11.0×幅19.5×奥行17.0		
	733	ko1884	石塔			反花座	高さ17.7×幅48.7×奥行(37.7)		複弁
	734	ko793	石塔			反花座	高さ(12.0)×幅(20.0)×奥行(9.5)		複弁
	735	132-69	石塔	D6付近	表採	基礎	高さ11.6×幅(22.5)×奥行(8.0)		格狭間
	736	132-241	石塔	F14	表土	基礎	高さ(18.1)×幅(24.0)×奥行7.3		格狭間に蓮華座を彫る。
	737	132-269	石塔	SX6423		基礎	高さ26.0×幅(24.6)×奥行8.1		格狭間に蓮華座を彫る。
	738	132-198	石塔			基礎	高さ(17.6)×幅(21.2)×奥行 8.0		格狭間に蓮華座を彫る。
	739	ko1016	石塔			基礎	高さ28.0×幅(55.3)×奥行7.3		
61	740	132-55	板碑型五輪塔	C6	表採	空風火水	高さ(31.0)×幅17.0×奥行14.0		五大種字彫る。
	741	135-442	板碑型五輪塔	W11	石垣底(黄褐色土上層)		高さ(36.7)×幅(19.0)×厚さ10.2	有無／	上大種字に紀名号を彫る。
	742	132-235	板碑型五輪塔	F12	表採		高さ(33.4)×幅(23.0)×厚さ13.1		
	743	135-443	板碑型五輪塔	G14付近		空風	高さ(29.8)×幅(19.9)×厚さ7.2		
	744	132-30	板碑型五輪塔	D8	表土		高さ(16.0)×幅(33.0)×厚さ7.0		五輪塔2基線刻
	745	132-240	板碑型五輪塔	SX6434			高さ(31.0)×幅(36.0)×厚さ(5.0)		種字に朱・金彩色残存
	746	132-3	板碑型五輪塔	G9付近	表採		高さ(9.8)×幅(5.5)×厚さ4.0		
	747	132-188	板碑型五輪塔	G14付近	表土砂利 石混土		高さ(20.0)×幅(14.5)×厚さ 8.0		
	748	132-154	板碑型五輪塔	SD6421			高さ(2[illegible].0)×幅(14.0)×厚さ6.0	永正1酉天1月／	
	749	132-128	板碑型五輪塔	E7 SD6421			高さ(23.0)×幅(17.0)×厚さ4.0		
	750	132-192	板碑型五輪塔	F6付近	II層		高さ(14.5)×幅(21.0)×厚さ(4.5)		
62	751	132-323	板碑型五輪塔	G4	表土～II層		高さ(16.0)×幅(26.0)×厚さ5.0	妙口口／	小片、側面なし。
	752	132-357	板碑型五輪塔	E8SD6421	砂利層	左側	高さ(17.0)×幅(13.0)×厚さ(5.0)	弘治三五月口	金彩色残存

図	番号	石仏番号 遺物番号	種別	出土地点	遺構/層位	部位	法量 cm（ ）は残存値	銘文	備考
	753	132-23	板碑型五輪塔	F14付近	表土砂利 石混土		高さ(26.0)×幅(11.7)×厚さ6.9	／□智淨／	
	754	132-51	不明	D11付近			高さ(8.5)×幅(17.3)×厚さ7.9	／四日	
	755	132-19	板碑か	F14付近	表土砂利 石混土	上方角	高さ(4.8)×幅(11.6)×厚さ7.5	天文十八年	
	756	132-56	板碑型五輪塔		表採		高さ(7.0)×幅(24.6)×厚さ9.0	為妙／ 明定／	
	757	132-191	板碑型五輪塔	F8付近	II層		高さ(8.3)×幅(23.0)×厚さ10.1	／願忌 ／月廿八日	
	758	132-321	板碑	I4	斜面崩落土		高さ(9.3)×幅(16.5)×厚さ7.1	妙得願定尼	
	759	132-26	不明	F14付近	表土砂利 石混土	石像	高さ(10.5)×幅(5.6)×厚さ(5.1)	蓮華／	
	760	132-324	板碑型五輪塔	J4	斜面崩落土		高さ(31.7)×幅(19.4)×厚さ13.7	正禅定門	
	761	132-318	板碑型五輪塔	E5付近	表土～II層	下部	高さ(19.6)×幅(44.0)×厚さ13.3	／門 ／願忌	
	762	132-23	板碑	F14付近	表土砂利 石混土		高さ(19.4)×幅(11.5)×厚さ16.0	天文五年丙申五月日 □□願定門	
	763	132-34	板碑	E6付近	表採		高さ(17.0)×幅(15.7)×厚さ8.8	秀梅定門 ／盛忠／	
	764	135-447	石仏	O13	石垣外部 根表土		高さ(29.8)×幅(23.2)×厚さ7.2		
63	765	132-287	石仏	D8	表土		高さ(11.3)×幅(10.2)×厚さ4.9	／願淨定／	小片
	766	132-21	板碑	F14付近	表土砂利 石混土		高さ(13.9)×幅(15.3)×厚さ5.5	／廿三日十／ ／北百足 天文三二十一月 ／願	
	767	132-20	板碑	F14付近	表土砂利 石混土	右側片	高さ(19.69)×幅(6.6)×厚さ6.9	妙金童女	
	768	132-33	板碑	F6付近	表採		高さ(18.8)×幅(16.1)×厚さ7.0	□西［　］ ［　］	
	769	132-18	板碑	F14付近	表土砂利 石混土		高さ(13.0)×幅(16.5)×厚さ4.9		
	770	132-320	板碑	CM1-5	斜面崩落土		高さ(18.3)×幅(17.7)×厚さ5.4	道場願□ 盛賀大厚□ 妙禅蓮 ／［　］	
	771	132-57	板碑	不明	表採		高さ(21.4)×幅(24.6)×厚さ7.2	道全禅／	
	772	132-331	不明	SK6434	黒色炭混土		高さ(22.0)×幅(15.0)×厚さ(2.1)	／無阿／	朱・金彩色残る。左側面にも朱が残る。
	773	132-126	板碑	E7 SD6421上面付近		脚	高さ(10.4)×幅(9.3)×厚さ8.5	／□□／ ／□□／ ／月廿	
	774	132-73	板碑	C6	表採		高さ(25.7)×幅(29.2)×厚さ7.6	／□□／ ／盛得／ ／道福　沖／ ／盛東　恵／	裏面にも銘有「盛／」／「服部郎／」
	775	132-322	板碑	I4	斜面崩落土		高さ(14.2)×幅(14.3)×厚さ6.9	／法界／ ／法界／ ／法界／	小片、側面なし。
	776	135-442	板碑	W11	石垣前(黄褐土上層)		高さ(36.7)×幅19.0×厚さ10.2	南無／	
	777	135-443	板碑	W11	石垣前(黄褐土上層)		高さ(46.8)×幅21.5×厚さ8.8	南無阿／	彩色の朱残る。
	778	135-440	板碑	W4 SD6443	斜面崩落土		高さ(30.0)×幅(16.0)×厚さ8.3	／願 ／弥陀仏	
64	779	135-450	石仏(地蔵)		道路脇側溝表採	頭部	高さ6.7×幅4.3×厚さ3.7		
	780	135-449	石仏		表採	頭部	高さ10.1×幅7.2×厚さ5.8		
	781	135-439	石仏			頭部	高さ22.5×幅13.0×厚さ14.0		
	782	135-444	石仏(地蔵)	W11	石垣前(黄褐土上層)	頭部	高さ20.5×幅14.1×厚さ9.7		
	783	ko1874	石仏			頭部	高さ29.8×幅30.9×厚さ18.3		
	784	132-268	石仏(地蔵)	SX6423		上部	高さ(17.8)×幅(24.2)×厚さ8.7	願／	

図	番号	石仏番号 遺物番号	種別	出土地点	遺構/層位	部位	法量 cm （ ）は現存長	銘文	備考
	785	135-435	石仏（地蔵）	Z6	石垣外	脚、右肩	高さ(20.1)×幅(25.2)×厚さ9.3		
	786	132-93	石仏（地蔵）	D8	表土	左下	高さ(21.6)×幅(14.3)×厚さ14.5	／女	
	787	135-436	石仏	Z6	石垣外	首から下	高さ(20.2)×幅(22.3)×厚さ9.0	山口東子	
	788	132-76	石仏（地蔵）	D8	表土	首から下	高さ(29.4)×幅26.8×厚さ11.0	妙喜禅定尼 弘治三丁巳八月口日	
	789	135-454	石仏	Z9		蓮華座	高さ(10.2)×幅(8.2)×厚さ5.8		
	790	ko48	石仏（地蔵）			光背	高さ49.8×幅23.8×厚さ5.5	真忠禅定門 「 」元年十一月廿六日	
	791	132-310	石仏（「手脱」部）	K13	表土ガラ 石混土	右下部	高さ(29.6)×幅(29.2)×厚さ7.0	良珍／	
65	792	ko1832	石塔			台座	高さ9.3×幅25.5×厚さ24.6		
	793	ko788	石塔			台座	高さ9.2×幅26.3×厚さ25.6		
	794	ko914	石塔			台座	高さ9.5×幅28.0×厚さ27.6		
	795	132-87	石塔	G12・13	表土砂利 石混土	台座	高さ8.7×幅(19.3)×厚さ(14.1)		
	796	132 32	石塔	E6付近	表採	台座	高さ9.7×幅(20.3)×厚さ(17.8)		
	797	132-96	石塔	D8	表土	台座	高さ9.0×幅(18.6)×厚さ28.4		
	798	132-293	石塔	J4	斜面崩落 土	台座	高さ11.5×幅30.8×厚さ(18.0)		
	799	132-250	石塔	J4	斜面崩落 土	台座	高さ9.8×幅32.3×厚さ(17.6)		
	800	132-327	石塔	K13	炭焼土層	台座	高さ8.4×幅(25.2)×厚さ(14.5)		
	801	132-89	石塔	D8	表土	台座	高さ11.0×幅(30.0)×厚さ(19.4)		
	802	132-277	石塔	SD6428	出土一括	台座	高さ14.8×幅(26.4)×厚さ(10.0)		
	803	132-45	石塔	B6付近	表土	台座	高さ(11.4)×幅(24.2)×厚さ(11.4)		
66	804	132-238	石龕	D16	表土	笠	高さ18.2×幅(47.4)×厚さ40.3		
	805	ko794	石龕			笠	高さ(14.0)×幅(60.7)×厚さ(33.3)		
	806	132 164	石龕	D11・12	石だまり	笠	高さ17.0×幅(35.5)×厚さ(30.9)		
	807	132-341	石龕	B8 SD6421	上層	側板	高さ(27.7)×幅(38.7)×厚さ9.4		阿弥陀像を半肉彫し光背を線刻
	808	132-247	石龕	J4	斜面崩落 土	側板	高さ(26.8)×幅(39.8)×厚さ7.0		舟形光背を線刻
	809	132-195	不明				高さ(12.1)×幅(16.2)×厚さ(3.8)		灯籠火袋の一部か、蓮華座を彫る。
	810	132 358	不明	F6付近	II層	不明大型石塔	高さ(14.0)×幅(12.8)×厚さ(7.9)	／鳥居形／	尖・金彩色残存
	811	135-652	不明	LV11	石垣外褐色粘質土	台座	高さ(3.8)×幅(15.3)×厚さ(8.2)		宋・金彩色残存
	812	132-338	灯籠	SK6434	黒色土層	笠	高さ12.5×幅24.3×奥行16.0		二段菱形透かし
	813	135-468	灯籠		表採	笠	高さ13.4×幅（14.2）×奥行（14.0）	真／	
67	814	135-155	台座	Z4・5	階段横出面	台座	高さ14.1×幅43.3×奥行32.8		
	815	132 251	台座	K5付近	表土～II層	台座	高さ28.4×幅（34.9）×奥行（26.7）		
	816	ko785	台座			台座	高さ(2.5)×幅(32.2)×奥行(20.0)		複弁反花、六角形
	817	ko944	台			台	高さ18.9×幅24.0×奥行14.8		上部に6ヵ所穴あり。
	818	ko2001	仏花瓶		表採	花瓶	高さ(21.2)×径15.6		
	819	135-459	仏花瓶		表採	花瓶	高さ(14.6)×径12.5	山口禅定	
	820	ko2002	仏花瓶		表採	基礎部	高さ28.7×幅9.7×奥行5.1		花瓶を浮彫りにする。

区	番号	石仏番号	種別	出土地点	遺構/層位	法量 cm （ ）は現存長	備考
68	821	132-275・496	各部	BC	階段横表土	口径17.6×高さ8.8	3足付
	822	132-10833 他	盤（香炉）	F16	炭焼土直上	口径22.5×高さ17.1	体部外面に「南無阿弥陀仏、七代上人真慶、□□仏(弥陀仏」の銘あり。
	823	132 12908	火舎	G15	黄褐色土、炭土灰混土	口径21.0×高さ(20.0)	下部にススが付着している。
	824	132 15309	火鉢	B8・9 SK6434	黒褐色土 粘混土	口径27.2×高さ12.8×底径16.0	
	825	132-8996	火鉢	J14	石垣直上	口径23.0	内面に突起状に3ヵ所を掘り出す。

図	番号	遺物番号	種別	出土地点	遺構/層位	法量 cm （ ）は残存長	備考
	826	132-17879・[illegible]	火�exp	H14-F15	炭焼土層	高さ11.5	
	827	86-799・803・6201	盤	T10	溜桝	幅16.9×高さ17.2	体部外面に「寺・口・水」などの文字が彫られる。
	828	86-2480	鼎脚	T10	溜桝	口径32.2×高さ19.6	3足付
	829	86-2505	鼎脚	T10	溜桝	口径29.0×高さ22.3	3足付
	830	86-14836	火鉢	P5	焼土炭	口径32.6×高さ25.5	3足付
	831	86-1112・16135	火鉢	T10	溜桝	口径29.1×高さ25.1	3足付
	832	132-14141	火鉢	F15	炭焼土	口径(26.7)×高さ(18.9)	足付
	833	86-17013	炉壁心			幅(18.0)×高さ(10.4)	
60	834	86-7727	バンドコ		耕土	長径22.9×短径7.1×厚さ3.2	楕円形、蓋
	835	86-5068	バンドコ	T10	溜桝	短径18.5×厚さ3.2	楕円形、蓋
	836	86-2422	バンドコ	T10	溜桝	長径26.4×短径17.3×厚さ2.9	楕円形、蓋
	837	132-22991	バンドコ	211	付近表土	長辺24.4×短辺16.3×厚さ3.5	長方形、蓋
	838	135-2582	バンドコ	T5	暗灰色土	幅20.8×奥行17.5×高さ14.9	D形
	839	90-1370	バンドコ		耕土	幅(19.6)×高さ15.7	楕円形
	840	86-2427	バンドコ	T10	溜桝	長径27.7×短径20.0×高さ16.5	楕円形
	841	90-1396	臼		耕土	幅20.0×高さ13.5	茶臼の上臼
	842	86-7014	臼			幅42.0×高さ12.6	茶臼の下臼
70	843	132-19787	長方形盤	J14	炭焼土	長辺23.7×短辺16.1×高さ6.8	器壁は薄く丁寧に磨かれている、底部是なし。
	844	135-2076	長方形盤	T11	石垣外炭焼色土	長辺30.9×短辺21.0×高さ6.2	器壁は薄く丁寧に磨かれている、底部是なし。
	845	132-17846	長方形皿	K13	表土	長辺(11.7)×短辺(10.8)×高さ5.0	器壁は薄く磨かれ、作りは843・844に似るが、底部回廊に足を削り出している点が異なる。
	846	132-22882	盤	E6	表採	高さ8.6×幅(16.6)×奥行(10.5)	不定形盤、足付
	847	90-1403	盤		耕土	高さ(13.0)×厚さ2.8	外面に「山・水ヵ」の文字を彫る、楕円または方形の大型盤と考えられる。
	848	132-16341	円形盤			径28.4×高さ8.6	是なし円部はノミ痕が粗く仕上げられている、外面に漆付着の上ない跡あり。
	849	132-4189	円形盤			径38.0×高さ5.3	足が削り出されている。
	850	132-11752	楕円形盤			短径34.3×高さ10.7	底部に4足が削り出される、外面は脱に線を細かく入れて仕上げる。
	851	86-801・802・999	水盤	T10	溜桝	口径38.0×高さ12.6×底径27.0	水抜きあり、底部は蓋箱底状に削られている、体彫外面に「桝・碗・盃」等の文字が彫られる。
	852	132-22949	水盤			短辺66.2×高さ12.2	導水盤、水抜き孔あり、呑水口が口状に削り出され、たまった水の上澄みだけ流れ出るように溝が彫られている。
71	853	135-6110	硯	SK6501	赤粒混暗色土	長辺5.9×短辺2.7×厚さ1.1	
	854	132-12791	硯			長辺10.2×短辺4.0×厚さ0.8	
	855	86-17012	硯			長辺(11.8)×短辺6.7×厚さ1.7	
	856	135-676	硯	P11	赤色粒混暗褐色土	長辺15.5×短辺7.2×厚さ(1.7)	
	857	86-2024	硯	T10	溜桝	長辺16.3×短辺4.8×厚さ2.0	
	858	132-3750	硯			長辺(7.7)×短辺5.4×厚さ1.7	
	859	86-14880	硯	P13		長辺5.0×短辺9.5×厚さ2.0	津部の厚みが薄い作りの硯で、よく使用し磨り減ったため破棄したと思われる。
	860	132-2937・2938	硯			長辺15.5×短辺(7.6)×厚さ(2.2)	
	861	132-8651	砥石			長辺(8.4)×短辺6.2×厚さ1.0	
	862	90-5830	砥石	H16	暗褐色	長辺7.9×短辺3.7×厚さ3.3	
	863	90-6328	砥石		近代溜桝	長辺7.6×短辺4.2×厚さ3.4	
	864	135-278[illegible]	砥石	T5 SK6488	暗灰色土	長辺7.0×短辺3.3×厚さ1.3	
	865	132-14071	砥石			長辺(6.4)×短辺3.2×厚さ1.3	
	866	132-20097	砥石			長辺10.4×短辺3.9×厚さ1.4	
	867	132-8438	砥石			長辺10.0×短辺3.5×厚さ1.9	

※ 銘文表記の□は欠字、［ ］は文字数不明のものを表し、／は石材欠損のため判読不明を表わす。

V　まとめ

敷地区画と建物跡

調査の結果、西山光照寺跡の中心部にあたる上段平坦部は、第132次調査区の南端で検出した区画溝(SD6421)を境に、南・北に大きく敷地が分かれ、また、上・下段の区画境には石垣がほぼ連続して築かれていることが判明した。しかし、寺院の構造上重要な寺域全体の範囲や、当時の参道・入口の位置等については、平坦部東側の下段部分や、西側の山間部が未調査のため依然不明であり、今後の調査課題としたい。

建物跡は、区画溝(SD6421)以南の南区側で3箇所、同溝以北の北区側で2箇所において検出した。しかし、礎石等の遺存状況が全体的に悪く、形が明瞭な建物を確認することができなかったが、およその範囲としては推定が可能であった。以下、各箇所で検出した建物跡についての概要をまとめる。

南区の南部(Aエリア)では、古い時期に掘立柱建物があり、建て替えて礎石建物(SB4450)となったと考えられる。SB4450の規模は、東西が推定約11m、南北が現状で10m以上である。

南区の中央西半(Cエリア)では、礎石の下に小砂利を詰めて固めた構造をもつ礎石建物(SB4407・4409)を検出し、規模は南北が推定約13m、東西が推定10m前後あり、東隣に地下式倉庫(SP4418)を伴う礎石建物(SB4408)がつながる形となっていたと考えられる。

南区の北西部(Dエリア)の礎石建物(SB4406)は、後世の庵跡と考えられる。当エリアは後世の削平が著しく、朝倉期の建物跡が全く検出できなかったが、北区の南端(Gエリア)で検出した建物(SB6425)が、朝倉期に存在した建物の北面と考えられる。このSB6425は、周囲より約0.3m高く造成された土台に構築され、土台北面の石組みは比較的大きな石で強固に築かれることから、恐らく、寺院の中核的な建物の可能性が考えられる。この建物推定範囲の南西に、朝倉期まで遡る溜枡状の石組み遺構(SX4426)が存在する。遺存状況が悪く明確でないが、重要な建物の一角に池が存在していた可能性も考えられ、SB6425を取り巻く空間については、今後の検討課題として挙げられる。

北区の南半部(Hエリア)では、南西に礎石建物(SB6426)、南東に礎石建物(SB6455)、北西に礎石建物(SB6429)の3棟の配置が推定される。これらの建物は、南北から東西にL字形に棟が繋がる可能性が考えられる。北西のSB6429の規模は、南北21.2m、東西10.6mと推定され、当寺院跡の中で最大である。南東のSB6455は、遺存状況が悪く形は不明だが、井戸(SE6428)が南東に隣接し、北東角に洗い場の可能性のある石組・石敷遺構(SX6441)、西端に甕埋設土坑(SK6435・6436)等を備えており、台所的な性格の建物と考えられる。

北区の北半部(Iエリア)では、建物の四隅が分からず形は不明であるが、大きな礎石を持つ建物(SB6490)がみられ、南に井戸(SE6483)、南西に火炉(SX6485)が存在する。SB6490の主軸は、他の建物が区画溝(SD6421)と一致する方向なのに対し、上・下段境の石垣に平行する方向で築かれ、主軸方向に大きな違いがみられ、他の建物と同時期の構築ではない可能性が考えられる。また、SB6490の推定範囲内で、瀬戸・美濃焼茶入・建水、越前焼擂鉢、鉄鍋、漆器皿を底面に納めた後に埋めたとみられる土坑(SK6491)を検出した。遺構の性格は不明であるが、土坑の時期が、瀬戸・美濃焼が16世紀中葉以降の製作年代であり、これらを一定期間所持した後に埋めたとすると、まさに朝倉氏の滅亡する天正元年(1573)頃の可能性が考えられる。

遺物の出土状況からみた敷地・建物の特徴

遺物全般の出土状況をみると、後世の削平が著しい南区東半（第87次調査区）と、南区上段北西（Dエリア）は、遺物包含層そのものが削平で失われたためか、出土量がかなり少ない。これ以外の地区では、南区上段南～中央西半（A～Cエリア）、北区南半（G・H・Jエリア）で遺物出土量が多いのに対し、北区北半（I・Kエリア）は少ないことが特徴としてあげられる。また、火事場整理の際、廃材の廃棄に利用されたと考えられる南区の地下式倉庫（SF4418）、北区の下段南東部の石垣下では、遺物が圧倒的に多く出土する傾向がある。

調理具の越前焼擂鉢・鉢の出土分布をみると、南区の建物（SB4450）の北西側と、北区の南東側の建物（SB6455）の付近にかなり集中する。このことから、調理を主に行う台所が、南・北区の両敷地に存在し、台所としてSB4450とSB6455の2棟が有力と考えられる。日常食膳具の碗・皿類の器種が殆どの白磁・染付では、越前焼擂鉢・鉢とほぼ同じ範囲に分布しながらもやや広がりがみられ、北区側では、建物（SB6426）付近や、北区北半側の井戸（SE6483）付近にまで分布の集中域が広がる。このように遺物が全般的に多く、その中でも調理具・食膳具が集中する、南区（Aエリア）にあるSB4450と、北区南半（Iエリア）にあるSB6455・SB6426等が、寺院の日常生活空間となる庫裏に相当する建物の可能性が考えられる。

その他、南区（Cエリア）の建物（SB4407・4408・4409）付近は、座敷飾りに使われる青磁等の優品や、茶器・花器が最も集中する場所であり、ここで使用された遺物が主に地下式倉庫（SF4418）内に掻き落とされたものと考えられる。なお、この地区から坩堝など金属加工を伺わせる遺物が出土している。

北区北半（I・Kエリア）の建物（SB6490）付近は、全体的に出土遺物が少ないエリアであり、日常生活空間からやや離れた場所と考えられる。しかし、貯蔵具の越前焼大甕、信楽焼壺、茶壺の華南褐釉壺、朝鮮製碗はこの地でまとまって出土し、先述のような茶器等が一括出土した土坑（SK6491）や、繭形分銅という極めて特殊な遺物が出土した場所である。

敷地の造成年代と変遷

今回の発掘調査は、上層遺構面までが調査の対象で、下層遺構については殆ど不明である。その中で、上層遺構面の造成上をたち割り、一部下層を調査したのが、南区Qライン・23ライントレンチ、北区Nライン・7ライントレンチ、及び、第144次調査トレンチ1・2である。そのうち、南区Qライントレンチ出土の土師質皿が、南区側の下層遺構（上層まで造成する直前段階）の年代を考える上で重要で、その特徴から16世紀初頭（第1四半期）の時期が考えられる。これに対し、北区7ライントレンチの造成土下（旧表土層）より出土した土師質皿の特徴は朝倉氏の最終段階に近いものであり、明らかな差がみられた。

上層の出土遺物をみると、北区北半側では、越前焼や瀬戸・美濃焼等にみられるように16世紀中葉以降の朝倉氏の滅亡直前期の遺物で構成しているが、南区から北区前半では、16世紀中葉以降が多い点は同じであるが、越前焼、瀬戸・美濃焼等の占いタイプも一定量出土する。

よって、当寺院の大規模な造成が行われたのが16世紀初頭から前葉で、少なくとも南区側の造成が先行する。その造成範囲は建物の軸方向が一致する北区南半までで一旦止まると考えられ、北区北半側は16世紀中葉にさらに拡張された可能性が指摘できる。

Ⅵ　考察

西山光照寺の石造物からみた寺院変遷

はじめに

西山光照寺跡は、発掘調査面積・遺物点数・石造物調査数などから、これまで一乗谷最大規模の寺院跡と評価されてきた。しかし考古学的成果が豊富な反面、朝倉氏滅亡後、福井市内へ移転してからも度々大火や戦災・震災を受けてきた経緯から、戦国期に遡る良質な文献史料が伝わっておらず歴史的には未解明の部分も多い。本稿では、一乗谷を代表する大規模寺院西山光照寺の歴史的変遷を整理するとともに、文献資料からは捉えにくい寺院活動の実態を、光照寺の特徴ともいうべき豊富な石造物遺物から読み取りたい[11]。

1．西山光照寺の前身と阿波賀について

西山光照寺の創建については、後世に作成された由緒に拠るしかなく、『寺院所有物明細帳』（明治33年作成）には、

開基及ヒ中興之由緒ヲ討スルニ、大同年中伝教大師ノ開基、本尊阿弥陀如来ハ多田満仲ノ念持仏ナリ、桓武天皇ノ御宇ニ伝教大師朝ヲ奉ジ、蜻蜓洲中ニ箇（近江比叡山東塔成檀院、伊予国灯明寺及び当寺）戒檀院ヲ置キ一乗円頓戒ヲ普ネク庶民ニ授与セラル故ニ西山一乗院ト号ス（当時足羽一乗谷ニ在リ、故ニ院号ヲ以テ地名トス）、文明三年朝倉敏景公城ヲ一乗谷ニ築ク、時ノ住職盛舜上人戒徳高カリシカバ公ノ帰依浅カラズ、其祖鳥羽豊後守将景公（法名光照寺殿月甫宗掬座元大居士）ノ菩提ノ為メ一乗院ヲ再建シ寺領（田畑一里四方）ヲ附シ寺号ヲ改メ祖ノ法号ニ依テ西山光照寺トナシ武運長久ヲ祈リ菩提ヲ弔ラハシメタリ、

と記される。これによれば、光照寺は鳥羽将景（光照用公居士）の菩提を弔うために再興された盛舜上人ゆかりの寺とされるが、内容については若干検討が加えられ、初代孝景の再建ではなく、盛舜上人の活動時期や朝倉氏の状況からみて2代氏景かそれ以降の当主による再興と考えられている[12]。鳥羽将景は、朝倉孝景の叔父で、孝景が将景の娘（円渓真成大姉）を妻に嫡子氏景が生まれていることから、孝景の舅で氏景の外祖父にもあたる人物であった。しかし、長禄3年（1459）反孝景派として堀江方（守護方）に属して戦い、和田の合戦で親子ともに討死した。このような経緯からすると敵対し没落した家であるが、朝倉当主との近い間柄が影響してか鳥羽氏は断絶することなく、将景の菩提を供養するため光照寺が再建されたことになる。

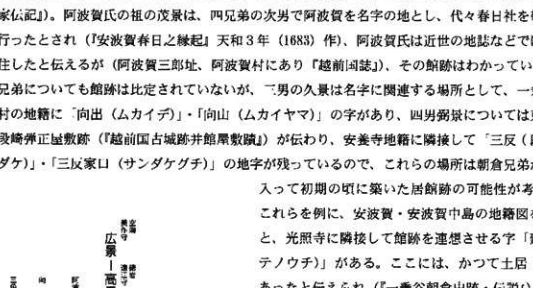
上記の明細帳では、開基を最澄とし西山一乗院を始まりとするが、草創期については他の史料から追証できず、『越前国名勝志』や『南越温故集』等の近世地誌類でも「開基不詳、中興盛舜」と書かれるのみで明らかにできない。しかし、光照寺の旧本尊とされる阿弥陀如来立像は平安末期の作とされ、また、西山光照寺の末寺全龍寺の本尊であった聖観音菩薩は平安時代の作とされることから、これらを安置した光照寺の前身となる寺があったと考えられる。そこで、光照寺が建てられた「阿波賀」という場所について考察することで、まずは光照寺の立地環境と再興以前の様子について整理したい。

一乗谷を含む宇坂荘は、福井平野南東の山間部に位置し足羽川とその支流の谷間に拓かれた荘園で、阿波賀は足羽川が福井平野へと流れ出る荘域の最西端にあたり、戦国期には倉が建ち並び市の開かれる

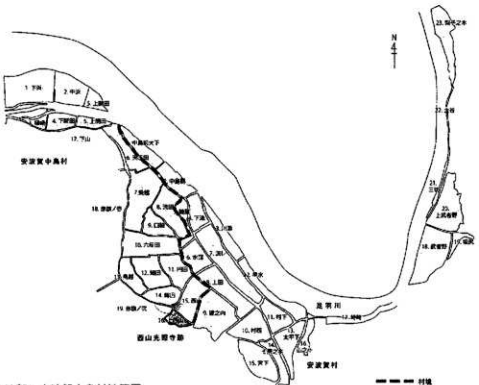
物資集散地として城下町一乗谷の中で最も繁華な場所であった。平安中期、治暦4年（1068）には荘園鎮守の春日神社が勧請されたと伝わることから（『阿波賀由緒書』）、朝倉氏が一乗谷を拠点とする以前から荘園の中心的場所として機能していたと考えられる。阿波賀春日神社は朝倉氏の滅亡とともに一時退転し元禄10年（1697）に再興されたため、光照寺と同じく戦国期以前をうかがい知る史料が伝えられていないが、神主家の墓所は江戸時代を通じて現在まで光照寺跡の寺域内にあり、光照寺過去帳の『士族檀中過去帳』にも「阿婆賀吉田氏」として吉田日向守定俊（宝永7年没）ほか神主親族の戒名が記されている。また、春日神社背後の山は『阿波賀由緒書』に「春口山、北は金語谷、南はシやうしゆん谷、ミねハ鉢伏ミねをかきつて、」とあって、光照寺の寺域南側に接する金吾谷までを神域としており、春日社と光照寺は阿波賀の西側にある山を二分して隣り合う位置関係にあったことがうかがえる。これらは近世の史料ではあるが、むしろ両者の成り立ちを伝えているとも思われ、もともとは春日神社と光照寺は宇坂荘鎮守社と別当寺のような関係であった可能性が考えられる。

2．阿波賀氏と西山光照寺

朝倉氏の一乗谷への進出は朝倉大功氏景（1339～1404）の時代には始まっており、氏景は一乗に熊野社を勧請し、弟の茂景・久景・弼景たちがそれぞれ阿波賀・向・三段崎を称したと伝えられる（『朝倉家伝記』）。阿波賀氏の祖の茂景は、四兄弟の次男で阿波賀を名字の地とし、代々春日社を敬い神事能を行ったとされ（『安波賀春日之縁起』天和3年（1683）作）、阿波賀氏は近世の地誌などでは阿波賀に居住したと伝えるが（阿波賀三郎址、阿波賀村にあり『越前国誌』）、その館跡はわかっていない[6]。他の兄弟についても館跡は比定されていないが、二男の久景は名字に関連する場所として、一乗谷奥の鹿俣村の地籍に「向出（ムカイデ）」・「向山（ムカイヤマ）」の字があり、四男弼景については東新町村に三段崎弾正屋敷跡（『越前国古城跡井館屋敷蹟』）が伝わり、安養寺地籍に隣接して「三反（段）家（サンダケ）」・「三反家口（サンダケグチ）」の地字が残っているので、これらの場所は朝倉兄弟が一乗谷に入って初期の頃に築いた居館跡の可能性が考えられる。これらを例に、安波賀・安波賀中島の地籍図をみてみると、光照寺に隣接して館跡を連想させる字「建之内（タテノウチ）」がある。ここには、かつて土居（土塁）があったと伝えられ（『一乗谷朝倉史跡・伝説』）、一辺100mを超える方形区画で朝倉義景館に匹敵する規模の館跡と推定される。残念ながら阿波賀氏の館跡との伝承はないが、西側の山は「金吾谷」と呼ばれ朝倉宗滴の屋敷があったという伝承がある。他にも「門口」の別称が伝わる字「村西」や、春日社のある字「宮ド」などの山際の敷地は、微高地で水害に強い場所ということで武家屋敷などの主要施設があった可能性が考えられる。これらのうちから阿波賀氏の居館跡を確定することはできないが、本拠を築くのに相応しい場所であり、15世紀初頭には阿波賀氏がいずれかの場所に拠点を築き、それを外護者として春日社や光照寺があったと想像される。



挿図24　朝倉・阿波賀氏系図
『朝倉家伝記』、『日下部氏朝倉系図略』によって作成した。



挿図 25　安波賀・安波賀中島村地籍図

安波賀・中島村は、「流田・下流・流レ・早水・水窪」などの地字名にも表れているように繰り返し足羽川氾濫の被害を受けた土地であるが、しかし同時に、足羽川から取れる魚鳥の恵みや、農業用水の水源（取水口）といった足羽川の恩恵を最も享受する土地でもあった。また「川港」（『一乗谷朝倉史跡・伝説』）の伝承があるように、河川交通、水運・陸運流通の結節点として大きな利権を生む場所であったといえるだろう。改めて光照寺の立地についてみてみると、安波賀・中島両村の平地のほぼ中央部にあたり、足羽川から山麓まで奥行のある洪水の被害を最も受けにくい場所といえる。寺域も背後の谷に平場を削り出して段状に広がる敷地と、左右の山裾に翼を広げるように一段高い敷地が広がり、門前にも十分な敷地を確保している。面積・立地ともに最良の場所であることは間違いなく、「建之内」という政治施設に隣接していることからも阿波賀の権益を有する者にとってその権威を象徴する意味を持つ寺院であったと想像される。

以上のように、阿波賀は早くから朝倉氏が血族を配して地盤を固めた土地であったが、長禄3年(1459) には、一族で敵味方に分かれ争う合戦の地となってしまう。「日下部氏朝倉系図略」には「二月廿一日阿波賀城戸口合戦、同八月十一日和田合戦、」とみえ、「安波賀春日之縁起」によれば、阿波賀城戸口の戦いで軍勢が濫妨し火を放ったため、神社や町屋がことごとく焼失してしまったという。また、和田庄の総社和田八幡宮の縁起書『和田八幡宮縁起書』にも「兵八千五百を率いて阿波賀城戸口合戦において力戦し大いに破り、」と記される。この時の阿波賀城戸口については、その位置や構造が明らかでないが、阿波賀の集落はこの戦闘によって大きな被害を受け、光照寺も兵火にかかった可能性が高い。これに引き続き同年8月11日には和田庄で合戦となり、鳥羽将景をはじめ朝倉庶流の多くが討ち死した。『大乗院寺社雑事記』（長禄3年8月18日条）によれば、「河口庄より徳市法師注進状到来。去る十一日暮ほどに、歴形方（守護斯波方）と甲斐方との合戦に及ぶ。歴形方に打死の輩は、堀江石見兄弟父子五人・朝倉豊後守（鳥羽将景）父子・同新蔵人（阿波賀）・〈遠江入道子〉同掃部・平泉寺大性院・

興原寺成舞坊、その外雑兵その数を知らずと云々、甲斐方には本庄（堀江）・細呂宜（堀江）・朝倉孫左衛門、皆以て薄手と云々」とあり、守護方と甲斐方の戦いとしながら、内実は越前の最有力国人であった堀江氏と朝倉氏がそれぞれ一族分かれて戦い大きな被害を出している。この結果、勝利した朝倉孝景の痛手は軽く、一方で叔父の鳥羽将景父子、阿波賀新蔵人良景、朝倉掃部助景契など有力な朝倉庶流は一掃されることとなった。

このように、朝倉孝景が一族内での主導権を確立する契機ともなった和田合戦であるが、和田庄といえば掃部助景契の祖父朝倉頼景が結城合戦の恩賞として配領した土地で、阿波賀と同じく朝倉庶流が根拠地としていた。『和田八幡宮縁起書』[6]には、西山光照寺の阿弥陀如来像にまつわる逸話が記されており、それによれば、東郷村西山の天台律宗興祥寺の住持某阿闍梨の夢に異人が現れて、和田の神であると名乗りお告げをしたので、目覚めて戸を開けてみると石の上に光明輝く仏像が立っており、阿闍梨は感涙して仏像を持ち帰り西山で敬うことになったという。縁起では寺の所在を東郷村とし、また寺名を興祥寺と誤っているが、この縁起に登場する仏像こそ多田満仲の念持仏という由緒を持つ西山光照寺本尊の阿弥陀如来像にあたると考えられ、これまで多田満仲と光照寺の関係は不明であったが、多田満仲が建立した和田八幡宮の神がもたらした仏像とする八幡宮縁起によって、光照寺本尊の由緒が生まれた背景がうかがえる。史料では光照寺と和田八幡宮を具体的に結びつけるものはなく、光照寺本尊の由緒も注目されることはなかったが、長禄の合戦という観点からみてみると、ともに阿波賀氏と掃部助家という朝倉庶流の所縁の地にあってその外護を受けた社寺であったが、合戦の兵火で衰微し、その後朝倉氏によって再興されたという共通項がみえてくる。

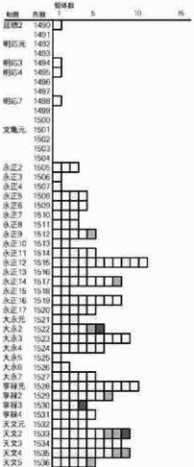
このような視点から、鳥羽将景の菩提を弔うため再建されたという光照寺再興の由緒を読み取ると、そこには名前は書かれていないが阿波賀氏も含めた長禄の合戦で戦死した朝倉氏庶流を鎮魂する意図があったと考えられる。文明11年（1479）の「清水寺再興奉加帳」に長禄の合戦で戦死した阿波賀新蔵人良景の後継とされる朝倉新蔵人景忠の名前がみえることからもうかがえるように、孝景は一度敵対し没落した一族を放置することなく、鳥羽・阿波賀・掃部助家を速やかに再興して新しい家臣団へと再統制していったのであり、このような朝倉庶流の再興に合わせて、過去の遺恨を流して戦死者を供養するため光照寺再建が進められたと考えられる。

3．西山光照寺の再興と石造物

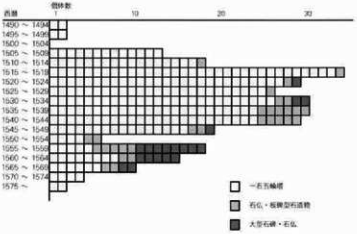
ここまでは光照寺の再興に至るまでを推察したが、再興された後の寺院活動の変遷については、石造物銘文をもとに考察していきたい。現在までに調査採録された光照寺の石仏・石塔類は2,011点を数えるが（表5「石塔・石仏種別一覧表」）、このうち紀年銘があるものは292点である。紀年銘は没年や供養した年を示すものであることから、実際に石塔が造立された時期とはズレがあり、また、複数人の供養するため紀年銘が複数刻まれるもの（表14「石造物銘文集成」番号Ko34・Ko43等、以下、同表から引用する際は番号のみ載せる）について考慮しなければならないが、それでも史料が乏しい状況においては、紀年銘に基づく紀年分布データが光照寺の盛衰を読み取る上で最も有効なデータといえる。そこで、紀年銘をもとに年次別分布グラフ①・②を作成した。①は紀年銘を単年ごとに集計したもので、②は造立時期について幅をもたせて読み取るために、5年ずつに区切って集計したものである。なお、グラフは五輪塔、石仏・板碑型石造物、大型石造物の種別がわかるよう表し、紀年銘が複数あるものについては造立数が捉えやすいよう新しい年紀のみを採って集計した。

表 13

年次別分布グラフ①



年次別分布グラフ②



（1）年次別分布グラフ概観

まず、①のグラフよれば、光照寺の石造物の中で最古の紀年銘のものは、延徳２年（1490）の一石五輪塔（KOT1366）である。光照寺が再興された時期は明確でないが、1500 年以前のものは４点と少なく、永正２年（1505）から増加することがわかる。このことから、永正年間以前は同じ場所に光照寺の前身となる寺院があったとしても石塔・石仏を造立することはほとんど行われていなかったことがうかがわれる。なお、光照寺は慶長 11 年（1606）に結城秀康より寺領を賜わり、同 16 年（1611）に堂宇が完成して現在地（福井市花月１丁目）へ移転したとされるので、調査を慶長年間までに区切り、慶長９年（1604）の石塔（KOT470）を下限としているが、墓地には先述のとおり春日神社神主家の墓石があり、わずかに近世期に造立された石造物も混在する。しかし、グラフ①・②を概観すれば、光照寺の石造物造立期間は、永正２年（1505）から朝倉氏が滅亡する天正元年（1573）で区切ることができる。グラフ①では天文９年（1540）が紀年銘個体数のピークとなっているが、この傾向は昭和 47 ～ 49 年に実施された一乗谷石造遺物予備調査でも現われており、その後の調査で採録点数が増えても変わっておらず、一乗谷全体の石造物造立時期の特徴といえる。予備調査の成果をまとめた『一乗谷石造遺物銘文調査報告書Ⅰ』では、天文年間に個体数が増加する理由として、４代孝景の時代に一乗谷で多くの寺院が建立され、朝倉氏の地位も幕府の御供衆から御相伴衆へと上昇していることから、政権が安定し熱心に造寺・宗教活動ができる環境にあったことを挙げている。しかし、天文９年が個体数のピークとなっている明確な理由は不明である。

（2）石造物数推移に表れた光照寺の寺院活動の盛衰

このような一乗谷全体で石造物を捉えた場合に共通している傾向以外に、グラフ②からは光照寺の寺院活動の盛衰が、グラフ推移となって表れたと考えられるポイントがある。個体数を5年ごとにまとめてみた場合、永正2年（1505）から増加し、永正12年～同16 年（1515 ～ 1519）にピークがあることがわかるが、永正2年（1505）も永正12年（1515）も、真盛門下の活動と光照寺にとっては重要な年といえる。永正2年は真盛上人の高弟として越前での布教に貢献した盛全（岡西光寺住持、西教寺2世、永正2年没）が上人号を許された年であり、また、永正12年は西山光照寺中興の祖である盛舜が上人号と香衣の勅許を申請した年にあたる。『守光公記』（永正12年閏2月1日条）によれば、光照寺は真盛上人門下の寺であるが法勝寺から円頓戒を受けその末寺となったとして法勝寺周興を仲介に勅許を願ったとされるが、盛舜は翌永正13年（1516）11月28日に亡くなっており、朝廷から上人号の勅許を得られたかどうかについては確認できない。しかし、この時期に光照寺の寺院活動が興隆し、石塔を立てて供養するという行為が盛んに行われるようになっていたのは間違いなく、大永2年（1522）に盛舜上人七回忌供養として立てられた高さ2mを超える石碑（Ko340）も、いわば光照寺の寺勢拡大の表れであり、真盛の教えを広め寺院の格式向上を目指した盛舜の功績を称える意味があったと考えられる。

一方で光照寺跡には盛舜の七回忌供養碑は残っているが、没年を刻んだ墓石は見つかっていない。盛舜・盛全の墓石と思われる石塔（S604 ・S627）は、光照寺と同じく真盛門下の寺院として多くの石造物が立てられた盛源寺跡に現存しており、これらは大きさや形状は平均的な一石五輪塔で、石塔の外見には盛舜・盛全の墓石という特殊性は表われていない。

『西山円頓戒血脈譜』（光照寺蔵）によれば、光照寺の法統は中興の祖盛舜上人から真秀－真儁－盛玄－真重－忠運－真慶と続いており、光照寺の石造物銘文にも盛舜上人（Ko340・Ko224）や5代真重（Ko224）、7代真慶（図版番号822）らの名前がありその存在が確認できる。しかし、盛全や盛舜は石造物銘文以外に一乗谷での具体的な事績がわからず、『真盛上人往生伝記』では両者は岡ノ西光寺の住僧と記されている。長享2年（1488）8月に真盛上人が一乗谷を訪れた際も、浄土宗の安養寺で説法を行っていることから、この頃にはまだ一乗谷に真盛門下の拠点となる寺院がなかったことが考えられる。石造物造立数の推移からも、明応4年（1495）に真盛上人が没した後に一乗谷への進出は本格化し、光照寺や盛源寺等が真盛門下の寺院として再建・新造されていったことがうかがえ、石造物造立ピーク時には、光照寺は一乗谷最大宗派の寺院として最盛期を迎えていたといえるだろう。

（3）大型石造物造立とその背景

引き続きグラフの推移をみてみると、永正12年以降はグラフ①のように単年ごとでは波がみられるが、グラフ②では天文18年（1549）頃まで安定した推移を示し、その後、個体数が減少して谷間を描くが、天文24 年～永禄2年（1555 ～ 1569）からは再び増加を示す。光照寺の活動に起きていた何らかの変化が石造物の造立数に表れたと考えられるが、史料からは寺院活動の変化を追えないため銘文からその変化の捉えようとするならば、その端緒は天文24 年（1555）に立てられた板碑型石碑（Ko224）にあると思われる。これは自然石の片面に三尊種子と真盛上人・盛舜上人の名を彫り、もう片面には大日種子と光照寺5代住持の真重上人が天文24年4月に開眼供養の導師を務めたとする銘文が刻まれる石碑で、現在も光照寺敷地のほぼ中央、寺の入口跡の横という目立つ場所に立っている。天文24年という年は、先述の盛舜上人七回忌供養碑が立てられてから33年の節目でもあるので、銘文の「開眼供養」は単に

石碑を立てたことを意味しているのではなく、この時に大規模な法要が執行されたことを記念して造立された可能性が考えられる。光照寺にはこのような自然石の大岩に文字を刻んだタイプの石造物がいくつか現存し、特に寺跡の北東隅（SX6494）や西側山中、東端（Ko338）にあるものは「結界石」と呼ばれて寺域の境界を表すものと考えられてきた。これらの石碑には「南無阿弥陀仏」の六字名号が大きく刻まれ、紀年銘から立てられた時期は異なるものの、いずれも光照寺の宗教空間を荘厳する効果があったと考えられる。特に北東隅の名号石碑は、名号の右側に「名号施主宇野三郎五郎名乗職近」、左側に「戒名真玄　永禄二庚申十二月吉日」と彫られており、宇野三郎五郎職近が施主となって永禄３年（1560）に立てたものと考えられるが、この石碑は光照寺北側の巨石を積んだ石垣に沿わせて組むように立てられており石垣の一部ともなっているため、その造営時期を推察する上で重要な手掛かりとなっている。また、刻字にはかすかに黒漆が残っており、造立時には文字に漆を接着剤として金の彩色が施されていたと推定され、寺域を守るように北東鬼門に向かって立てられた石碑は、光照寺の景観を彩る壮麗な記念碑となっていたと想像される。

現在、光照寺跡正面に立ち並ぶ37体の大型石仏のうち紀年銘等から造立年代がわかるものは18体あり、このうち天文24年造立の三尊石碑より前の紀年銘を持つものは２体（Ko19・Ko37）しかなく、残りはこれ以降に立てられたものである。詳しく年代をみてみると、弘治３年（1557）のものが１体（Ko8）、永禄元年（1558）が４体（Ko2・Ko3・Ko12・Ko15）、永禄２年（1559）が２体（Ko26・Ko28）、永禄３年（1560）が６体（Ko14・Ko24・Ko29・Ko30・Ko34・Ko187）、永禄10年（1567）が１体（Ko33）、永禄年間のものが２体（Ko1・Ko10）となっている。紀年銘からは、大型石仏の多くが天文24年（1555）から永禄３年（1560）という比較的短い期間に集中して造立されたことがうかがえ、グラフ②からもこの時期に大型石仏が増えている傾向が読み取れる。これらがどのような事情で造立されたのかをうかがい知る例として、阿弥陀如来像（Ko24）と十一面千手観音像（Ko14）がある。Ko24には「道秀大法師第七回忌、永禄三年四月十四日施主玄祐法師」と銘文があり、永禄３年（1560）４月に玄祐法師が施主となって道秀大法師の七回忌に立てられた石仏であることがわかるが、Ko14にも「道秀大法師七廻忌、四恩法界…」と刻まれることから、同じく永禄３年に道秀大法師七回忌供養として立てられた石仏と考えられる。道秀大法師については『西山円頓戒血脈譜』に名前がみえず光照寺との関わりは不明だが、一乗谷の真盛門下の寺院に大きな影響力を持った人物であったようで、盛源寺にも道秀大法師の名を刻む石造物が複数みられることから、道秀の７回忌にあたる永禄３年にかけて大型石仏を造立し顕彰・供養しようという動きが盛んであったことがうかがえる。残念ながら、このような大型石仏を造立する際の具体的な流れや費用捻出について詳らかにすることができないが、これらは光照寺の敷地内に無計画に立てられたものではなく寺院全体の景観に関わる重要な造形物であることから、長期間かけて施主を募り、石仏造立のための敷地造成等を伴って完成した事業であることが想像される。光照寺は永禄２年（1559）にはすでに勅願寺となっていたことが『御湯殿上日記』（正月27日条）にみえることから、この頃には寺格向上も果たされ名実ともに一乗谷で最も権勢を誇る寺院となっていたのであり、盛舜上人七回忌供養碑等と同じく、永禄年間にも光照寺ゆかりの高僧の法要を契機として大規模な奉加・勧進活動が勧められたものと思われる。このようなことから、光照寺の大型石造物造立は、法要や堂塔の新築・修築・造営等と並行して勧められたものと考えられ、往時の繁栄の様子をうかがい知る貴重な証といえるだろう。

おわりに

ここまで、光照寺の歴史変遷について、由緒・伝承・地籍図や石造物銘文等の資料をもとに可能な限りの考察を試みた。光照寺はその立地や規模から鑑みて、その前身は宇坂荘阿波賀にあって春日社と並んで荘園を鎮護する寺院であった可能性が考えられる。朝倉氏の一乗谷進出により一族の阿波賀氏等が外護者となったと推察されるが、長禄の合戦の中で阿波賀も戦場となり光照寺も兵火を受け衰退し、その後、朝倉氏の城下町整備や一族再編に合わせて、鳥羽将景や阿波賀良景ら長禄の合戦で戦死した一族の菩提を弔う寺院として、また当時、熱狂的信者を集め、急速に越前に広まった真盛上人の教えを受ける寺院として再興されたと考えられる。

光照寺の石造物から再興後の寺院活動の変遷を読み取ると、年次別分布グラフが示す永正 12 年～同 16 年（1515 ～ 1519）のピークは、中興の祖盛舜上人の活動が寺勢拡大・寺格向上へと結実し、造立数の増加として表れたものと考えられる。また、盛舜上人七回忌や道秀大法師七回忌にあわせて造立された大型の石碑・石仏からは、光照寺が大法要を契機として勧進し寺院造営を図っていたことがうかがわれ、寺院の正面や石垣に配された大型石造物は、光照寺の権勢を象徴する記念碑的意味を持っていたといえるだろう。

最後に、光照寺の石造物の多くは今も現地にあるが、破損や風化が進み、平成 16 年の水害により西側の山で土石流が発生したため倒壊し埋没したものも多い。一乗谷の人々の葬送・供養のあり方、石塔を立てることの意味、一乗谷の都市としての盛衰と寺院の関係については、石造物調査の集積データをさらに読み込み分析していく必要がある。そのためには、唯一の手がかりともいえる石造物を引き続き調査し保存していくことが重要である。

注 (1) 西山光照寺の石造物については、『一乗谷石造遺物調査報告書 I』1975 年、資料館発掘調査・整備事業概報『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 1995』、『同 1996』を参照。歴史については『西山光照寺物語』平成 17 年を参照。

(2) 佐藤圭「概説 一乗谷の宗教と信仰」『第 10 回企画展 一乗谷の宗教と信仰』平成 11 年

(3) 阿波賀氏の一乗谷での動静は史料上みえず、『大乗院寺社雑寺記』等では坂井郡大口郷の政所職をめぐる相論の中でみえる。

(4) 角鹿尚計「和田八幡宮と『和田八幡宮縁起書』について」福井市立郷土歴史博物館『研究紀要』第 16 号、平成 21 年

謝辞 西山光照寺に関する資料調査では、西山光照寺をはじめ、滋賀県西教寺、滋賀県実成坊、大野市蓮光寺の御協力・御高配を賜った。厚くお礼申し上げる。

表14 石造物銘文集成

所在地調査区域	石仏・造物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	1		石仏		不動明王	168+α	121.0		72.0	24.0			□金法師／妙□禅定門」妙□禅定尼」妙祐禅定尼朝霊童女永禄□年」妙□禅尼	舟形光背(大炎)	
Ko	2		石仏		釈迦如来	163+α	117.0		68.0	25.0	1558	永禄1	真橋上座住至浄上」願主祐善法師永禄元年」閏六月十五日	舟形光背、顔欠、頭光上部に宝塔、仏伝十体、両脇に種子あり。	
Ko	3		石仏		阿弥陀	174+α	117.0		72.0	24.0	1558	永禄1	永禄元年□月廿八日」道祐禅定門宗仲法師」妙忍比丘尼六親眷属等	舟形光背、種子あり。	
Ko	4		石仏		地蔵	166+α	110.0		69.0	24.0			□月法師□□□□	左上欠、舟形光背、頭光上部に種子あり。	
Ko	7		石仏		聖観音	160+α	103.0		69.0	24.0			／禅□」／父母六親眷属等／	上欠、顔欠、舟型光背か。	
Ko	8		石仏		観音	175+α	116.0		69.0	24.0	1551 1557	天文20 弘治3	蓮妙禅尼天文廿年四月廿二日」門金上座」蓮妙禅尼弘治三年二月晦日	十一面か。上左欠、舟形光背	
Ko	9		石仏		観音	175+α	115.0		70.0	22.0			奉造立開眼正観音仏一体右志者／妙／」／七世父母六親眷属等施主」／	舟形光背、頭光に種子多数あり。	
Ko	10		石仏		千手観音	172+α	115.0		76.0	25.0			施主□□紙堤[　]永禄□□」十方三世仏一切諸菩薩六親眷衆生等」四月□日」[　]阿弥陀仏□□坪門[　]	右上欠、舟形光背	
Ko	12		石仏		阿弥陀	136+α	94+α		78.0	25.0	1558	永禄1	□全禅定門七世父母六親」□□大姉眷属□□等」善久上座永禄元年」妙全大姉」妙□八月廿六日敬白	上欠、放射光	
Ko	13		石仏		阿弥陀三尊	173+α	48.0		79.0	21.0			／□□」善光寺如来」善□	右上亀裂あり、化仏七体下に神像か、二体、舟形光背	
Ko	14		石仏		十一面千手観音	170+α	117.0		74.0	25.0			道秀大法師七廻忌」四恩法界／」鳴[　]妙法	上部亀裂あり、舟形光背、種子あり。	
Ko	15		石仏		虚空蔵	170+α	113.0		71.0	23.0	1558	永禄1	全清禅定門妙弗大姉」妙清比丘尼逆修」三回忌永禄元年七月廿八日	舟形光背	
Ko	16		石仏		阿弥陀	168.0	82.0		77.0	29.0			願主新右衛門」阿弥陀仏	上記の外に左右それぞれ行程あり。左から三行目妙西か。懸仏11体、種子、舟形光背、頭部	
Ko	19		石仏		地蔵	243+α	180.0		93.0	44.0	1530	享禄3	奉造供養地蔵菩薩御尊像諸願成就」□時享禄三歳寅年卯月十六日大奈敬白」妙宗、[妙□]蔵、□□、妙[illegible]、妙照、[　]、妙□□□、妙心、□□□□□□、道□、妙心、道善、妙音、善□、善久、□□、妙□、善□、道妙、[　]、妙□□、妙□、□□、妙□、布[illegible]□□妙心宗、□妙善、妙□、[illegible]妙□、[illegible]妙行、[　]、妙祐、[　]、善□、□□、妙[　]、仏□、]□□□□[　]□全順□□□妙[illegible]道[illegible]□□道□妙三妙久良□、道年、妙□、妙[　]、□□□□□□□□祐源[illegible]蓮源[illegible]妙善、妙□、道秀、妙因、[illegible]□久、妙□／願主道祥法師一仏浄土妙順[illegible]妙蔵[illegible]道妙[illegible]妙[illegible]道久妙□善長道秀[illegible]永久、道□、道間、道徳、正妙、真朝、妙□、道[illegible]妙清	舟形光背、光背に雲の装飾あり。六地蔵の種子あり。	
Ko	23		石仏		千手観音	83+α	83+α		77.0	23.0			道安／」盛安／	上、下欠	
Ko	24		石仏		阿弥陀	139+α	101+α		75.0	24.0	1560	永禄3	道秀大法師第七回忌」永禄三年四月十四日願主玄祐法師	舟形光背、合掌、頭光に種子あり。	

所在地 調査区分	石仏・造物番号	出所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	25		石仏		阿弥陀	127+α	99+α		75.0	22.0			／妙○□)、[　]禅定尼)[　]歓女	上欠、化仏あり か。	
Ko	26		石仏		地蔵	102+α	89.0		74.0	24.0	1559	永禄2	盛春逆修飯田新七郎宗頼)時永禄弐年己未二月吉日敬白	上欠	
Ko	27		石仏		剣多遊歓子	145+α	102+α		82.0	25.0			□本法師	下欠、舟型光背	
Ko	28		石仏		手手観音	136+α	120.0		72.0	26.0	1559	永禄2	上町江上善左衛門盛念)○□○□徹一切諸仏)□妙禅定門)永禄二年九月十一日)妙○大姉	上欠、右肩に種子あり。	
Ko	29		石仏		手手観音	156+α	121.0		72.0	25.0	1560	永禄3	慶善禅定門妙林[　]九月廿一日)□永[　]永禄三年)二月[　]	舟型光背、頭光に種子あり。	
Ko	30		石仏		阿弥陀	137+α	103+α		70.0	22.0	1560	永禄3	春芸上人)永禄三年四月六日	舟形光背	
Ko	32		石仏		阿弥陀	132+α	118.0		70.0	26.0			六観法界[　]吉日	上右欠、二分、両肩に種子あり。	
Ko	33		石仏		阿弥陀	149+α	116.0		71.0	26.0	1567	永禄10	□春禅定門[　]妙○大姉)玄梓禅定門六観法界)[　]永禄十年四月廿八日	上・右欠、放射光	
Ko	34		石仏		阿弥陀三尊	111.0			78.0	20.0	1541 1552 1560	天文10 天文21 永禄3	永禄三年)□□逆修)天文十年十二月十二日)敬道禅門)六観法界)妙正比丘尼)天文廿一八月廿六日)現求逆修)三月廿九日	上欠	
Ko	35		石仏		不明	78.0	28.0		74.0	23.0			／□□逆修)／妙禅定尼)／□盛五上座)／緑□妙逆修	上欠	
Ko	37		石仏		不動	280+α	205.0		125.0	54.0	1533	天文2	見我身者、是善提心)聞我名者、断悪修善)天文二癸巳年五月廿八日願主道伴)聞我説者、得大知恵)皆我心者、即命成仏)(裏面・側面)道林、善長、盛永、覚武、道西、□□□□道円□□□道西□)盛妙道幸善□善□盛□□□道□、道春、道□、道□、□善)道□□□□善□金、妙三、妙道、妙林、□□、妙□、□□、盛清)道盛慧心真砂盛幸□)母道善、道勝、道□、□善、西道言、妙道言、道祝、□正、妙音、妙□、道慶、全順、妙祐、慶□、□□、妙慶、妙□、道林)□道心、春□、盛□、盛□、□善伯、春□、□順、□倍真林、周□、□□、妙法、妙□、道一)道久、春悲、□□、□和、□春、□□□□、道善、□道□□道、道岡□盛道、道善、妙清)道寿□□□□□全盛、妙祐、善盛、朝善作、道法、道□、道□、盛存、善寿、雅秀、盛心、永慶)真□、盛賢、道条、善慶、盛□、道□、道西、禅□、道見、玄資、春慶、道忠、善□、祐清、西仙、禅智)善西、盛久、□□、妙言、妙□、正真)道□、道視、道□)真光、道言、春慶、道□、道慶、道久、善□、盛□、妙□、妙□)□道林、幸□□立真□盛□道法□□□□門善久)盛□、盛□□□□□盛善、妙久、禅□、道永[　])□□□慶、妙芸、妙円、太□、道□、妙道、妙永、[　]	その他銘多数あり、読めず。梵字はカーンマン、舟形光青、火炎光背	
Ko	38		五輪塔	完形		58.0		20.0	16.0	15.0			永／法□／四十一／		
Ko	43		石仏		地蔵	42.0	29.0		26.0	11.0	1538 1543 1553	天文12 天文22 天文7	／久禅門　天文十二年九月十八日 教西童子　天文廿二年八月十日 道華禅門　天文七年□月十九日	上欠、基礎台、座像	
Ko	45		石仏		地蔵	35.0	25.0		25.0	11.0			[　]禅定尼 永禄／	下欠、舟形光背、蓮弦、主尊	

所在地 調査次数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	46		石仏		二尊か	38.5	22.5		19.0	8.5			妙正童女	石半欠、歪曲、基礎台13cm、左地蔵	
Ko	48		石仏		地蔵	34.0	23.0		24.0	12.0			高忠禅定門 ／寅元年五月廿六日	基礎台5cm	
Ko	49		一石五輪塔	完形		66.2		20.0	20.0	20.0	1519	永正16	永正十六天己卯 妙珍禅定尼 八月廿日	四面	707
Ko	51		一石五輪塔	水地		28.0		23.5	16.5	16.0	1539	天文8	天文八年己亥 月作禅心禅定門 六月十九日	残欠、四面、Aa72と同一銘	
Ko	52		一石五輪塔	火水地		44.5		18.5	18.0	17.5	1509	永正6	[　]正叢大姉 永正六己□三月十二日	残欠、四面	
Ko	53		一石五輪塔	水地		32.5		20.5	16.5	17.0			□□十三[　] □□禅門 正月[　]	四面	
Ko	54		一石五輪塔	火水地		48.0		23.0	17.5	17.5	1528	大永8	大永八天戊子 善放法師 正月十五日	四面	
Ko	56		一石五輪塔	地		16.0		16.0	13.0	12.0			妙幻童女 ／月十九日		
Ko	59		一石五輪塔	地		24.0		24.0	18.5	17.5			古海□清比丘尼 五月廿日	四面	
Ko	77		一石五輪塔	地		19.5		19.5	17.5	18.0	1515	永正12	[　]大姉 逆修 永正十二年乙亥時正[　]	四面	
Ko	88		一石五輪塔	水地		30.0		18.0	17.0	17.0	1533	天文2	天文二年／ [　] 七月廿[　]	四面	
Ko	89		一石五輪塔	地		24.5		24.5	16.5	17.0	1534	天文3	智覚金鑑童子 天文三年十一月廿八日	四面	
Ko	100		一石五輪塔	風火水地		36.0		19.0	13.5	13.5	1523	大永3	妙聖大姉 大永三天四月十四日	四面	
Ko	107		一石五輪塔	火水地		39.0		16.5	16.5	16.0	1513	永正10	盛実禅定門 永正十癸酉六月廿二日	四面	
Ko	109		一石五輪塔	火水地		41.0		18.5	17.0	17.0	1514	永正11	永畔禅定門 永正十一甲戌正月廿一日	四面	
Ko	120		一石五輪塔	火水地		48.5		17.0	21.5				為妙／		
Ko	123		一石五輪塔	地		26.0		26.0	18.0	18.0	1519	永正16	永正十六天 性珍禅定門 十月一日	四面	
Ko	126		一石五輪塔	水地		32.0		24.0	18.5	18.0	1544	天文13	天文十三年甲辰 真幸禅定門 正月四日	四面、水輪残少	
Ko	131		一石五輪塔	火水地		42.0		19.0	18.0	17.0	1519	永正16	□裕[　] 永正十六己□六月廿二日	四面	
Ko	139		一石五輪塔	地		23.0		23.0	18.5	18.0	1542	天文11	妙□大姉 天文十一年[　]		
Ko	142		一石五輪塔	地							1496	明応4	明応四己卯[　]	残欠	
Ko	145		一石五輪塔	地									明応／ 妙／	残欠、四面	
Ko	146		一石五輪塔	地		28.0			21.0	20.5			大永／ 玄秀法師 正月廿日	四面	

所在地 調査区域	石仏・造仏番号	種別・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	149		一石五輪塔	地		27.0			18.0	18.0			／ ／ 十一月／		
Ko	150		一石五輪塔	火水地		42.0		21.5	16.0	13.0	1542	天文11	天文十一年壬寅 盛栽比丘尼 四月十四日	四面、裏平欠	
Ko	151		一石五輪塔	火水地		45.5		22.5	17.5	17.0	1521	大永1	大永元年 道本法師 十月／	四面	
Ko	152		一石五輪塔	地		22.5		22.5	16.5	16.0	1518	永正15	永正十五年 盛道禅門 六月八日	四面	
Ko	153		一石五輪塔	水地		36.0		22.0	18.0	16.5	1526	大永6	大永六年□戊 春玉比丘尼 二月二日	四面	
Ko	154		一石五輪塔	地		22.0		22.0	15.0	15.5	1563	永禄6	永禄六年 西妙大姉 十二月十三日	四面	
Ko	155		一石五輪塔	地		20.5		20.5	18.0	17.5			為真宗禅尼 逆修 五月十六日	四面	
Ko	158		一石五輪塔	地		21.0		21.0	16.0	16.0	1567	永禄10	永禄十年 道心禅定門 三月十三日	四面	
Ko	160		一石五輪塔	地		17.0		17.0	12.0	12.0	1529	享禄2	享禄二年 □祥禅門 七月十六日	四面、左半欠	
Ko	161	左台座	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	17.6	14.9	1517	永正14	□□真□大姉 永正十四天十一月十日	四面	
Ko	166	左台座	一石五輪塔	地輪		18.8		18.8	18.0	17.0	1498	明応7	為金悲禅尼 明応七天七月廿日	四面	
Ko	172		一石五輪塔	火水地		43.0		21.0	17.0	16.5			道空禅定門 天文□年七月／	正面	
Ko	176		一石五輪塔	地		23.5		23.5	16.5	8.0	1564	永禄7	永禄七年 [　　] 正月廿日	裏平欠	
Ko	177		一石五輪塔	地		20.0		20.0	7.0	13.5			五月八日	四面、右欠	
Ko	182		一石五輪塔	地		23.0		23.0	18.0	18.0			[　]二年 [　　] [　　] ―――――――― 永禄[　　] □□大姉 [　　]	四面、表裏に銘あり。	
Ko	183		一石五輪塔	火水地		40.0		21.0	15.5	15.5	1528	享禄1	享禄元年 道全禅門 四月七□	四面	
Ko	186		一石五輪塔	地		22.0		22.0	16.0	13.0			[　　] 円覚禅門 四月廿日	裏平欠	
Ko	187		石仏		阿弥陀	170+α	118.0		79.0	25.0	1560	永禄3	□□禅定門　永禄三年]真春比丘尼 盛□禅尋]大悲□□禅定門]真妙逆修]妙□大姉□月吉日	舟形光背、頭光、放射光あり。種子あり。	
Ko	188		石仏		地蔵	62.0	30.0		32.0	8.0			[　　]禅定門	上、左欠、基礎高25cm	
Ko	189		石仏		地蔵	39.0	25.0		20.0	10.0	1563	永禄6	心善童子 永禄六年七月／	下欠、主頭面巾4cm	
Ko	191		石仏		地蔵	25.0	13.0		26.0	11.0			慈現／ 弘治／	下欠、主頭、舟形光背湯込	
Ko	195		石仏		地蔵	29.0	19.0		23.0	13.0			永芝禅定門　十二月 □□比丘尼	下欠、主頭面巾3cm	

所在地 調査区名	石仏・石塔番号	現況・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	196		石仏		地蔵	32.0	18.0		24.0	11.0			／正月九日	上、右欠、座像	
Ko	198		石仏		観音	37.0	27.0		25.0	11.0	1543	天文12	天文十二年 七月廿二日	上欠、右二行銘文、左行銘読めず。	
Ko	201		石仏		地蔵	29.0	16.0		23.0	10.0			／歳女	上欠、基礎台	
Ko	203		石仏		阿弥陀	32.0	17.0		24.5	10.0	1540	天文9	道林／ 天文九／	下欠、圭頭廂4cm、頭光上部にキリーク	
Ko	204		不明			18.0	7.0		22.0	8.0			永／	下欠、舟形光背	
Ko	208		石仏		三尊	52.0	29 30.5 29		45.0	9.0			□妙歳女[　　]年 □月□日 妙玉歳女天文□年 九月十一日	圭頭、下欠、廂巾5.5cm	
Ko	209		石仏		地蔵	51.0	26.0		22.0	8.5	1544	天文13	妙存大姉 天文十三／	下欠、圭頭	
Ko	210		石仏		地蔵	50.0	27.0		27.0	10.0	1538	天文7	光秀童子 天文七年六月十二日	圭頭、下少欠	
Ko	216		不明			54.0	39.0		28.0	18.0	1533	天文2	／全禅定門廿三□ 天文二癸巳十一月五日往生	上・下欠、合掌、種子あり。	
Ko	217		板碑			33.0			21.5	7.0			／ 三月／	五輪塔彫刻、上・右・下欠	
Ko	218		板碑			48.0			14.5	14.0	1558	永禄1	永禄元天 □受禅定尼 八月八日	上・下に枘あり。	
Ko	219		一石五輪塔	火水地		42.0		22.0	17.0	16.5			□□法師	西面	
Ko	220		一石五輪塔	地		22.0		22.0	17.5	17.5	1517	永正14	妙□大姉 [　　] 永正十四天十二月三日	西面	
Ko	221		板碑			24.0			22.0	7.0			□智道女 宗清□子 道□禅門 妙□禅尼 妙西禅尼 □□道女 妙□道女	現欠	
Ko	222		一石五輪塔	火水地		46.0		19.5	18.0	17.5	1512	永正9	為盛立禅門 逆修 永正九壬□三月十五日	四面	
Ko	223		石仏		地蔵	24.0	11.0		25.0	6.5		天文10	天文十／	圭頭廂巾4cm、下欠	
Ko	224		板碑			100＋α			76.0	51.0	1555	天文24	真盛上人」盛禅上人」開眼供養禅師 当寺五代真盛上人」天文廿四乙卯 年四月□盛□	右二行銘、左二行銘、種子あり。	
Ko	230	T12	一石五輪塔	水地		35.5		22.0	17.0	16.5	1572	元亀4(3)	元亀四壬申年 善徳局禅大姉 八月十二日	四面	
Ko	231		五輪塔	地		23.0		23.0	18.0	18.0	1541	天文10	天文十年 真光法師 [　　]	四面	
Ko	233		五輪塔	水地		33.0			17.0	17.0	1527	大永7	道忍禅定門 [　]門 大永七年十一月十九日	四面	
Ko	234		五輪塔	水地		29.0			17.0	17.0			永禄□年 道慶禅門 十二月[　　]	四面、水輪現少	
Ko	236	山潤	一石五輪塔	地輪		18.1		18.1	18.0	17.0	1511	永正8	善仲禅門 永正八辛巳七月廿日	四面	

所在地調査区数	石仏・造物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	241		一石五輪塔	火水地							1519	永正16	滝三童子 道仙禅門、永正十六十二月十一日 滝光童子		
Ko	242		一石五輪塔	地		21.0		21.0	17.5	17.5			天文[　　] 妙□大姉 十月[　　]	四面	
Ko	248		一石五輪塔	火水地		46.0			18.0	17.5	1515	永正12	永正十二乙□六月三□	四面	
Ko	249		一石五輪塔	地		18.0		18.0	13.5	14.0	1539	天文8	天文八[　　] 妙□比丘□[　　] 九月七[　　]		
Ko	252	山頂	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0	12.5	12.5	1560	永禄3	永禄三天 春時童女 十一月十七日	四面	
Ko	256		一石五輪塔	地		22.5		22.5	16.0	16.0	1541	天文10	天文十年 妙勝大姉 十月九日	四面	
Ko	259		一石五輪塔	完形		47.0			13.5	13.0	1525	大永5	大永五年 正光童子 十一月十二日	四面	
Ko	260		石仏		地蔵	52.0	31.0		22.0	10.0	1529	享禄2	祐永禅尼往生位 享禄二天己□ 二月十六日	下少欠、圭頭面巾3.5cm	
Ko	263		一石五輪塔	火水地		34.5		17.0	12.0	12.0			大永□□ 妙林禅尼 四月□日	四面	
Ko	267		一石五輪塔	火水地		41.0		21.0	16.0	16.0	1540	天文9	天文九年 妙幸禅尼 □月廿九日	四面	
Ko	268		一石五輪塔	完形		58.5		21.0	15.5	15.5			十月 真春童子 十四日	四面	
Ko	269		石仏		地蔵	25.0	14.0		18.5	6.5	1566	永禄9	妙清童／ 永禄九年／	圭頭、舟形光背組込、下欠	
Ko	271		一石五輪塔	火水地		43.0		24.0	15.5	15.5	1543	天文12	天文十二年 妙□勝尼 十月二日	四面	
Ko	273		一石五輪塔	火水地		48.0		23.5	17.5	17.5	1520	永正17	永正十七年□ 慶祐比丘尼 八月廿五日	四面	
Ko	278		一石五輪塔	火水地		39.5		17.5	16.0	16.0	1512	永正9	□盛阿童子 永正九壬申二月十七日	四面	
Ko	279		一石五輪塔	地		20.0		20.0	16.0	16.0	1535	天文4	天文四年乙未 □□雅是尼 正月十日	四面	
Ko	280		不明			35.0	23.0		25.0	10.0			／童女	上、左欠、基礎台3.7cm、柄あり。	
Ko	281		一石五輪塔	地		20.0		20.0	16.3	16.3	1571	元亀2	元亀二年 □幸徳盛禅定門 九月廿六日	四面	
Ko	283		一石五輪塔	地		18.5		18.5	15.5	15.5	1522	大永2	滝舜童子 大永二天五月六日	四面	
Ko	285		一石五輪塔	地		16.6		16.6	11.0	11.0			[　　] 真与童子 七月九日		
Ko	287		一石五輪塔	地		22.8		22.8	15.7	15.5	1535	天文4	天文四年乙未 善西禅門 三月廿四日		
Ko	288		板碑			22.5			31.0	9.5			□願禅門 ／月十二日 ／禅尼	上、左欠、五輪塔二体線刻あり。基礎高5cm	

所在地 調査区域	石仏・造物番号	現度・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
Ko	297		一石五輪塔	地		16.5		15.5	15.5	15.5	1510		[　　]厚尼 逆修 □正七庚午十一月十日	西面、庚午は永正七年	
Ko	298		一石五輪塔	火水地		30.0		20.0	14.3	14.3			春妙大姉	西面、中央に割付線一本	
Ko	299		一石五輪塔	地		22.5		22.5	15.0	15.0			妙幾	四面	
Ko	300	三尊石付近	一石五輪塔	地		21.0		21.0	17.0	17.0	1517	永正14	永正十四天 道三禅門 八月十七日	四面	
Ko	301b		一石五輪塔	火水地		43.5		23.0	17.0	17.0	1548	天文17	天文十七年 一阿弥陀仏 十二月六日	四面	
Ko	301a		石仏		地蔵	55.0	34.0		25.3	12.0	1539	天文8	道久上座天文八年 七月六日	下少欠、歪頭、顔欠	
Ko	308		一石五輪塔	地		17.4		17.4	18.5	14.0			天四子十一月廿八日	後欠、或いは盛尊上人のものか。	
Ko	315		石仏		地蔵	32.0	23.0		21.5	6.5			□玉□女 呈	歪頭、奇形鋸込	
Ko	317		一石五輪塔	地		18.8		18.8	14.5	14.1	1833	天文2	天文二年 真珍法師 二月四日	四面	
Ko	322	山内廻地	一石五輪塔	地		19.4		18.9	12.0	12.0			慈父浄云法印	四面	
Ko	324		一石五輪塔	地		21.0		21.0	16.0	16.0	1546	天文15	權大僧都法印□□□□ 天文十五年丙□九月十二日	四面	
Ko	326		一石五輪塔	火水地		42.5		18.5	18.0	18.0	1509	永正6	老春禅定門 永正六天正月六日	四面	
Ko	330		一石五輪塔	地		23.5		23.5	18.0	18.0	1540	天文9	天文九年 妙□禅尼 [　　]	四面	
Ko	331		一石五輪塔	火水地		44.0		19.0	17.5	17.5	1509	永正6	道善禅門 永正六天正月廿九日	四面	
Ko	332		一石五輪塔	火水地		45.0		23.5	17.5	17.5	1534	天文3	天文三年甲午 □信童子 潤正月廿□日	四面	
Ko	335		一石五輪塔	地		21.0		21.0	18.0	18.0	1515	永正12	善林童子 永正十二七月十日	四面	
Ko	337		石幢			52.5			20.5		1569	永禄12	永禄十二□已年 奉納如法経為法果聖霊 七月十五日 西山光照寺三昧	八角柱	
Ko	338		板碑			153+α			74.0	66.0	1549	天文18	内藤全左衛門全思上座 天文己酉年五月[　]日	安山岩谷産。己酉は天文十八年、銘の下に蓮台あり、舟形か。	
Ko	339		四角柱			174.0			30.0	30.0			奉造立供養法界真妙□惡元亦無自亦無他幻生幻□非実地／□南無阿弥陀仏」右志者西山光照寺逆修一結之願大施主等祈果生界□生極楽／	銘は正面三行、他面は読めず。	
Ko	340		四角柱			226+α			32.0	33.0	1522	大永2	光明篇照十方世界　信心弟子等結願諸等各敬白」六八金仏殿願円朝大乗或□□盛尊上人那七仏仏道場進法界祥生平等位」金仏敬生照敬不捨　大永二歳壬子二月廿八日願立之願法不自生亦不従他生不共不無因是故説無生／□聞仏如水是法界身入一切衆生心□中是故等心想仏時是心作仏是心是仏」願[　]門□□仕	盛尊上人の供養塔、上部宝珠は欠損している。$a±$面を異にする。Ko224号・5804号を参照	

伊東調査次数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	復種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	65	左台座	一石五輪塔	火水地		43.5		18.5	18.0	17.5	1506	永正3	為昌林紹繁禅定門 永正三年八月廿一日	四面	
KOT	81	左台座	一石五輪塔	地輪		20.5		20.5	14.8	14.8	1530	享禄3	享禄三年 妙玲禅定尼 十月三日	種子二面のみ。	
KOT	85	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	15.0	15.5	1548	天文17	天文十七年 牧西禅門 □月廿七日	四面	
KOT	86	左台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	16.0	16.5	1532	享禄5	享禄五年壬辰 □□比丘尼 五月九日	四面	
KOT	91	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	13.0	14.0	1548	天文17	天文十七□ 花淡妙崇大姉 九月廿一日	四面 裏面に銘あり「天文十□□」姉□□□」九月廿一日」	
KOT	93	左台座	一石五輪塔	火水地		44.0		23.0	18.0	18.0			元亀□□ □□禅定門 □月十一日	四面	
KOT	94	左台座	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	16.5	16.5			□□十年 □□□□ 七月廿五日	紀付け線三本あり。法名の下に逆理あり。	
KOT	95	左台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.5	16.5			□□□□ □盛大姉 十月□□	四面	
KOT	100	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	14.7	13.0	1542	天文11	天文十一年 裕□童子 五月廿二日	四面	
KOT	101	左台座	一石五輪塔	地輪		24.6		24.6	18.0	17.5			妙春禅定尼 □□□□	四面	
KOT	107	左台座	一石五輪塔	水地		35.0		23.0	15.8	16.0	1527	大永7	大永七年 妙西禅尼 三月廿六日	四面	
KOT	108	左台座	一石五輪塔	地輪		22.6		22.6	16.0	15.3			妙念	種子正面のみ。	
KOT	112	左台座	一石五輪塔	地輪		23.2		23.2	17.4	17.4	1543	天文12	天文十二年／ □□大姉 □月□□	四面	
KOT	113	左台座	一石五輪塔	火水地		46.0		19.2	19.2	19.5	1515	永正12	道本□□ 永正十二年正月七日	四面	
KOT	122	左台座	一石五輪塔	地輪		28.5		28.5	20.0	20.5			千慶妙富禅定尼	四面	
KOT	127	左台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	15.5	14.0	1546	天文15	天文十五年□ 祐清童女 九月二日	四面	
KOT	128	左台座	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	18.0	17.5			為道玲禅門 □正八天七月六日	四面	
KOT	129	左台座	一石五輪塔	地輪		18.5		18.5	14.0	14.5	1540	天文9	西智童□ 天文九年庚子七月八日	四面	
KOT	139	左台座	一石五輪塔	地輪		20.5		20.5	16.1	15.8	1540	天文9	天文九年庚子 敬賀禅定門 八月□□	四面	
KOT	142	左台座	一石五輪塔	火水地		48.5		22.0	17.5	17.7	1517	永正14	妙□禅尼 永正十四[　　]	四面	
KOT	143	左台座	一石五輪塔	火水地		45.0		21.0	15.8	15.5	1540	天文9	天文九年庚子 浴性禅門 七月四日ハクソハラ	四面	
KOT	146	左台座	一石五輪塔	火水地		44.0		21.3	17.4	17.0			□□□門	種子不明	

現在地 調査区分	石仏・石塔番号	板碑・グリット	種別	部位	像種	絶高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	149	左台座	笠塔婆	塔身				38.0	14.0	12.5	1558	永禄1	永禄元天 □受禅定門 八月八日	上下に凸部あり。法名の下に逝座の彫刻あり。	
KOT	153	左台座	一石五輪塔	火水地		46.5		22.3	16.0	16.3	1524	大永4	大永四天甲申 禅有法師 五月廿二日	四面	
KOT	155	左台座	一石五輪塔	地輪		36.0			17.5	17.4	1522	大永2	大永二年 道泉禅門 正月十四日	四面	
KOT	162	左台座	一石五輪塔	地輪		23.6		23.6	16.5	16.0			□□□□九	四面	
KOT	164	左台座	一石五輪塔	地輪		22.8		22.8	17.8	17.8			盛□大姉	四面	
KOT	165	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	15.0	15.3			□岳道□禅定門 □□五天六月廿一日	四面	
KOT	166	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	17.0	18.0			春智法師 □□□月十五日	四面	
KOT	167	左台座	一石五輪塔	地輪		22.8		22.8	14.7	15.0	1546	天文15	□忍禅定尼 天文十五丙午四月十七日	四面	
KOT	168	左台座	一石五輪塔	水地		34.0			17.2	16.0	1533	天文2	天文二年□ 妙金 十二月□□	四面	
KOT	169	左台座	一石五輪塔	火水地		47.3			18.5		1516	永正13	永正十三丙子 盛賢禅門 四月十四日	四面	
KOT	171	左台座	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	16.5	16.5			妙□禅尼逝修	四面	
KOT	173	左台座	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	16.5	16.0			□□□□ 泉善禅門 十一月十□	四面	
KOT	175	左台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	17.0	17.0			妙正禅尼 [　]十一月十[　]	四面	
KOT	176	左台座	一石五輪塔	地輪		26.0		26.0	17.0	17.0	1545	天文14	天文十四乙巳年 妙清／ 六月／	四面	
KOT	180	左台座	一石五輪塔	火水地		40.0		21.0	15.5	15.5	1528	享禄1	享禄元年□子 道金禅門 四月廿一□	四面	
KOT	184	左台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	17.0	17.0	1523	大永3	大永三年 道□禅定門 十二月十一日	四面	
KOT	185	左台座	笠塔婆	塔身		43.0			13.0				□□□定門 □□□□尼	上下に凸部あり。	
KOT	189	左台座	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	17.0	17.0	1570	元亀1	元亀元年 □覚禅定門 六月廿八日	四面	
KOT	191	左台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	15.2	15.0	1537	天文6	天文六年□酉 善教禅門 三月八日	四面	
KOT	193	左台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	16.8	16.5	1528	大永6	大永八天戊子 妙祝比丘尼 五月廿二日	四面	
KOT	197	左台座	板碑か。			16.2				5.0			／逆修	裏面は研磨していない。上部欠	
KOT	199	左台座	板碑			26.5			19.5	8.8			烏性法師	下に凸部あり。	
KOT	201	左台座	板碑か。	不明									／□□／ ／頭陀□□／ ／智祐□全／	欠損しているため計測不能。	

埼玉地 調査未整	石仏・造物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	205	左台座	石仏		地蔵								／禅門 ／月十七日	立像。右手に錫杖、右手に宝珠を持つ。上部欠	
KOT	210	左台座	板碑										／四月／	五輪塔を線刻する。	
KOT	212	左台座	笠塔婆	塔身		34.0			17.4		1535	天文4	正面／梵仏 右 天文四己未二月二月時正 左 ／禅定門	裏面に坐像の石仏、上部欠	
KOT	377	左台座	石仏	地蔵									／十五□七月十一日	上下欠損、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。	
KOT	379	T12	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	13.5	13.5			天文□□ 玄久童子 七月十日	四面	
KOT	380	T12	一石五輪塔	火水地		43.5		18.5	18.0	17.8	1515	永正12	為善西禅門 永正十二□十一月三日	四面	
KOT	382	T12	一石五輪塔	火水地		43.0		23.0			1532	天文1	天文元年壬辰 宗見禅定門 正月／	四面	
KOT	383	T12	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0	17.5	17.5			宗信大姉	四面	
KOT	385	T12	一石五輪塔	火水地		53.0		22.0	21.5	20.5	1514	永正11	妙慶大姉 永正十一申戌五月七日	四面	
KOT	391	T12	一石五輪塔	地輪		19.5		19.5	14.0	14.0	1540	天文9	天文九年 宗学童子 八月十六日	四面、側付け線あり。	
KOT	407	T12	一石五輪塔	火水地		33.0		19.0	12.5	12.5	1604	慶長9	慶長九申辰 為妙宗大姉也 三月廿四日	種子正面のみ。	
KOT	409	T12	一石五輪塔	空風火水地		62.0		22.0	17.5	17.5	1532	天文1	天文元年 善春禅門 九月十二日	四面	
KOT	412	T12	一石五輪塔	水		16.5							阿	上下に間部あり。種子なし。「阿」の文字の線刻あり。	
KOT	413	T12	一石五輪塔	地輪					20.5	21.0			妙恩禅定尼 ／月九日	四面	
KOT	429	T12	板碑										／大姉天文／	上下欠	
KOT	470	T12	不明								1535	天文4	／定門天文四年 ／尼天文□六月	立像	
KOT	655	山側	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	13.0	13.5			妙永大姉		
KOT	685	山側	板碑										／正月廿二日	五輪塔線刻あり。	
KOT	699	山側	一石五輪塔	地輪							1531	享禄4	享禄四年辛卯□月□□	地輪の一部	
KOT	701	山側	石仏	不明									／妙忍童女 ／月十四日	上下欠	
KOT	718	山側	板碑										／応元天十二月廿／	五輪塔線刻あり。	
KOT	719	山側	板碑										／ 十二月／ 道幸禅門 ／ 廿三日／	上部欠	
KOT	730	山側	板碑								1540	天文9	天文九年西申 ／逆修 十月十五日	平欠	

現在地調査区番	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	幅種	総高	地高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	735	山腹	板碑								1512	永正9	永正九年 碑久／	五輪塔を二本隣刺、上下欠	
KOT	741	山腹	不明	不明									／□井主／		
KOT	743	山腹	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0		17.0			六月廿三日	半欠	
KOT	745	山腹	板碑										／実法師 ／盗等 ／十八日天孝□廿八	KOT782の板碑の下部か。	
KOT	747	山腹	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	18.0	18.0			□□禅門 十一月十日	四面	
KOT	756	山腹	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	16.5	15.5	1545	天文14	天文十四年 □□□□ 八月廿一日□	善提門、祝聖門は種子なし。	
KOT	759	山腹	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	15.5	13.0	1563	永禄6	永禄六癸亥年 □教禅定門 □月廿一□	底面欠、別付け線三本あり。	
KOT	761	山腹	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0		17.0			□賢禅定門	半欠	
KOT	762	山腹	板碑										鎮／ ／三界万／	下部欠、KOT745の板碑の上部か。	
KOT	780	山腹	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0		18.5			九月三日		
KOT	784	山腹	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	18.5	18.0	1601	慶長6	慶長六年辛丑 為根昌法師大菩薩也 潤十一月廿四日		
KOT	790	山腹	板碑										／門 ／梅門 ／西禅門 ／二年九月廿八日		
KOT	809	山腹	一石五輪塔	火水地		37.5		18.3	14.3	13.3			西見童子 六／	別付線あり。	
KOT	815	山腹	一石五輪塔	地輪		14.6		14.6	11.2	10.5	1861	永禄4	永禄四年 円生童子 五月六日	別付線三本	
KOT	816	山腹	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	17.0	17.0	1535	天文4	天文四乙未年五月三日 妙定禅定尼 江州北郡　大夫		
KOT	818	山腹	一石五輪塔	地輪		19.5		19.5	18.5				天文十／ 後大僧都／ 十月廿／	地輪種子の左右に文字があるが読めず。	
KOT	824	山腹	一石五輪塔	空風火水地		48.0		14.0	14.3	14.3			善賢／ 六月六日／		
KOT	831	山腹	一石五輪塔	地輪		21.7		21.7	16.5	15.8			／道一		
KOT	838	山腹	一石五輪塔	地輪							1545	天文14	／文十四年乙巳 ／大永童子 ／月十八日		
KOT	844	山腹	一石五輪塔	地輪		22.6		21.6	16.2	14.5	1541	天文10	天文十年辛丑 妙観□□ 九月十三日		723
KOT	845	山腹	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	17.3	16.0	1535	天文4	天文四年／ 妙慶比丘／ 正月廿一		718
KOT	857	山腹	一石五輪塔	地輪		19.5		19.5		12.8	1538	天文7	天文七年 宗珍禅門		
KOT	860	山腹	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	16.0	15.5			[　　]三年 開□慈敬禅士 閏月十八日	別付線三本	
KOT	862	山腹	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	27.0	17.0			[　　]元年 妙[　　] [　　]十[　　]		

所在地調査次数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	後補	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	863	山裾	一石五輪塔	地輪		25.4		24.2	19.0	17.0	1528	大永8	〔　〕大永八年 月□宗祐大禅定門 八月□二日		710
KOT	865	山裾	一石五輪塔	地輪		15.5		15.5	13.5	13.0	1541	天文10	天文十年辛丑 正玲童女霊位 十二月十八日		
KOT	875	山裾	一石五輪塔	地輪		22.8		22.8	17.0	16.8			寛寿	種子を蓮の花輪でかこみ梵唐の順刻あり。	
KOT	876	山裾	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	17.2	17.0			天文□□ 妙善大姉 十月十日		
KOT	877	山裾	一石五輪塔	地輪		25.2		25.2	16.5	16.7	1536	天文5	天文五年丙申年 妙清禅定尼 四月十五日		
KOT	878	山裾	一石五輪塔	地輪		25.2		25.2	17.2	17.0	1520	永正17	永正十七庚辰 盛妙童女正年七歳 五月十六日		
KOT	879	山裾	一石五輪塔	地輪		22.2		22.2	15.2	15.7	1546	天文14	天文十四年 妙泉禅尼 二月廿二日		
KOT	880	山裾	一石五輪塔	地輪		22.2		22.2	17.2	17.1	1519	永正16	永正十六年 宗林禅定門 十月十日		
KOT	881	山裾	一石五輪塔	火水地		45.4		23.0	17.3	17.0	1521	大永1	大永元年 道華禅門 二月／		
KOT	911	山裾	石仏						30.0	11.0			／宗主 ／法門	上部欠	
KOT	921	山裾	板碑					19.5	32.0	7.0			／定尼 ／日	上部欠	
KOT	922	山裾	石仏						26.0	12.0			／門盛妙 ／五月一日	上部欠	
KOT	925	山裾	板碑						21.6	8.5			／□ ／年忌	上部欠	
KOT	926	山裾	石仏						30.0	5.0			道慶禅／	下部欠	
KOT	947	山裾	板碑							4.5			道秀□／		
KOT	962	山裾	板碑							10.0			／禅門 ／二日 ／六年 ／禅尼 ／□日		
KOT	965	山裾	板碑							6.5			妙慶大姉		
KOT	984	山裾	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	18.5		1596	永禄9	永禄九丙寅	後半分欠	
KOT	1001	山裾	石仏										／禅／ ／九月一日／	上下欠	
KOT	1027	山裾	一石五輪塔	地輪		14.0		14.0	10.5			永禄6	□□童子□ □禄六年二月八日	両側欠	
KOT	1031	山裾	石仏										二十九番松尾／	西国三十三所霊場の二十九番目松尾寺	
KOT	1033	山裾基地	一石五輪塔	地輪		23.5		23.5	17.0	17.0	1559	永禄2	永禄二己未年 道慶禅門 十一月廿日		
KOT	1036	山裾基地	一石五輪塔	水地				23.0	17.0	17.0	1527	大永7	道忍禅定門 〔　　〕門 大永七年十一月十九日		
KOT	1037	山裾基地	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0		13.0	1549	天文18	天文十八年 妙忠禅尼 ／		

所在地調査区略	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	後補	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1047	山根	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	15.0	14.5	1546	天文15	天文十五年 妙智大姉 八月一日		
KOT	1051	山根	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	16.0	16.5	1520	永正17	永正十七天 妙泉禅門 五月廿四日		
KOT	1065	山根	一石五輪塔	地輪		19.5		19.5	18.5	18.0			妙盛禅尼 [　　]		
KOT	1101	山根	一石五輪塔	地輪		17.0		17.0	14.5	13.5	1522	大永2	大永二年 ／女 ／		
KOT	1102	山根	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0					□□宗信禅定門	地輪一部のみ。	
KOT	1103	山根	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0	16.0				円昌禅門 四月廿九／	後半分欠	
KOT	1104	山根	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0	17.0				[　　] 道都[　] [　　]	後半分欠	
KOT	1105	山根	一石五輪塔	地輪		20.5		20.5	16.5				□□□□ 盛志禅□ 九月[　]	半欠	
KOT	1111	山根	板碑			21.0			24.0	8.0			／善　長円／ ／見　心豊／ ／□　観清／	割付跡あり。	
KOT	1118	山根	石仏								1533	天文2	金禅定門 天文二癸巳十一月五日		
KOT	1120	山根	石仏										／万霊六親／ ／祐禅定門		
KOT	1122	山根	石仏										道善		
KOT	1144	山根	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.0				[　　] 妙地大姉 [　　]	裏側が欠けている。	
KOT	1148	山根	一石五輪塔	地輪		17.5		17.5	15.0				／年□未 ／朝禅定尼 ／一月廿六日	裏側と上部が欠けている。	
KOT	1161	山根	板碑			23.0			19.0	6.0	1522	大永2	／第三年／ ／阿弥陀仏／ ／大永二年／		
KOT	1179	右台座	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	16.5	16.0			[　]三年 [　]禅定門 十一月[　]		
KOT	1181	右台座	一石五輪塔	地輪		23.5		23.5	17.8	16.5	1535	天文4	天文四年乙未 妙音禅尼　逆修 七月□□		
KOT	1183	右台座	一石五輪塔	地輪		26.4		26.4	18.8		1554	天文23	天文廿三年 妙実禅定門 ／		
KOT	1188	右台座	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	17.0	16.0	1534	天文3	天文三甲午年／ 盛口比丘尼／ 十二月／		
KOT	1218	右台座	一石五輪塔	地輪		16.7		16.7	15.0	14.9	1534	天文3	妙慶禅尼 天文三年甲午二月九／		
KOT	1228	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	17.8	16.8	1533	天文2	天文二年 □□禅門 ／□月[　]		
KOT	1229	右台座	一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	17.0	16.9	1567	弘治3	天興庵主 逆修 弘治三丁巳八月九日	割付跡三本	
KOT	1230	右台座	一石五輪塔	地輪		21.3		21.3	16.2	14.7	1544	天文13	天文十三年 王墨童子 八月十二日		
KOT	1247	右台座	一石五輪塔	地輪		20.3		20.3	16.3	15.5	1544	天文13	天文十三年 [　]禅定門 十二月廿七日		
KOT	1248	右台座	一石五輪塔	火水地		46.0		22.0	17.0	16.5	1528	大永8	明智禅定門 大永八年戊子七月廿三日		

所在地調査次数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1249	右台座	一石五輪塔	地輪		26.0		26.0	18.0	19.0			／十丁□年 盛第上座 〔　　〕日／		
KOT	1250	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	17.3	17.2			／西／ 西法法師 正月三日		
KOT	1254	右台座	一石五輪塔	火水地		43.0		17.7	17.5		1515	永正12	盛春法師 永正十二乙亥三月四日	裏面を割る。三面は種子あり。	
KOT	1261	右台座	一石五輪塔	水地		23.3		17.2	12.3	12.9	1530	享禄3	享禄三年／ 清久童女 十月廿六日		
KOT	1264	右台座	一石五輪塔	火水地							1540	天文9	天文九 道頓禅／ 十一月十五日		
KOT	1265	右台座	一石五輪塔	火水地		41.0		16.3	17.0	16.3	1512	永正9	為盛清法師 永正九壬申正月七日		
KOT	1270	右台座	一石五輪塔	火水地		44.0		18.8	17.0	16.5	1508	永正5	為西道禅門 永正五天十月廿四日		
KOT	1273	右台座	一石五輪塔	地輪		27.0		27.0	20.4	20.5	1548	天文17	天文十七年戊申 真得禅定尼 八月廿六日		
KOT	1276	右台座	一石五輪塔	地輪		21.8		21.8	17.3	15.3			妙玲禅尼		
KOT	1280	右台座	一石五輪塔	地輪		24.5		24.5	16.5	16.5			大永／ 道教禅／ 七月十七日	後側欠ける。	
KOT	01296	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	14.5	15.0			〔　　〕三年 □□禅定門 十月廿五日		
KOT	1299	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	18.5	16.5			芳宝妙春大姉 七月五日		
KOT	1302	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	17.5	17.0	1523	大永3	大永三天癸未 淨西禅門 三月六日		
KOT	1305	右台座	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0	18.5	18.0	1545	天文14	天文十四乙巳年 道久禅門		
KOT	1314	右台座	一石五輪塔	地輪		24.0		24.0		17.5	1520	永正17	永正十七庚申年 妙華禅尼		
KOT	1316	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.0	17.5	1529	享禄2	享禄二年 □智禅門 四月廿六日		
KOT	1320	右台座	一石五輪塔	火水地		45.0		23.0	18.0	17.5			妙能禅尼 〔　　〕		
KOT	1331	右台座	一石五輪塔	火水地		44.5			18.0	18.5	1514	永正11	法祐禅尼 永正十一年五月六日		
KOT	1332	右台座	一石五輪塔	火水地		40.0		19.5	16.5	16.5	1540	天文9	天文九年 妙能禅尼 五月八日		
KOT	1333	右台座	一石五輪塔	火水地		44.8		18.5	17.5	17.5	1505	永正2	為善心禅門 永正二天四月六日		
KOT	1334	右台座	一石五輪塔	地輪		26.0		26.0	19.5	19.5	1536	天文5	天文五年丙申 □□禅定門 〔　〕月廿八日		
KOT	1336	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	17.5	17.0	1816	永正13	永正十三年 妙清禅尼 二月七日		
KOT	1337	右台座	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	16.0	16.0	1528	大永8	〔　　〕 大永八年□□七日		
KOT	1348	右台座	一石五輪塔	地輪		22.2		22.2	19.0	19.2	1522	大永2	大永二年 妙教禅尼 七月十五日		

所在地 調査区名	石仏・造物番号	場所・グリット	種別	部位	機械	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1353	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	15.0	15.5	1545	天文14	天文十四年乙巳 朝栄童女 二月廿七日		
KOT	1357	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	14.0	14.3			享[　　] 正円比丘尼 九月五日		
KOT	1358	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	16.5	17.0	1530	享禄3	享禄三年庚寅 妙円禅定尼 三月[　]日		
KOT	1359	右台座	一石五輪塔	火水地		45.5		21.5	17.5	17.5			盛慶		
KOT	1360	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	17.5	18.5	1528	享禄1	享禄元年 盛宵禅尼逆修 九月十二日		
KOT	1366	右台座	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0	17.0	17.0	1490	延徳2	為真定禅門 延徳二庚戌三月三日		
KOT	1368	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	16.5	16.5	1523	大永3	妙慶大姉 大永三天七月十三日		
KOT	1369	山裾	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	15.5	15.0	1528	大永8	大永八年 明春大姉 □□三月□日		
KOT	1375	右台座	一石五輪塔	地輪		15.0		15.0	15.5	15.5			賀□大禅 □□二月十日		
KOT	1377	右台座	一石五輪塔	火水地		50.8		21.3	21.0	20.0	1509 1513	永正6 永正10	為大雄鵬上座 永正十癸酉 逆修 二月廿四日 永正己巳八月十五日		
KOT	1390	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	19.0		1523	大永3	大永三年 盛閑禅定門 十一月廿六日		
KOT	1391	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	16.0	15.0			□□五天丙辰 玉嶽□金居士 十二月七日		
KOT	1399	右台座	一石五輪塔	火水地		39.0		19.0	14.0	14.0	1540	天文9	道威法師 天文九年庚子五月八日		
KOT	1403	右台座	一石五輪塔	火水地		41.0		18.0	17.5	16.5	1508	永正5	為妙金禅／ 永正五戊辰十月八日		
KOT	1404	右台座	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0	14.0	13.5			□寅		
KOT	1405	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.5	17.0	1524	大永4	大永四年甲申 金水禅門 十二月廿五日		
KOT	1412	右台座	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	15.5	16.0	1535	天文4	天文四年乙未 妙温童女 六月廿八日		
KOT	1413	右台座	一石五輪塔	地輪		23.5		23.5	18.0	17.5	1505	永正2	永正二天 道□禅門 二月十五日		
KOT	1416	右台座	一石五輪塔	火水地		51.0		21.5	20.5	20.5	1524	大永4	明徹禅旭居士 大永四天□月廿六日		
KOT	1417	右台座	一石五輪塔	火水地		46.0		24.5	16.5	17.0			智慶大徳逆修		
KOT	1423	右台座	一石五輪塔	地輪		18.5		18.5	15.0	15.5	1515	永正12	善久童子 永正十二乙亥七月十二日		
KOT	1424	右台座	一石五輪塔	地輪		24.5		24.5	17.0	17.5	1560	天文19	天文十九年 慈岳宗安禅定門 二月廿七日		
KOT	1425	右台座	一石五輪塔	火水地		34.0		17.5			1528	大永8	善久童子 大永八天正月一日		

所在地・調査区数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1430	右台座	一石五輪塔	地輪		24.5		24.5	17.0	17.0	1536	天文5	天文五年丙申 盛全童子 二月八日		
KOT	1433	右台座	一石五輪塔	火水地		36.0		18.2	15.5	15.0	1545	天文14	天文十四年乙巳 妙覚童子 五月廿一日		
KOT	1435	右台座	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	16.0	14.5			天文十[　] 道□法□ 五月廿九日		
KOT	1436	右台座	一石五輪塔	火水地		42.0		19.8	17.0	16.8	1563	永禄6	永禄六／ 立蓮童／ 四月／	別付線三本	
KOT	1440	右台座	一石五輪塔	地輪		16.0		16.0	12.0	12.5	1536	天文5	天文五丙申 妙幸童／ 九月十／		
KOT	1446	右台座	一石五輪塔	地輪		17.0		17.0	11.8	11.8			覚運法印		
KOT	1452	右台座	一石五輪塔	地輪		24.5		24.5	19.2	20.0	1540	天文9	浮秀大姉 天文九年庚子十四日		
KOT	1458	右台座	一石五輪塔	地輪		17.9		17.9	6.6	6.0	1514	永正11	／林禅門 永正十一甲戌十月八日		
KOT	1470	右台座	一石五輪塔	地輪		22.7		22.7	16.8	16.5	1528	享禄1	享禄元年戊子 全久大姉 九月十一日		
KOT	1472	右台座	一石五輪塔	地輪		6.4		6.4	13.5	13.9	1533	天文2	花屋逆春童女 天文二癸巳年三月十日		
KOT	1483	右台座	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	21.0	15.9	1529	享禄2	道勝禅定門 享禄二天己丑三月廿七日		
KOT	1493	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	16.5	17.0	1524	大永4	珠林東勝禅[　] 大永四甲申卯月五日		
KOT	1498	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	21.0	20.5			□慈□禅定 [　] [　]月十五日		
KOT	1505	右台座	一石五輪塔	地輪		23.5		23.5	17.0	16.5	1519	永正16	永正十六天 妙善禅定尼 十二月廿六日		
KOT	1507	右台座	一石五輪塔	火水地		37.5		20.5	14.0	14.0	1544	天文13	天文十三年 弥平禅定門 九月五日		
KOT	1509	右台座	一石五輪塔	火水地		46.0		22.5	17.0	17.0	1505	永正2	[　] 永正二[　]四月[　]		
KOT	1519	右台座	一石五輪塔	水地		35.0		20.5	16.5	17.0	1523	大永3	□□法師 大永三天四□十五日		
KOT	1528	右台座	一石五輪塔	火水地		46.0		22.0	17.0	17.0	1524	大永4	大永四年 善三禅門 十一月七日		
KOT	1530	右台座	一石五輪塔	火水地		43.5		18.0	19.0	18.5	1508	永正5	為善仁童子 永正五戊□十二月廿八日		
KOT	1532	右台座	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0	17.0	16.5	1515	永正12	□善大姉 逆修 永正十二天七月十五日		
KOT	1534	右台座	一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.0	16.5			□□ 天[　] 十月[　]		
KOT	1535	右台座	一石五輪塔	地輪		20.5		20.5	14.0	14.0			盛玲法師逆／		
KOT	1536	右台座	一石五輪塔	地輪		21.0		21.0	17.5	18.0			[　] 補玲禅尼 [　]十四日		
KOT	1546		一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	17.5	17.0			妙清禅尼		

所在地 調査区域	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	復元	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘　文	備　考	図版
KOT	1548	右台座	一石五輪塔	地輪		22.0		22.0	18.0	18.0			[　　] [　　]禅門 六月[　　]	削られて読めず。	
KOT	1549	右台座	一石五輪塔	地輪		20.5		20.5	15.0	14.5			善□法師		
KOT	1553	右台座	一石五輪塔	地輪		24.5		24.5	19.0	17.0	1520	永正17	永正十七天 妙田童女 八月廿七日		
KOT	1558	右台座	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	13.0	13.0	1538	天文7	道玲禅定門 天文七年正月十九日		
KOT	1561	右台座	一石五輪塔	地輪		28.5		28.5	19.5	20.5	1494	明応3	性妙大姉 明応三年正月十五日		
KOT	1564	右台座	一石五輪塔	火水地		48.0		24.0	17.5	17.5	1554	天文23	天文廿三年 □西上人 □月三日	火、水輪裏側かけている。	
KOT	1570	右台座	板碑						21.0				阿／ ／無阿弥陀仏道／ 大永／		
KOT	1572	右台座	石仏										□文十二年 七月廿七日	上部欠。左手に蓮の花を持つ。	
KOT	1583	右台座	石仏		地蔵								妙賢禅／	下部欠	
KOT	1593	右台座	石仏		地蔵								永心禅定門／ 三月□日／	下部欠	
KOT	1601	右台座	石仏										／文十二年八月廿九日／	上下欠	
KOT	1602	右台座	石仏								1548	天文17	／天文十七正月廿三日	上部欠	
KOT	1604	右台座	石仏		地蔵				21.0	8.0	1563	永禄6	心善童子／ 永禄六年七月／		
KOT	1606	右台座	石仏								1567	永禄10	宗恩上座　永禄十年六月／	上下欠	
KOT	1613	右台座	石仏								1540	天文9	道林／ 天文九／	下部欠	
KOT	1619	右台座	石仏										／□円□□ ／妙慶童女　善了童子／	上部欠	
KOT	1642	右台座		供花器									山慶容禅定尼		
KOT	1671		一石五輪塔	地輪		19.3		19.3	14.5		1533	天文2	天文二年 盛徳禅門 正月七日		
KOT	1672		一石五輪塔	火水地		48.9			18.0				□□□天 寿彩禅定門 五月八日		
KOT	1693		一石五輪塔	水地		33.0		19.5	16.5				[　　] 盛賢禅門 正月／		
KOT	1703		一石五輪塔	火水地		49.0		24.5	17.0				[　　] 逆修 [　　]		
KOT	1709		一石五輪塔	地輪		22.3		22.3	16.2		1532	享禄5	平徒五天王民 宗忠禅門 四月六日		
KOT	1715		一石五輪塔	地輪		23.1		23.1	16.6				[　　] 道資童子 卯月一日	割付線あり。	
KOT	1722		一石五輪塔	地輪		27.3		27.3					宝山永珍禅定門		
KOT	1738		一石五輪塔	地輪		22.2		22.2	17.5		1527	大永7	大永七年丁亥 道信禅門 十一月廿七日		
KOT	1743		一石五輪塔	地輪		20.8		20.8	17.7				永正十□年□□ 妙言禅定尼 ／月二日		
KOT	1751		一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	17.5		1517	永正14	永正十四年 果恵妙心大姉 十二月八日		
KOT	1753		一石五輪塔	地輪		21.8		21.8	21.4		1511	永正8	月庵□心大姉 逆修 永正八辛未二月／		

所在地調査区域	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1755		一石五輪塔	地輪		22.5		22.5	17.0				道円逆師 ／十月／		
KOT	1756		一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	18.0				妙一道女 ／十月廿／		
KOT	1757		一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	16.5		1546	天文15	天文十五年丙午 道誉上座 正月十一日		
KOT	1763		一石五輪塔	地輪		24.0		24.0	17.0		1539	天文8	天文八己亥年七月十四日 盛妙禅定尼 春秋二□		
KOT	1769		一石五輪塔	地輪		18.5		18.5	18.2				固妙禅尼 逆修 ／時正		
KOT	1770		一石五輪塔	地輪		25.7		25.7	18.4				[　　] 寓妙大妙 二月廿一日		
KOT	1781		一石五輪塔	地輪		22.4		22.4	18.3		1516	永正13	永正十三丙子 妙久童女 十月十日		
KOT	1784		一石五輪塔	火水地		36.3			15.4				[　　]童子 十月七日		
KOT	1788		一石五輪塔	地輪		23.0		23.0	16.1		1559	永禄2	永禄二年□未 了珪大姉七□ ／十四日		
KOT	1788		一石五輪塔	地輪		27.0		27.0	20.5		1539	天文8	天文八年己亥 宗慶禅定尼 七月十九日		
KOT	1793		一石五輪塔	水地		29.8		19.3	14.7		1531	享禄4	享禄四年辛卯 妙寿童子 七月十日		
KOT	1796		一石五輪塔	地輪		16.3		16.3	17.2		1514	永正11	／門 永正十一年十二月廿八日		
KOT	1798		一石五輪塔	地輪		19.8		19.8	17.4		1515	永正12	妙菊童女 永正十二乙亥十月十三日		
KOT	1878		一石五輪塔	地輪		23.3		23.3	21.4		1551	天文20	梵策智劫禅／ 天文廿年辛亥二月十／		
KOT	1879		石仏	地蔵		39.0			22.0		1538	天文7	天文七年四月七日 慶円禅定門		
KOT	1885	山内下	一石五輪塔	地		25.0		25.0	16.8	17.0	1539	天文8	天文八年己亥 宗慶阿闍梨 六月七日		
KOT	1886	谷入口	板碑										妙善大姑 十月廿一日 宗賢童子[　　]		
KOT	1890	谷入口	一石五輪塔	地		18.5		18.5	18.0	18.0			妙心禅尼 ／正十一年□二月廿九□		
KOT	1896	谷入口	一石五輪塔	火水地		45.0		19.0	18.2	17.9	1518	永正12	／童女 永正十二乙亥六月三日		
KOT	1898	三尊石付近	板碑										／慶／		
KOT	1900	三尊石付近	石仏										永貞大／		
KOT	1907	三尊石付近	一石五輪塔	地		21.5		21.5	14.5	14.5	1531	享禄4	享禄四年辛卯 妙西禅尼 八月五日		
KOT	1909	三尊石付近	一石五輪塔	地		18.5		18.5	14.5	14.5	1517	永正14	行円童子 ／永正十四天十二月廿三日／		
KOT	1911	三尊石付近	一石五輪塔	地		15.0		15.0	15.3	15.0	1510		[　　] 逆修 ／正七庚午十一月十／		

所在地 調査区数	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	幅種	総高	地高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1912	三尊石付近	石碑										願奉禅／		
KOT	01915	三尊石付近	石碑										／盛秋童子　妙清恵尼 ／野馬堂七世父母等 ／童子　妙圓童子		
KOT	1924	三尊石付近	一石五輪塔	火水地		39.0		20.0	14.5	14.2			春妙大姉		
KOT	1933	三尊石付近	一石五輪塔	地		18.0		18.0	16.2	16.7			／雷比丘尼		
KOT	1937	三尊石付近	一石五輪塔	地		18.4		18.4	13.3	13.7	1539	天文8	天文八／ 妙口比／ 九月七／		
KOT	1948	三尊石付近	一石五輪塔	水地				19.8	14.0	14.0	1534	天文3	天文三甲午年 妙心比丘尼 九月六日		
KOT	1949	三尊石付近	一石五輪塔	地		22.4		22.4	18.4	18.2	1529	享禄2	妙春禅尼 享禄二年二月七日		
KOT	1951		一石五輪塔	地									／六年丁酉十月十二日		
KOT	1958	山内墓地	一石五輪塔	火水地				21.0	16.5	16.5			□□三郎 道泉禅門 八月十五日		
KOT	1957	山内墓地	一石五輪塔	完形		50.0		19.0	15.5	15.0	1517	永正14	善信童子 永正十四天十二月十三日		
KOT	1968	山内墓地	一石五輪塔	完形		48.5		18.5	13.5	14.5	1527	大永7	大永七年 妙一童女 八月□五日		
KOT	1960	山内墓地	石仏								1559	永禄2	永禄二六月 廿二日		
KOT	1961	山内墓地	石仏										／己□九〔　〕		
KOT	1963	山内墓地	一石五輪塔	地輪		23.0		20.2	13.4	13.2	1557	弘治3	弘治三年丁巳／ 宗碧童子 十二月八日		
KOT	1964	山内墓地	石仏										／□童女	□は二か？	
KOT	1966	山内墓地	一石五輪塔	水地				23.0	17.2	17.2	1518	永正15	／仙大姉 永正十五天十一月廿八日	文字に漆残存する。	
KOT	1967	山内墓地	一石五輪塔	地輪				24.5	17.1	17.8			〔　〕十六年 真久禅定門 正月三日		
KOT	1968	山内墓地	一石五輪塔	地輪				23.5	17.2	16.5			盛秀		
KOT	1969	山内墓地	一石五輪塔	地輪				24.5	16.8	16.9			妙泉禅尼	文字に朱漆残存	
KOT	1970	山内墓地	一石五輪塔	地輪				22.0	17.3	17.3	1523	大永3	逝修 心妙大姉 大永三年		
KOT	1971	山内墓地	一石五輪塔	地輪				23.0	17.3		1534	天文3	天文三年 因芳比丘尼 三月廿六日	文字に漆、金箔残存する。	
KOT	1972	山内墓地	一石五輪塔	水地		35.8		24.3	18.0	17.5			月南妙稔大姉 □文五四申年□三月廿九日		
KOT	1973	山内墓地	一石五輪塔	地輪				24.0	17.0	17.1	1529	享禄2	享禄二年 道泉禅門 十一月九日	側行線あり。	
KOT	1974	山内墓地	一石五輪塔	地輪				21.0	17.7	17.0	1523	大永3	大永三年 祖□大姉 十二月十三日	朱漆残存	
KOT	1975	山内墓地	一石五輪塔	地輪				22.7	17.2	16.7			妙久大姉		
KOT	1976	山内墓地	一石五輪塔	地輪				22.5	15.5	15.5	1561	永禄4	／□権大僧都清□ 永禄四年五月〔　〕		

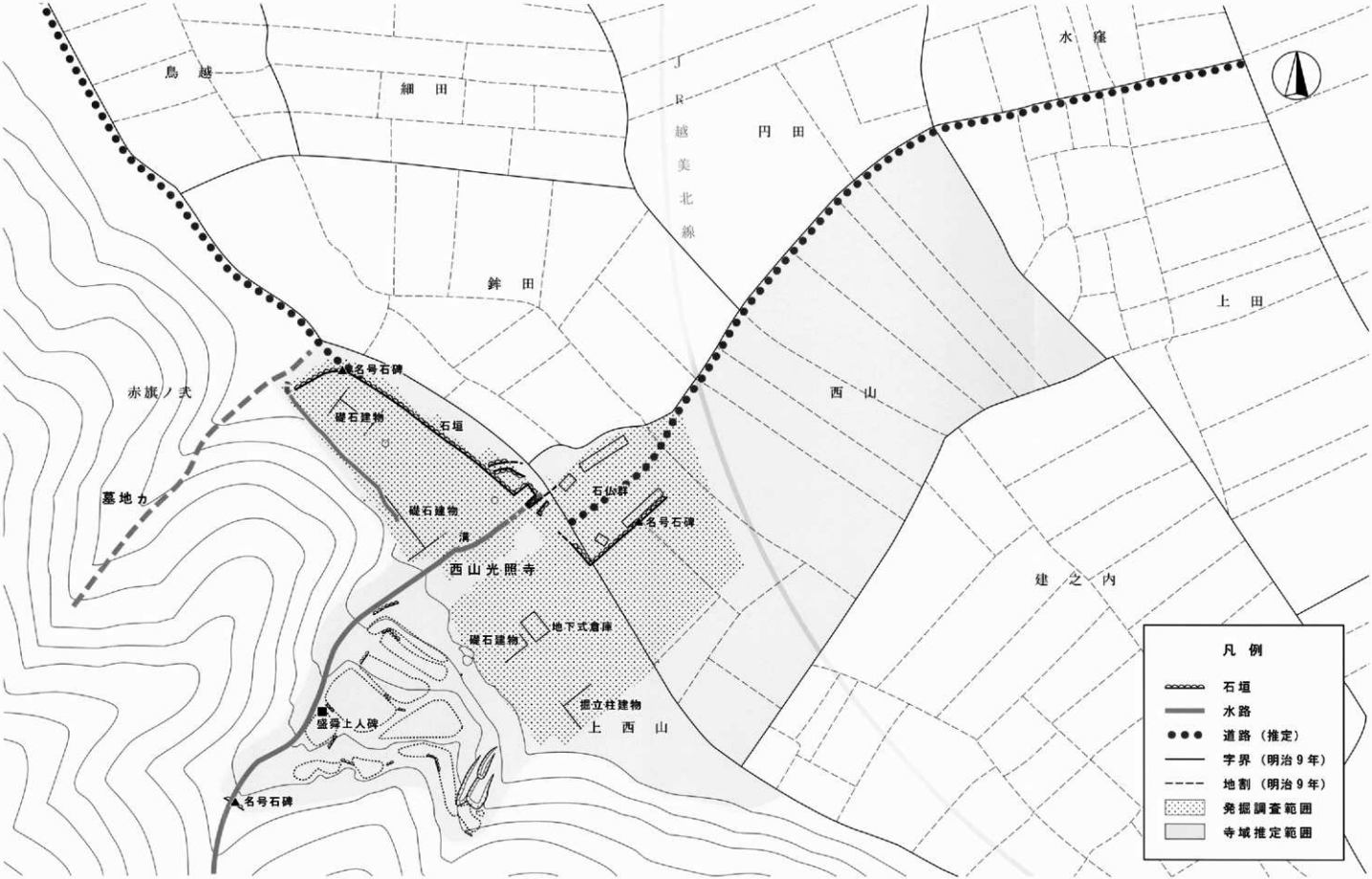
所在地 調査区数	石仏・遺物番号	現所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
KOT	1977	山内窟地	一石五輪塔	水地					16.5	16.0			元亀／ 俱 勇／ 十二月廿／	地輪下部分大きく破損する。	
KOT	1978	山内窟地	一石五輪塔	地輪				22.5	17.0	18.0	1519	永正16	永正十六年 道順禅門 十月十四日		
KOT	1989	山内窟地	一石五輪塔	地輪				24.5	17.0		1565	永禄8	永禄八年 玄禅禅定門 十二月廿七日		
KOT	1981	山内窟地	一石五輪塔	火水地				22.0	15.0		1531	享禄4	享禄四年辛卯 正禅法師 二月二日		
KOT	1982	山内窟地	板碑										妙一禅尼		
KOT	1983	山内窟地	一石五輪塔	火水地				23.0	18.0	18.0	1535	天文4	真世禅定尼 天文四乙未九月七日		
KOT	1984	山内窟地	一石五輪塔	地輪				22.0	17.0	17.0			道金禅門逆修		
KOT	1985	山内窟地	一石五輪塔	地輪				24.0	17.0	17.5			妙悲禅定尼		
KOT	1986	山内窟地	一石五輪塔	水地				19.5	15.3	14.8	1531	享禄4	享禄四辛卯年 嗣智童子 八月廿七日		
KOT	1987	山内窟地	一石五輪塔	地輪				22.5	17.0	16.5	1521	大永1	大永元年 宮久禅門 □月廿八日		
KOT	1988	山内窟地	一石五輪塔	地輪				22.0	16.5	16.5	1537	天文6	天文六年□酉 栄西禅定門 七月九日	朱漆・金彩色残存	
KOT	1989	山内窟地	一石五輪塔	地輪				22.0	16.7	16.5	1558	弘治4	弘治四年 □□宗珠大姉 四月六日		
KOT	1991	山内窟地	一石五輪塔	地輪				19.0	12.4	12.0	1571	元亀2	元亀二年六月十四日 清庵瑞照上座 修証与六郎	別付線あり。	
KOT	1992	山内窟地	一石五輪塔	地輪				28.5	20.8	20.5	1510	永正7	永正七庚午年 浄金禅定門 六月朔日		
KOT	1996	山内窟地	一石五輪塔	地輪				19.0	18.5	18.5	1508	永正5	盛妙貞禅尼 永正五戊辰十一月廿五日		
KOT	1997	山内窟地	一石五輪塔	火水地				19.5	18.0	17.8			[　　] [　　] 永正□□年十月十七日		
KOT	1998	山内窟地	一石五輪塔	火水地				24.0	17.5	17.0	1568	永禄11	永禄十一年□□ 盛妙大郎		
KOT	1999	山内窟地	一石五輪塔	地輪					18.0	18.0	1524	大永4	妙善／ 大永四年甲□二月廿五日／		
86次			一石五輪塔	地輪									妙円／ 八月廿／		
86次			石仏石碑										／観		
132次	2	D8	一石五輪塔	地輪		18.0		18.0	17.0	17.5			勝長禅定門 □元天四月十二日		705
132次	4	E7付近	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	20.0	16.5	1539	天文8	尊堂盛寿童女 天文八己亥年□月廿□日	梵子に月輪あり。	713
132次	11	E7付近	一石五輪塔	地輪		18.3		18.3	18.3	18.0	1509	永正6	／郎 永正六己巳正月廿四日	金彩色残存	700
132次	19	F14付近	板碑か	上左角		14.8			11.6	7.5	1549	天文18	天文十八年		755
132次	20	F14付近	石仏か	石側片		19.6			6.6	6.9			／妙金童女／		767

所在地 調査区域	石仏・遺物番号	場所・グリット	種別	部位	他情	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
132次	21	F14付近	板碑			13.9			15.3	5.5	1553	天文22	／廿三二月十／ ／比丘尼／ ／天文廿二十一月／ ／座／		766
132次	23	F14付近	板碑			19.4			11.5	16.0	1536	天文5	／天文五年丙申五月日 ／□□禅定門		762
132次	25	F14付近	板碑			16.0			11.7	6.9			／賢禅／		753
132次	26	F14付近	石仏か	右側		10.5			5.6	5.1			／精軍／		759
132次	33	E6付近	板碑			18.8			16.1	7.0			／西／		768
132次	39	F14付近	一石五輪塔	地		18.0		18.0	15.0	17.0	1511	永正8	為妙清大姉 永正八辛未二月廿三日		701
132次	43	H4	一石五輪塔	地輪		20.0		20.0	15.0	14.8			〔　　〕 妙西大姉 四月□日		714
132次	48	D8	一石五輪塔	火水地		45.2		24.0	16.8	16.0	1569	永禄12	瀧澤□法大姉 永禄十二己巳壬五月八日	梵字に月輪	727
132次	51	D11付近	石仏			18.5			17.3	7.9			四日		754
132次	56	不明	板碑			17.0			24.0	9.0			／為妙／ ／明応／		756
132次	57	不明	板碑			21.4			24.6	7.2			／道金禅／		771
132次	65	E8付近	一石五輪塔	地		18.5		18.5	12.5	12.0			悉昌永貞大姉		712
132次	73	C6	板碑			25.7			29.2	7.6			□□ 盛得　□ 盛掃　清□ 盛雲　遊□	裏面にも銘文有 〔　盛／〕／ 眼道禄／〕	774
132次	76	D8	地蔵	背から下		29.4			26.8	11.0	1557	弘治3	／妙西禅定尼 ／弘治三丁巳八月〔　〕		788
132次	79	D8	組合五輪塔	地輪		20.3		20.3	12.9	16.0			□光禅定／	別付線あり。	715
132次	82	D8	石塔			9.6			14.4	8.7			／二月廿	小片	
132次	83	D8	一石五輪塔	火水地		42.8		21.0	16.3	16.5			宝神院阿闍梨金禅		721
132次	93	D8	地蔵	左下		21.6			14.3	14.5			／女		786
132次	104	G8.9	一石五輪塔	地輪		13.5		13.5	13.5	13.0	1512	永正9	為妙〔　　〕 永正九四月十日		
132次	117	C14	一石五輪塔	地輪		21.5		21.5	14.8	14.8			〔　　〕文〔　〕西 □盟禅尼 四月十五日		722
132次	118	E7仮SD1上面付近	一石五輪塔	地輪		25.0		25.0	18.0	17.0	1519	永正16	永正十六天□ 妙□禅尼 九月十一日		709
132次	126	E7仮SD1上面付近	板碑			10.4			19.3	8..5			／〔　　〕／ ／〔　　〕／ ／月廿／	摩滅激しく判断不可	773
132次	154	D8.9.10	板碑			21.0			14.0	6.0	1517	永正14	永正十四天丁丑／		748
132次	159	E7付近	一石五輪塔	火水地		49.1		23.8	17.5	16.0	1539	天文8	正等沙弥尼 天文八己亥十一月六日	別付線あり。	725
132次	163	E7付近	一石五輪塔	地輪		25.3		25.3	18.0	18.0	1623	大永3	大永三天癸 慶正禅尼 七月八日		719
132次	165	F14	一石五輪塔	地輪		26.6		26.6	18.0	18.0	1564	永禄7	永禄七甲子年 智□昌由禅定門 □□九〔　　〕		720

所在地 調査次数	石仏・造物番号	場所・グリット	種別	部位	像種	総高	像高	地輪高	巾	厚	西暦	和暦	銘文	備考	図版
132次	191	F6付近	板碑			18.3			23.0	10.1			／禅尼 ／月廿八日		757
132次	268	SX6423	地蔵			17.8			24.2	8.7			盛／		784
132次	287	D8	石仏			11.3			10.2	4.9			／盛禅定／	小片	765
132次	318	E5付近	板碑	下部		19.6			44.0	13.3			／門 ／禅尼	大型	761
132次	319	E5付近	一石五輪塔	火水地		41.3		17.6	17.8	17.8	1515	永正12	道徴童女 永正十二乙亥正月廿五日		703
132次	320	LM-4.5	板碑			18.3			17.7	5.4			／道祐禅口／ ／盛牧大禅口／ ／妙□□／		770
132次	321	I4	板碑			19.3			16.5	7.1			妙爲禅定尼		758
132次	322	I4	板碑			14.2			14.3	6.9			／法界／ ／法界／ ／法界／	小片、側面なし。	775
132次	323	G4	板碑			16.0			16.0	5.0			妙□□	小片、側面なし。	751
132次	324	J4	板碑			31.7			19.4	13.7			正禄禅門		760
132次	339	P2	一石五輪塔	地輪		22.0		18.0	18.0	18.0	1516	永正13	永正十三年 妙蔵童女 十一月廿三日		708
132次	340	E13	千手観音	右手部		29.6			29.2	7.0			良珍／		791
132次	357	E8板SD1	石仏	左側		17.0			13.0	8.0	1557	弘治3	弘治三五月／	金彩色残存	752
132次	358	F6付近	不明大型石塔			14.0			12.8	7.9			／無阿弥／	文字に朱、金彩色残存	810
135次	420	Z4	一石五輪塔	地輪		19.0		19.0	13.7	14.0	1526	大永6	大永六年 妙慶童女 七月廿三日		706
135次	422	Z4	一石五輪塔	火水地		45.4		18.8	19.0	18.0	1515	永正12	盛為童女 永正十二乙亥天七月七日		704
135次	424	Z4	一石五輪塔	火水地		46.0		22.5	17.8	16.0	1529	享禄2	享禄二天 妙心大姉 十二月廿八日	別付箱あり。	711
135次	428	YZ4	一石五輪塔	火水地		40.0		20.6	17.5	17.0	1534	天文3	道運禅門 天文三年七月七日		726
135次	436	Z6	石仏	首から下		20.2			22.5	9.0			／□□童子		787
135次	437	Z5	一石五輪塔	地輪		27.0		25.8	17.0	16.5	1539	天文8	天文八年 道華禅定門 二月廿一日		717
135次	440	W4板SD7内	板碑			30.0			16.0	8.3			／座 ／弥陀仏		778
135次	443	W11	板碑			46.8			21.5	8.8			南無阿	朱線残存	777
135次	446	Y8	一石五輪塔	火水地		57.6		22.9	22.4	22.4	1507	永正4	妙寅 永正四丁卯十二月十七日		702
135次	447	O13	石仏			29.8			23.2	7.2			秀禅定門 盛忠／		764
135次	458		灯籠	笠		13.4			14.2	14.0			貞		813
135次	459		石仏	花瓶		14.6							□□禅定		819
135次	464	Z4	一石五輪塔	火水地		49.0		23.8	18.2	18.0	1534	天文3	雪堂金瑞禅定門 天文三年正月三日	金彩色残存、別付箱あり。	724

銘文の□は欠字を表す。[　　]は文字数不明の欠字を表す。
／は石材が欠けて判読不明を表す。
大型石造物の銘文の改行は 」 で表す。
梵字の別字は省略する。

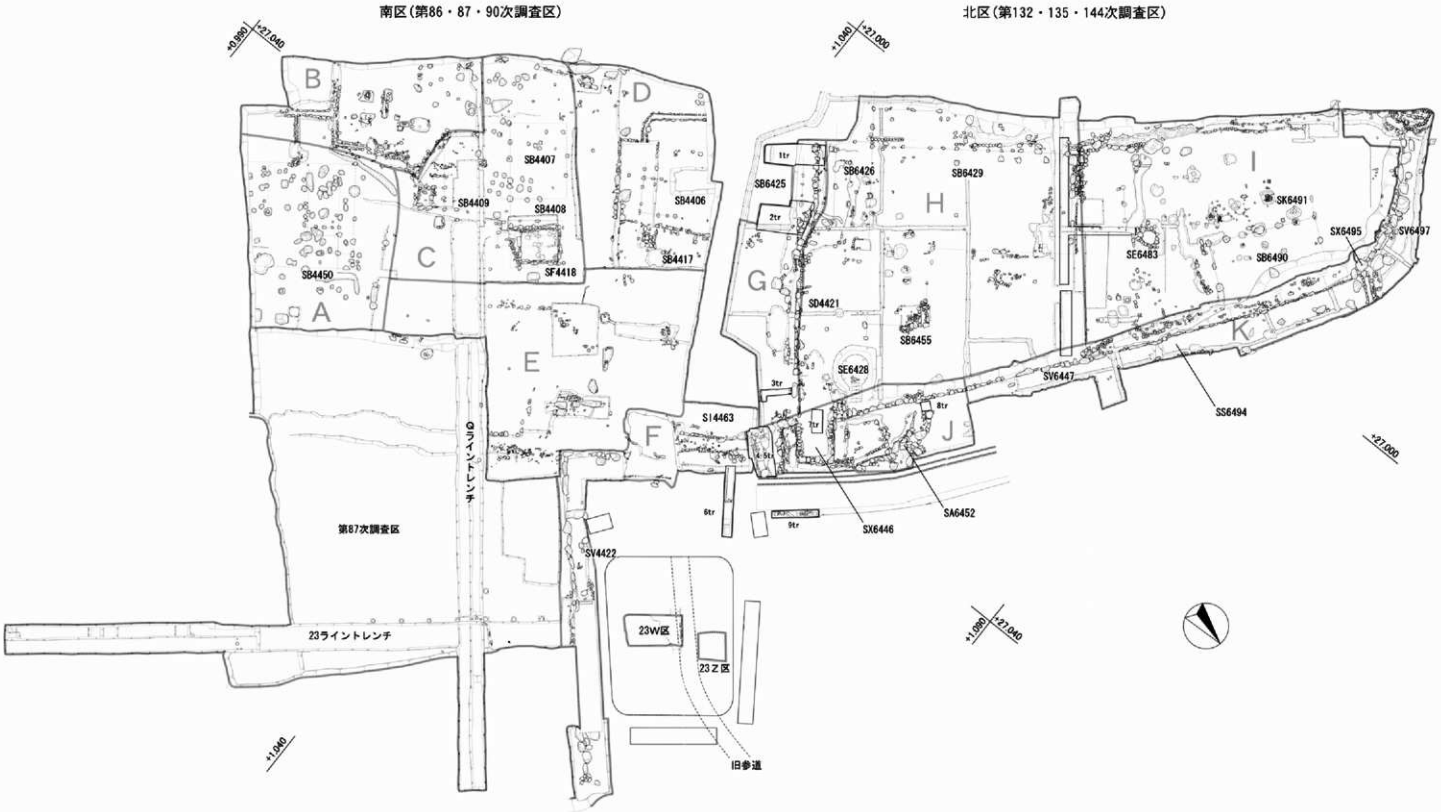
第１図　西山光照寺跡寺域推定図



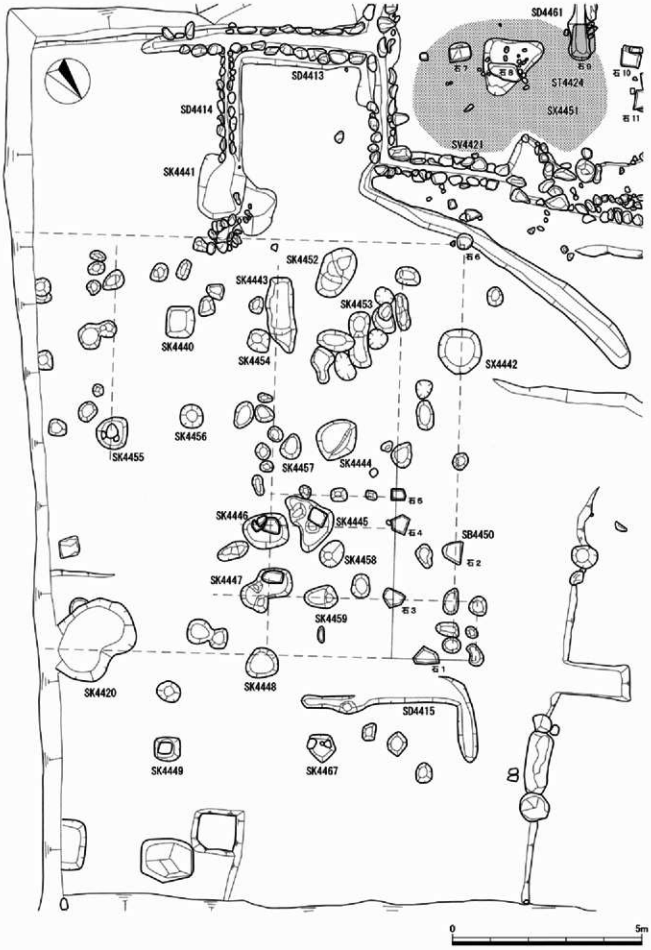
縮尺：1/1000

（発掘調査、地形測量図、地籍図をもとに作成）

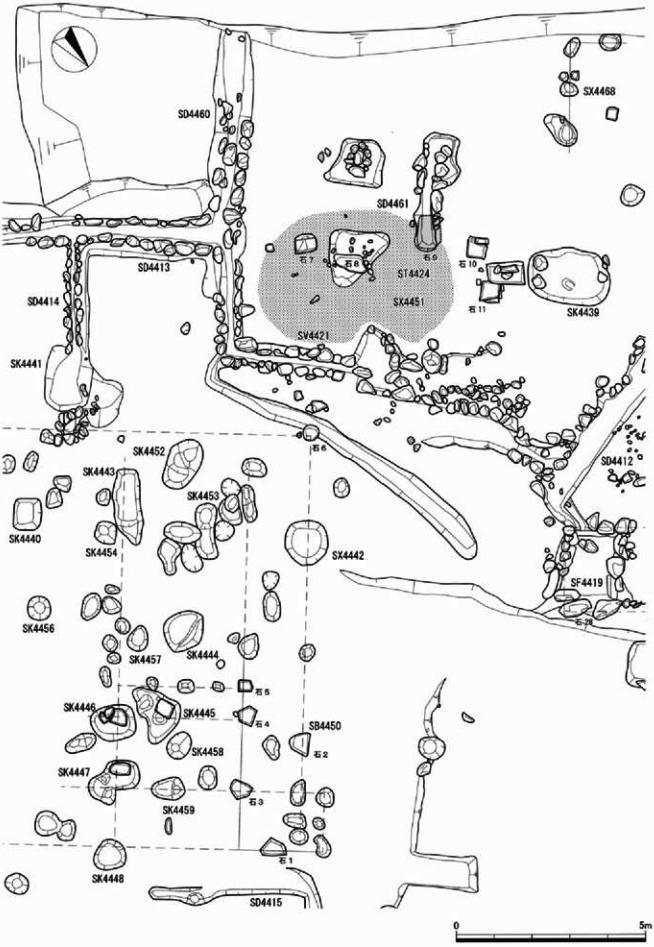
第２図　西山光照寺跡発掘調査区全体図



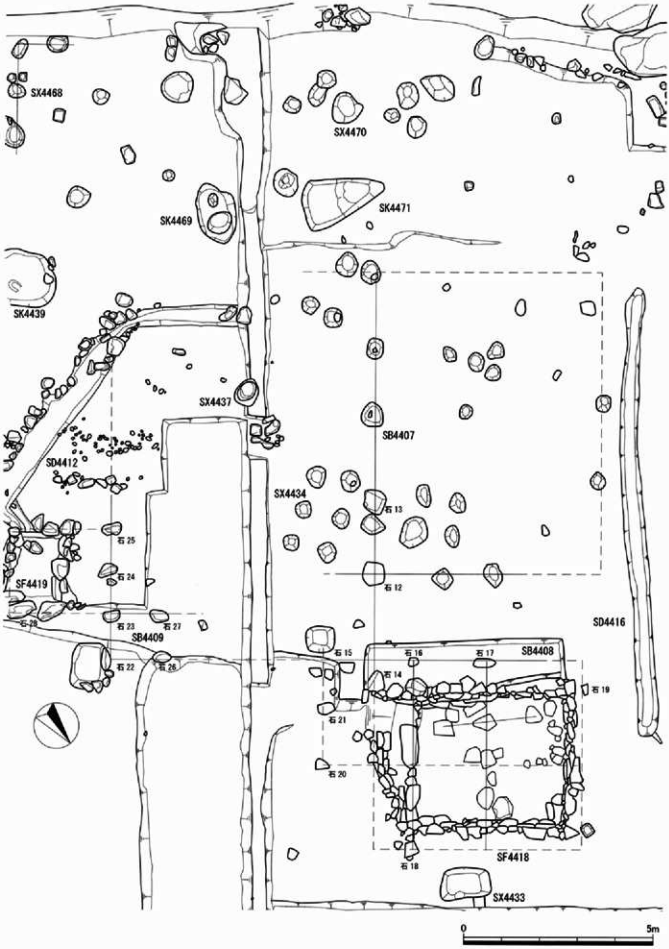
第３図　南区遺構群細図(1)



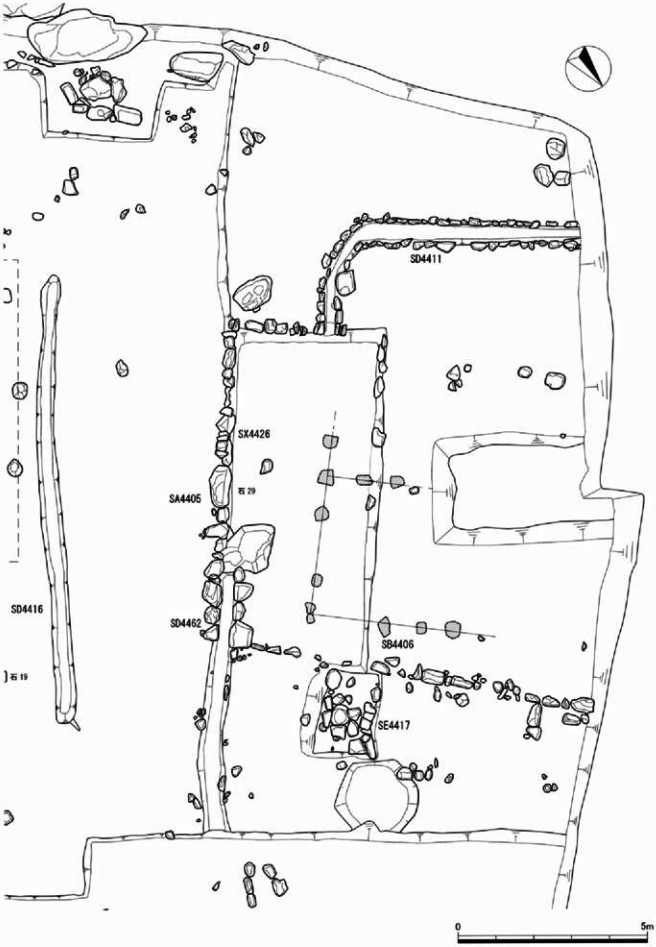
第４図　南区遺構詳細図(2)



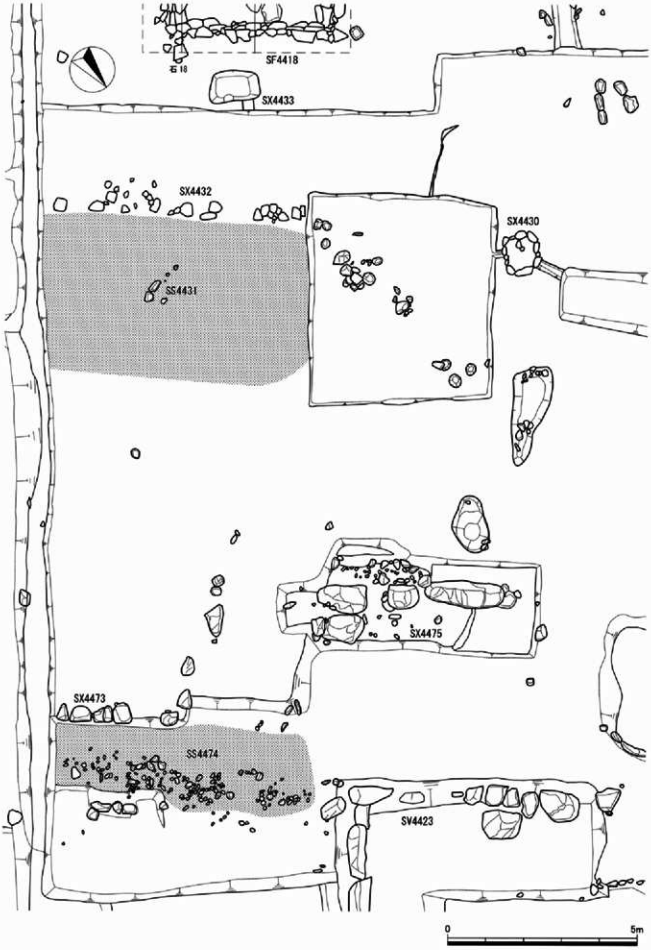
第５図　南区遺構詳細図(3)



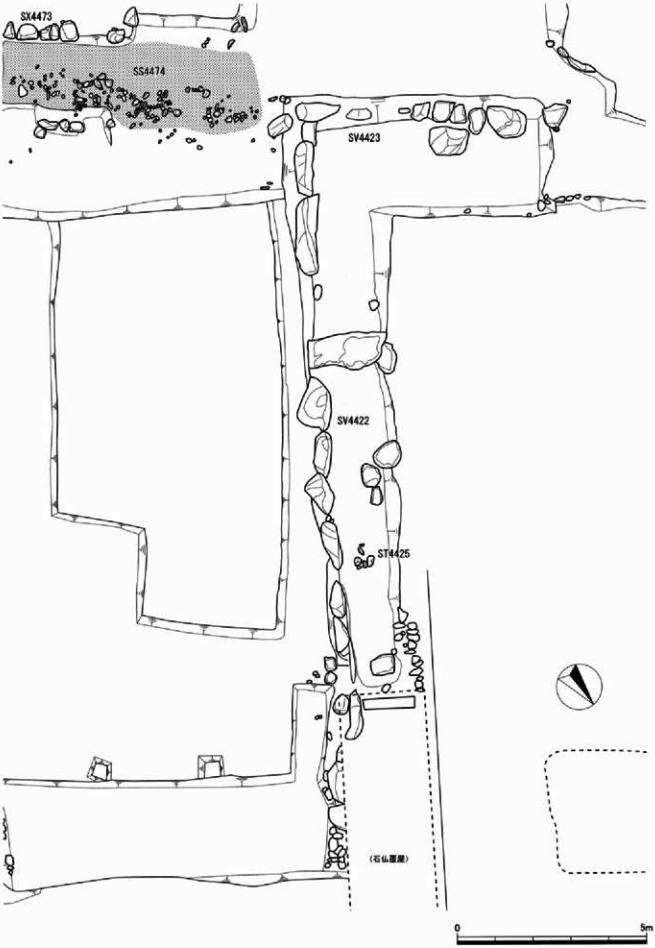
第６図　南区遺構詳細図(4)

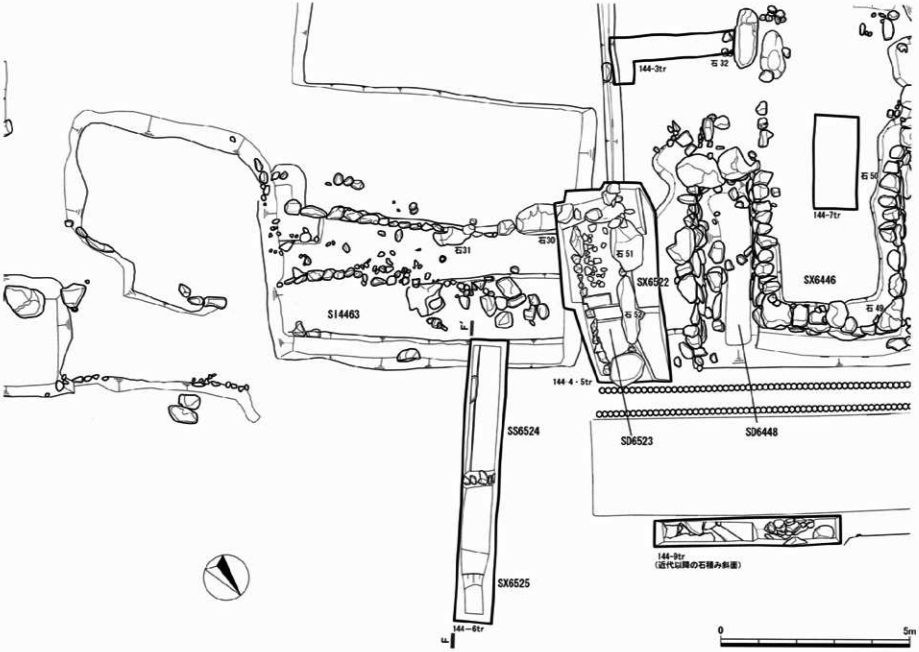


第７図　南区遺構詳細図(5)



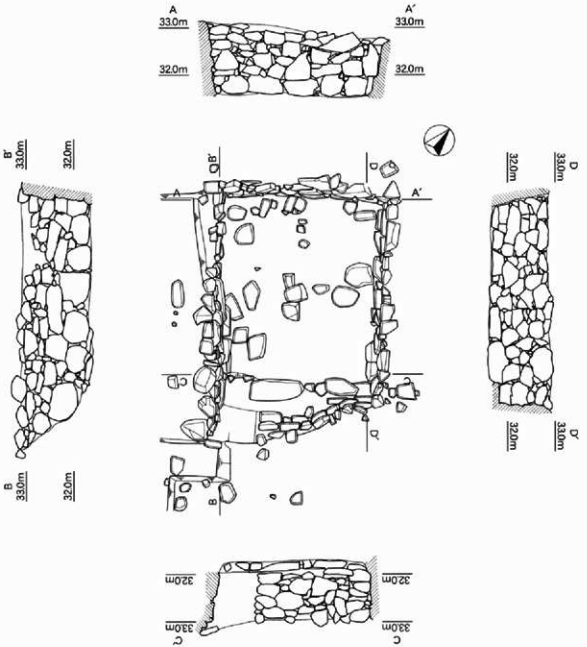
第８図　南区遺構群細図(6)



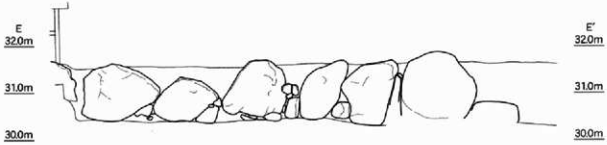


第9図 南・北区遺構詳細図

第10図　SF4418・SV4423詳細図

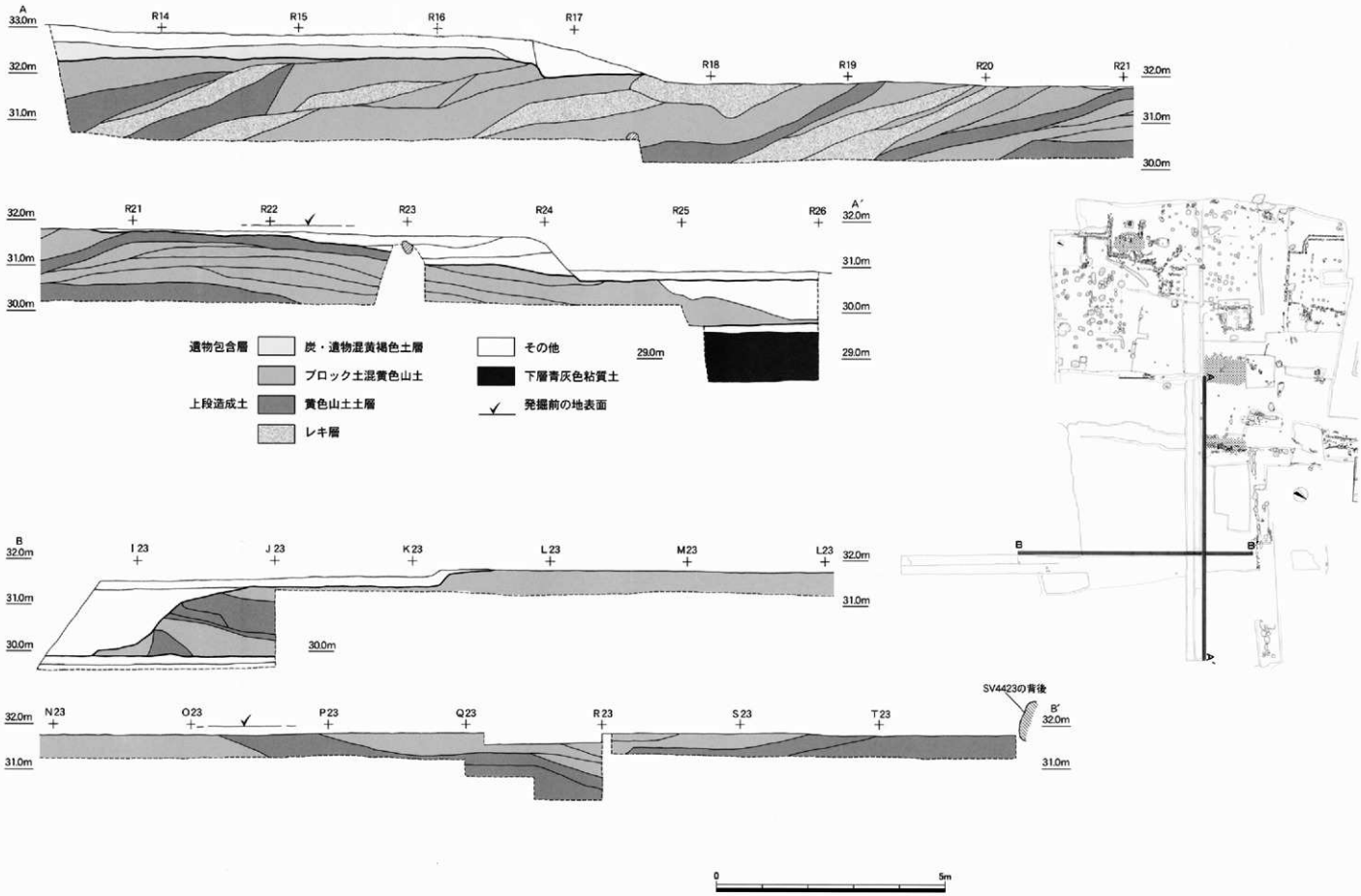


SF4418平面・立面図(縮尺:1/80)

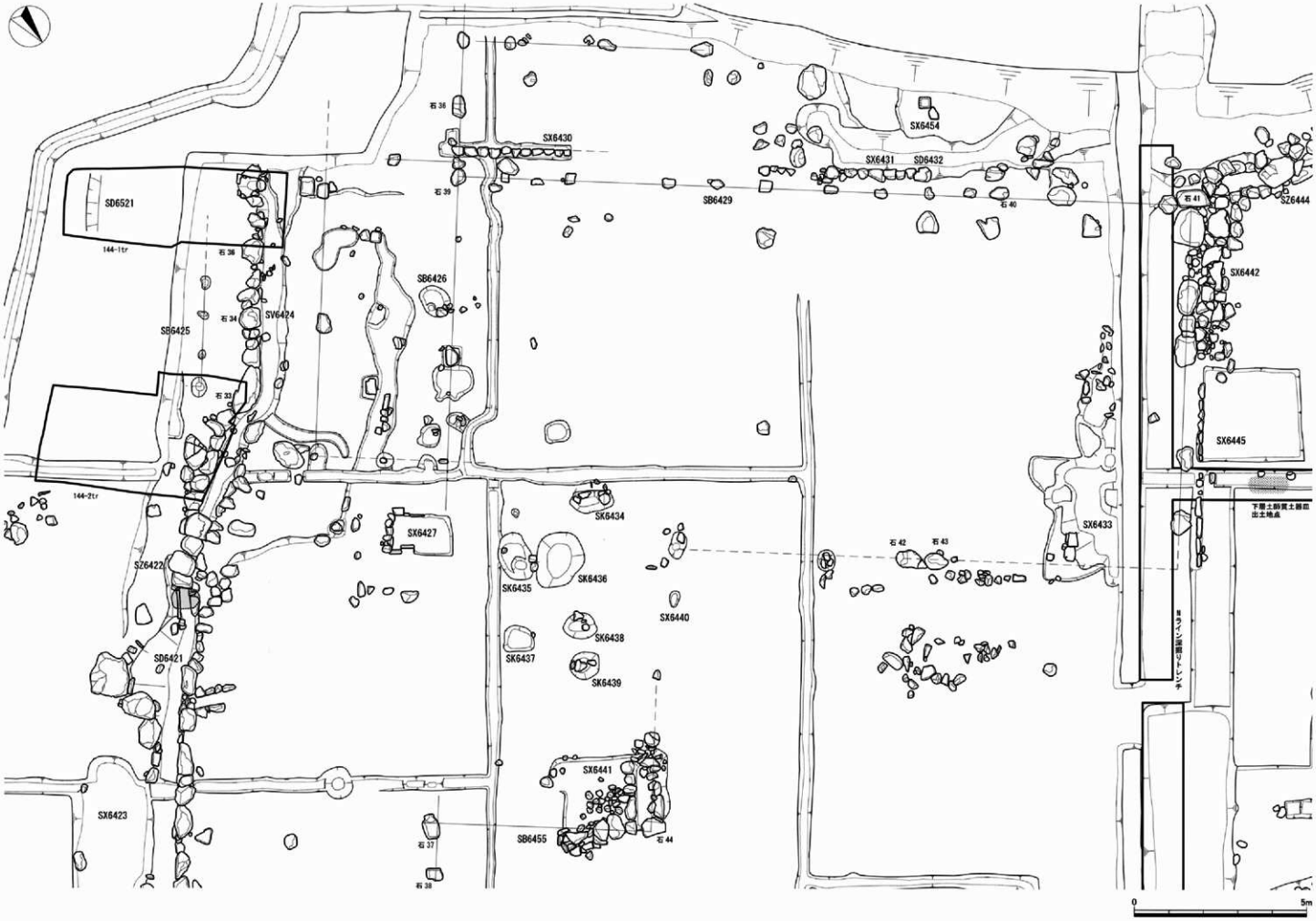


SV4422立面図(縮尺:1/80)

第11図　南区(第87次調査)トレンチ土層図

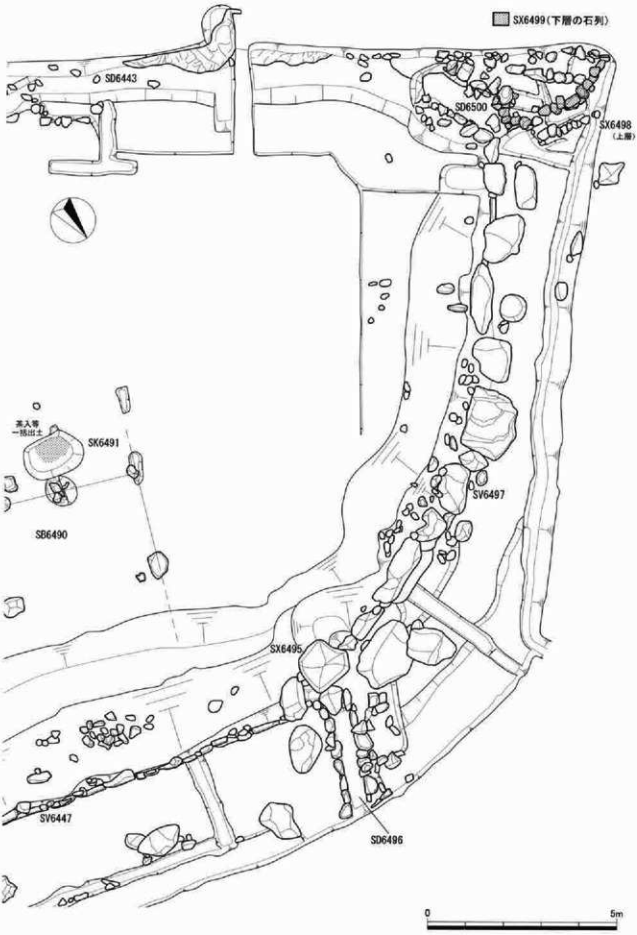


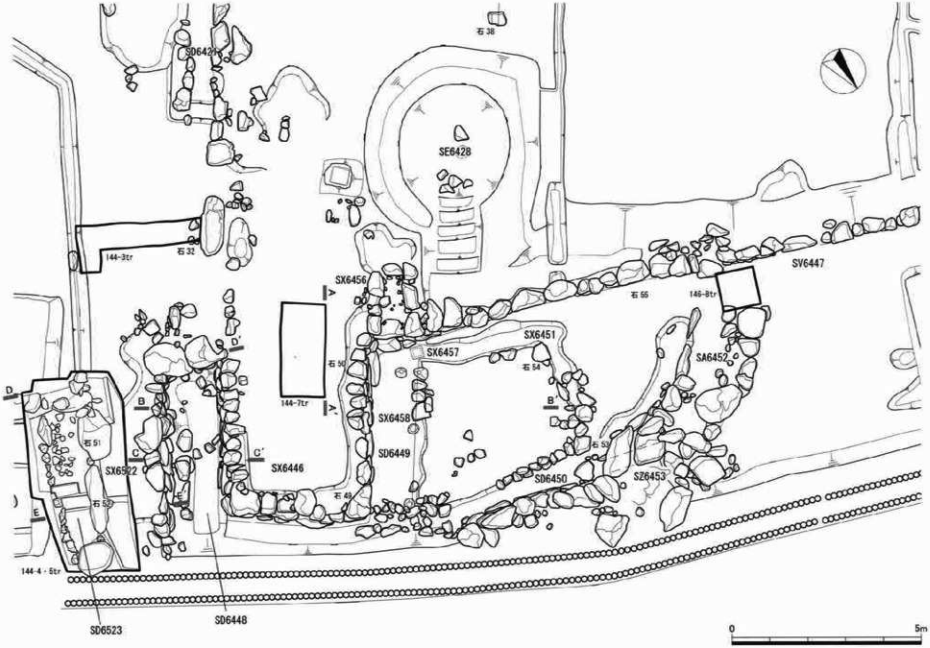
第12図　北区遺構詳細図(1)



第13図　北区遺構詳細図(2)

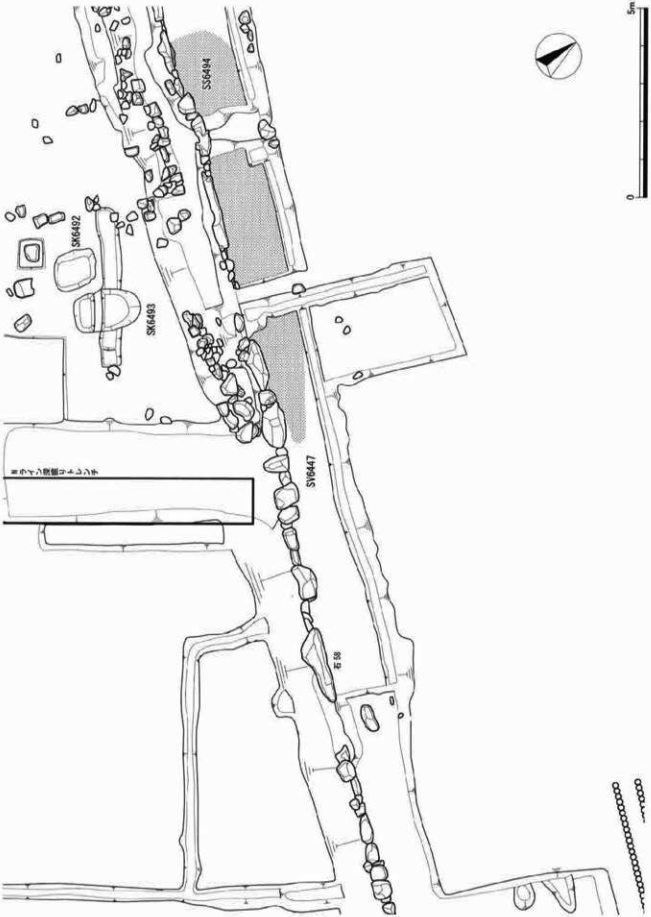
第14図　北区遺構詳細図(3)



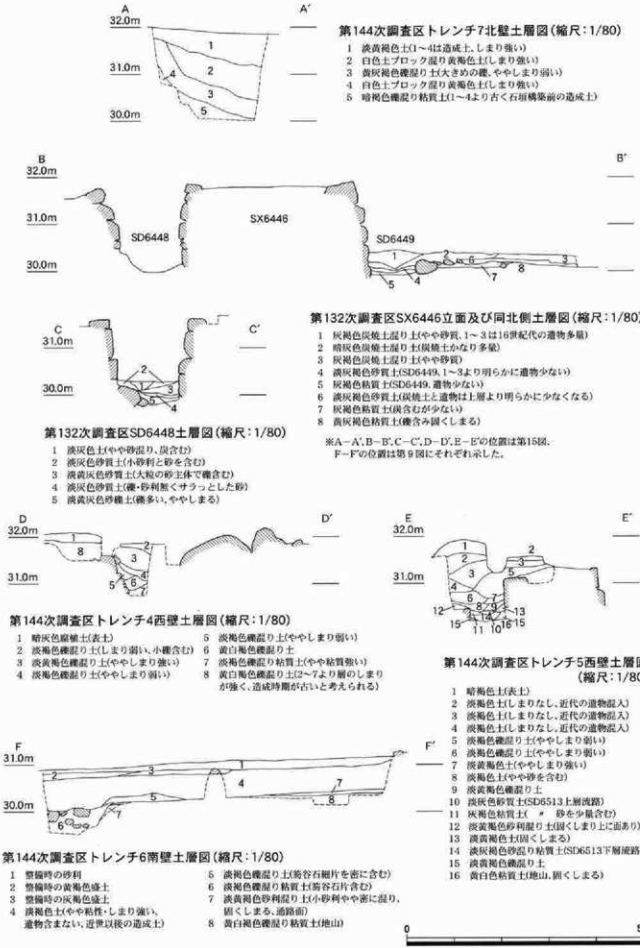


第15図　北区遺構詳細図(4)

第16図　北区遺構詳細図(5)



第17図　北区土層図(1)



第144次調査区トレンチ7北壁土層図(縮尺:1/80)

1　淡黄褐色土(1～4は造成土,しまり強い)
2　白色土ブロック混り黄褐色土(しまり強い)
3　黄灰褐色礫混り土(大きめの礫,ややしまり弱い)
4　白色土ブロック混り黄褐色土(しまり強い)
5　暗褐色礫混り粘質土(1～4より古く石原橋築前の造成土)

第132次調査区SX6446立面及び同北側土層図(縮尺:1/80)

1　灰褐色炭焼土混り土(やや砂質,1～3は16世紀代の遺物多量)
2　暗灰色炭焼土混り土(炭焼土かなり多量)
3　灰褐色炭焼土混り土(やや砂質)
4　淡灰褐色砂質土(SD6449,1～3より明らかに遺物少ない)
5　灰褐色粘質土(SD6449,遺物少ない)
6　淡灰褐色砂質土(炭焼土と遺物は上層より明らかに少なくなる)
7　灰褐色粘質土(炭含むが少ない)
8　黄灰褐色粘質土(礫含み固くしまる)

※A－A′,B－B′,C－C′,D－D′,E－E′の位置は第15図,
F－F′の位置は第9図にそれぞれ示した。

第132次調査区SD6448土層図(縮尺:1/80)

1　淡灰色土(やや砂混り,炭含む)
2　淡灰色砂質土(小砂利と砂を含む)
3　淡黄灰色砂質土(大粒の砂主体で礫含む)
4　淡灰色砂質土(礫・砂利無くサラっとした砂)
5　淡黄灰色砂礫土(礫多い,ややしまる)

第144次調査区トレンチ4西壁土層図(縮尺:1/80)

1　暗灰色腐植土(表土)
2　淡褐色礫混り土(しまり弱い,小礫含む)
3　淡黄褐色礫混り土(ややしまり強い)
4　淡褐色礫混り土(ややしまり弱い)
5　淡褐色礫混り土(ややしまり弱い)
6　黄白褐色礫混り土
7　淡褐色礫混り粘質土(やや粘質強い)
8　黄白褐色礫混り土(2～7より層のしまりが強く,造成時期が古いと考えられる)

第144次調査区トレンチ5西壁土層図(縮尺:1/80)

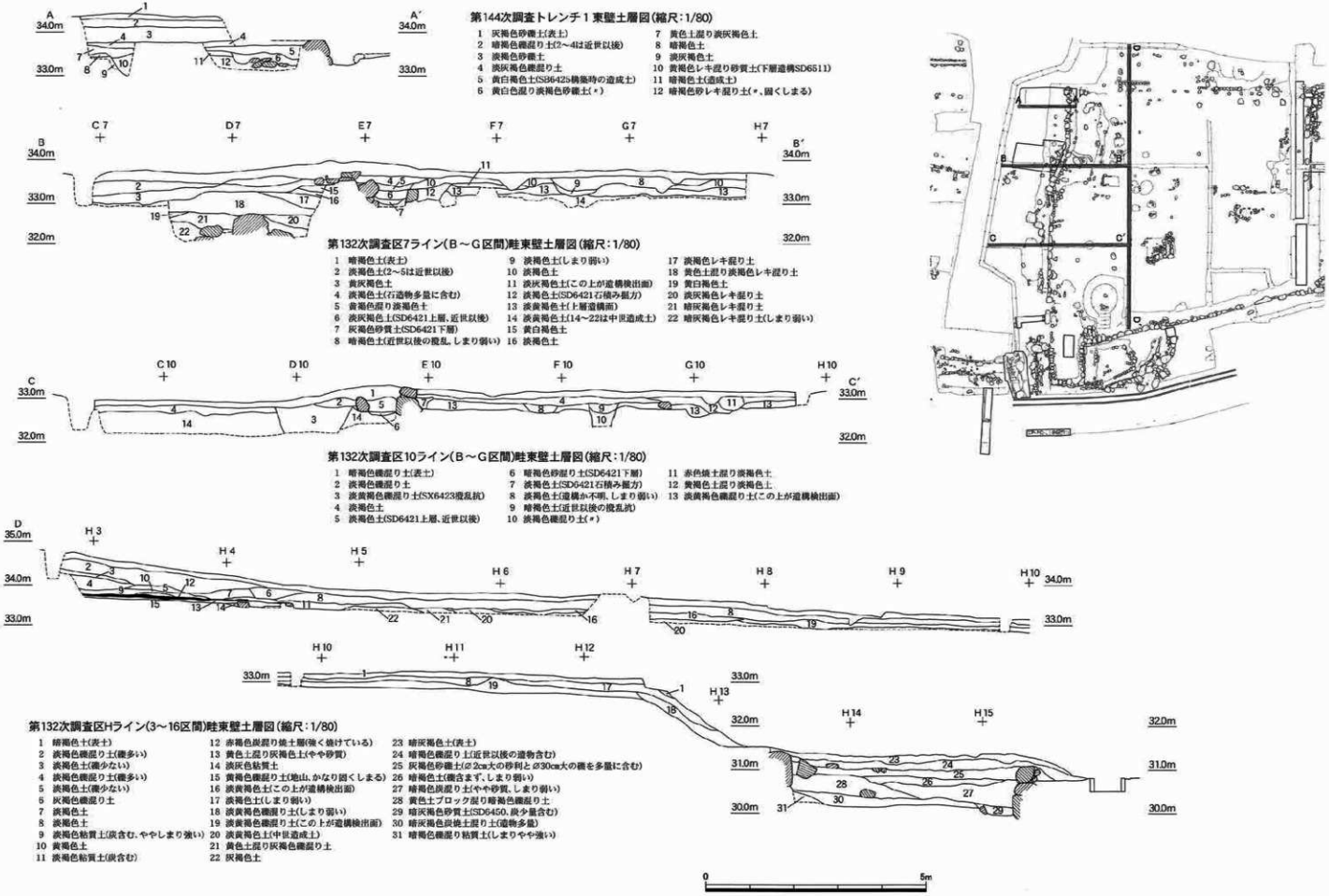
1　暗褐色土(表土)
2　淡褐色土(しまりなし,近代の遺物混入)
3　淡褐色土(しまりなし,近代の遺物混入)
4　淡褐色土(しまりなし,近代の遺物混入)
5　淡褐色礫混り土(ややしまり弱い)
6　淡褐色礫混り土(ややしまり弱い)
7　淡黄褐色土(ややしまり強い)
8　淡褐色土(やや砂を含む)
9　淡黄褐色礫混り土
10　淡灰色砂質土(SD6513上層流路)
11　灰褐色粘質土(〃　砂を少量含む)
12　淡黄褐色砂利混り土(固くしまり上に面あり)
13　淡黄褐色土(固くしまる)
14　淡灰褐色砂混り粘質土(SD6513下層流路)
15　淡黄褐色礫混り土
16　黄白色粘質土(地山,固くしまる)

第144次調査区トレンチ6南壁土層図(縮尺:1/80)

1　整備時の砂利
2　整備時の黄褐色盛土
3　整備時の灰褐色盛土
4　淡褐色土(やや粘性・しまり強い,遺物含まない,近世以後の造成土)
5　淡褐色礫混り土(筒谷石細片を密に含む)
6　淡褐色礫混り粘質土(筒谷石片含む)
7　淡黄褐色砂利混り土(小砂利やや密に混り,固くしまる,通路面)
8　黄白褐色礫混り粘質土(地山)

0　5m

第18図　北区土層図(2)



第144次調査トレンチ1東壁土層図(縮尺:1/80)

1 灰褐色砂礫土(表土)
2 暗褐色礫混り土(2～4は近世以後)
3 淡褐色砂礫土
4 淡灰褐色礫混り土
5 黄白褐色土(SB6425橋脚時の造成土)
6 黄白色混り淡褐色砂礫土(〃)
7 黄色土混り淡灰褐色土
8 暗褐色土
9 淡灰褐色土
10 黄褐色レキ混り砂質土(下層遺構SD6511)
11 暗褐色土(造成土)
12 暗褐色砂レキ混り土(〃、固くしまる)

第132次調査区7ライン(B～G区間)畦東壁土層図(縮尺:1/80)

1 暗褐色土(表土)
2 淡褐色土(2～5は近世以後)
3 黄灰褐色土
4 淡褐色土(石造物多量に含む)
5 黄褐色混り淡褐色土
6 淡灰褐色土(SD6421上層、近世以後)
7 灰褐色砂質土(SD6421下層)
8 暗褐色土(近世以後の撹乱、しまり弱い)
9 淡褐色土(しまり弱い)
10 淡褐色土
11 淡灰褐色土(この上が遺構検出面)
12 淡褐色土(SD6421石積み裾力)
13 淡黄褐色土(上層遺構面)
14 淡黄褐色土(14～22は中世造成土)
15 黄白褐色土
16 淡褐色土
17 淡褐色レキ混り土
18 黄色土混り淡褐色レキ混り土
19 黄白褐色土
20 淡灰褐色レキ混り土
21 暗灰褐色レキ混り土
22 暗灰褐色レキ混り土(しまり弱い)

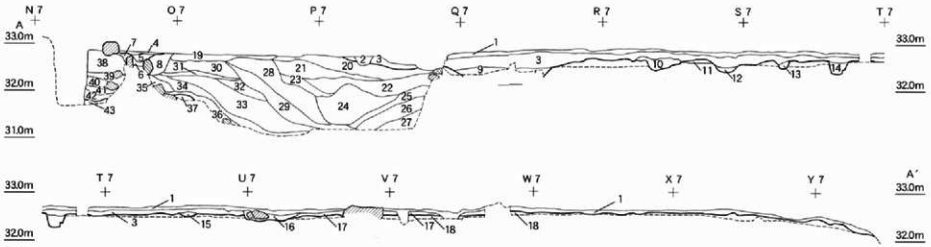
第132次調査区10ライン(B～G区間)畦東壁土層図(縮尺:1/80)

1 暗褐色礫混り土(表土)
2 淡褐色礫混り土
3 淡黄褐色礫混り土(SX6423撹乱抗)
4 淡褐色土
5 淡褐色土(SD6421上層、近世以後)
6 暗褐色砂混り土(SD6421下層)
7 淡褐色土(SD6421石積み裾力)
8 淡褐色土(遺構が不明、しまり弱い)
9 暗褐色土(近世以後の撹乱抗)
10 淡褐色礫混り土(〃)
11 赤色焼土混り淡褐色土
12 黄褐色土混り淡褐色土
13 淡黄褐色礫混り土(この上が遺構検出面)

第132次調査区Hライン(3～16区間)畦東壁土層図(縮尺:1/80)

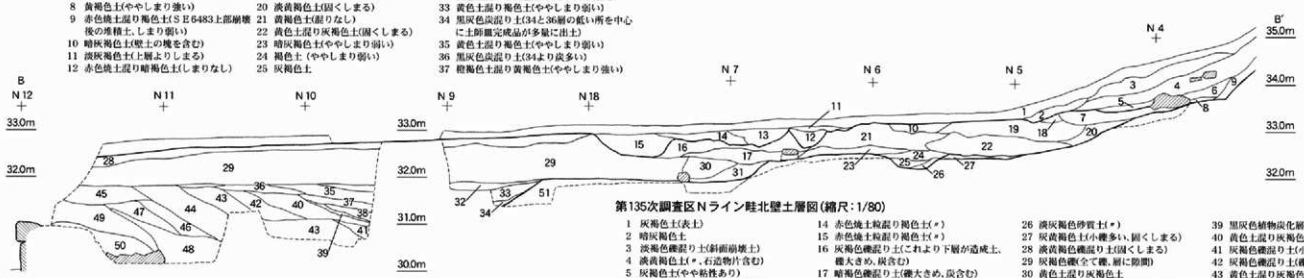
1 暗褐色土(表土)
2 淡褐色礫混り土(礫多い)
3 淡褐色土(礫少ない)
4 淡褐色礫混り土(礫多い)
5 淡褐色土(礫少ない)
6 灰褐色礫混り土
7 淡褐色土
8 淡褐色土
9 淡褐色粘質土(炭含む、ややしまり強い)
10 黄褐色土
11 淡褐色粘質土(炭含む)
12 赤褐色炭混り焼土層(強く焼けている)
13 黄色土混り灰褐色土(やや砂質)
14 淡灰色粘質土
15 黄褐色礫混り土(地山、かなり固くしまる)
16 淡黄褐色土(この上が遺構検出面)
17 淡褐色土(しまり弱い)
18 淡黄褐色礫混り土(しまり弱い)
19 淡黄褐色礫混り土(この上が遺構検出面)
20 淡黄褐色土(中世造成土)
21 黄色土混り灰褐色礫混り土
22 灰褐色土
23 暗灰褐色土(炭土)
24 暗褐色礫混り土(近世以後の遺物含む)
25 灰褐色砂礫土(φ2cm大の砂利とφ30cm大の礫を多量に含む)
26 暗褐色土(礫含まず、しまり弱い)
27 暗褐色炭混り土(やや砂質、しまり弱い)
28 黄色土ブロック混り暗褐色礫混り土
29 暗灰褐色砂質土(SD6450、炭少量含む)
30 暗灰褐色炭焼土混り土(遺物多量)
31 暗褐色礫混り粘質土(しまりやや強い)

第19図　北区土層図(3)



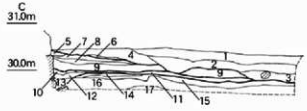
第135次調査区7ライン畦西壁土層図(縮尺:1/80)

1 暗灰褐色土(表土)
2 褐色土(しまりなし、根痕)
3 赤色焼土粒混り褐色土
4 褐色土(やや粘性あり、しまりなし)
5 暗灰色炭混り土
6 灰褐色土(SX6445)
7 黄色土混り灰褐色土(ややしまり強い)
8 黄褐色土(ややしまり強い)
9 赤色焼土混り褐色土(SE6483上部崩壊後の堆積土、しまり弱い)
10 暗灰褐色土(壁土の塊を含む)
11 淡灰褐色土(上層よりしまる)
12 赤色焼土混り暗褐色土(しまりなし)
13 暗褐色土(しまりなし、根痕?)
14 赤色焼土粒混り暗褐色土(柱痕ピット)
15 暗褐色土(しまりなし、根痕?)
16 淡褐色礫混り土(攪乱)
17 淡褐色土(3より赤色焼土少)
18 淡黄褐色礫混り土(上層遺構面直下)
19 黄褐色土(下よりしまりなし)
20 淡黄褐色土(固くしまる)
21 黄褐色土(砂りなし)
22 黄色土混り灰褐色土(固くしまる)
23 暗灰褐色土(ややしまり弱い)
24 褐色土(ややしまり弱い)
25 灰褐色土
26 黄色土混り灰褐色土(ややしまり強い)
27 黄色土混り灰褐色土(やや明るい)
28 灰褐色礫混り土(礫多い)
29 灰褐色礫混り土(礫多い、しまり弱い)
30 淡黄褐色土(固くしまる)
31 暗灰色炭混り土(大粒の炭あり)
32 黄色土混り暗褐色土(まだら状、炭含む)
33 黄色土混り褐色土(ややしまり弱い)
34 黒灰色炭混り土(34と36層の厚い所を中心に土師器完成品が多量に出土)
35 黄色土混り褐色土(ややしまり弱い)
36 黒灰色炭混り土(34より炭多い)
37 橙褐色土混り黄褐色土(ややしまり強い)
38 黄色土混り灰褐色土(ややしまり弱い、礫・炭少量含む)
39 黒灰色炭混り土(炭多量)
40 暗灰色炭混り土(炭少量)
41 橙褐色粘質土(固くしまる)
42 暗褐色炭混り土(炭やや多く含む)
43 黄褐色礫混り土(地山、固くしまる)



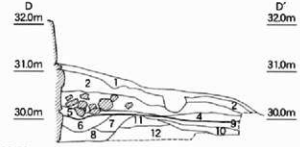
第135次調査区Nライン畦北壁土層図(縮尺:1/80)

1 灰褐色土(表土)
2 暗灰褐色土
3 淡褐色礫混り土(斜面崩壊土)
4 淡黄褐色土(〃、石造物片含む)
5 灰褐色土(やや粘性あり)
6 淡灰褐色土(粘性弱い、礫含む)
7 黒灰色炭混り土(炭多量、やや粘性あり)
8 淡灰褐色炭混り土(炭少含む)
9 黄灰褐色土(常総よりしまる)
10 灰褐色土(しまり弱い)
11 赤色焼土粒混り暗灰褐色土(攪乱抗)
12 赤褐色土(〃、赤色焼土粒多量)
13 暗灰褐色土(〃、赤色焼土粒含む)
14 赤色焼土粒混り褐色土(〃)
15 赤色焼土粒混り褐色土(〃)
16 灰褐色礫混り土(これより下層が造成土、礫大きめ、炭含む)
17 暗褐色礫混り土(礫大きめ、炭含む)
18 暗灰褐色礫混り土(炭少量含む)
19 灰褐色礫混り土(φ10cm以下の小礫多い)
20 暗褐色礫混り土(18より礫少ない)
21 淡褐色礫混り土(小礫多量、土師皿片含む)
22 灰褐色礫ほぼ全て礫で層に隙間あり)
23 暗灰褐色土(やや粘性あり、炭含む)
24 黄色土粒混り灰褐色粘質土(しまり強い)
25 淡黄褐色砂質土(造成前の下層遺構?)
26 淡灰褐色砂質土(〃)
27 灰黄褐色土(小礫多い、固くしまる)
28 淡黄褐色礫混り土(固くしまる)
29 灰褐色礫(全て礫、層に隙間)
30 黄色土混り灰褐色土
31 黄色土混り灰褐色土(礫少ない)
32 黄褐色土(礫の全く無い層)
33 灰褐色礫混り土(礫多め)
34 暗灰褐色土(礫少ない)
35 灰褐色土(礫少量、炭含む)
36 黄色土混り灰褐色土(しまりやや強い)
37 灰白土混り褐色土
38 暗灰褐色炭混り土
39 黒灰色植物炭化層(薄く広がる)
40 黄色土混り灰褐色土
41 灰褐色礫混り土(小さめの礫)
42 灰褐色礫混り土(礫やや多い)
43 黄色土混り灰褐色土(礫少ない)
44 灰褐色礫(全て礫、層に隙間)
45 黄色土混り灰褐色土(しまり強い)
46 黄色土混り褐色土(礫少ない)
47 淡黄褐色土(礫少ない)
48 灰色礫混り土(やや小さめの礫主体)
49 黄褐色土(礫少ない)
50 灰色礫混り土(小さな礫主体)
51 黄褐色土(地山、小礫含む、固くしまる)



第135次調査区石垣下側P12・13区畦南壁土層図(縮尺:1/80)

1 淡褐色礫混り土
2 褐色土(焼土粒少量あり、しまり弱い)
3 黄色土混り淡褐色土(しまり弱い)
4 赤色焼土混り土(壁土の塊・炭多い)
5 褐色土
6 赤色焼土粒混り土
7 灰褐色礫混り土(φ5cm以下の砂利主体)
8 暗灰褐色粘質土(砂利少ない、粘性強め)
9 黄褐色土混り砂利(φ5cm以下の砂利が密に敷かれる)
10 灰褐色土(やや粘性あり、しまり強い)
11 灰褐色土(やや粘性あり、ややしまり強い)
12 褐色砂質土(粘性あるが砂質が強め)
13 灰褐色砂質土(粘性あるが砂質が強め)
14 黄褐色砂利混り土(やや密に砂利混じる)
15 黄色土混り灰褐色砂利混り土(14より砂利少ないが混じる、石垣構築当初の地面)
16 暗灰褐色礫混り粘質土(これより下は石垣構築以前の層である)
17 暗黄褐色礫混り土

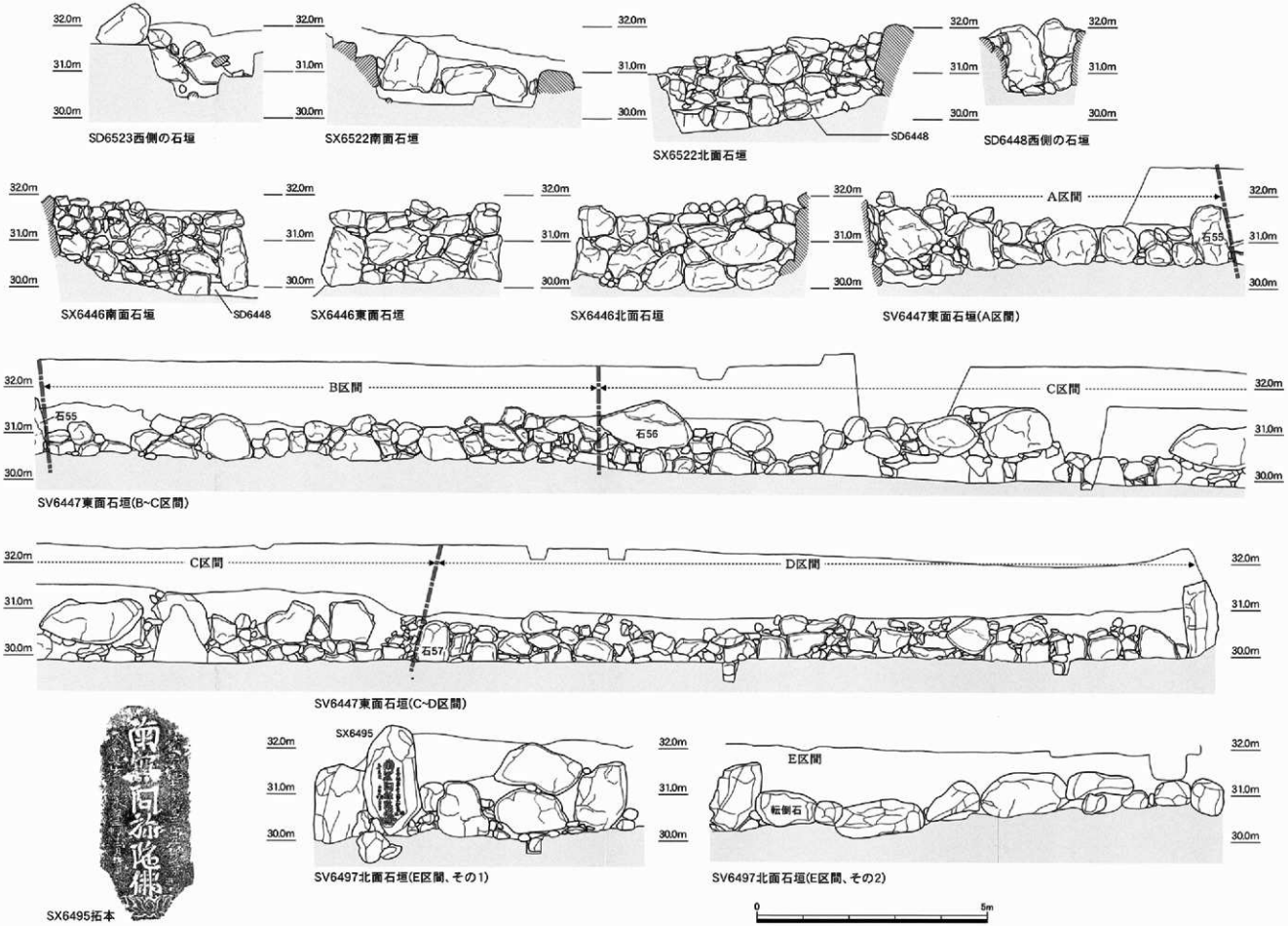


第135次調査区石垣下側Y8・Z9区畦東壁土層図(縮尺:1/80)

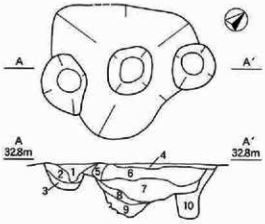
1 暗灰色土(表土)
2 淡褐色土(礫少ない、しまりなし)
3 褐色礫混り土(礫多い、石垣転石あり)
4 褐色礫混り土(3よりしまる)
5 黄褐色土
6 黄褐色礫混り土(礫多めで、10cm程度の礫主体)
7 淡褐色礫混り土(6と色調が変わるのみ)
8 灰褐色礫混り土(φ20~30cm大の礫主体、石垣基礎部を埋設するための掘り方)
9 黄色土ブロック混り褐色土(ややしまり強い)
10 褐色礫混り土
11 褐色混り土礫(10より固くしまる)
12 褐色粘質土(礫少なく、粘性強め)

0　5m

第20図　北区石垣立面図

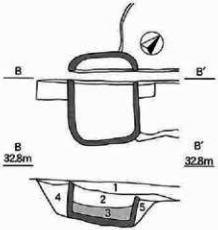


第21図　SX6484・SX6485・SK6489・SK6491詳細図



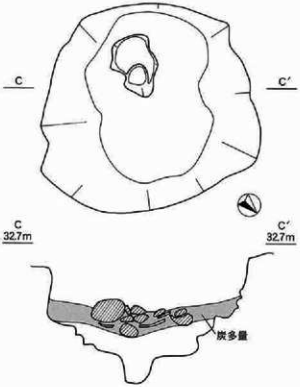
SX6484平面・土層図(縮尺:1/20)

1　灰褐色土(根概、しまりなし)
2　褐色土(赤色粒少含む)
3　淡褐色土(2よりしまる)
4　暗灰褐色土(やや粘性あり)
5　灰褐色土(根概、しまりなし)
6　赤色焼土ブロック混り暗褐色土
7　赤色焼土粒・炭混り灰褐色土(炭多い)
8　淡灰褐色土(赤色粒・炭少含む)
9　淡褐色土(やや粘性あり)
10　褐色土(やや粘性あり)

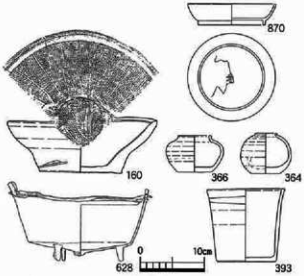


SX6485平面・土層図(縮尺:1/20)

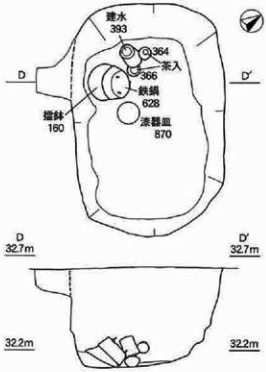
1　赤色焼土粒混り褐色土
2　赤色焼土粒混り暗褐色土
3　黒灰褐色炭混り土(下になるほど黒い。灰が堆積したと思われる)
4　黄色土混り褐色土(掘り方)
5　淡黄褐色土(掘り方)



SK6489平面・断面図(縮尺:1/20)



SK6491底面一括出土遺物(縮尺:1/6)

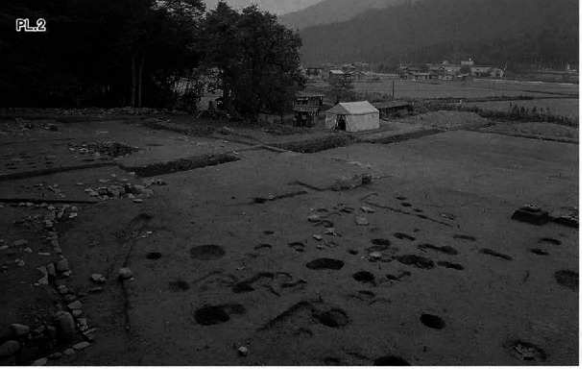


SK6491平面・断面図(縮尺:1/20)

南区(第86・87・90次)発掘調査前

参道・石仏(東から)

調査地全景(南東から)



南区遺構
全景・南東側

第86・87次調査区
全景(南西から)

第86次調査区
全景(南から)

第86・87次調査区
南側(南西から)

南区遺構
南側

SB4450
他土坑群
（西から）

SB4450
他土坑群
（東から）

SV4421
SF4419
SB4450
他土坑群
（西から）

南区遺構
南西側の墓地等(1)

SV4421
ST4424
SX4451
(東から)

SV4421
ST4424
SD4460
SD4461
(東から)

SD4413
SD4414
SD4460
(東から)

南区遺構
南西側の墓地等(2)

SD4460
ST4424
SX4451
(南から)

ST4424
石塔の土台
(南東から)

ST4424
土台下の石組み
(東から)

南区遺構
地下式倉庫跡

SB4408
SF4418
全景(東から)

SF4418
内部(南から)

南区遺構
地下式倉庫跡他

SF4418
東壁
（西から）

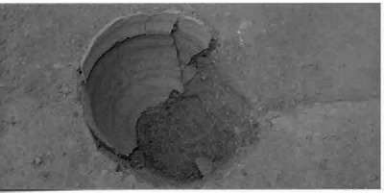
SF4418
南壁
（北から）

SF4419
（東から）

南区遺構
西側

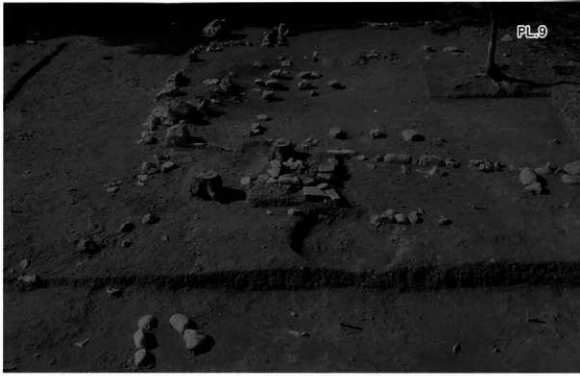
SB4407
SD4416
SX4434
(東から)

SB4407西端付近
SX4470
SK4471
(北から)



SX4437
甕埋設土杭坑
(北から)

南区遺構
北西側



SX4428
SE4417
SA4405
SB4406
(東から)

SA4405
SB4406
SD4411
(南から)

SE4417
(東から)

SX4426
(東から)

南区遺構
北東側

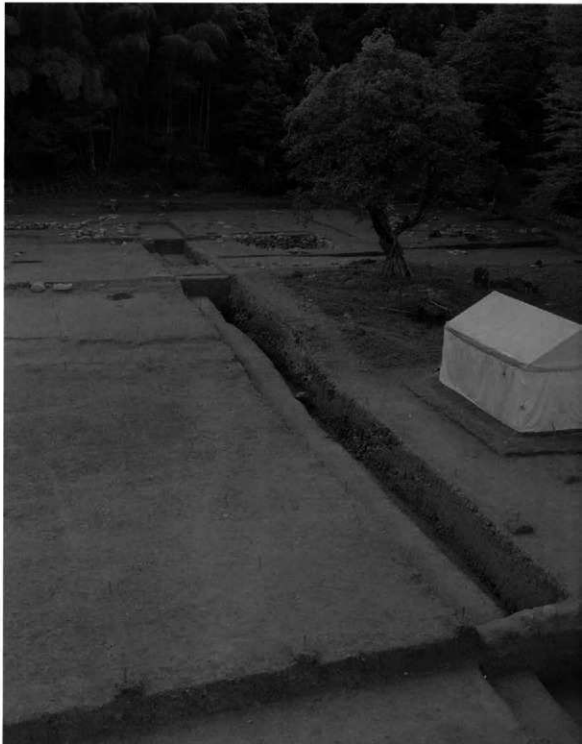
SX4473
SX4474
SX4475
(南から)

SX4475
(西から)

SX4473
(東から)

南区遺構
北側・東西トレンチ

SI4463
（東から）



第87次調査区
Qライントレンチ
（東から）

南区遺構
石垣

SV4422
ST4425
(東から)

SV4422
(西から)

北区(第132・135次)発掘調査前

名号石碑付近(北から)

北区上段平坦面(Bエリア南側)の樹木伐採前の状況(南西から)

北区遺構
南半側全景・区画溝

第132次調査区
東側
(北西から)

第132次調査区
西側
(北から)

SD6421
SZ6422
SX6423
(西から)

北区遺構
南西側

SD6421
SV6424
SB6425
SB6426
(北から)

SD6421
SV6424
SB6425
(西から)

SB6425
(東から)

北区遺構
南半側建物跡他

SB6426
SB6429
SX6430
(南から)

SB6429南西側
SX6430
焼土面
(東から)

【左】
SB6429西面
SX6430
焼土面
(南から)

【右】
SB6426北西側
SX6430
(西から)

北区遺構
南半側

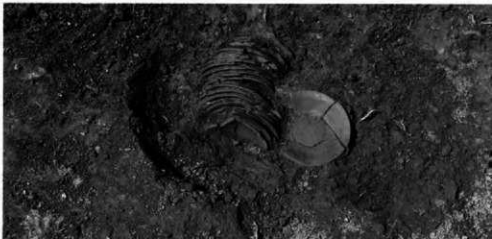
SX6427
SK6434～6439
（西から）

【左】
SX6427検出状況
（南東から）

【右】
SX6427
（北から）

【左】
SX6434五輪塔地輪
出土状況
（東から）

【右】
SK6434五輪塔地輪を
外した後の状況
（東から）



SX6440土師質土器皿
一括出土状況
（南から）

北区遺構
西側

SB6429北西角
SX6431
SD6432
(北から)

SX6442
SD6443
SZ6444
(北東から)

SD6443
SZ6444
(北東から)

北区遺構
北半側全景・建物跡

第135次調査区全景
（南西から）

第135次調査区全景
（北西から）

SB6490
（西から）

北区遺構
北半側

SX6485
SX6486
SK6487
(北西から)

【左】
SE6483
(北西から)

【右】
SX6485
(西から)

【左】
SK6489
SK6491
(西から)

【右】
SK6489
(北から)

【左】
SK6491
(南から)

【右】
茶入・建水・鉄鍋・擂鉢出土状況
(南から)

トレンチ4・5
SX6522
SD6523
（東から）

トレンチ6
SS6524
（北東から）

トレンチ6
SX6525
（北西から）

北区遺構
下段南東側(1)

SX6446
SA6452
SD6448
SD6450
(南から)

SD6448
西側石垣
(東から)

SX6446
SD6448
SD6449
(北東から)

SD6441
SX6458
(西から)

北区遺構
下段南東側(2)

SX6446
SV6447
SX6451
SA6452
SZ6453
(北から)

SD6450
SX6451
SA6452
SZ6453
(南から)

SV6447南半側
(南東から)

北区遺構
下段東側の石垣他

SV6447北半側
(南東から)

SV6447中央付近
(東から)

SV6447
前面の土層堆積状況
(南東から)

北区遺構
名号石碑他

SV6447
北半側
SX6495
SD6496
(北東から)

SX6495
文字詳細
(北東から)

SD6496
(北東から)

北区遺構
下段北側の石垣他

SX6495
SV6497
(東から)

SV6497
(東から)

SX6498
SX6499
SD6500
(北東から)

北区遺構
下層トレンチ調査

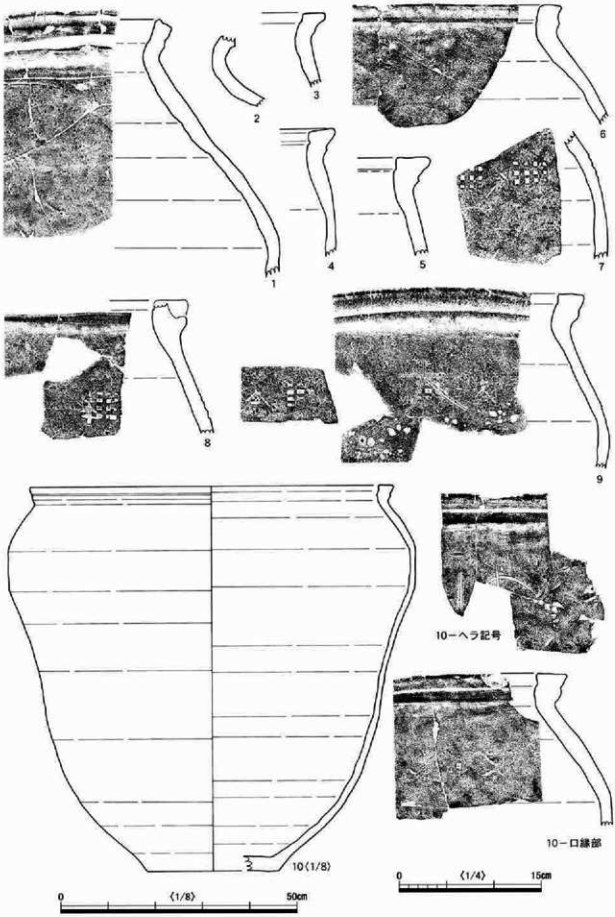
Nライントレンチ西側
(北東より)

Nライントレンチ東側
(北東より)

【上】
出土状況詳細
(北より)

【下】
7ライントレンチ下層
土師質土土器皿出土状況
(北より)

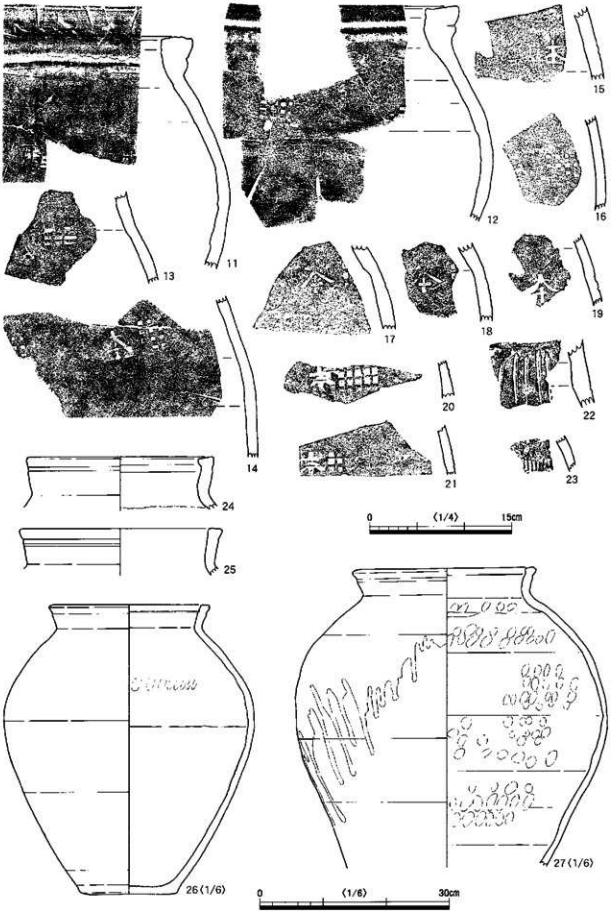
第22図　出土遺物(1)　越前焼



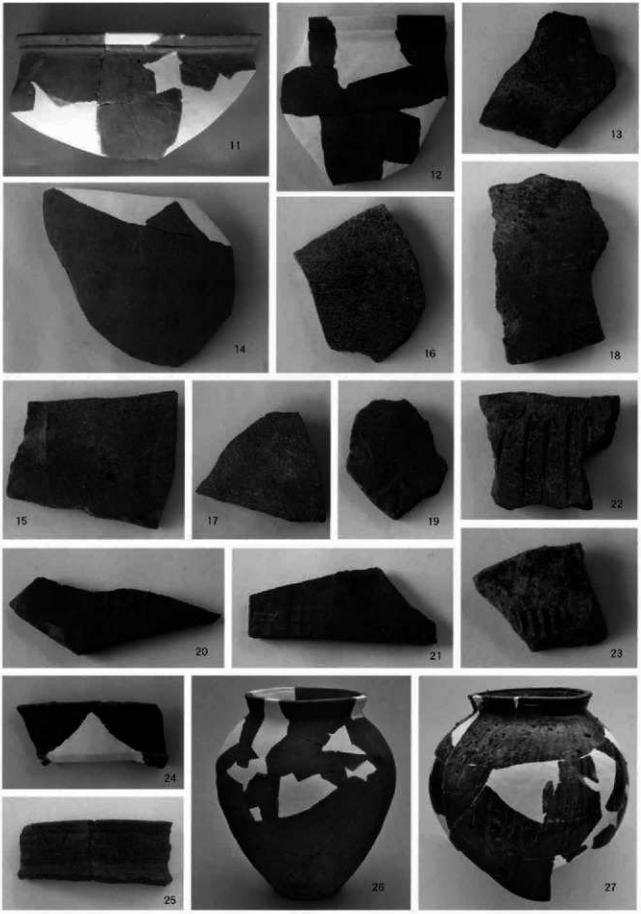
越前焼壺１～10

越前焼甕 1～10

第23図　出土遺物(2)　越前焼

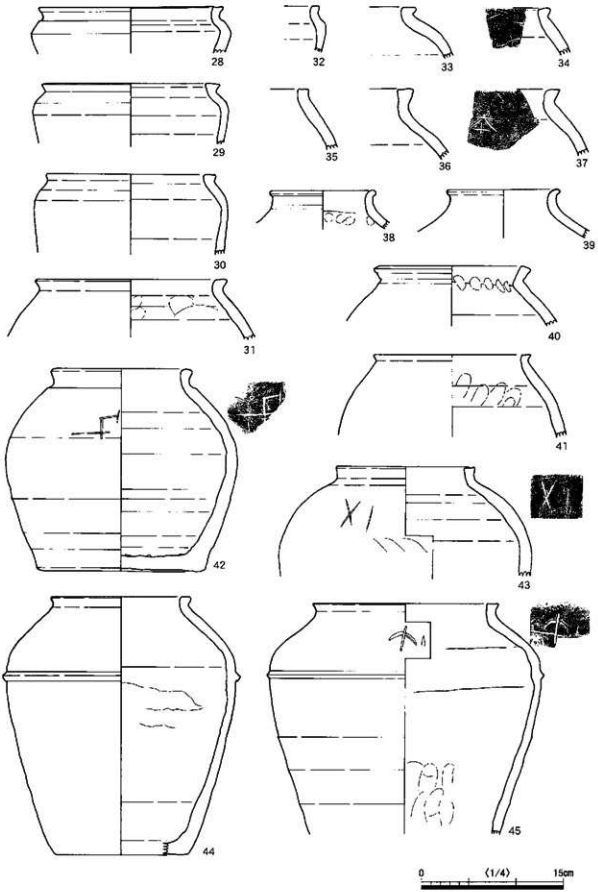


越前焼実11～27

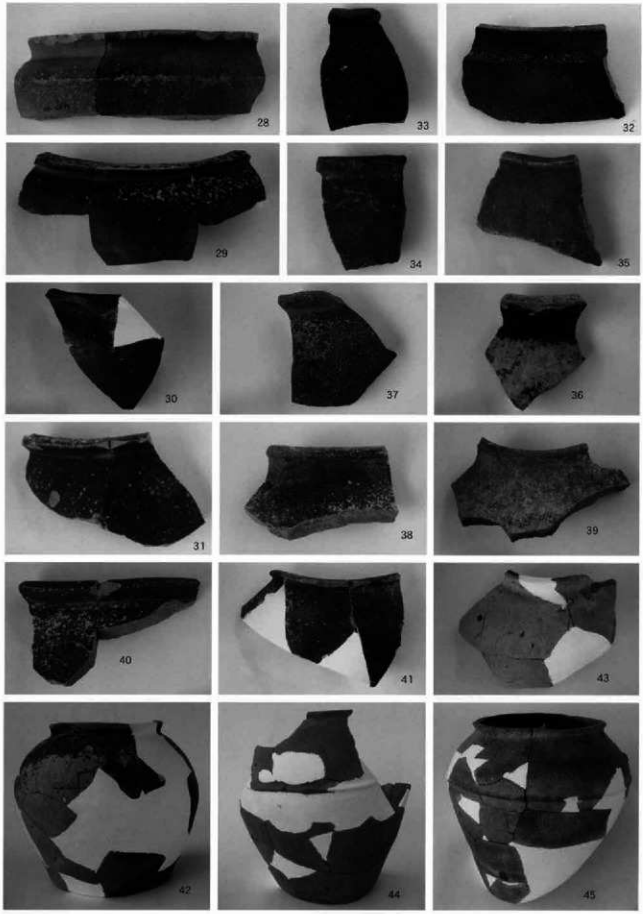


越前焼実11～27

第24図　出土遺物(3)　越前焼

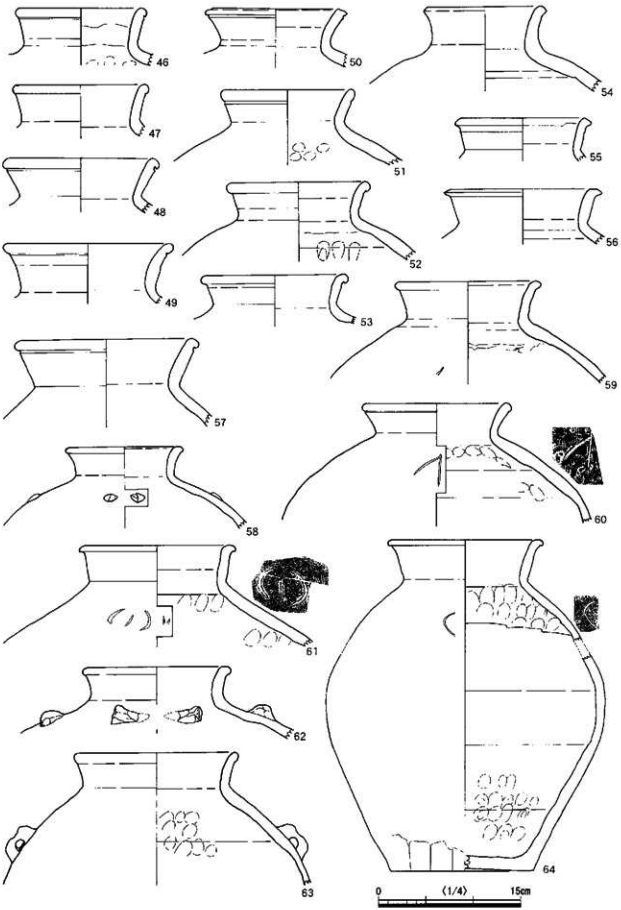


越前焼甕28～37・40～45　壺38・39

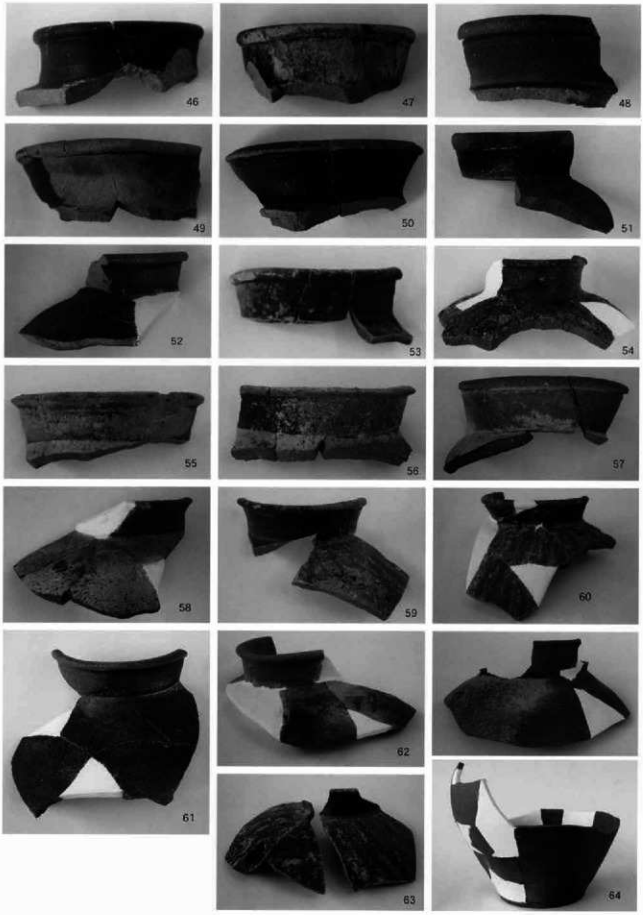


越前焼甕28～37・40～45　壺38・39

第25図　出土遺物(4)　越前焼

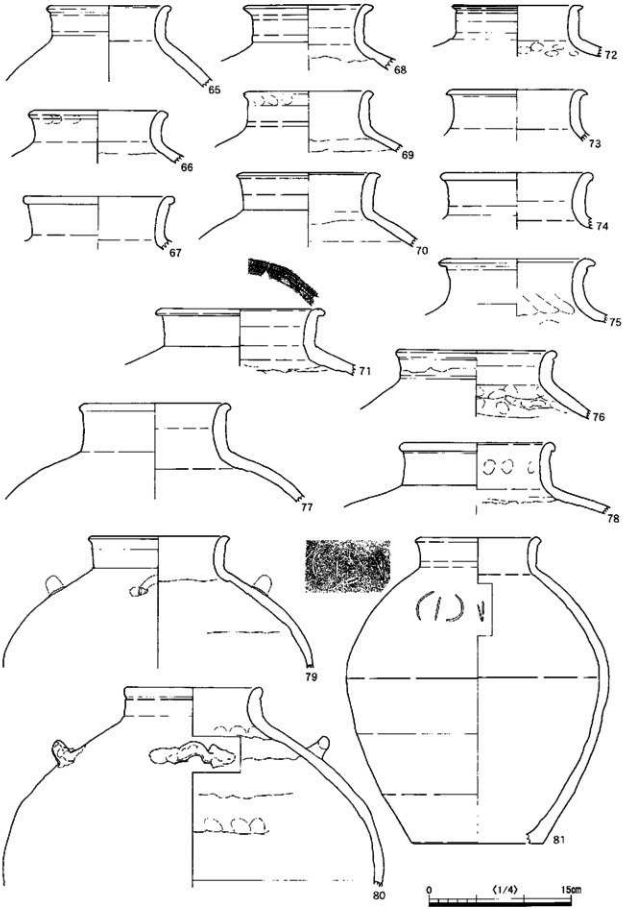


越前焼46～64



越前焼壺46～64

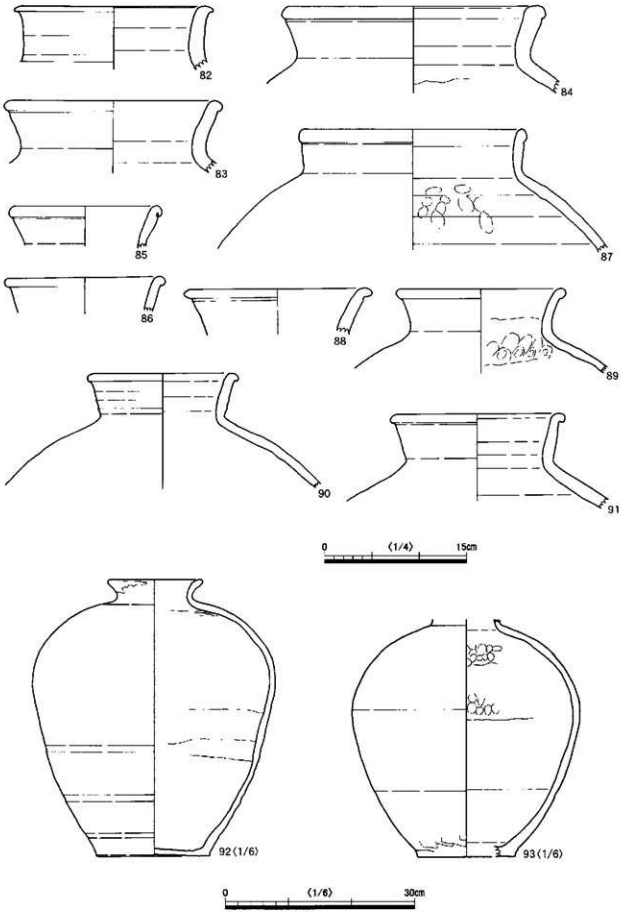
第26図　出土遺物(5)　越前焼



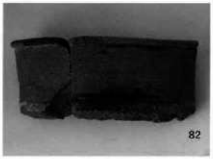
越前焼壺65～81

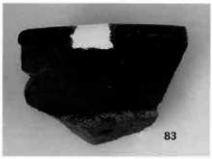
越前焼壺65～81

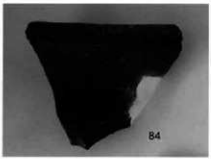
第27図　出土遺物(6)　越前焼



越前焼壺82～93


82


83


84

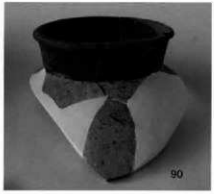
85

86

87

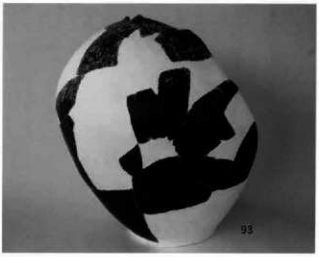
89

88


90

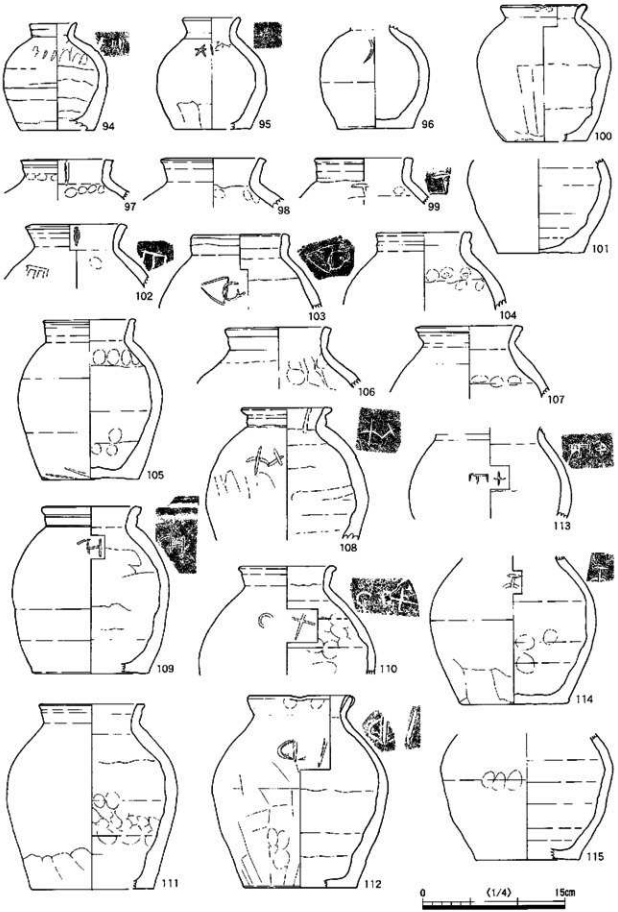
91

92

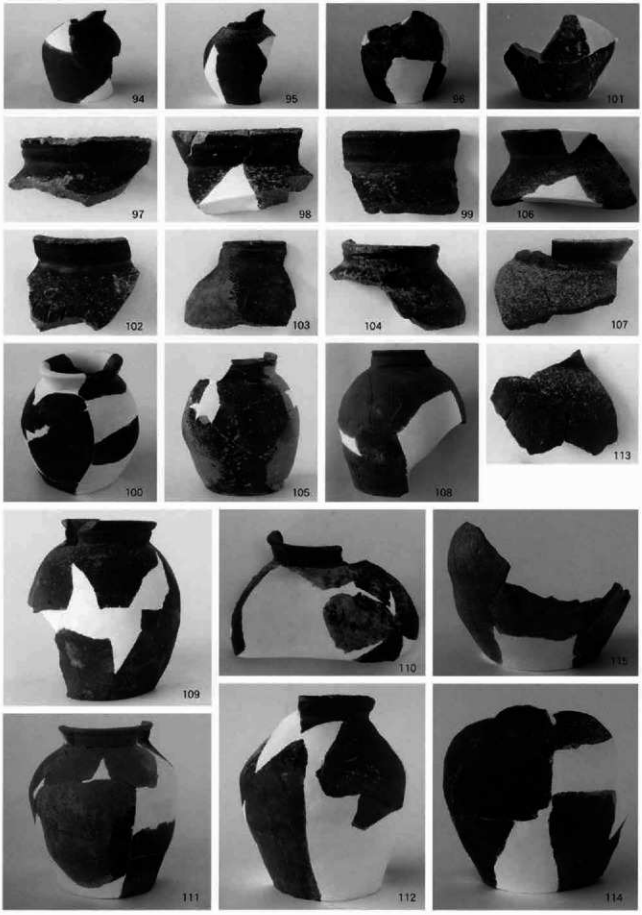

93

越前焼壺82～93

第28図　出土遺物(7)　越前焼

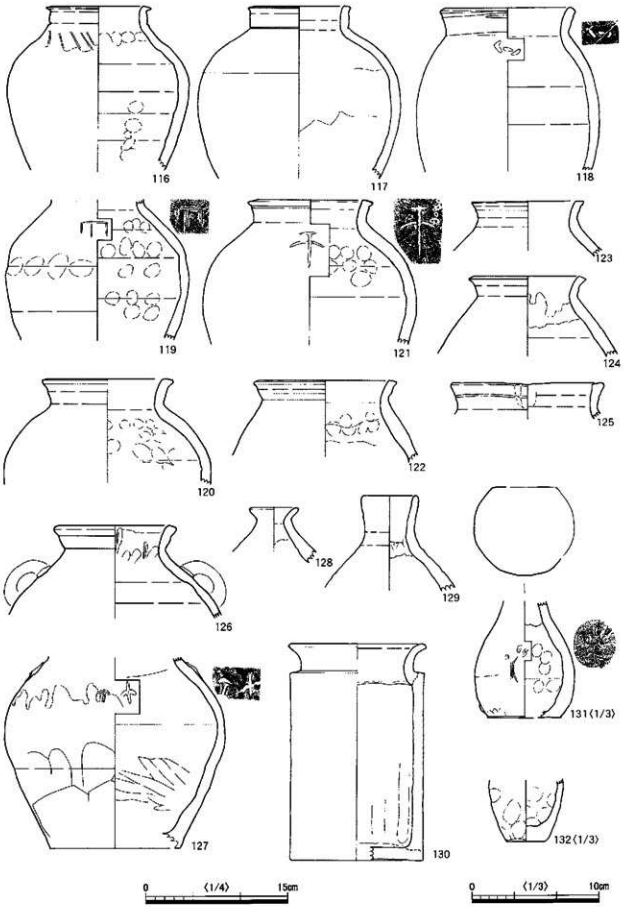


越前焼№94～115

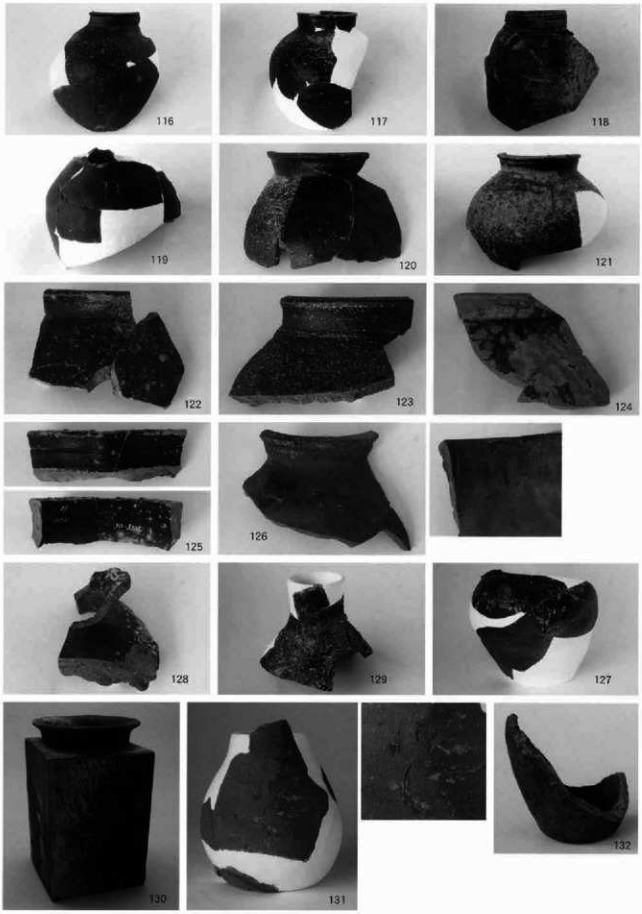

94
95
96
101
97
98
99
106
102
103
104
107
100
105
108
113
109
110
115
111
112
114

越前焼壺94～115

第29図　出土遺物(8)　越前焼

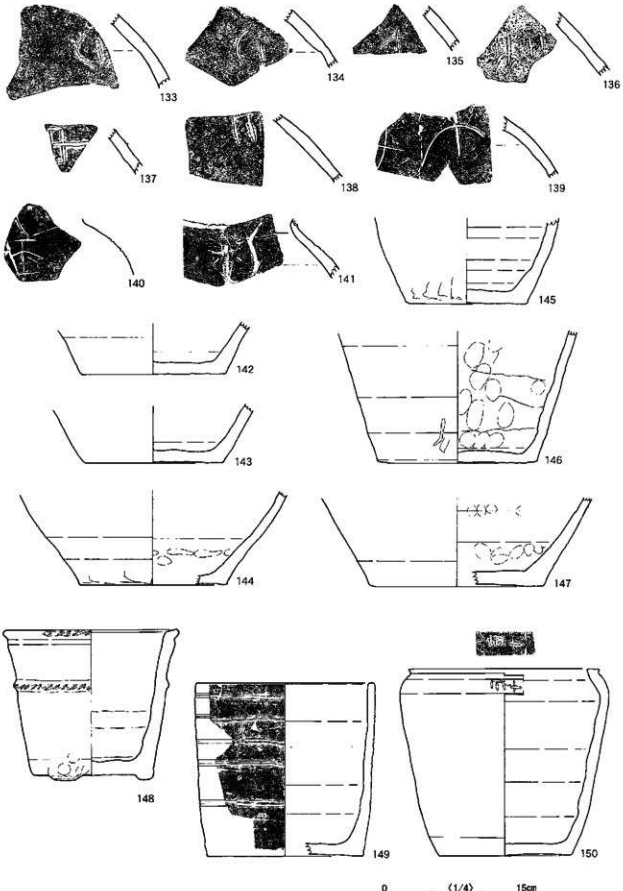


越前焼壺116～127　瓶128・129　四角盆130　掛花生131　茶入132

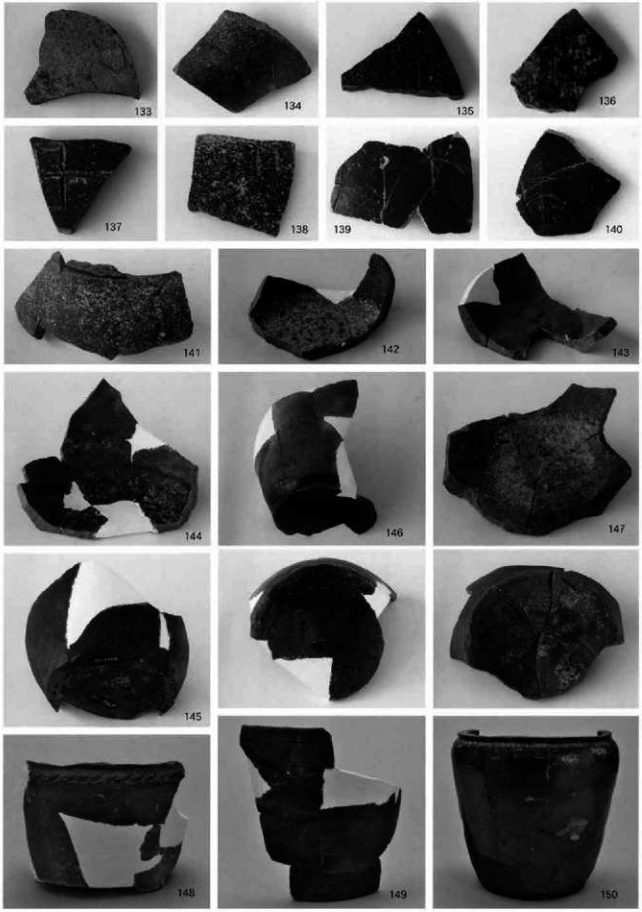


越前焼壺116～127　瓶128・129　四角壺130　掛花生131　茶入132

第30図　出土遺物(9)　越前焼

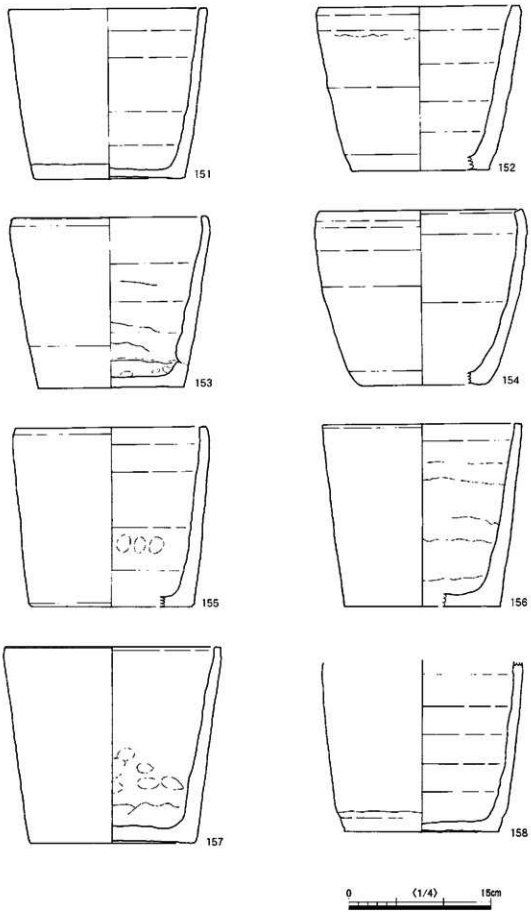


越前焼壺133～147　桶148～150

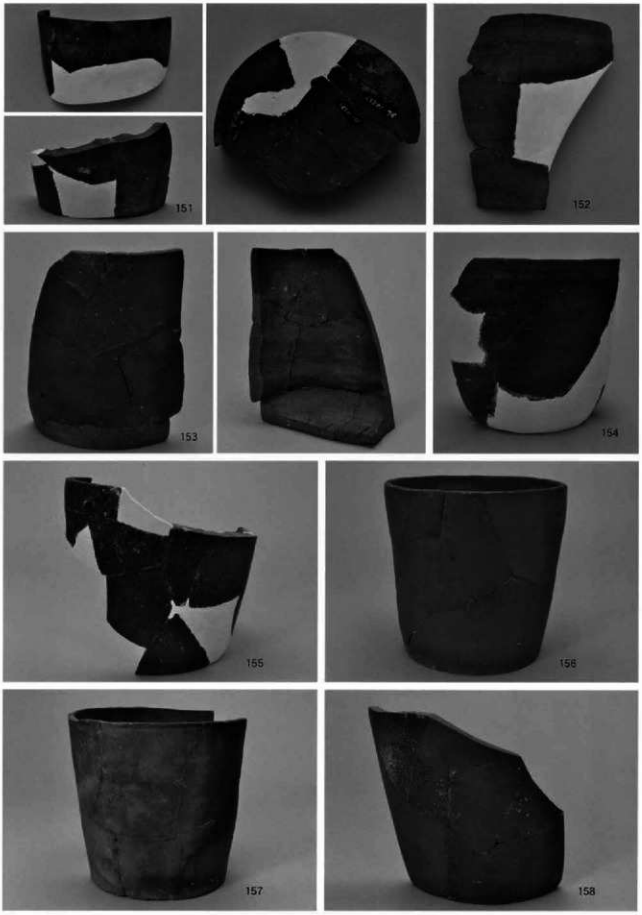


越前焼壺133～147　桶148～150

第31図　出土遺物(10)　越前焼

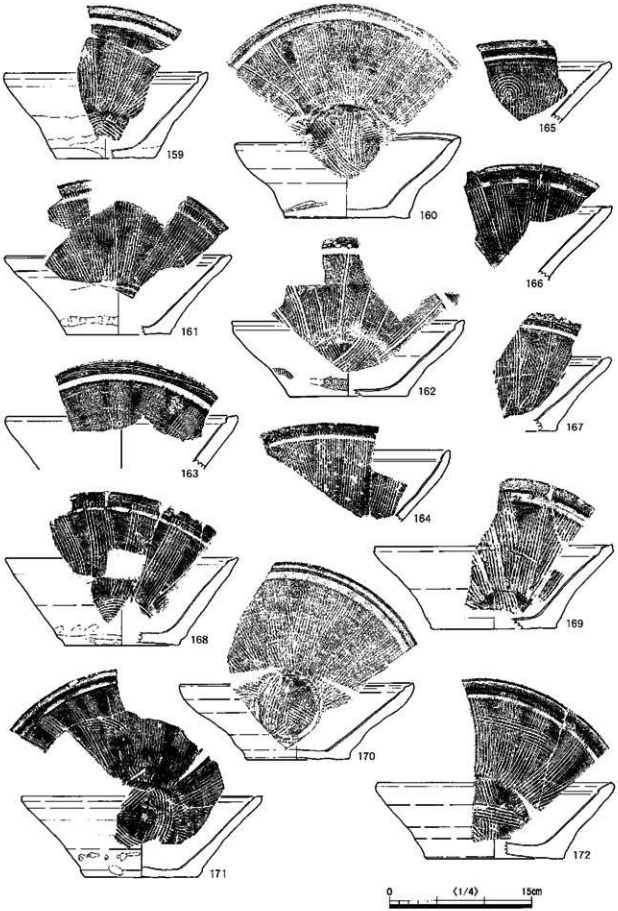


越前焼桶151～158



越前焼桶151～158

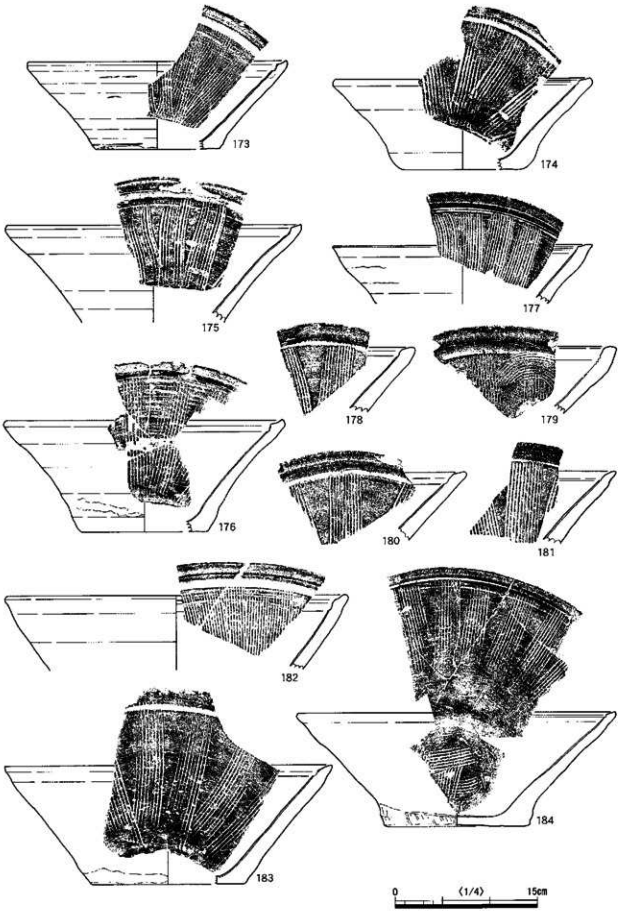
第32図　出土遺物(11)　越前焼



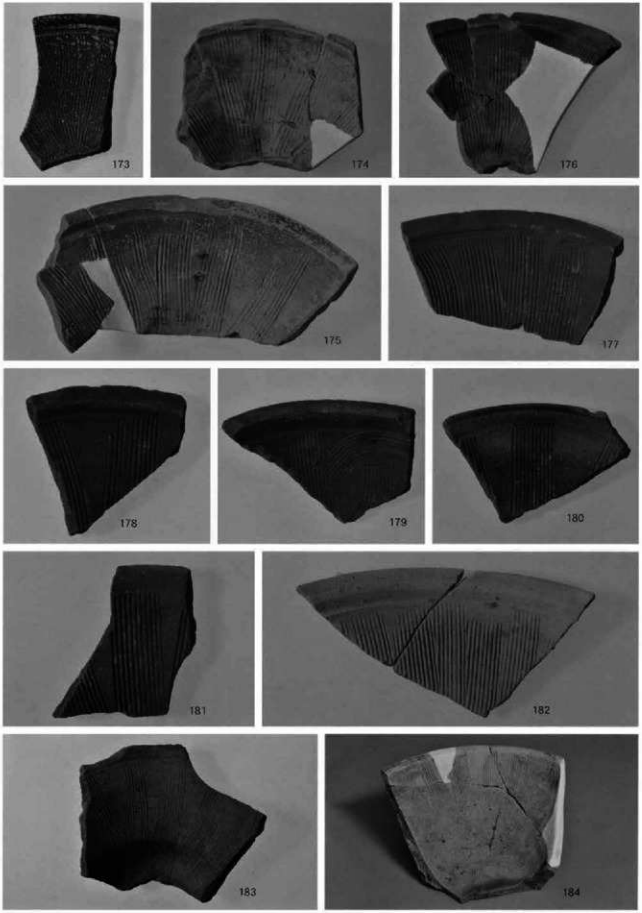
越前焼擂鉢159～172

越前焼擂鉢159～172

第33図　出土遺物(12)　越前焼

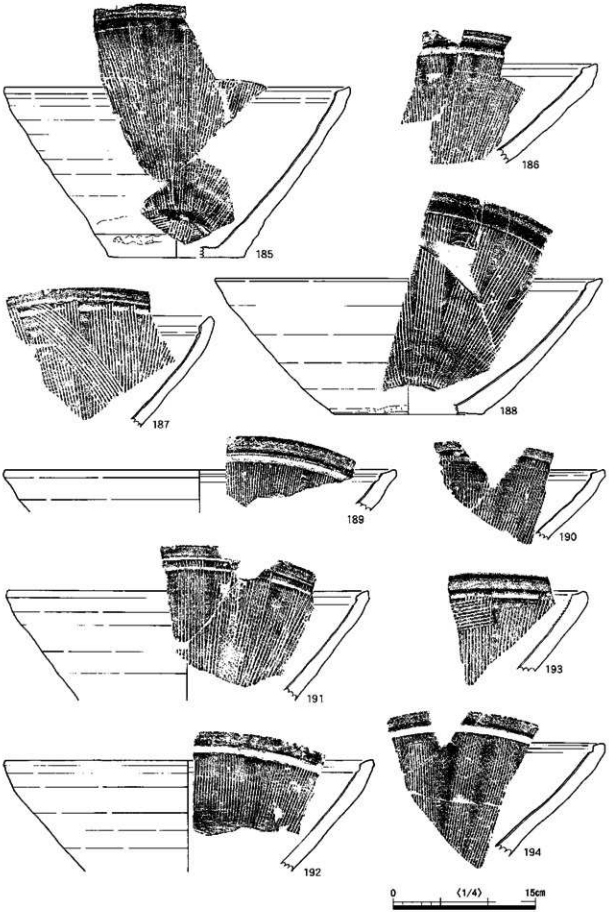


越前焼擂鉢173～184

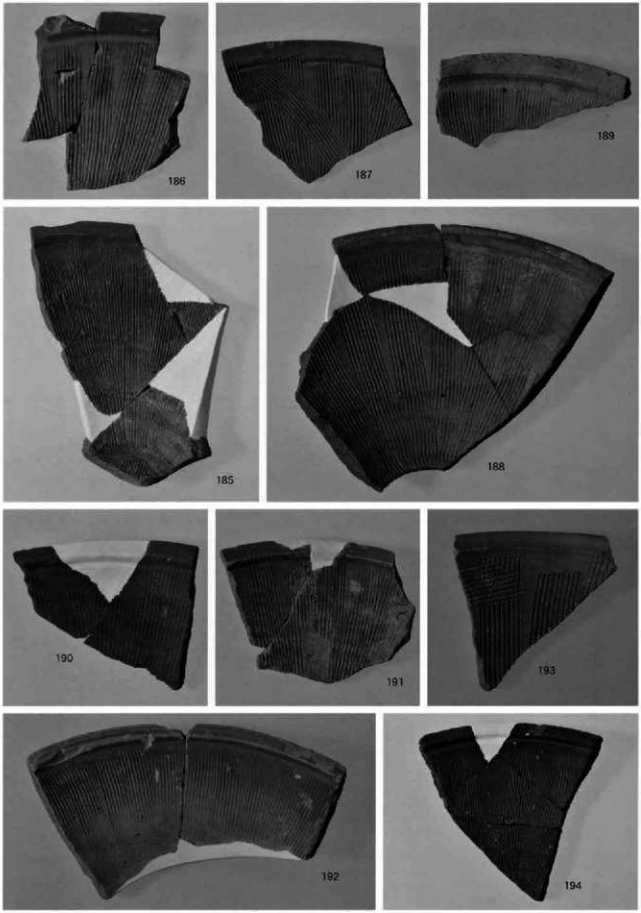


越前焼擂鉢173～184

第34図　出土遺物(13)　越前焼

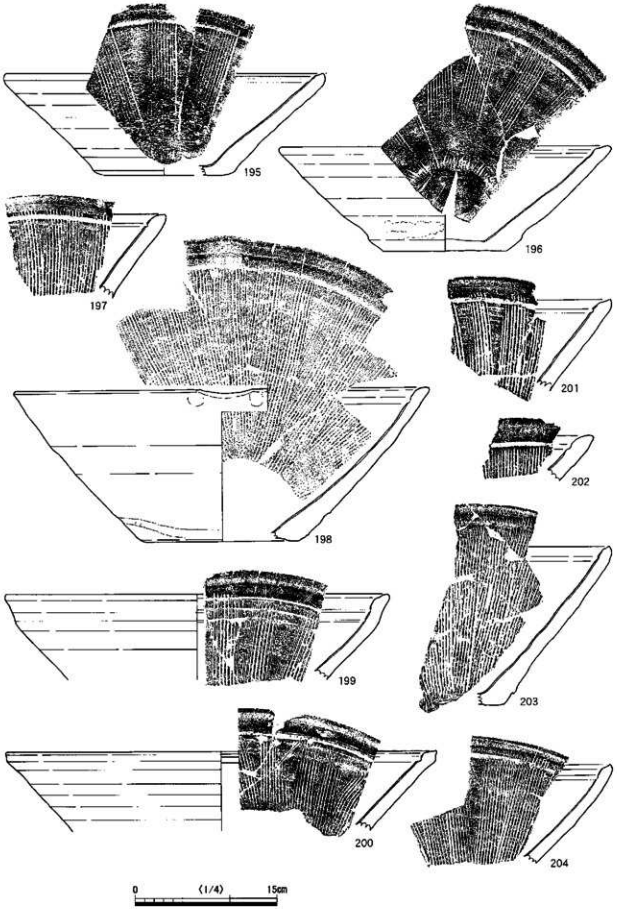


越前焼擂鉢185～194

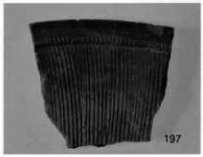


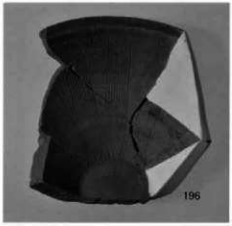
越前焼擂鉢185～194

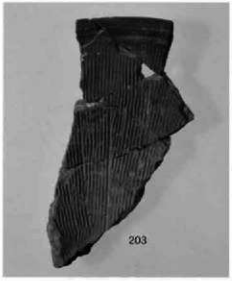
第35図　出土遺物(14)　越前焼

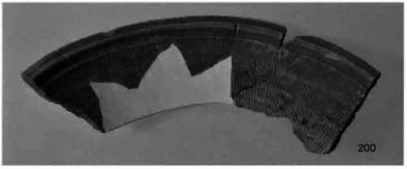


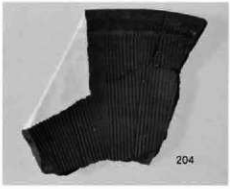
越前焼擂鉢195～204





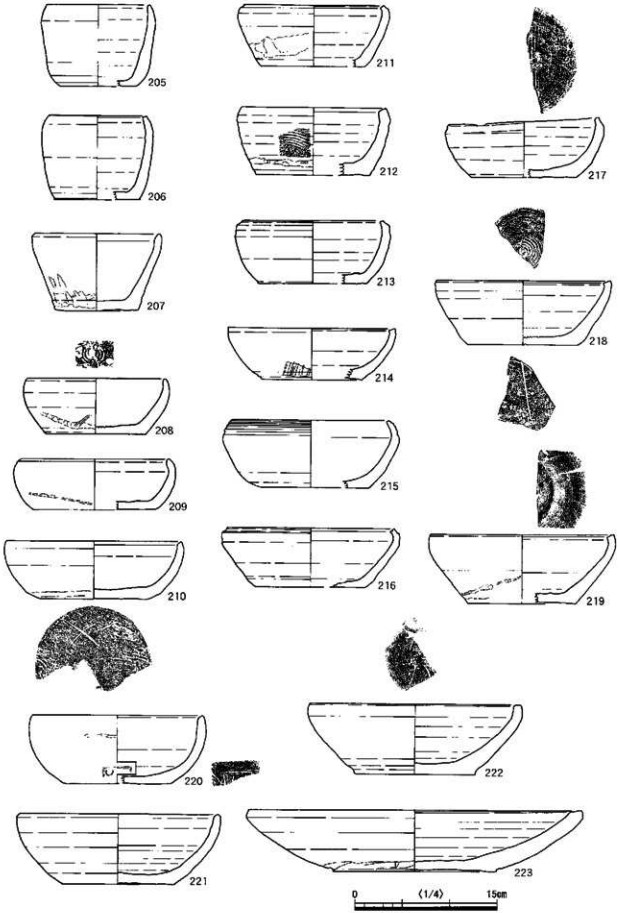






越前焼擂鉢195～204

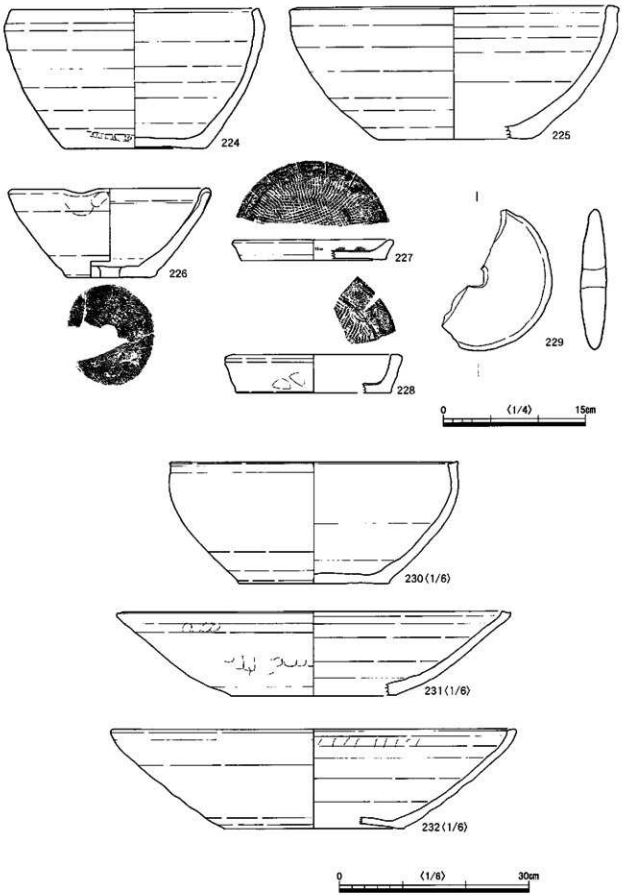
第36図　出土遺物(15)　越前焼



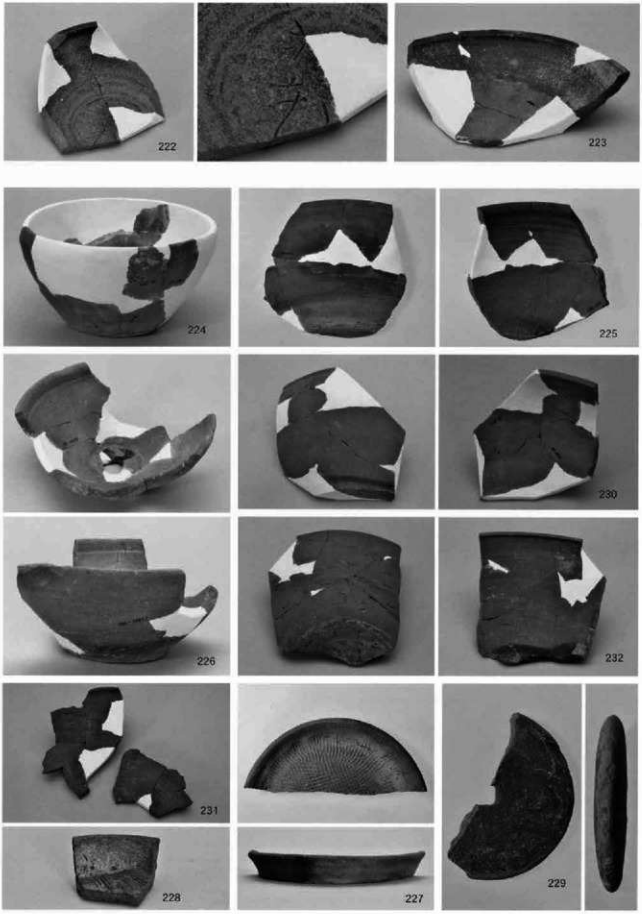
越前焼建水205～207　鉢208～223

越前焼建水205～207　鉢208～221

第37図　出土遺物(16)　越前焼

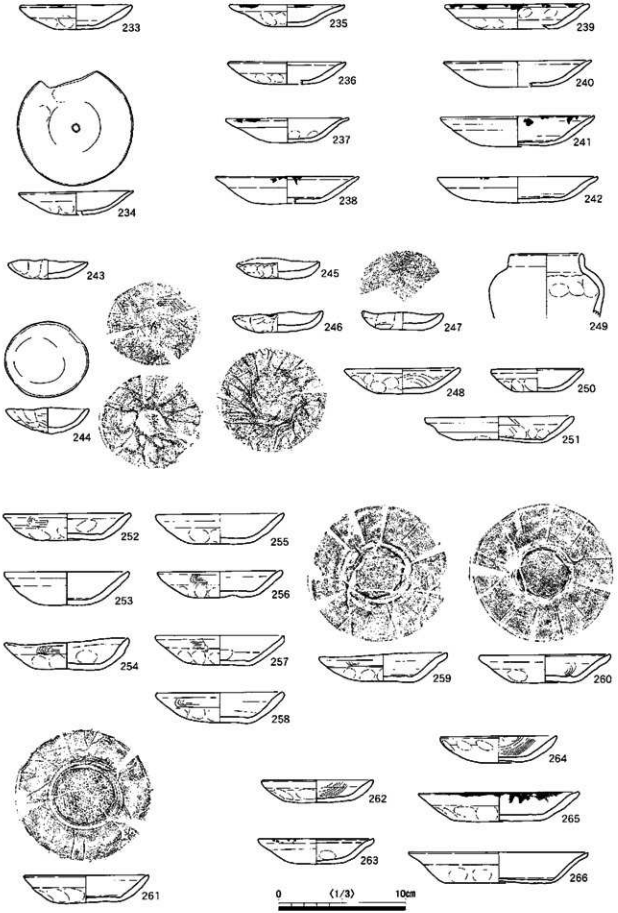


越前焼鉢224～226・230～232　御皿227・228　蘇研229

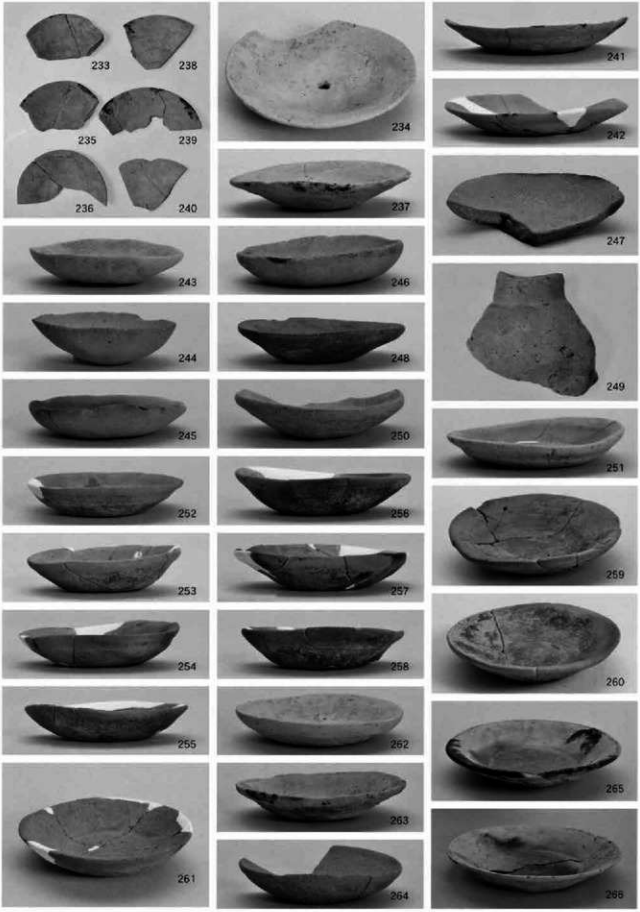


越前焼鉢222～226・230～232　卸皿227・228　薬研229

第38図　出土遺物(17)　土師質土器

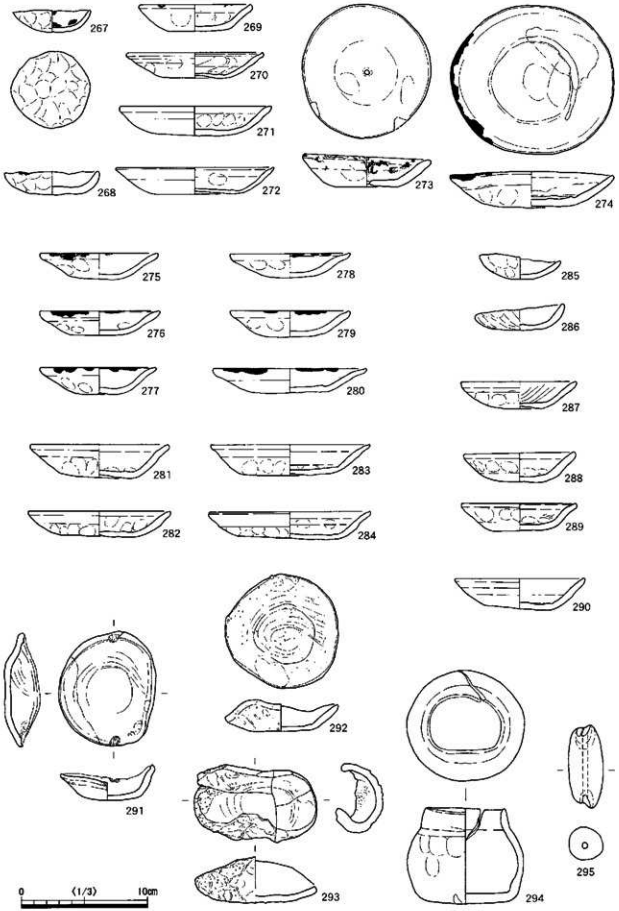


土師質皿233～248・250～266　壺249



土師質皿233～248・250～266　壺249

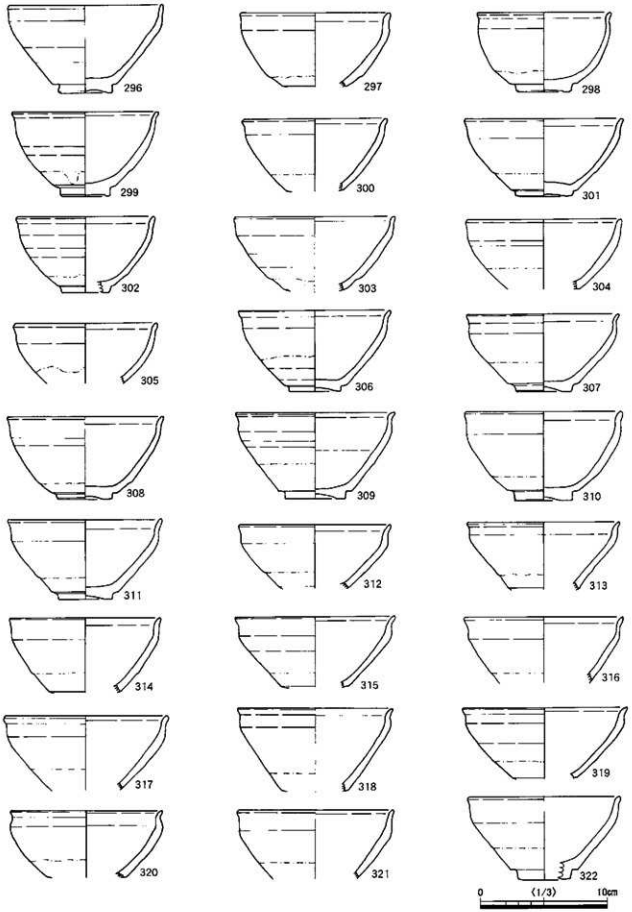
第39図　出土遺物(18)　土師質土器



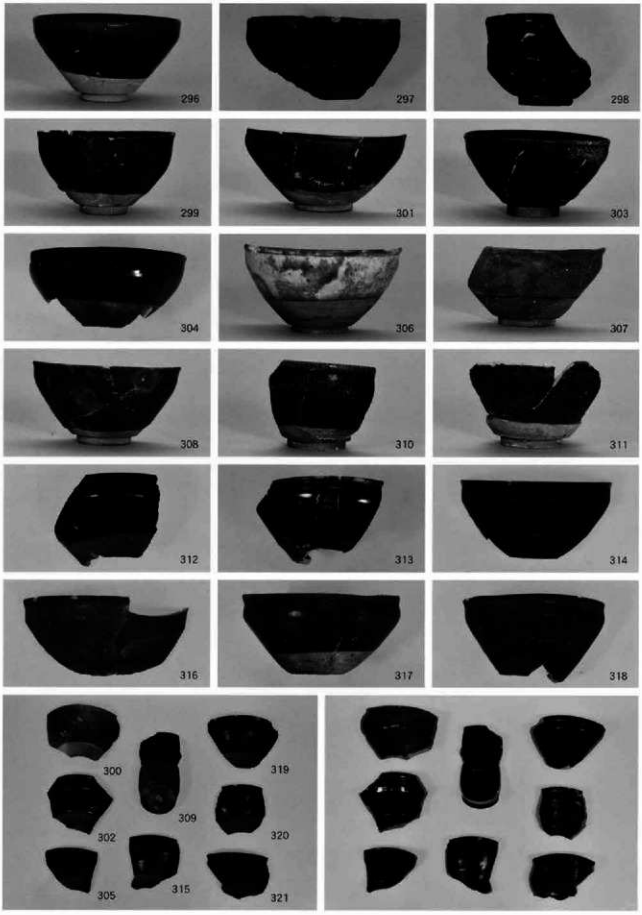
土師質皿267～293　壺294　土錘295

土師質皿267～293　壺294　土錘295

第40図　出土遺物(19)　瀬戸・美濃焼

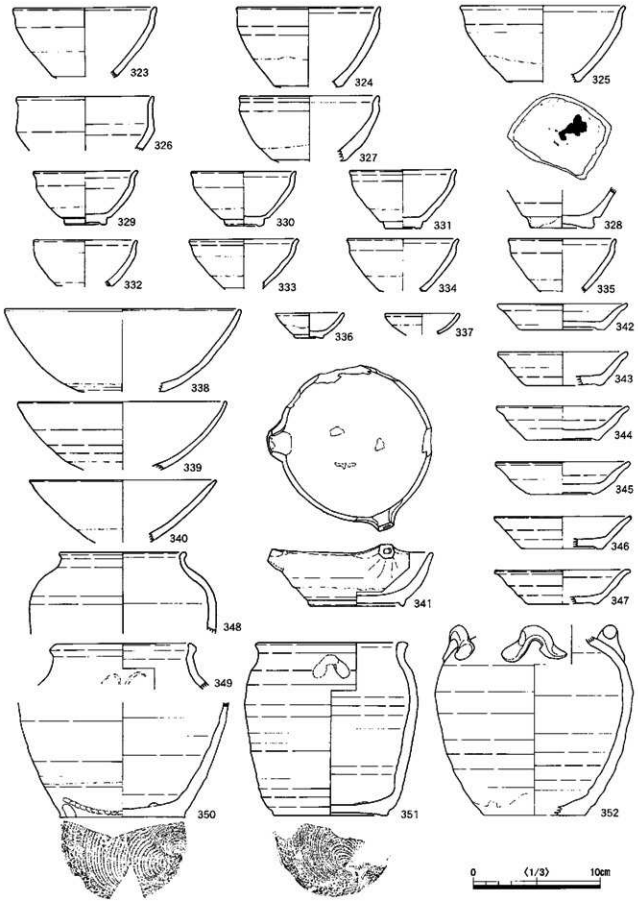


鉄釉天目碗296～322

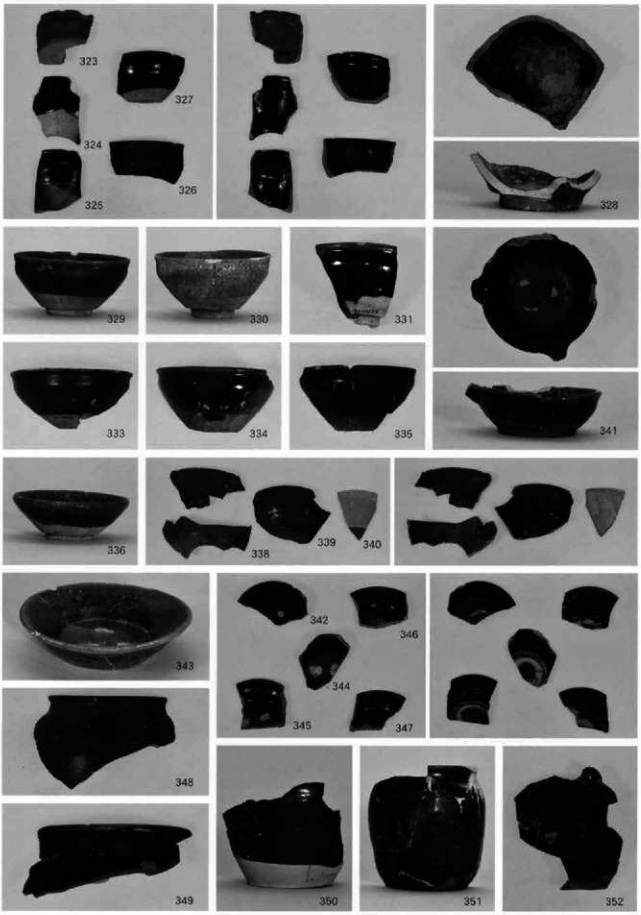


鉄釉天目茶碗296～321

第41図　出土遺物(20)　瀬戸・美濃焼

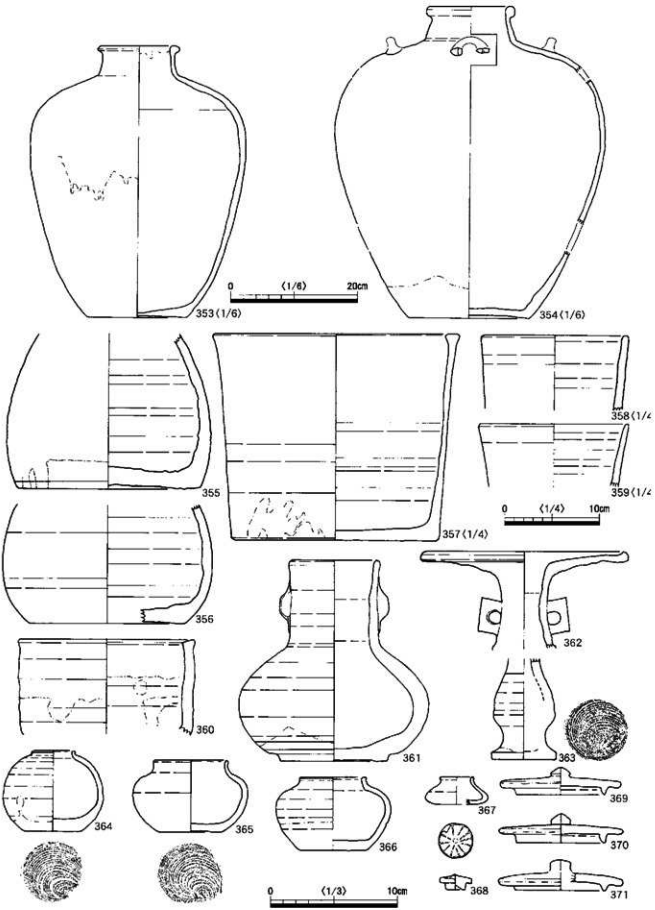


鉄釉天口碗323～335　平碗338～340　小坏336・337　皿342～347　壺348～352　片口鉢341



鉄釉天目茶碗323～331・333～335　平椀338～340　小坏336　皿342～347　壺348～352　片口鉢341

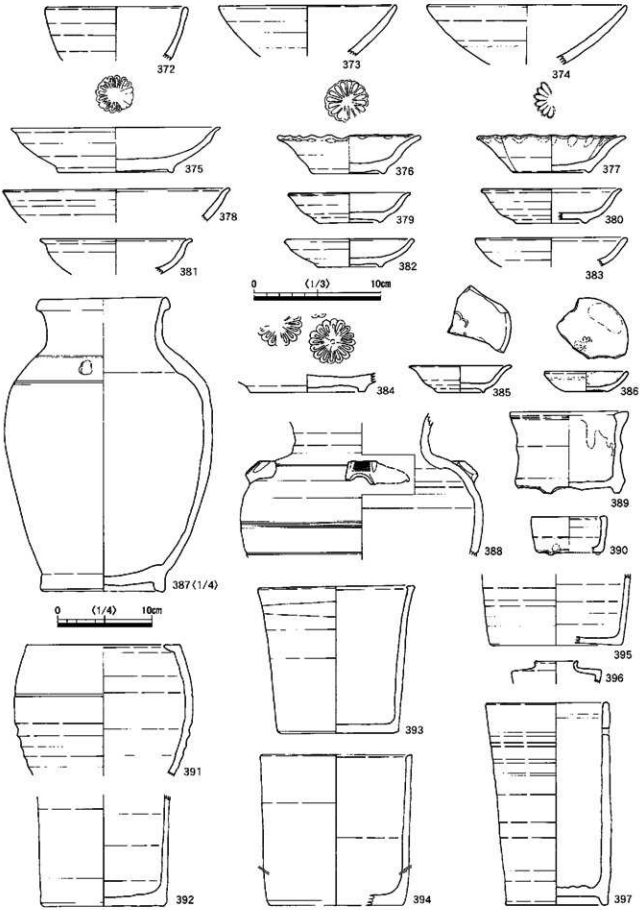
第42図　出土遺物(21)　瀬戸・美濃焼



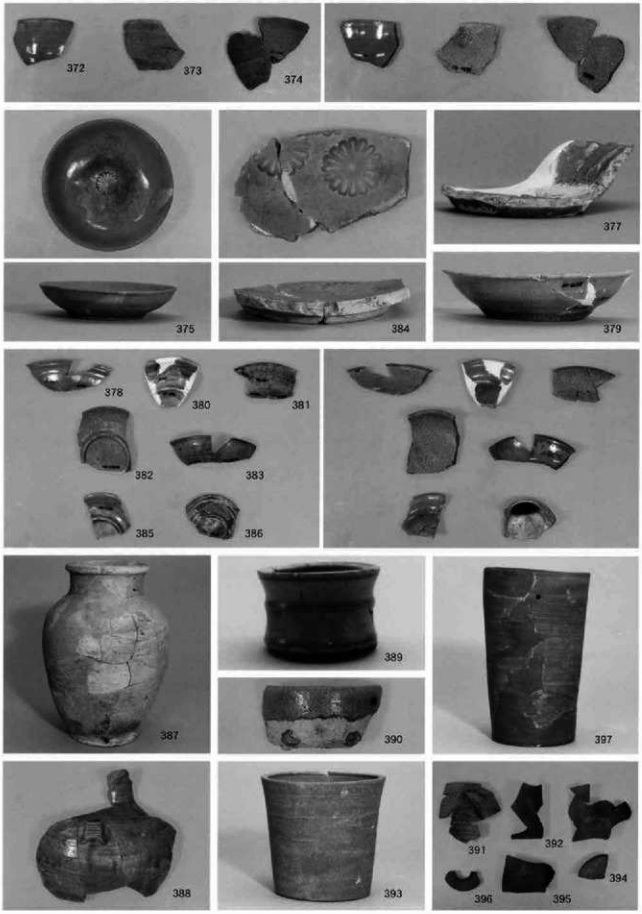
鉄釉壺353～356　桶357　筒形容器358～360　瓶361～363　茶入364～366
水滴367　蓋368～371

鉄釉壺353～356　桶357　筒形容器358～360　瓶361～363　茶入364～366　水滴367　蓋368～370

第43図　出土遺物(22)　瀬戸・美濃焼

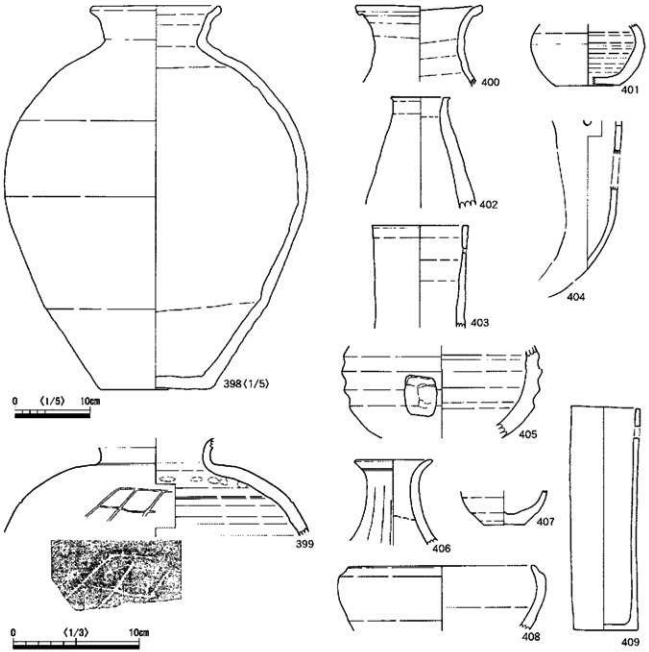


灰釉碗372～374　皿375～386　壺387・388　香炉389・390
無釉水指391　建水392～395　茶入396　花生397



灰釉碗372～374　皿375・377～386　壺387・388　香炉389・390
無釉水指391　建水392～395　茶入396　花生397

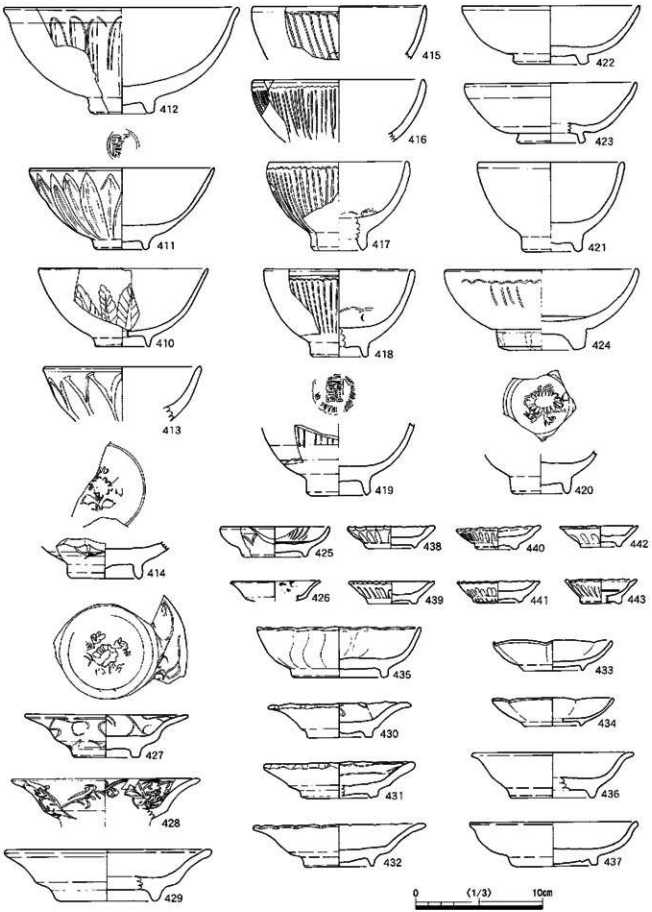
第44図　出土遺物(23)　その他国産陶磁器



信楽焼壺398　丹波焼壺399　備前焼壺400　瓶401・402　花生403～405
不明瓶406・407　建水408　花生409

信楽焼壺398　丹波焼壺399　備前焼壺400　瓶401・402　花生403～405
不明瓶407　建水408　花生409

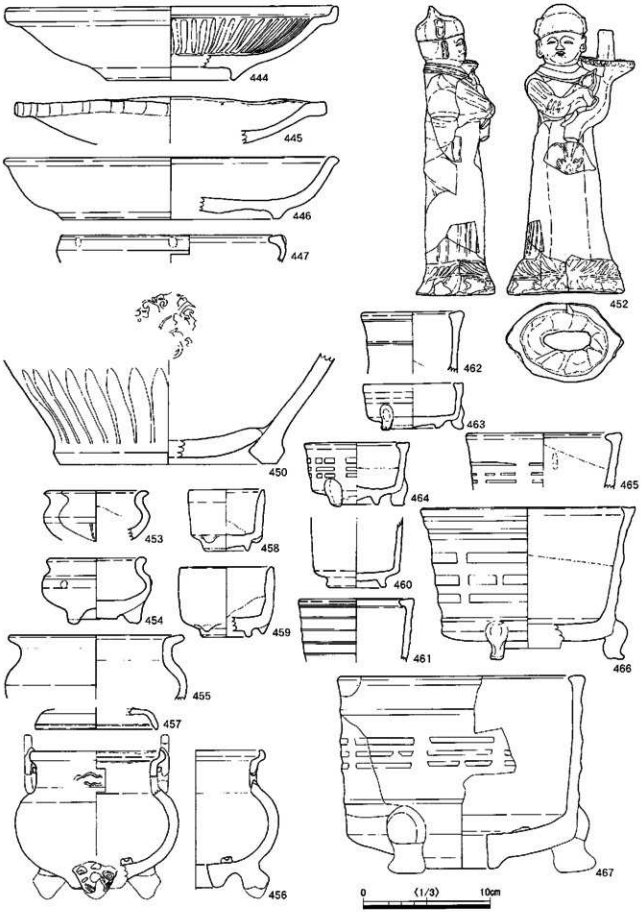
第45図　出土遺物(24)　外国産陶磁器



青磁碗410～424　皿425～443

青磁碗410～420・422～424　皿425～428・430～437・439～443

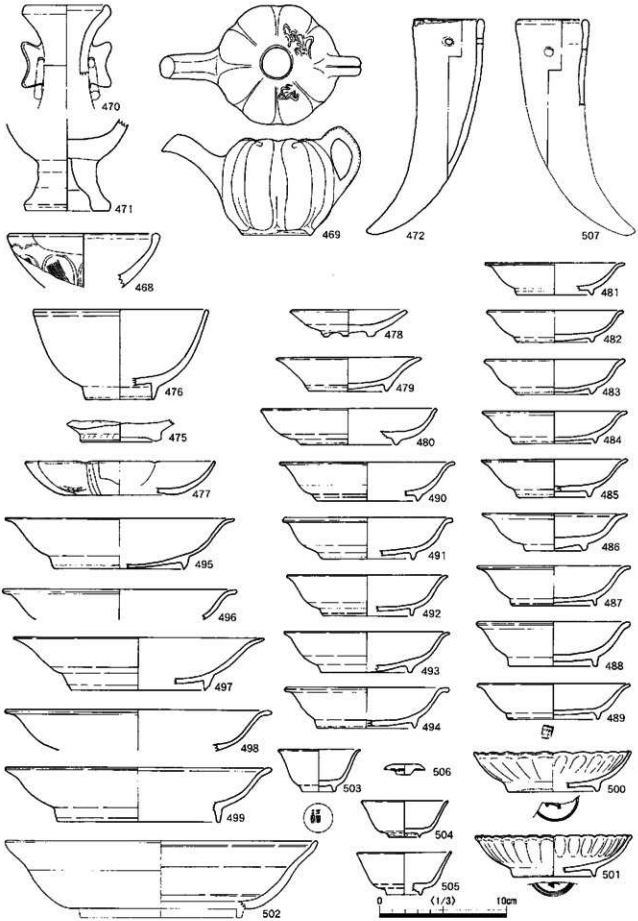
第46図　出土遺物(25)　外国産陶磁器



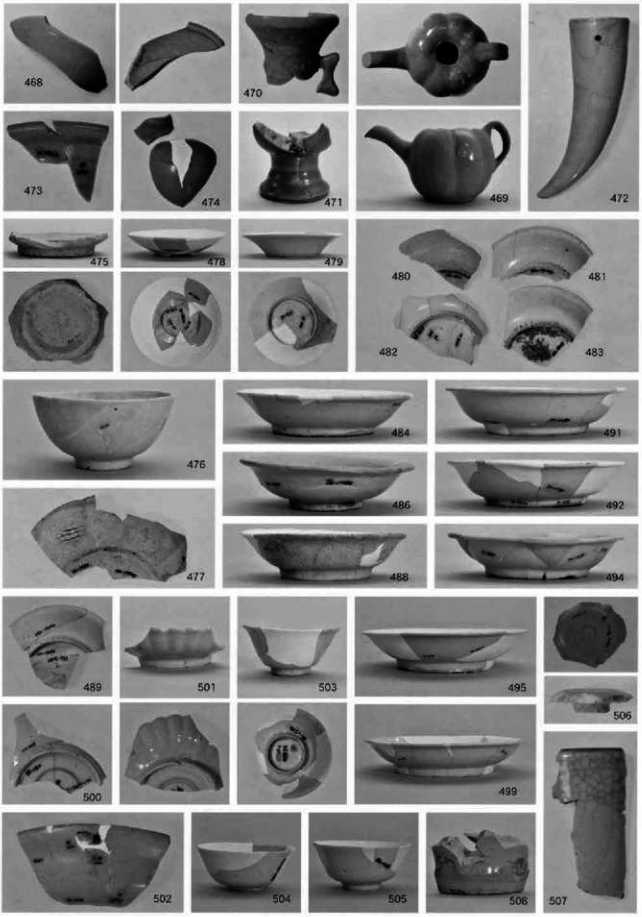
青磁盤444～447　酒会壺450　燭台452　香炉453～467

青磁盤444・446～449　酒会壺450・451　燭台452　香炉453～467

第47図　出土遺物(26)　外国産陶磁器

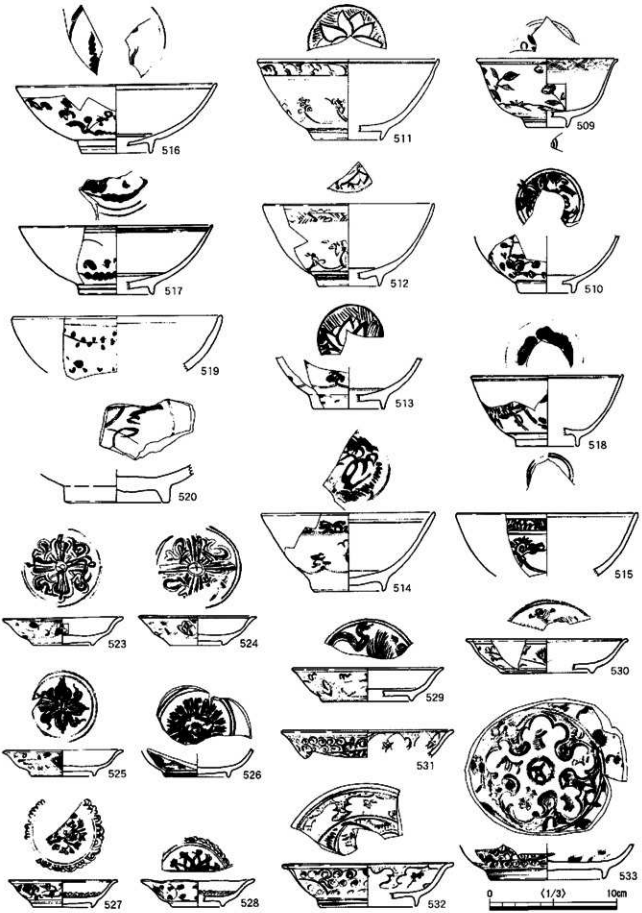


青磁乳鉢468　水注469　花瓶470・471　角杯472　白磁碗475・476　皿477～501
鉢502　杯503～505　蓋506　角杯507



青磁乳鉢468　水注469　花瓶470・471・473・474　角坏472
白磁椀475・476　皿477～484・486・488・489・491・492・494・495・499～501　鉢502
坏503～505　蓋506　角坏507　四耳壺508

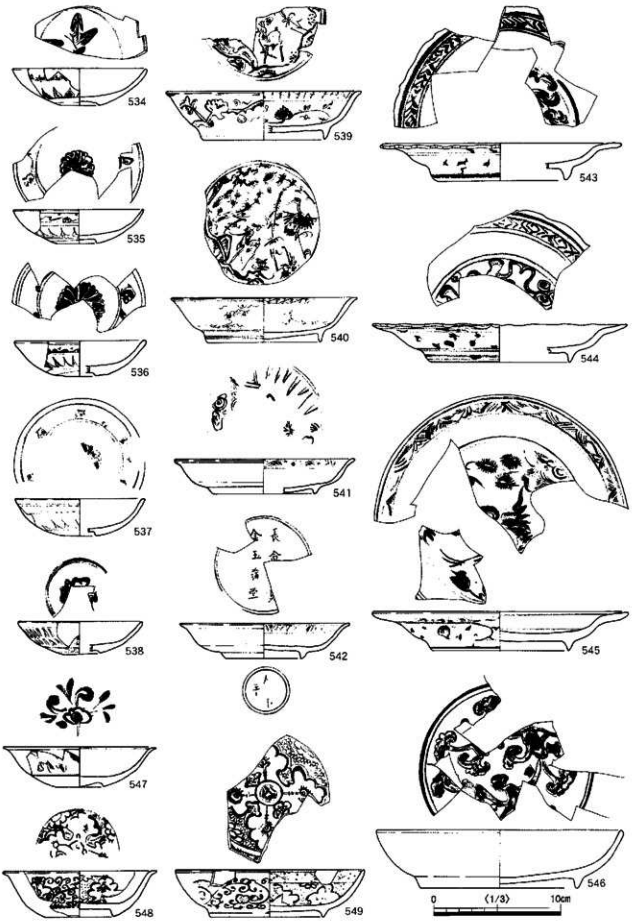
第48図　出土遺物(27)　外国産陶磁器



染付碗509～520　皿523～533

染付碗509～522　皿523～533

第49図　出土遺物(28)　外国産陶磁器

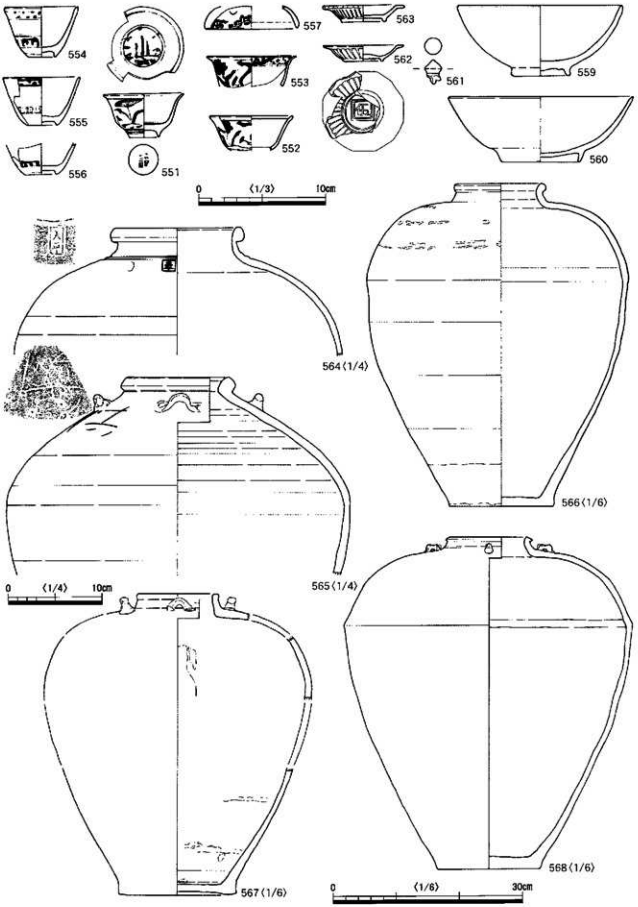


染付皿534～549

534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550

染付皿534～550

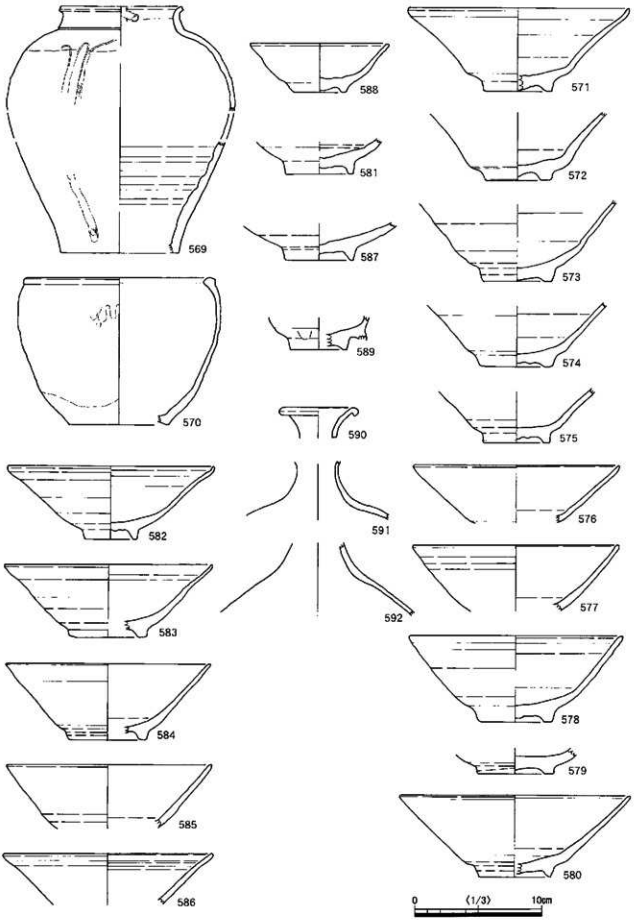
第50図　出土遺物(29)　外国産陶磁器



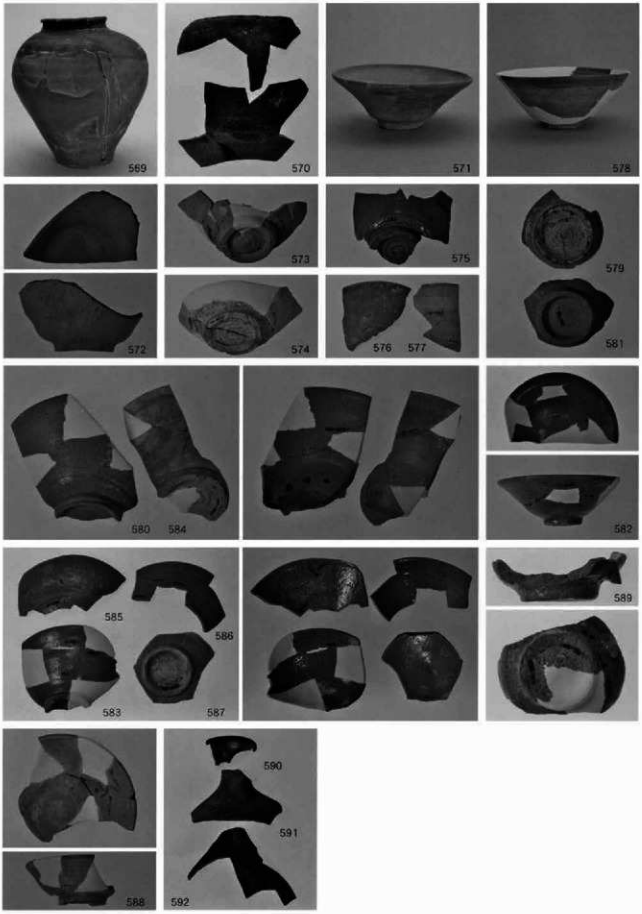
染付皿551～556　蓋557　瑠璃釉碗559・560　つまみ561　華南皿562・563　壺564～568

染付坏551～556　蓋557　花瓶558　瑠璃釉碗559・560　つまみ561　華南皿562・563　壺564～568

第51図　出土遺物(30)　外国産陶磁器

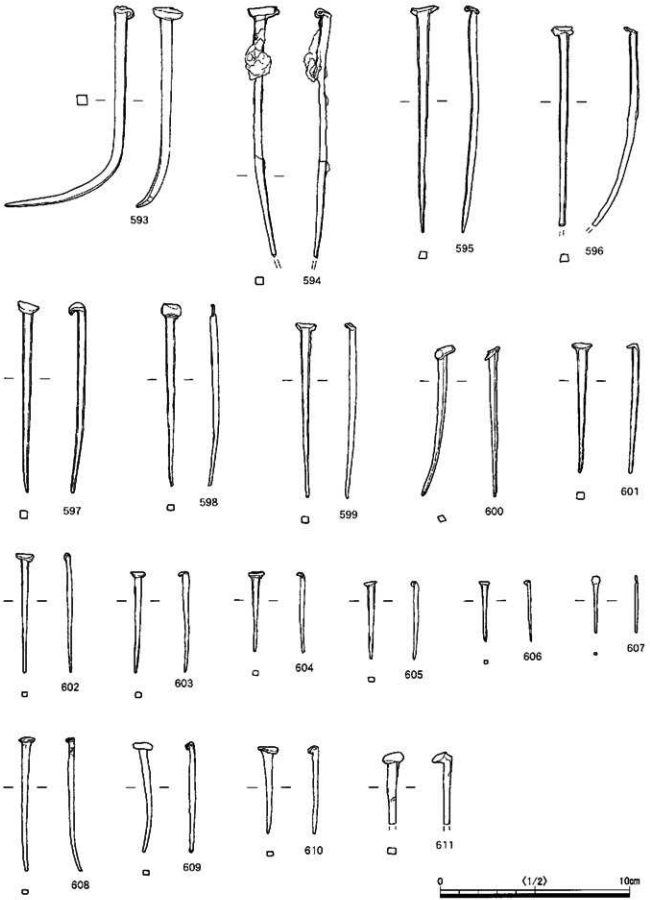


華南壺569　鉢570　朝鮮碗571～588　香炉589　瓶590～592

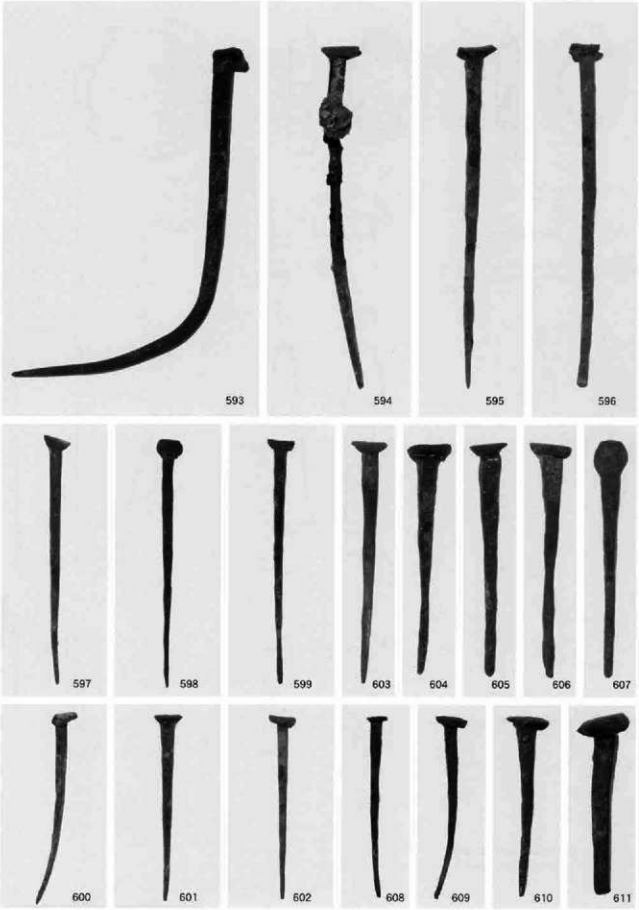


華南壺569　鉢570　朝鮮碗571～588　香炉589　瓶590～592

第52図　出土遺物(31)　金属製品

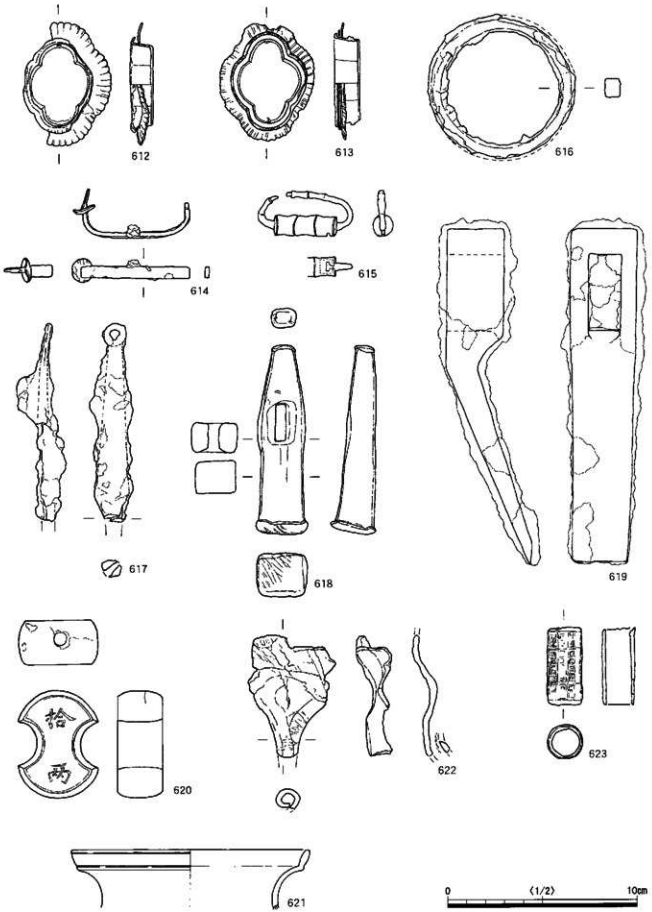


金属製品釘593～611

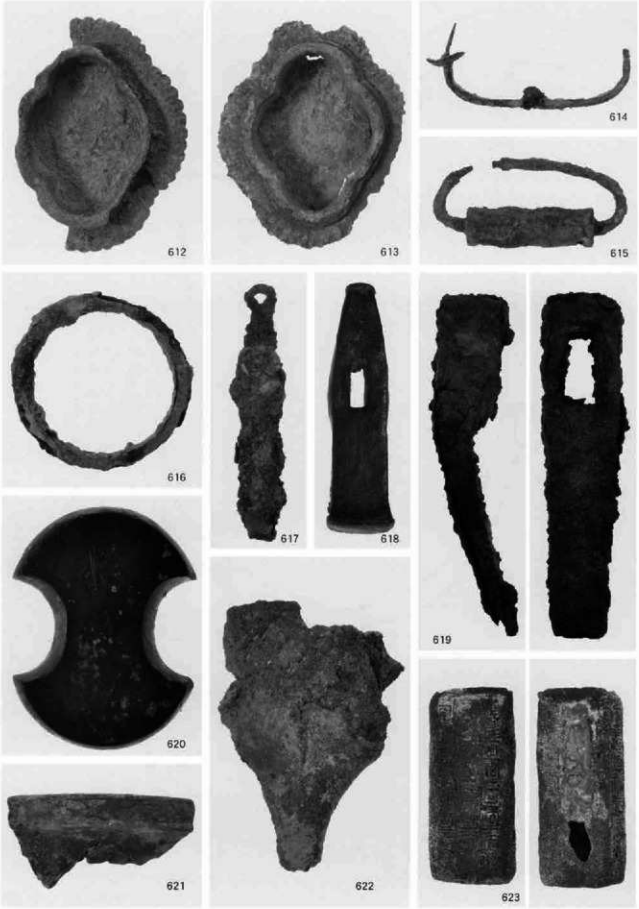


金属製品釘593～611

第53図　出土遺物(32)　金属製品

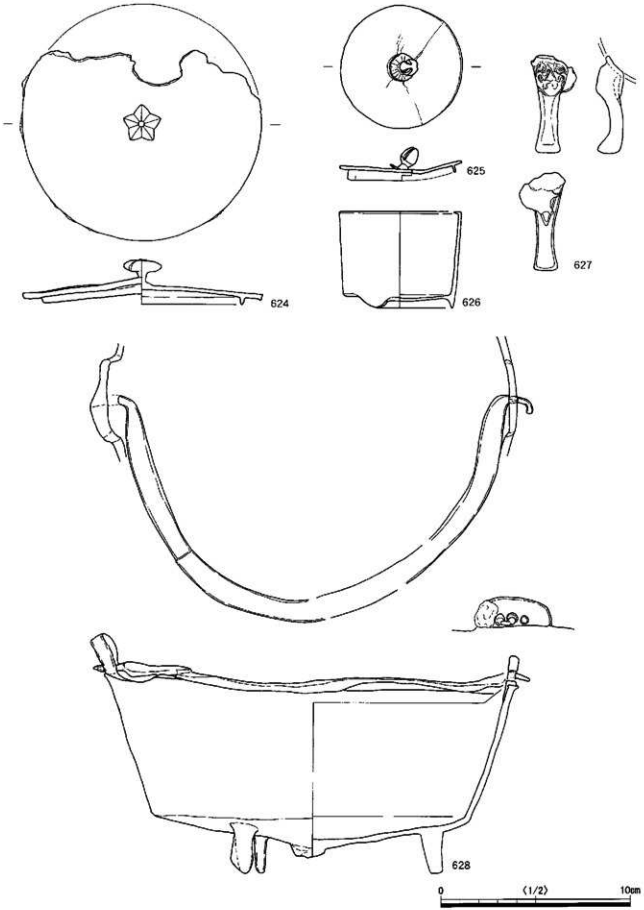


金属製品引手金具612～614　鋲615　環状金具616　鍵617　金槌618　手斧619　分銅620
花瓶621・622　管耳瓶623



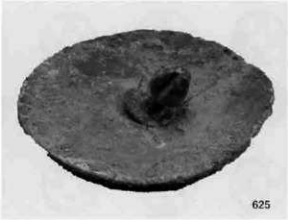
金属製品引手金具612～614　錠前615　環状金具616　鍵617　金槌618　手斧619　分銅620
花瓶621・622　管耳瓶623

第54図　出土遺物(33)　金属製品



金属製品蓋624・625　香炉626・627　鍋628

624


625

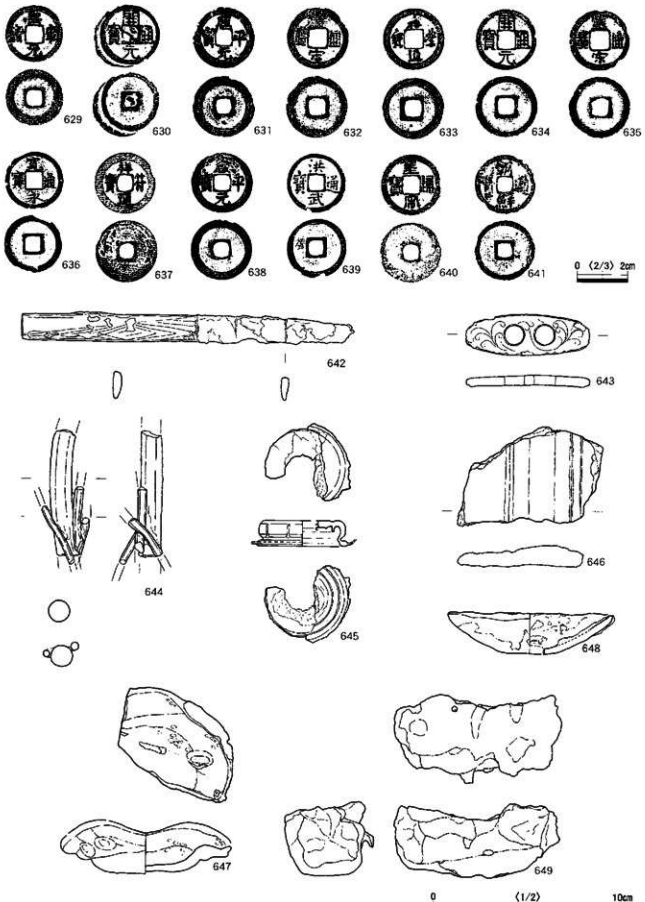
626

627

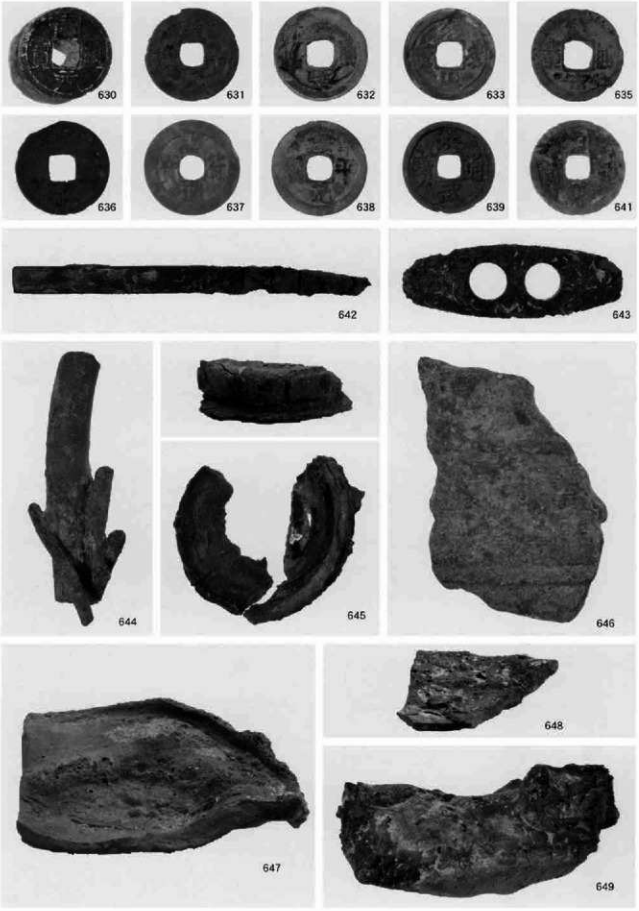
628

金属製品蓋624・625　香炉626・627　鍋628

第55図　出土遺物(34)　金属製品

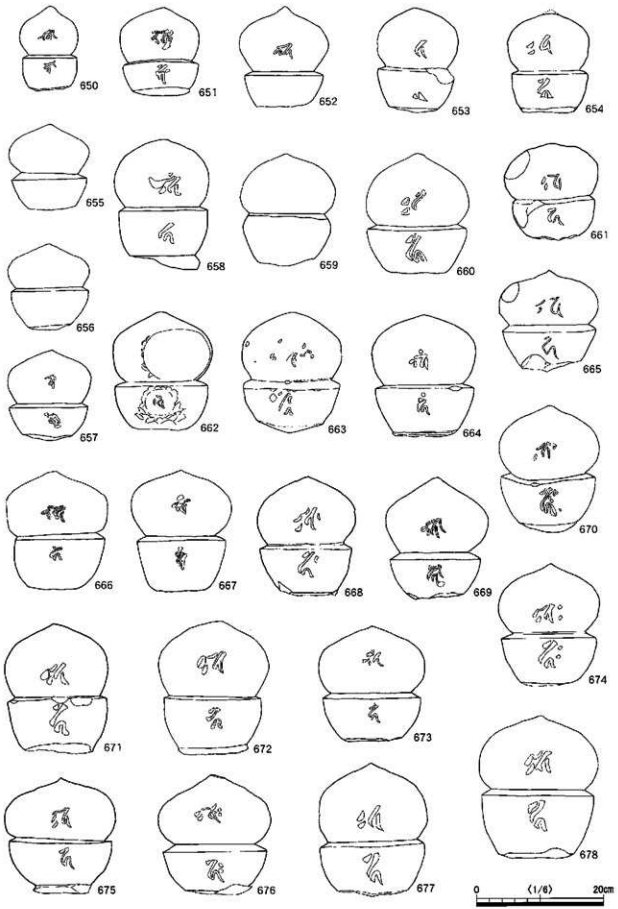


金属製品銅銭629～641　小柄642　鞘形金具643　その他644～646　坩堝647・648　炉壁649



金属製品銅銭630～633・635～639・641　小柄642　鞘形金具643　その他644～646
坩堝647・648　炉壁649

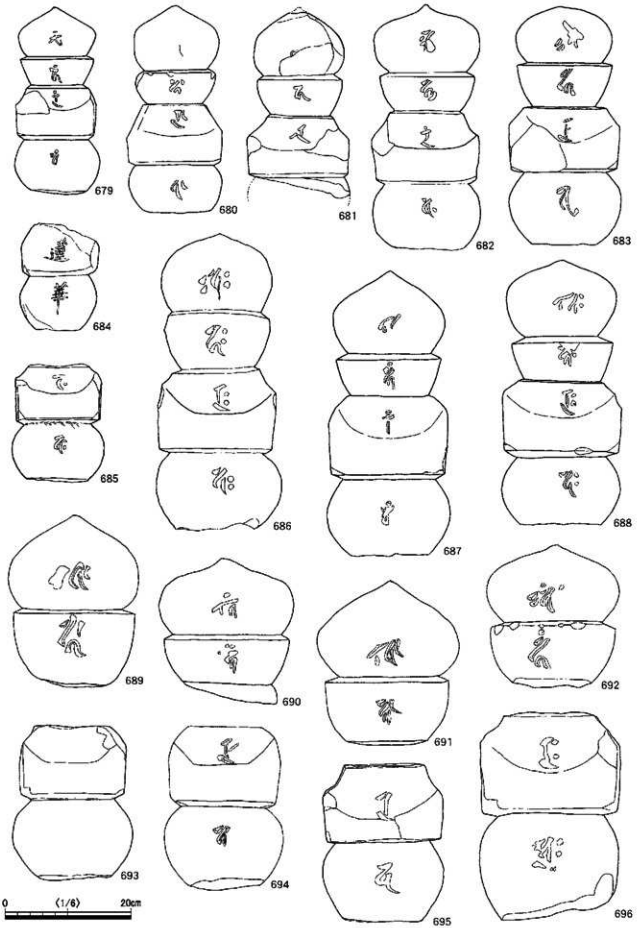
第56図　出土遺物(35)　石製品



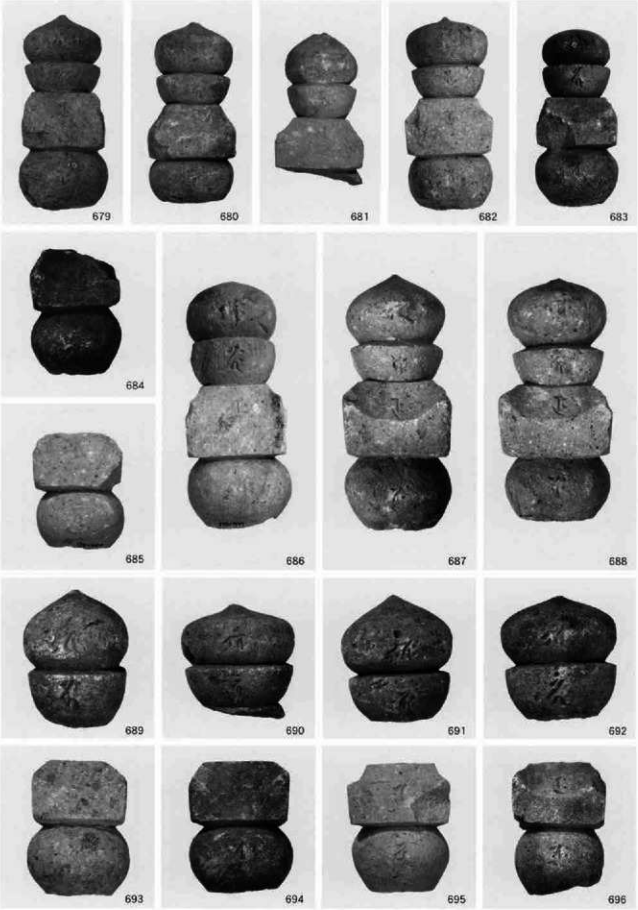
石製品一石五輪塔650～678

石製品―石五輪塔650～678

第57図　出土遺物(36)　石製品

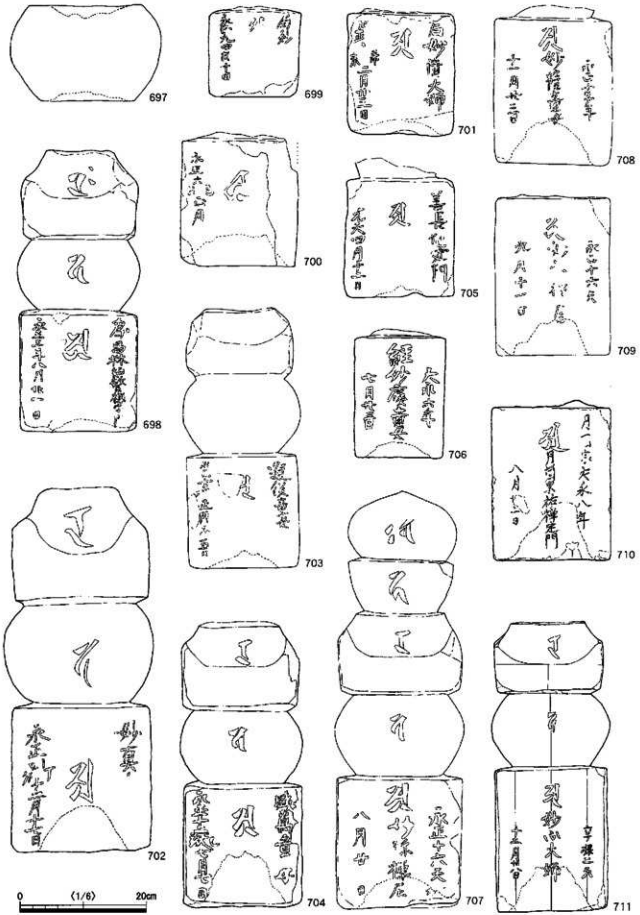


石製品一石五輪塔679～696

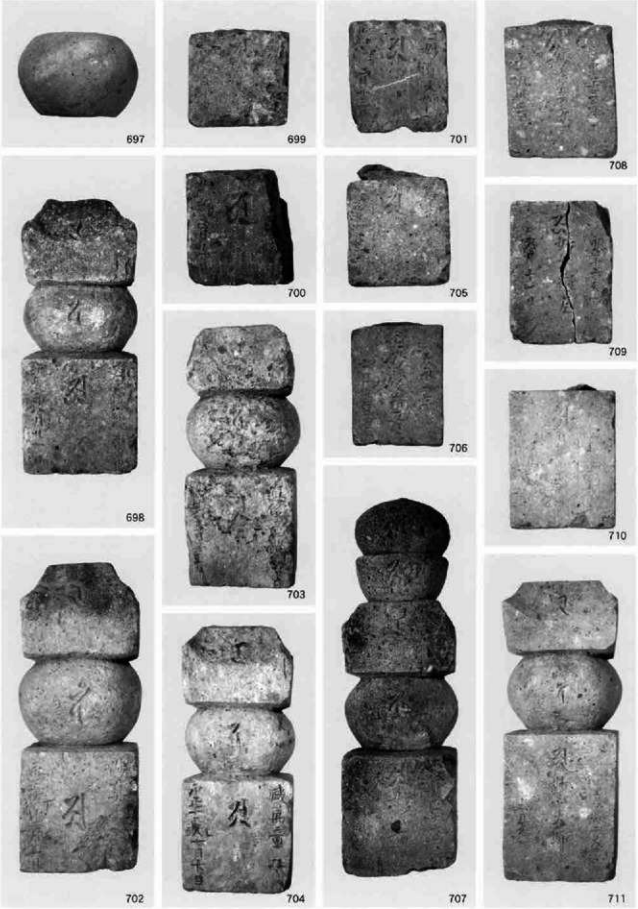


石製品―石五輪塔679～696

第58図　出土遺物(37)　石製品

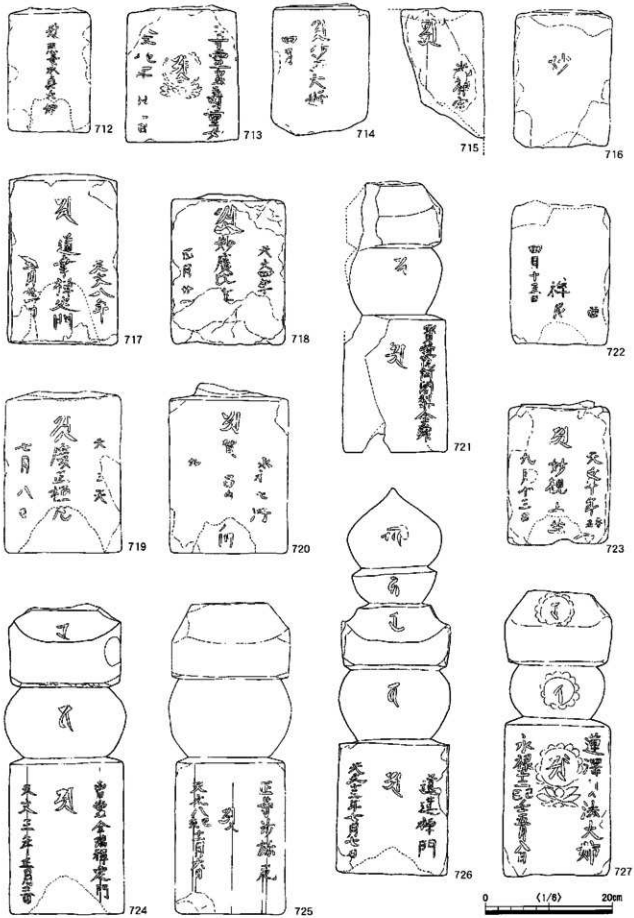


石製品組合五輪塔697　一石五輪塔698～711

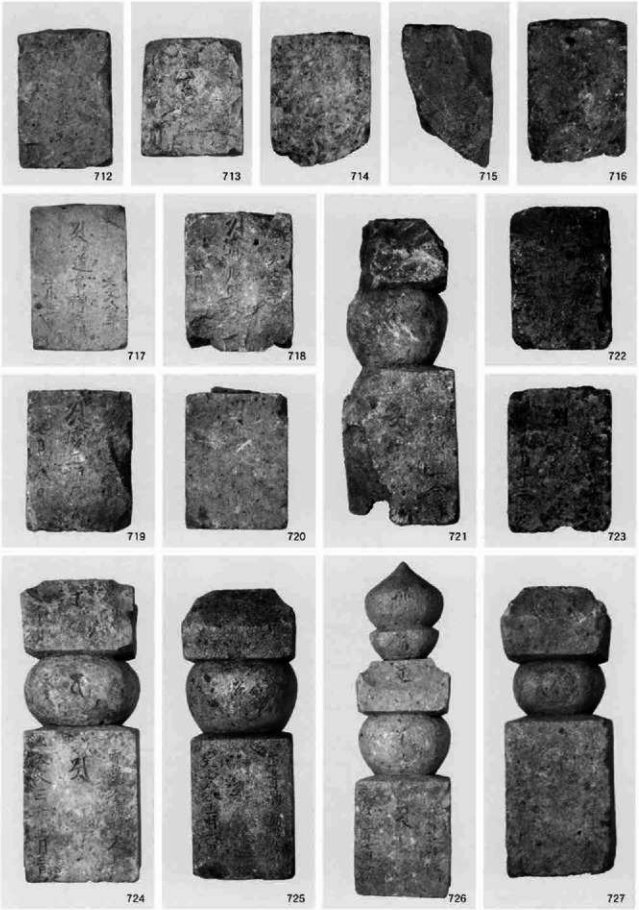


石製品組合五輪塔697　一石五輪塔698～711

第59図　出土遺物(38)　石製品

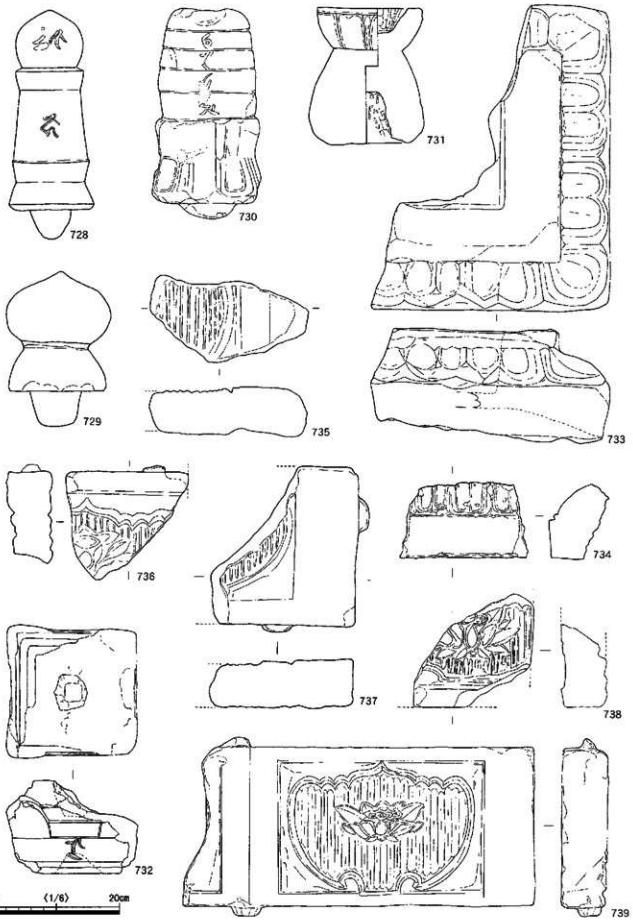


石製品―石五輪塔712～727



石製品―石五輪塔712～727

第60図　出土遺物(39)　石製品



石製品宝篋印塔728・732　石塔729～731・733～739

728

729

732

731

733

730

734

736・737

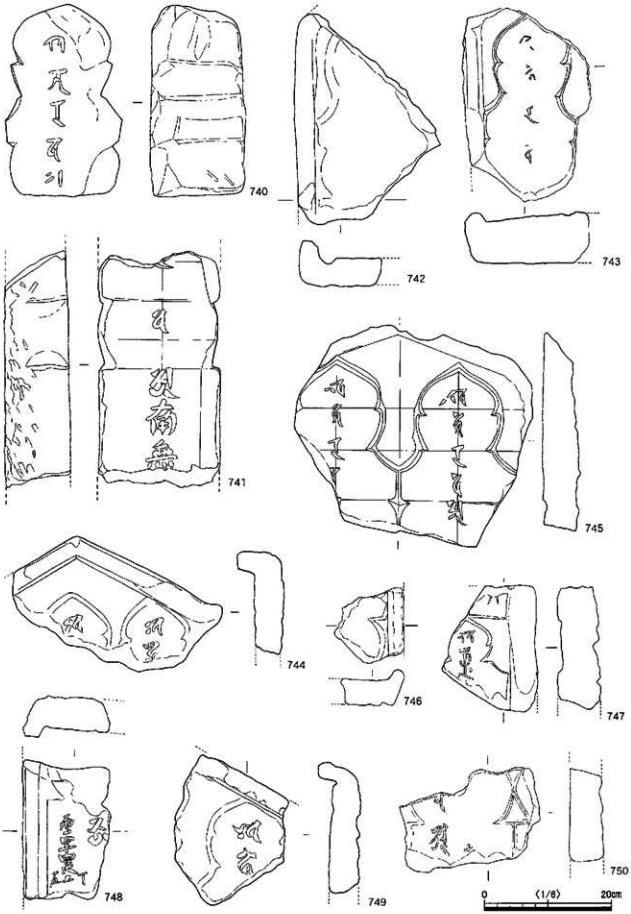
735

738

739

石製品宝篋印塔728・732　石塔729～731・733～739

第61図　出土遺物(40)　石製品



石製品板碑型五輪塔740～750

740

742

744

741

743

745

746

747

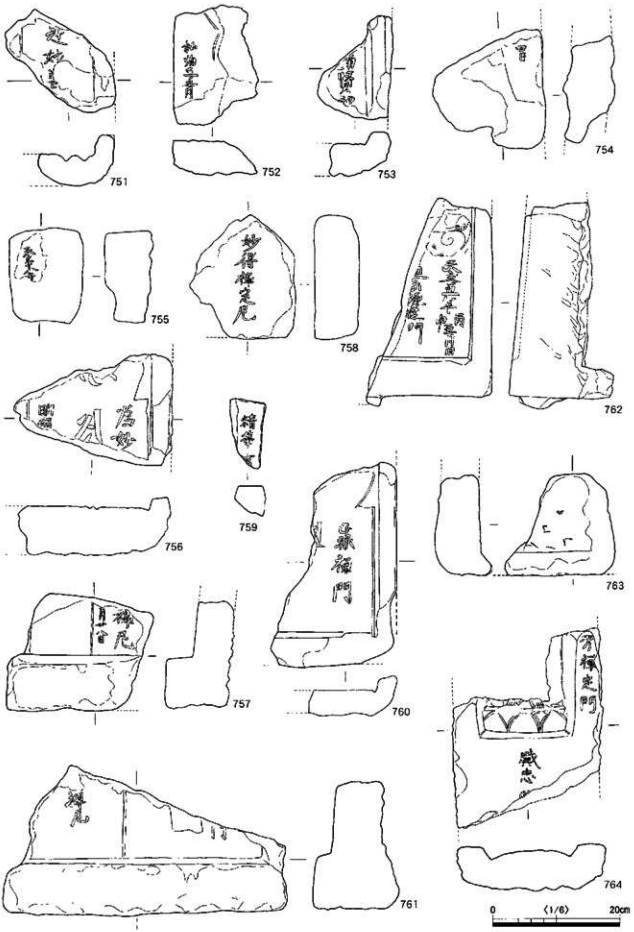
748

749

750

石製品板碑型五輪塔740～750

第62図　出土遺物(41)　石製品



石製品板碑型五輪塔751～753・756・757・760・761　板碑754・755・758・762・763
不明759　石仏764

751

752

753

754

755

756

757

758

760

762

763

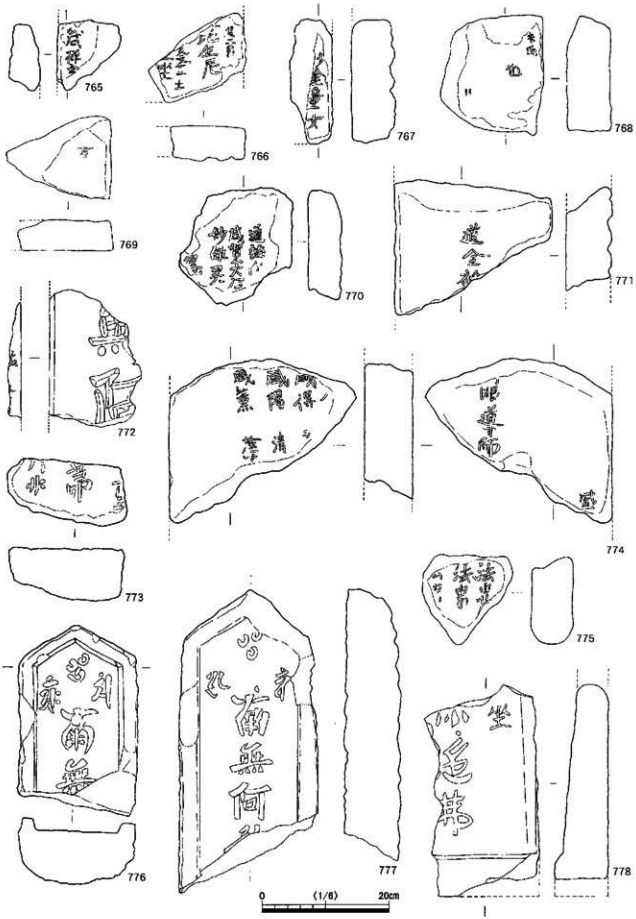
764

759

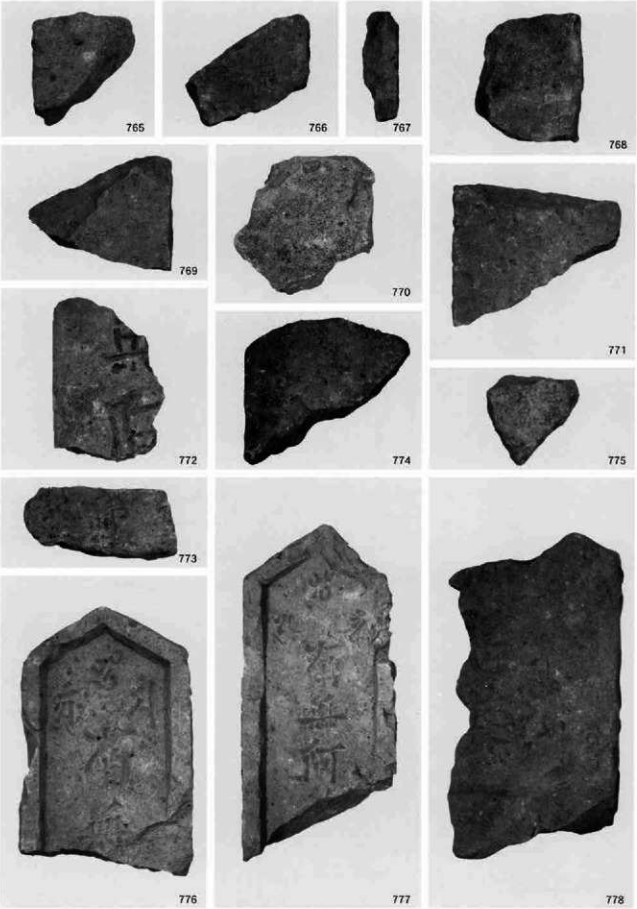
761

石製品板碑型五輪塔751～753・756・757・760・761　板碑754・755・758・762・763
不明759　石仏764

第63図　出土遺物(42)　石製品

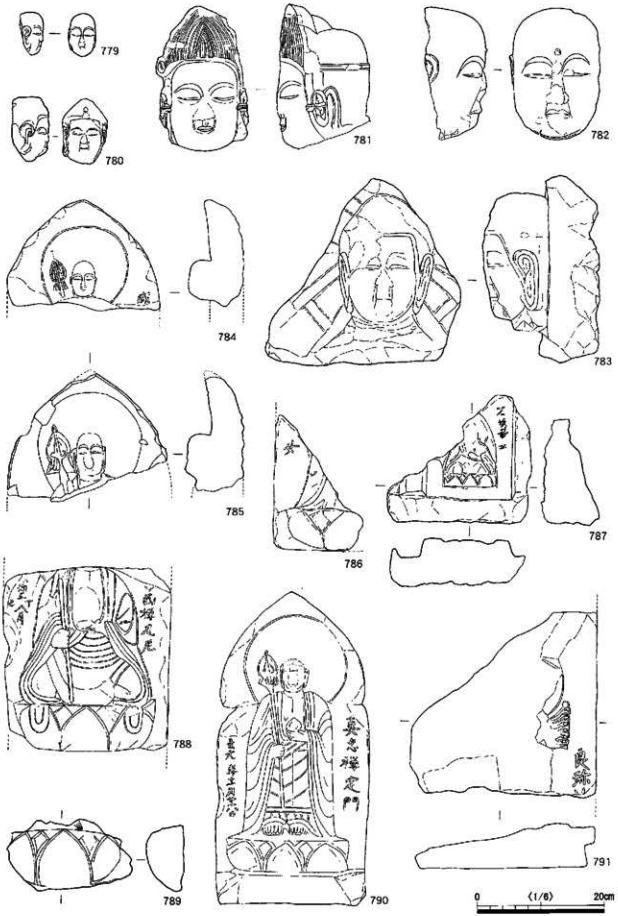


石製品板碑765～778



石製品板碑765～778

第64図　出土遺物(43)　石製品



石製品石仏779～791

779

780

781

782

786

784

783

787

785

788

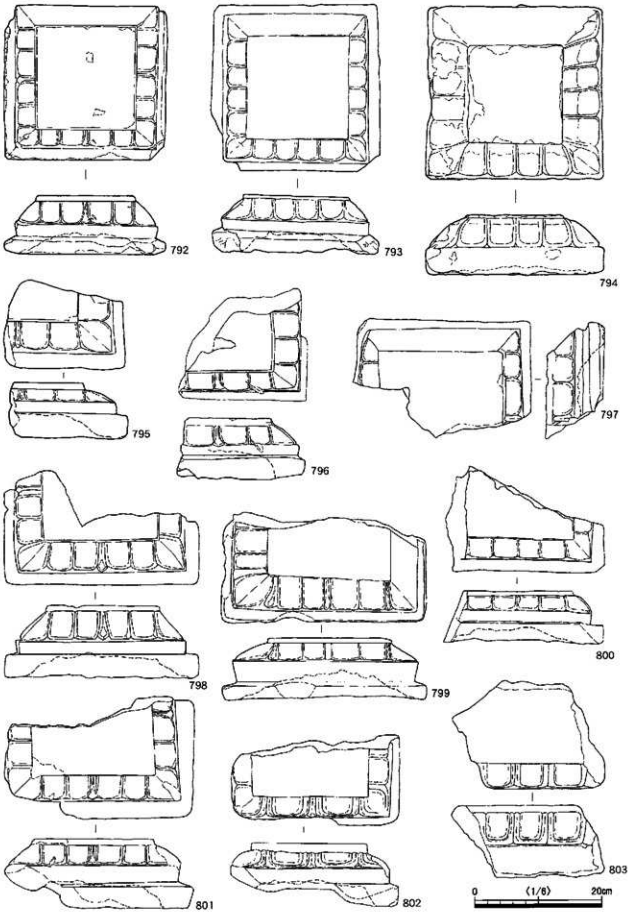
789

790

791

石製品石仏779～791

第65図　出土遺物(44)　石製品



石製品石塔台座792～803

792

793

794

796

797

795

798

799

801

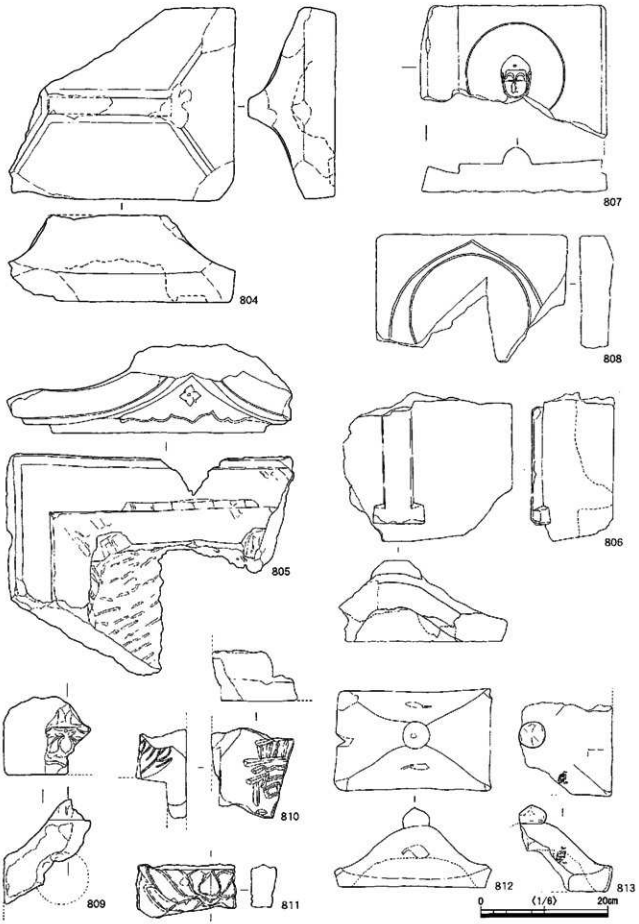
800

802

803

石製品石塔台座792～803

第66図　出土遺物(45)　石製品



石製品石龕804～808　不明809～811　灯籠812・813

804

805

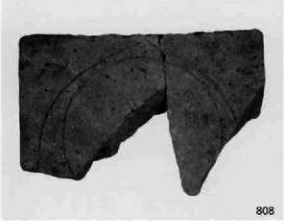
809

810

811

812

807

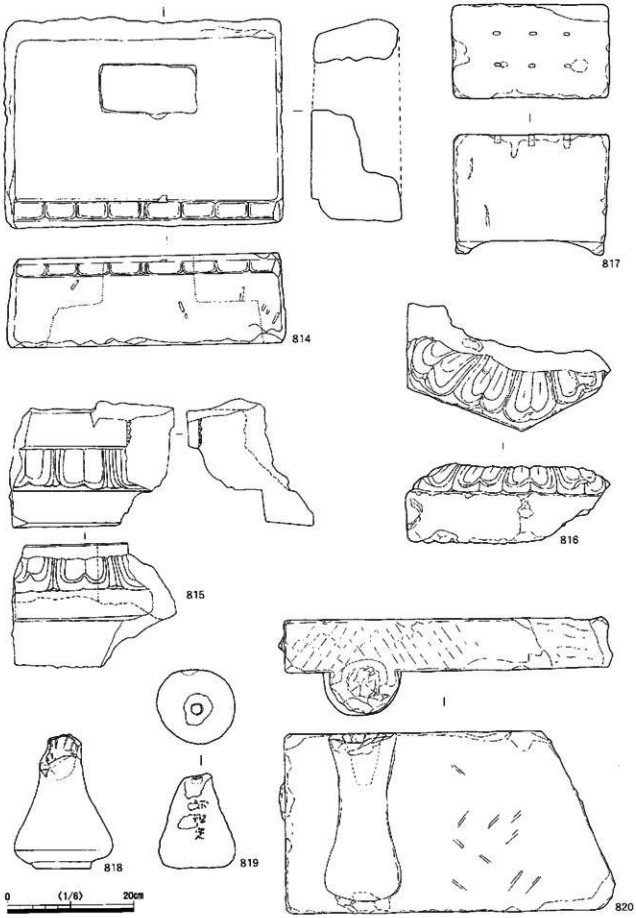

808

806

813

石製品石龕804～808　不明809～811　灯龍812・813

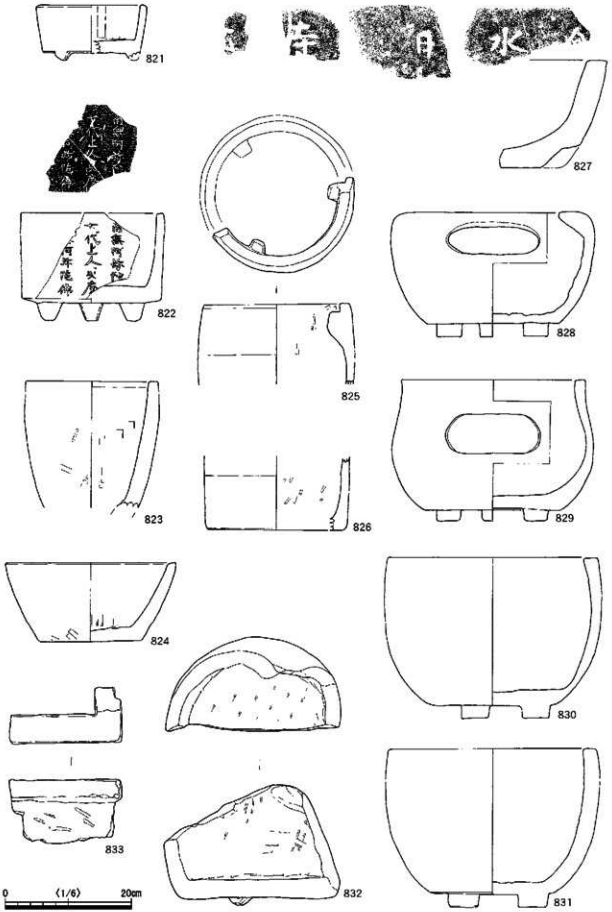
第67図　出土遺物(46)　石製品



石製品台座814～816　台817　仏花瓶818～820

石製品台座814～816　台817　仏花瓶818～820

第68図　出土遺物(47)　石製品



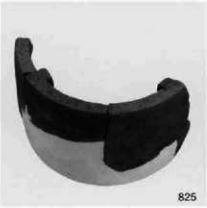
石製品盤(香炉)821・822　盤827　火桶823・825・826　火鉢824・830～832　風炉828・829　炉壇石833

821

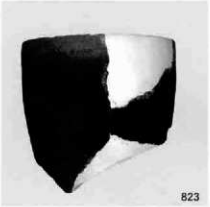
824

828

822

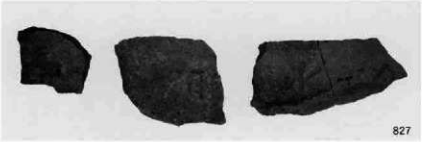

825

829


823

826

830


827

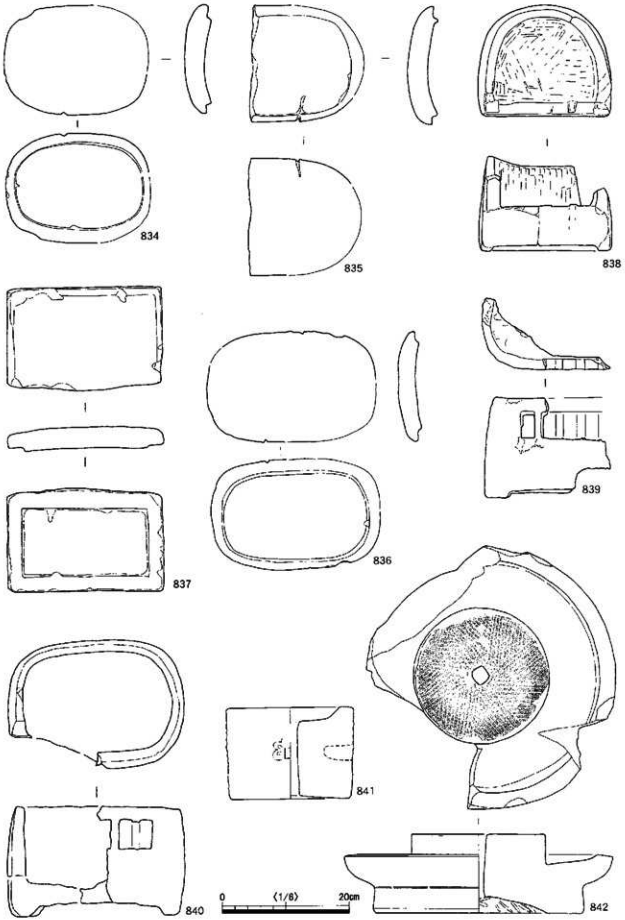
833

832

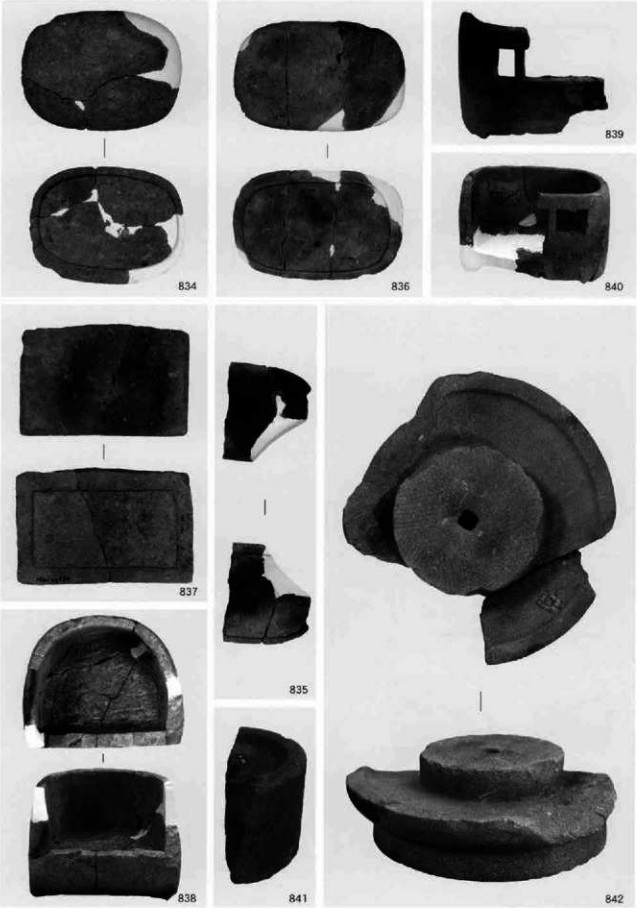
831

石製品盤(香炉)821・822　盤827　火桶823・825・826　火鉢824・830～832　風炉828・829　炉壇石833

第69図　出土遺物(48)　石製品

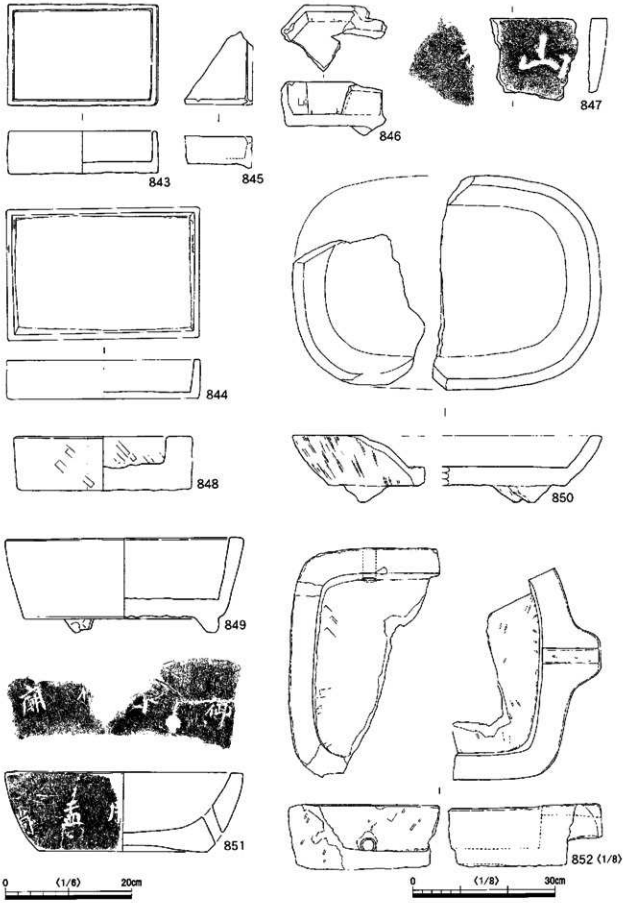


石製品バンドコ834～840　臼841・842



石製品バンドコ834～840　臼841・842

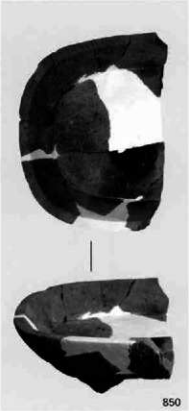
第70図　出土遺物(49)　石製品

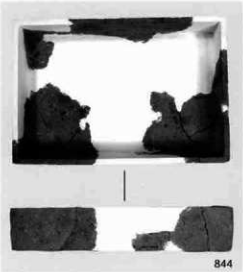


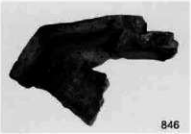
石製品壁843～852

843

845


850


844

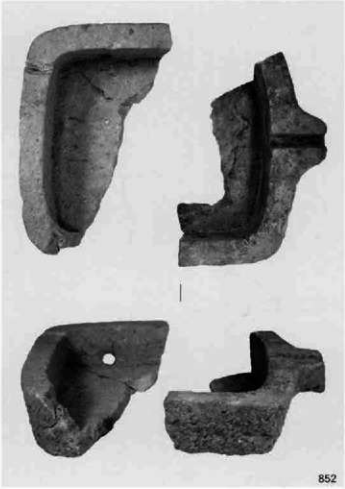

846

848

847

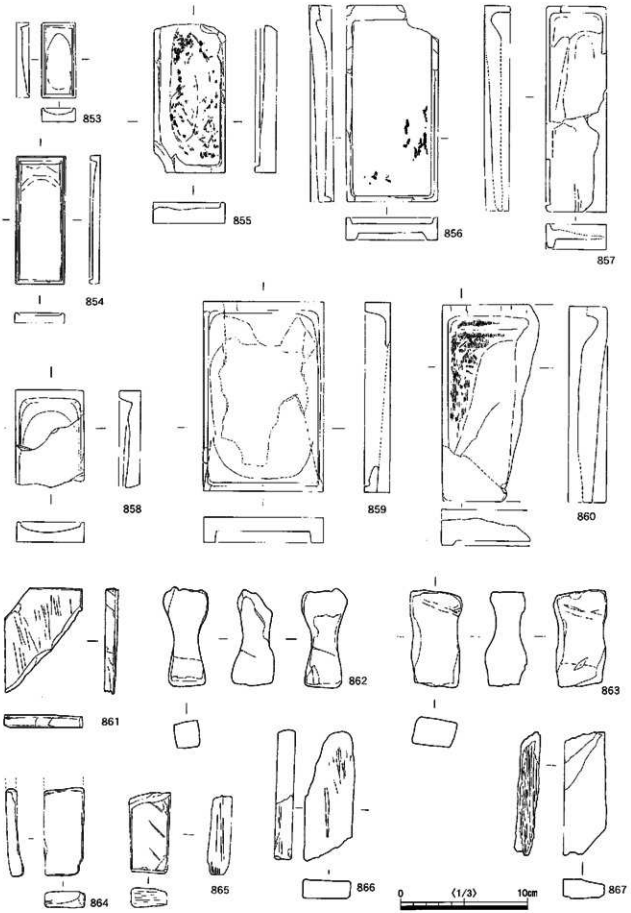
849

851

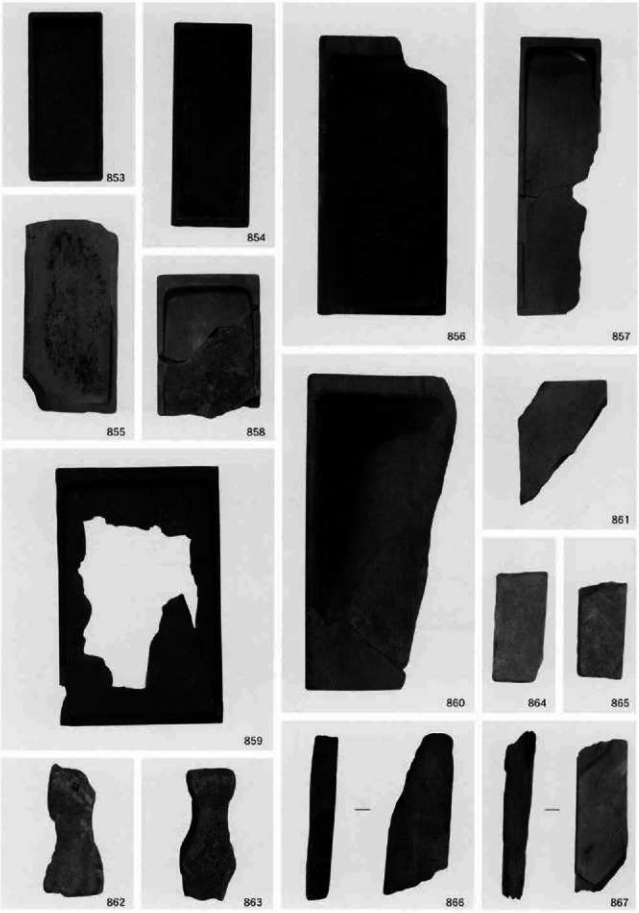

852

石製品盤843～852

第71図　出土遺物(50)　石製品

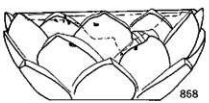


石製品硯853～860　砥石861～867

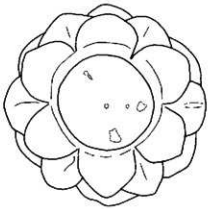


石製品砥853～860　砥石861～867

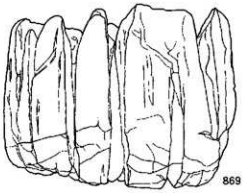
第72図　出土遺物(51)　木製品



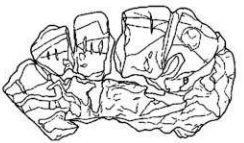
868



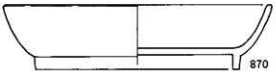
0　(1/1)　2cm



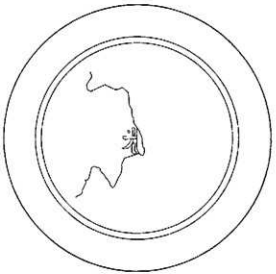
869



0　(1/3)　10cm



870



0　(1/2)　10cm

木製品蓮華座868　柱材869　漆器皿870

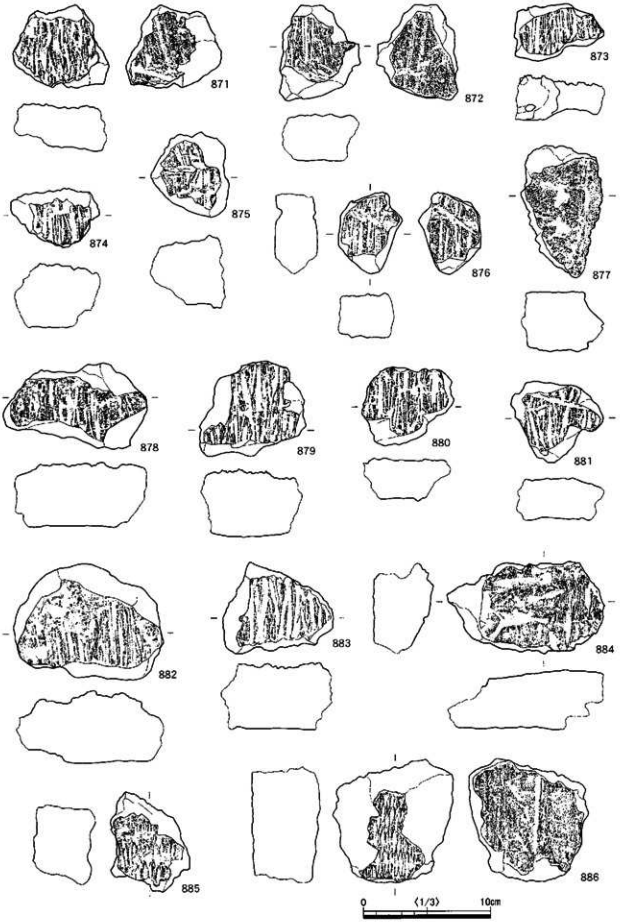
868

869

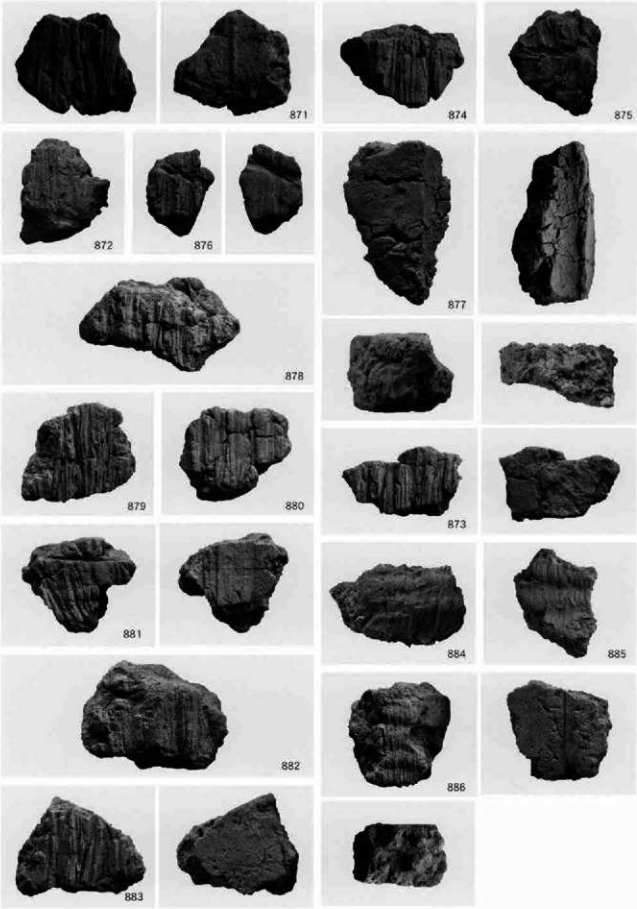
870

木製品蓮華座868　柱材869　漆器皿870

第73図　出土遺物(52)　壁土状塊



壁土状塊871～886



壁土状塊871～886

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはっくつちょうさほうこく
書名	特別史跡 朱谷朝倉氏遺跡発掘調査報告11
副書名	第86・87・90・132・135・144次調査（西山光照寺跡）
シリーズ番号	11
編著者名	鄉部正典(編)、川越光洋、木村孝一郎、月輪泰、松本泰典、宮永一美
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910 2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-3644
発行年月日	平成27年3月20日

調査地区	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
第86・87・90・132・135・144次調査	福井市安波賀中島町字西山・上西山・赤旗ノ弐	18210	史—31	36°0′44″	136°17′50″	110521～120323	5,500㎡	環境整備に伴う発掘調査

調査地区 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第86・87・90・132・135・144次調査（西山光照寺跡）	寺院	室町・戦国	石垣、石組溝、通路、石列、暗渠、礎石建物、大型石積施設(地下式倉庫)、石積施設、井戸、土坑、名号石碑、墓など	越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、信楽焼、備前焼、青磁、白磁、染付、瑠璃釉碗、褐釉壺、朝鮮製碗、薬形分銅、釘、鉄鍋、木製蓮華座、漆器皿、石製風炉・盤、硯、一石五輪塔、板碑、石仏	上・下段の境に江石を用いた石垣が築かれ、寺跡の北端部では石垣の中に埋め込まれる形で六字名号の石碑が造立される。土坑底面より鉄釉茶入、建水、擂鉢、鉄鍋、漆器皿が一括で出土した。

要約

朱谷朝倉氏遺跡の特別史跡区域内の北西端に位置する西山光照寺跡の発掘調査報告書である。西山光照寺は天台真盛宗で、江戸時代初期に北ノ庄(福井)城下に移転した。発掘調査は、平成6・7年度に寺院跡の南半(南区)約3,400㎡分の調査、平成22・23年度に寺院跡の北半(北区)約2,300㎡の調査を行い、平成25年度に、南・北両区の遺構のつながり等を確認する目的での補足調査を行った。調査の結果、上・下段境の石垣、南・北に区画する石組溝を検出した。建物跡は礎石等の遺構の遺存状況が悪く全体の形状は明確に出来なかったが、南区側の3箇所と北側側の2箇所で礎石建物の配置を確認した。北区南半の山際では火災による焼土面と共に建物の礎石が良好に遺存し、南北約21mの大型の礎石建物を確認することができた。南区の中央部では地下式倉庫跡を検出し、中から火事場整理によって掻き落されたとみられる陶磁器の優品等が多数出土した。出土遺物をみると、16世紀中頃以降の遺物がかなり多く、古いものが少ない。トレンチ下層より出土した16世紀第1四半期の土師質土器皿がまとまって出土しており、西山光照寺跡の当初の大規模な造成が行われ、16世紀中頃以降に最も繁栄したと考えられる。

平成27年3月10日　印刷
平成27年3月20日　発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告11

第86・87・90・132・135・144次調査（西山光照寺跡）

編　集　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
発　行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
福井市安波賀町4－10
印　刷　マイプリントコーポレーション株式会社